佐久市埋蔵文化財調査報告書　第84集

榛名平・坪の内遺跡群

HARU　NA　HIRA

榛名平遺跡

第Ⅲ分冊
古代律令編

長野県佐久市根岸榛名平遺跡発掘調査報告書

2001. 3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第84集

榛名平・坪の内遺跡群

HARU　NA　HIRA

榛名平遺跡

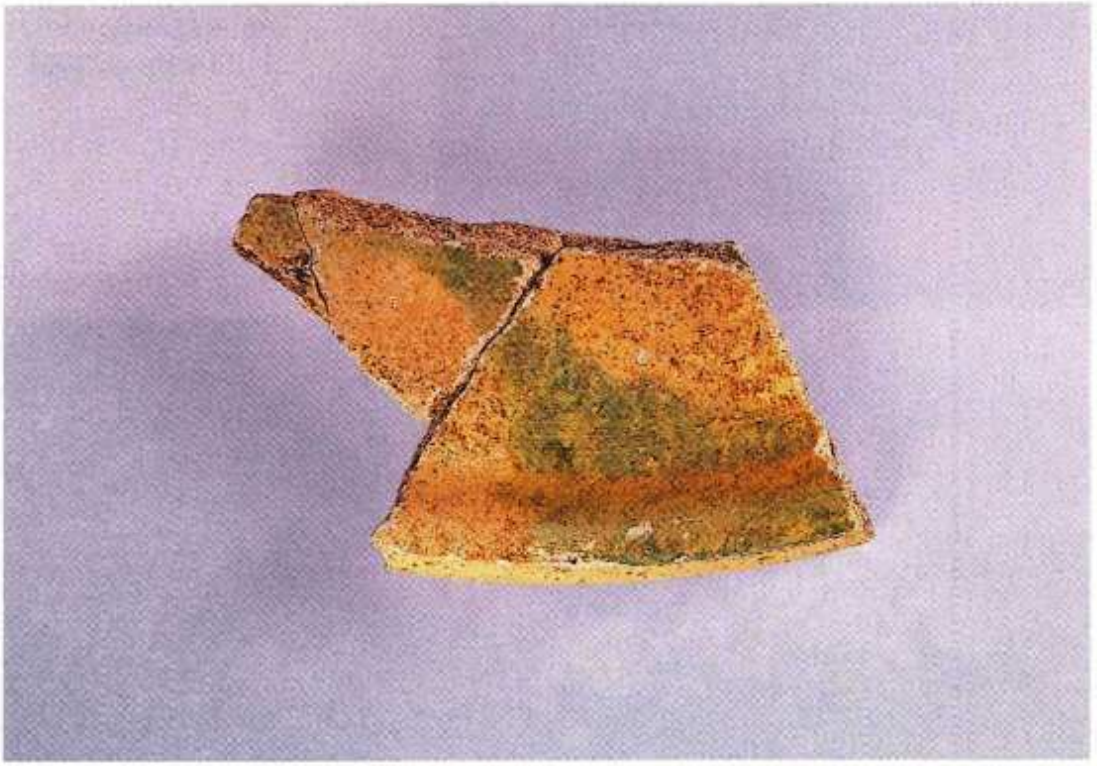
第Ⅲ分冊
古代律令編

長野県佐久市根岸榛名平遺跡発掘調査報告書

2001．3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

榛名平遺跡全景　後方は御荷山麓、遺跡周辺では刈り入れ間近の水田が広がる



Ⅱ H12号住居址出土『奈良三彩蓋』

上右　須恵器蓋「大井」刻書
上左　遺跡現場説明会風景
中央　ⅢH28号住居址カマド
下　少年考古学教室風景

凡　例

1、第Ⅲ分冊は奈良・平安時代の遺構・遺物を取り上げた。

2、遺構の略記号は、住居址(H)・掘立柱建物址(F)・土坑(D)・溝状遺構(M)である。

3、挿図の縮尺は次のとおりである。下記以外の物については挿図中にスケールを示す。

竪穴住居址・掘立柱建物址1/80　カマド1/40　土坑1/60　土器1/4　石器1/3

4、遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。

5、土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版　標準土色帖』に基づいた。

6、遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。

7、調査区グリットは公共座標に従い、間隔は4×4mに設定した。グリットの名称は北西コーナー杭を基準とする。

8、住居址の面積は床面積(住居址下端範囲)を測定し、カマド部分は測定値より除外してある。

9、遺構は支障がない限り調査時の番号をそのまま使用しているため、欠番や飛び番がある。遺構記号の前のローマ数字は地区名を表す。

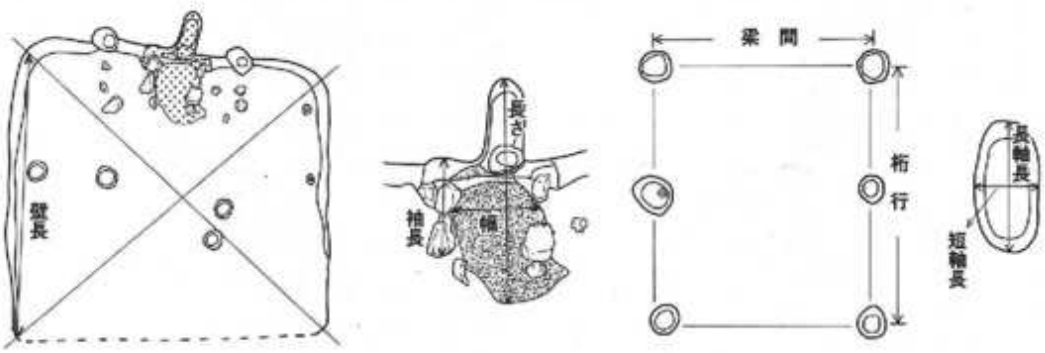
10、挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。

地山断面　　カマド範囲　　貼床・二次焼成範囲(羽口)

焼土・鉄分付着範囲　　須恵器断面　　灰釉範囲

黒色処理　　石製品断面

11、各遺構の計測は下の凡例に従った。



目　次

巻頭カラー図版

凡　例

第Ⅰ章　榛名平遺跡における奈良・平安時代の概要

第1節　概　要 ……1

第Ⅱ章　遺構と遺物

第1節　竪穴住居址 ……3

第2節　掘立柱建物址及び柵列 ……110

第3節　土　坑 ……125

第4節　特殊遺構

①方形区画溝 ……150

②小鍛冶遺構 ……153

③土壙墓 ……157

第5節　溝状遺構 ……158

第6節　ピット ……166

第7節　遺構外出土遺物 ……169

第Ⅲ章　考　察

第1節　奈良・平安時代の土器について ……183

写真図版

図　版　目　次

第1図　Ⅰ区奈良・平安時代遺構全体図 ……2
第2図　ⅠH10号住居址実測図 ……3
第3図　ⅠH10号住居址出土遺物実測図 ……4
第4図　ⅠH20号住居址実測図 ……5
第5図　ⅠH21号住居址実測図 ……6
第6図　ⅠH21号住居址出土遺物実測図 ……7
第7図　ⅠH24号住居址実測図 ……8
第8図　ⅠH24号住居址出土遺物実測図 ……9
第9図　ⅠH25号住居址実測図 ……10
第10図　ⅠH25号住居址出土遺物実測図 ……10
第11図　ⅠH30号住居址出土遺物実測図 ……11
第12図　ⅠH30号住居址実測図 ……12
第13図　ⅠH31号住居址出土遺物実測図 ……13
第14図　ⅠH31号住居址実測図 ……13
第15図　ⅠH32号住居址実測図 ……14
第16図　ⅠH32号住居址出土遺物実測図 ……15
第17図　ⅠH33号住居址実測図 ……16
第18図　ⅠH33号住居址出土遺物実測図 ……16
第19図　ⅠH34号住居址実測図 ……17
第20図　ⅠH34号住居址出土遺物実測図 ……17
第21図　ⅠH36号住居址及び出土遺物実測図 ……18
第22図　ⅠH37号住居址実測図 ……18
第23図　ⅠH38号住居址実測図 ……19
第24図　ⅠH38号住居址出土遺物実測図 ……20
第25図　ⅠH40号住居址実測図 ……21
第26図　ⅠH40号住居址出土遺物実測図 ……22
第27図　ⅠH41号住居址実測図 ……23
第28図　ⅠH41号住居址出土遺物実測図① ……24
第29図　ⅠH41号住居址出土遺物実測図② ……25
第30図　ⅠH42・43号住居址実測図 ……27
第31図　Ⅱ区奈良・平安時代遺構全体図 ……28
第32図　ⅡH1号住居址実測図 ……29
第33図　ⅡH1号住居址出土遺物実測図 ……30
第34図　ⅡH2号住居址実測図 ……31
第35図　ⅡH2号住居址出土遺物実測図 ……32
第36図　ⅡH3号住居址実測図 ……33
第37図　ⅡH3号住居址出土遺物実測図 ……34
第38図　ⅡH4号住居址実測図 ……36

図 版 目 次

第39図 ⅡH4号住居址出土遺物実測図①……36
第40図 ⅡH4号住居址出土遺物実測図②……37
第41図 ⅡH5号住居址実測図……37
第42図 ⅡH5号住居址出土遺物実測図……38
第43図 ⅡH6号住居址出土遺物実測図……38
第44図 ⅡH6号住居址実測図……39
第45図 ⅡH7号住居址実測図……40
第46図 ⅡH7号住居址出土遺物実測図……41
第47図 ⅡH8号住居址実測図……42
第48図 ⅡH8号住居址出土遺物実測図……43
第49図 ⅡH9号住居址実測図……44
第50図 ⅡH9号住居址出土遺物実測図……44
第51図 ⅡH11号住居址実測図……45
第52図 ⅡH11号住居址出土遺物実測図……45
第53図 ⅡH12号住居址カマド実測図……46
第54図 ⅡH12号住居址実測図……47
第55図 ⅡH12号住居址出土遺物実測図……48
第56図 ⅡH13号住居址実測図……50
第57図 ⅡH13号住居址出土遺物実測図……51
第58図 ⅡH14号住居址実測図……52
第59図 ⅡH14号住居址出土遺物実測図①……53
第60図 ⅡH14号住居址出土遺物実測図②……54
第61図 ⅡH15号住居址実測図……55
第62図 ⅡH15号住居址出土遺物実測図……56
第63図 ⅡH17号住居址実測図……57
第64図 ⅡH17号住居址出土遺物実測図……58
第65図 ⅡH19号住居址実測図……59
第66図 ⅡH19号住居址出土遺物実測図……60
第67図 ⅡH20号住居址実測図……61
第68図 ⅡH20号住居址出土遺物実測図……61
第69図 ⅡH22号住居址実測図……63
第70図 ⅡH22号住居址出土遺物実測図……64
第71図 ⅡH23号住居址出土遺物実測図……65
第72図 ⅡH23号住居址実測図……66
第73図 ⅡH24号住居址実測図……67
第74図 ⅡH24号住居址出土遺物実測図……67
第75図 Ⅲ区奈良・平安時代遺構全体図……68
第76図 ⅢH6号住居址実測図……69
第77図 ⅢH6号住居址出土遺物実測図……69
第78図 ⅢH7号住居址実測図……70
第79図 ⅢH7号住居址出土遺物実測図……71
第80図 ⅢH8号住居址実測図……72
第81図 ⅢH9号住居址実測図……73
第82図 ⅢH9号住居址出土遺物実測図……74
第83図 ⅢH10号住居址実測図……75
第84図 ⅢH10号住居址出土遺物実測図……76
第85図 ⅢH11号住居址実測図……77
第86図 ⅢH12号住居址実測図……78
第87図 ⅢH12号住居址出土遺物実測図……78
第88図 ⅢH14号住居址実測図……79
第89図 ⅢH15号住居址実測図……80
第90図 ⅢH15号住居址出土遺物実測図……80
第91図 ⅢH16号住居址実測図……81
第92図 ⅢH17号住居址実測図……82
第93図 ⅢH17号住居址出土遺物実測図……82
第94図 ⅢH19号住居址実測図……83
第95図 ⅢH20号住居址実測図……84
第96図 ⅢH20号住居址出土遺物実測図……84
第97図 ⅢH21・23号住居址実測図……85
第98図 ⅢH24号住居址実測図……87
第99図 ⅢH24号住居址カマド実測図……88
第100図 ⅢH24号住居址出土遺物実測図①……88
第101図 ⅢH24号住居址出土遺物実測図②……89
第102図 ⅢH27号住居址及び出土遺物実測図……91
第103図 ⅢH28号住居址実測図……92
第104図 ⅢH28号住居址カマド実測図……93
第105図 ⅢH28号住居址出土遺物実測図①……94
第106図 ⅢH28号住居址出土遺物実測図②……95
第107図 ⅢH31号住居址及び出土遺物実測図……97
第108図 ⅢH32号住居址及び出土遺物実測図……98
第109図 ⅢH44号住居址実測図……99
第110図 ⅢH44号住居址出土遺物実測図……100
第111図 ⅣH1号住居址実測図……101
第112図 ⅣH1号住居址出土遺物実測図……102
第113図 ⅣH2号住居址実測図……103
第114図 ⅣH2号住居址出土遺物実測図……103
第115図 ⅣH3号住居址実測図……104
第116図 ⅣH3号住居址出土遺物実測図……105
第117図 ⅣH4号住居址実測図……106
第118図 ⅣH4号住居址出土遺物実測図……107
第119図 ⅣH9号住居址実測図……108
第120図 ⅣH17号住居址実測図……109
第121図 ⅣH9号住居址出土遺物実測図……109
第122図 ⅠF3・4・6号・ⅡF3号掘立柱建物址実測図……111
第123図 ⅡF2号・ⅢF3号掘立柱建物址実測図……113
第124図 ⅢF4号掘立柱建物址実測図……114
第125図 ⅢF5号掘立柱建物址実測図……115
第126図 ⅢF8号・ⅢF11号掘立柱建物址実測図……116
第127図 ⅢF9号掘立柱建物址実測図……118
第128図 ⅢF10号・ⅢF12号掘立柱建物址実測図……119
第129図 Ⅰ1・2・3・4号・Ⅲ1号欄列実測図……121
第130図 Ⅲ2・3号欄列実測図……122
第131図 ⅠD14・19・26・28号 ⅡD1・2・7号土坑実測図……126
第132図 ⅡD8・9・10・11・12・13号土坑実測図……128
第133図 ⅡD16・20・21・26号土坑実測図……129
第134図 ⅡD28・29・31・33・42・43・44・84号土坑実測図…130
第135図 ⅡD70・73・85・116・121・127号
ⅢD7・12・31号土坑実測図……134
第136図 ⅢD10・20・32・54・87・88号土坑実測図……136
第137図 ⅣD1・3号土坑実測図……137
第138図 ⅠD5・8・13・21・22・23・24・25・27号土坑実測図…139
第139図 ⅢD25・43・45・49・50・51・64・65号土坑実測図…141
第140図 ⅢD66・67・68・75・81・86号土坑実測図……143
第141図 ⅢD82・83・84・85・91・92・97・98・33号土坑実測図…145
第142図 ⅣD5・37・38・41号 ⅡD115・129号土坑実測図…146
第143図 Ⅰ～Ⅳ区土坑出土遺物実測図……148
第144図 ⅡM9号溝状遺構実測図……150
第145図 ⅡM9号溝状遺構出土遺物実測図……151
第146図 ⅡH18号住居址実測図……154
第147図 ⅡH18号住居址出土遺物実測図①……155
第148図 ⅡH18号住居址出土遺物実測図②……156
第149図 ⅡD24号土坑実測図……157
第150図 ⅠM5・11号溝状遺構実測図……159
第151図 ⅠM4・12号 ⅣM1号溝状遺構実測図……161
第152図 ⅢM6・7号溝状遺構実測図……162
第153図 ⅢM13・45号溝状遺構実測図……164
第154図 ⅡM31号溝状遺構出土遺物実測図……165
第155図 Z区ピット群実測図……167
第156図 ピット出土遺物実測図……168
第157図 遺構外出土遺物実測図(灰釉陶器)……169
第158図 遺構外出土遺物実測図(須恵器①)……170
第159図 遺構外出土遺物実測図(須恵器②)……171

図 版 目 次

第160図　遺構外出土遺物実測図(須恵器③) ……172
第161図　遺構外出土遺物実測図(須恵器④) ……173
第162図　遺構外出土遺物実測図(須恵器⑤) ……174
第163図　遺構外出土遺物実測図(土師器) ……175
第164図　遺構外出土遺物実測図(石製品) ……176
第165図　榛名平Ⅰ期の土器様相 ……185
第166図　榛名平Ⅱ期の土器様相 ……185
第167図　榛名平Ⅲ期の土器様相 ……186
第168図　榛名平Ⅳ期の土器様相 ……187
第169図　榛名平Ⅴ期の土器様相 ……188

付 表 目 次

第1表　ⅠH10号住居址出土遺物観察表 ……4
第2表　ⅠH21号住居址出土遺物観察表 ……7
第3表　ⅠH24号住居址出土遺物観察表 ……9
第4表　ⅠH25号住居址出土遺物観察表 ……11
第5表　ⅠH30号住居址出土遺物観察表 ……12
第6表　ⅠH31号住居址出土遺物観察表 ……13
第7表　ⅠH32号住居址出土遺物観察表 ……15
第8表　ⅠH33号住居址出土遺物観察表 ……16
第9表　ⅠH34号住居址出土遺物観察表 ……17
第10表　ⅠH36号住居址出土遺物観察表 ……19
第11表　ⅠH38号住居址出土遺物観察表 ……20
第12表　ⅠH40号住居址出土遺物観察表 ……22
第13表　ⅠH41号住居址出土遺物観察表 ……26
第14表　ⅡH1号住居址出土遺物観察表 ……30
第15表　ⅡH2号住居址出土遺物観察表 ……32
第16表　ⅡH3号住居址出土遺物観察表 ……32
第17表　ⅡH4号住居址出土遺物観察表 ……36
第18表　ⅡH5号住居址出土遺物観察表 ……38
第19表　ⅡH6号住居址出土遺物観察表 ……39
第20表　ⅡH7号住居址出土遺物観察表 ……41
第21表　ⅡH8号住居址出土遺物観察表 ……43
第22表　ⅡH9号住居址出土遺物観察表 ……44
第23表　ⅡH11号住居址出土遺物観察表 ……46
第24表　ⅡH12号住居址出土遺物観察表 ……49
第25表　ⅡH13号住居址出土遺物観察表 ……51
第26表　ⅡH14号住居址出土遺物観察表 ……54
第27表　ⅡH15号住居址出土遺物観察表 ……56
第28表　ⅡH17号住居址出土遺物観察表 ……58
第29表　ⅡH19号住居址出土遺物観察表 ……60
第30表　ⅡH20号住居址出土遺物観察表 ……62
第31表　ⅡH22号住居址出土遺物観察表 ……65
第32表　ⅡH23号住居址出土遺物観察表 ……66
第33表　ⅡH24号住居址出土遺物観察表 ……67
第34表　ⅢH6号住居址出土遺物観察表 ……70
第35表　ⅢH7号住居址出土遺物観察表 ……71
第36表　ⅢH9号住居址出土遺物観察表 ……74
第37表　ⅢH10号住居址出土遺物観察表 ……76
第38表　ⅢH12号住居址出土遺物観察表 ……79
第39表　ⅢH15号住居址出土遺物観察表 ……81
第40表　ⅢH17号住居址出土遺物観察表 ……83
第41表　ⅢH20号住居址出土遺物観察表 ……84
第42表　ⅢH24号住居址出土遺物観察表 ……90
第43表　ⅢH27号住居址出土遺物観察表 ……91
第44表　ⅢH28号住居址出土遺物観察表 ……96
第45表　ⅢH31号住居址出土遺物観察表 ……98
第46表　ⅢH44号住居址出土遺物観察表 ……100
第47表　ⅣH1号住居址出土遺物観察表 ……102
第48表　ⅣH2号住居址出土遺物観察表 ……104
第49表　ⅣH3号住居址出土遺物観察表 ……105
第50表　ⅣH4号住居址出土遺物観察表 ……107
第51表　Ⅰ～Ⅲ区土坑出土遺物観察表 ……149
第52表　ⅡM9号溝状遺構出土遺物観察表 ……152
第53表　ⅡH18号住居址出土遺物観察表 ……155
第54表　ⅢM6号溝状遺構出土遺物観察表 ……163
第55表　ⅡM31号溝状遺構出土遺物観察表 ……165
第56表　ピット出土遺物観察表 ……168
第57表　遺構外出土遺物観察表(灰釉陶器) ……176
第58表　遺構外出土遺物観察表(須恵器①) ……177
第59表　遺構外出土遺物観察表(須恵器②) ……178
第60表　遺構外出土遺物観察表(須恵器③) ……179
第61表　遺構外出土遺物観察表(須恵器④) ……180
第62表　遺構外出土遺物観察表(須恵器⑤) ……181
第63表　遺構外出土遺物観察表(土師器) ……182

写 真 図 版

図版1　①ⅠH10号住居址全景
②ⅠH10号住居址カマド検出状況
図版2　①ⅠH10号住居址カマド全景
②ⅠH10号住居址南東コーナー遺物出土状況
図版3　①ⅠH20号住居址全景
②Ⅰ区北側調査風景
図版4　①ⅠH21号住居址全景
②ⅠH21号住居址掘り方全景
図版5　①ⅠH24号住居址全景
②ⅠH24号住居址掘り方全景
図版6　①ⅠH25号住居址全景
②ⅠH34号住居址全景
図版7　①ⅠH30号住居址全景
③ⅠH30号住居址掘り方全景
図版8　①ⅠH31号住居址全景
②ⅠH31号住居址掘り方全景
図版9　①ⅠH32号住居址全景
②ⅠH32号住居址掘り方全景
図版10　①ⅠH33号住居址全景
②ⅠH33号住居址掘り方全景
図版11　①ⅠH37号住居址全景
②ⅠH38号住居址全景
図版12　①ⅠH40号住居址全景
②ⅠH43号住居址全景
図版13　①ⅠH41号住居址全景
②ⅠH41号住居址掘り方全景
図版14　①ⅠH41号住居址カマド検出状況
②ⅠH41号住居址カマド全景

写真図版

図版15 ①ⅡH1号住居址全景
②ⅡH1号住居址カマド掘り方全景
図版16 ①ⅡH1号住居址南東コーナー土坑遺物出土状況
②ⅡH1号住居址南東コーナー土坑掘り方全景
図版17 ①ⅡH2号住居址全景
②ⅡH3号住居址全景
図版18 ①ⅡH5号住居址全景
②ⅡH7号住居址全景
図版19 ①ⅡH4号住居址全景
②ⅡH4号住居址掘り方全景
図版20 ①ⅡH6号住居址全景
②ⅡH6号住居址焼土検出状況
図版21 ①ⅡH8号住居址全景
②ⅡH8号住居址カマド全景
図版22 ①ⅡH11号住居址全景
②Ⅱ区東側調査風景
図版23 ①ⅡH12号住居址全景
②ⅡH12号住居址カマド及び遺物出土状況
図版24 ①ⅡH12号住居址カマド検出状況
②ⅡH12号住居址カマド掘り方全景
図版25 ①ⅡH13号住居址全景
②ⅡH13号住居址カマド全景
図版26 ①ⅡH14号住居址全景
②ⅡH14号住居址遺物出土状況
図版27 ①ⅡH14号住居址カマド全景
②ⅡH14号住居址カマド掘り方全景
図版28 ①ⅡH15号住居址全景
②ⅡH15号住居址カマド全景
図版29 ①ⅡH17号住居址全景
②ⅡH17号住居址遺物出土状況
図版30 ①ⅡH17号住居址カマド全景
②ⅡH17号住居址カマド掘り方全景
図版31 ①ⅡH19号住居址全景
②ⅡH20号住居址全景
図版32 ①ⅡH22号住居址全景
②ⅡH22号住居址カマド全景
図版33 ①ⅡH23号住居址全景
②ⅡH23号住居址遺物出土状況
図版34 ①ⅡH24号住居址全景
②ⅢH6号住居址全景
図版35 ①ⅢH7号住居址全景
②ⅢH7号住居址カマド掘り方全景
図版36 ①ⅢH8号住居址全景
②ⅢH8号住居址カマド全景
図版37 ①ⅢH9号住居址全景
②ⅢH9号住居址カマド全景
図版38 ①ⅢH10号住居址全景
②ⅢH11号住居址全景
図版39 ①ⅢH12号住居址全景
②ⅢH14号住居址全景
図版40 ①ⅢH15号住居址全景
②ⅢH16号住居址全景
図版41 ①ⅢH17号住居址全景
②ⅢH19号住居址全景
図版42 ①ⅢH20号住居址全景
②Ⅲ区調査風景
③ⅢH23号住居址全景
図版43 ①ⅢH24号住居址全景
②ⅢH24号住居址カマド全景
図版44 ①ⅢH27号住居址全景
②ⅢH27号住居址カマド掘り方全景
図版45 ①ⅢH28号住居址全景
②ⅢH28号住居址カマド検出状況
図版46 ①ⅢH28号住居址カマド袖部検出状況
②ⅢH28号住居址カマド掘り方全景
図版47 ①ⅢH31号住居址全景
②ⅢH32号住居址全景
図版48 ①ⅢH44号住居址全景
②ⅢH44号住居址遺物出土状況
図版49 ①ⅣH1号住居址全景
②ⅣH1号住居址カマド掘り方全景
図版50 ①ⅣH2号住居址全景
②ⅣH2号住居址カマド掘り方全景
図版51 ①ⅣH3号住居址全景
②ⅣH3号住居址カマド掘り方全景
図版52 ①ⅣH4号住居址全景
②ⅣH4号住居址内D2号土坑遺物出土状況
図版53 ①ⅣH9号住居址全景
②ⅣH17号住居址全景
図版54 ①IF6号掘立柱建物址全景
②ⅡF3号掘立柱建物址全景
図版55 ①ⅢF2号掘立柱建物址全景
②ⅢF3号掘立柱建物址全景
図版56 ①ⅢF4号掘立柱建物址全景
②ⅢF5号掘立柱建物址全景
図版57 ①ⅢF8号掘立柱建物址全景
②ⅢF9号掘立柱建物址全景
図版58 ①ⅢF10号掘立柱建物址全景
②ⅢF12号掘立柱建物址全景
図版59 ①Ⅰ1号柵列全景
②Ⅲ1号柵列全景
図版60 ①Ⅲ2号柵列全景
②ⅢH28号住居址調査風景
図版61 ①ID5号土坑 ⑤ID19号土坑
②ID8号土坑 ⑥ID21号土坑
③ID13号土坑 ⑦ID22号土坑
④ID14号土坑 ⑧ID23号土坑
図版62 ①ID24号土坑 ⑤ⅡD7号土坑
②ID25号土坑 ⑥ⅡD8号土坑
③ⅡD1号土坑 ⑦ⅡD9号土坑
④ⅡD2号土坑 ⑧ⅡD10号土坑
図版63 ①ⅡD11号土坑 ⑤ⅡD20号土坑
②ⅡD12号土坑 ⑥ⅡD21号土坑
③ⅡD13号土坑 ⑦ⅡD28号土坑
④ⅡD16号土坑 ⑧ⅡD29号土坑
図版64 ①ⅡD70号土坑 ⑤ⅡD116号土坑
②ⅡD73号土坑 ⑥ⅡD121号土坑
③ⅡD84号土坑 ⑦ⅢD12号土坑
④ⅡD85号土坑 ⑧ⅢD25号土坑
図版65 ①ⅢD31号土坑 ⑤ⅢD45号土坑
②ⅢD32号土坑 ⑥ⅢD49号土坑
③ⅢD33号土坑 ⑦ⅢD51号土坑
④ⅢD43号土坑 ⑧ⅢD54号土坑
図版66 ①ⅢD64号土坑 ⑤ⅢD81号土坑
②ⅢD66号土坑 ⑥ⅢD82・83号土坑
③ⅢD67・68号土坑 ⑦ⅢD84号土坑
④ⅢD75号土坑 ⑧ⅢD88号土坑
図版67 ①ⅣD1号土坑 ④ⅣD37号土坑
②ⅣD3号土坑 ⑤ⅣD38号土坑
③ⅣD5号土坑 ⑥ⅣD41号土坑

写 真 図 版

図版68　①方形区画溝　ⅡM９号溝状遺構全景
　　②Ⅱ区調査地点
図版69　①土壙墓　ⅡD24号土坑
　　②土壙墓　ⅡD24号土坑人骨出土状態
図版70　①小鍛冶遺構　ⅡH18号全景
　　②小鍛冶遺構　ⅡH18号炉全景
図版71　①小鍛冶遺構　ⅡH18号羽口出土状況(南より)
　　②小鍛冶遺構　ⅡH18号羽口出土状況(北より)
図版72　①ⅠM５号溝状遺構全景
　　②ⅠM４号溝状遺構全景
　　③Ⅰ区調査地点全景
図版73　①ⅠM11号溝状遺構全景
　　②ⅠM12号溝状遺構全景
図版74　①ⅡM31号溝状遺構全景
　　②ⅣM１号溝状遺構全景
図版75　ⅠH10・21・24号住居址出土遺物
図版76　ⅠH24・25・30・31号住居址出土遺物
図版77　ⅠH32・33・34・36・38・40・41号住居址出土遺物
図版78　ⅠH41号住居址出土遺物
図版79　ⅠH41，ⅡH１・２・３号住居址出土遺物
図版80　ⅡH３・４・５・６号住居址出土遺物
図版81　ⅡH６・７・８・９・11・12号住居址出土遺物
図版82　ⅡH12・13・14号住居址出土遺物
図版83　ⅡH14・15・17・19・20号住居址出土遺物
図版84　ⅡH20・22号住居址出土遺物
図版85　ⅡH22・23・24，ⅢH６・７・９号住居址出土遺物
図版86　ⅢH10・11・12・15・17・20・23号住居址出土遺物
図版87　ⅢH24・27・28号住居址出土遺物
図版88　ⅢH28号住居址出土遺物
図版89　ⅢH28・31・32・44，ⅣH１・２・３・４号住居址，ⅡD10・85，ⅢD33号土坑出土遺物
図版90　ⅡD11・28，ⅢD54号土坑，ⅡM９号溝状遺構出土遺物
図版91　ⅡM９・31，ⅢM６号溝状遺構，ピット出土遺物
図版92　ⅡH18号住居址(小鍛冶遺構)出土遺物
図版93　遺構外出土遺物①
図版94　遺構外出土遺物②
図版95　遺構外出土遺物③
図版96　遺構外出土遺物④
図版97　ⅠH36，ⅡH12・13・14・17，ⅢH24号住居址出土遺物(石製品)
図版98　ⅡH４，ⅢH28，ⅣH９号住居址，遺構外出土遺物(石製品)
図版99　ⅠH40・41，ⅡH３・４・14・20，ⅢH24・28号住居址，ピット出土遺物(鉄製品)

第Ⅰ章　榛名平遺跡における奈良・平安時代の概要

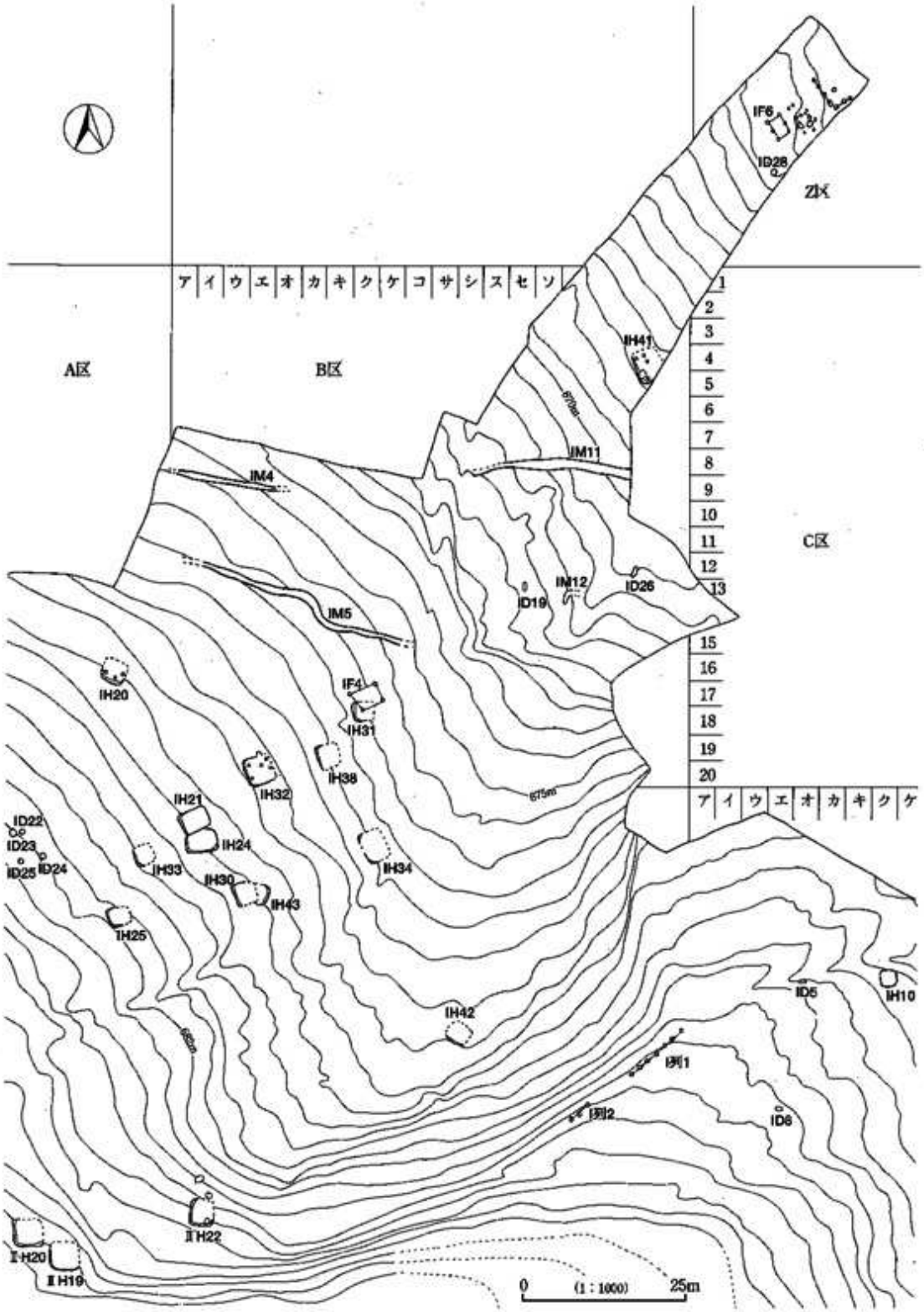
第1節　概　要

榛名平遺跡における奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居址63軒・掘立柱建物址12棟・土坑60基・溝状遺構10本・特殊遺構として方形区画溝・小鍛冶遺構・土壙墓等が検出された。これらの遺構は調査区が傾斜地ということもあり、いずれも傾斜の低い方の住居址の壁が検出されず「コ」の字状を呈する住居址がほとんどであった。また、中にはⅢH28号住居址の様に本来の地形から類推しても傾斜谷部側の壁の存在は疑わしく、急傾斜地における竪穴住居構造の再考を考えさせる遺構も存在した。遺構の分布は主に調査区北側の北斜面であるB・F区、調査区中央部の南斜面であるI区、調査区上段部東斜面のL・M区の3地域にまとまって検出されている。分布の特徴としてはL・M区では竪穴住居址とともに掘立柱建物址が多く検出され、庇を持つ総柱式掘立柱建物址も検出された。これら掘立柱建物址の帰属時期は不明な物が多かったが、規則性のある配置からほぼ同一時期の遺構と考えられた。

当遺跡における遺構の帰属時期は各遺構より出土した遺物を他遺跡の土器編年を援用して決定した。なお当遺跡の土器編年については第Ⅲ章について考察している。土器より導き出された年代は9世紀初頭から10世紀末の約200年間が当てられた。よって榛名平遺跡の住居址はほぼ平安時代に比定されよう。また、年代ごとの遺構の分布は3地域で偏りが見られ、調査区中央部の竪穴住居址群は9世紀中葉を主体とし、北部低地と上部台地は10世紀中葉を主体とする遺構が多かったことから、遺跡内での集落拡散が行われたような状態であった。また、調査区中央部の9世紀代の集落があった場所には新たに方形の区画溝と小鍛冶遺構が出現する。この方形区画溝の性格は確証を得られなかったが北佐久郡御代田町川原田遺跡の方形区画溝とも似ており、集落内のお堂的建物或いは松本市吉田川西遺跡と同じような富豪農民層の屋敷跡等の可能性が考えられる。

出土遺物としてはⅡH12号住居址覆土から「奈良三彩蓋」の破片が出土している。小片であるために全容を把握できなかったが、三彩蓋に多い小型品ではなく径18cm近い大型の蓋であることが解り、新潟県和島村八幡林官衙遺跡の出土例を参考とし推定復元図を記載した。また、グリット一括遺物であるが、須恵器蓋の内面刻書として「大井」が1点出土している。この刻書は焼成後のものであった。また、この須恵器蓋の摘み部は特異な形態を示し佐久平周辺では出土例の無いものであった。今日「大井」の刻書・墨書は佐久地域において地域を問わず出土する傾向にあり、大井郷との比定地問題も含め検討を必要としていると思われる。

以上、榛名平遺跡における奈良・平安時代の遺構・遺物の概要であり、以下各遺構・遺物について竪穴住居址より述べる。



第1図　Ⅰ区奈良・平安時代遺構全体図

第Ⅱ章　遺構と遺物

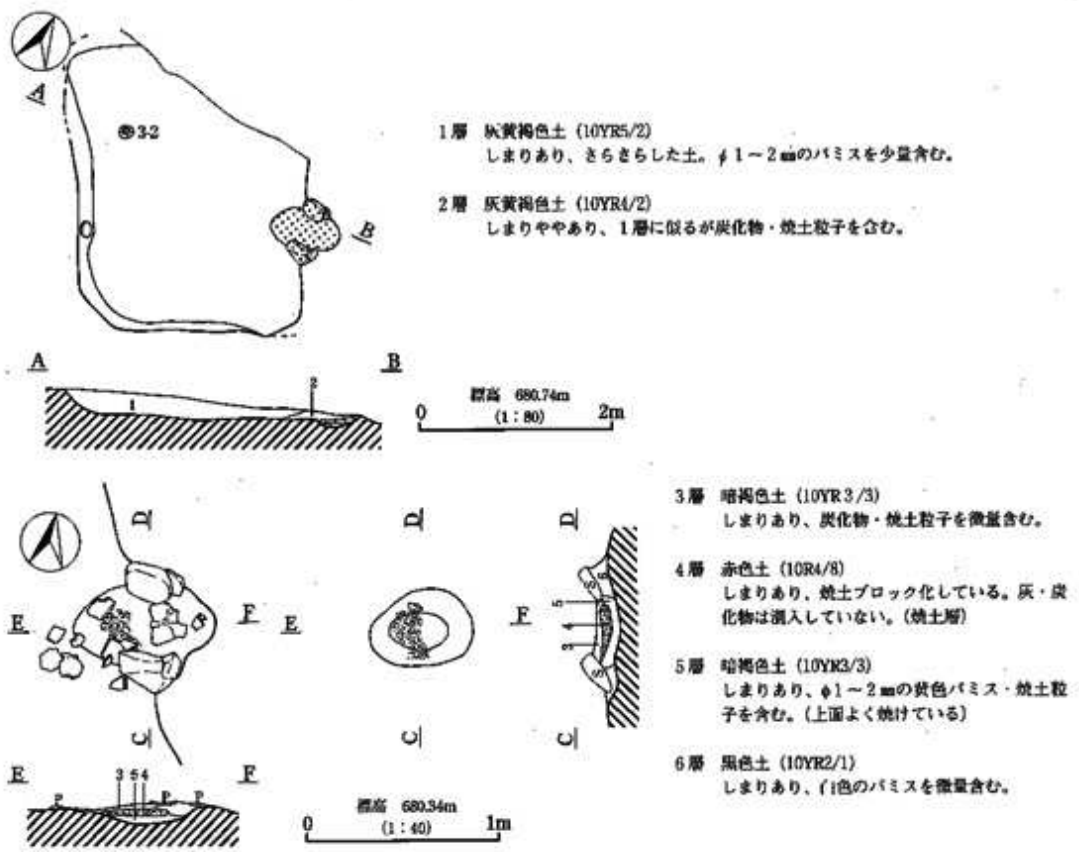
第１節　竪穴住居址

(1) ＩH10号住居址（第２・３図、写真図版一・二）

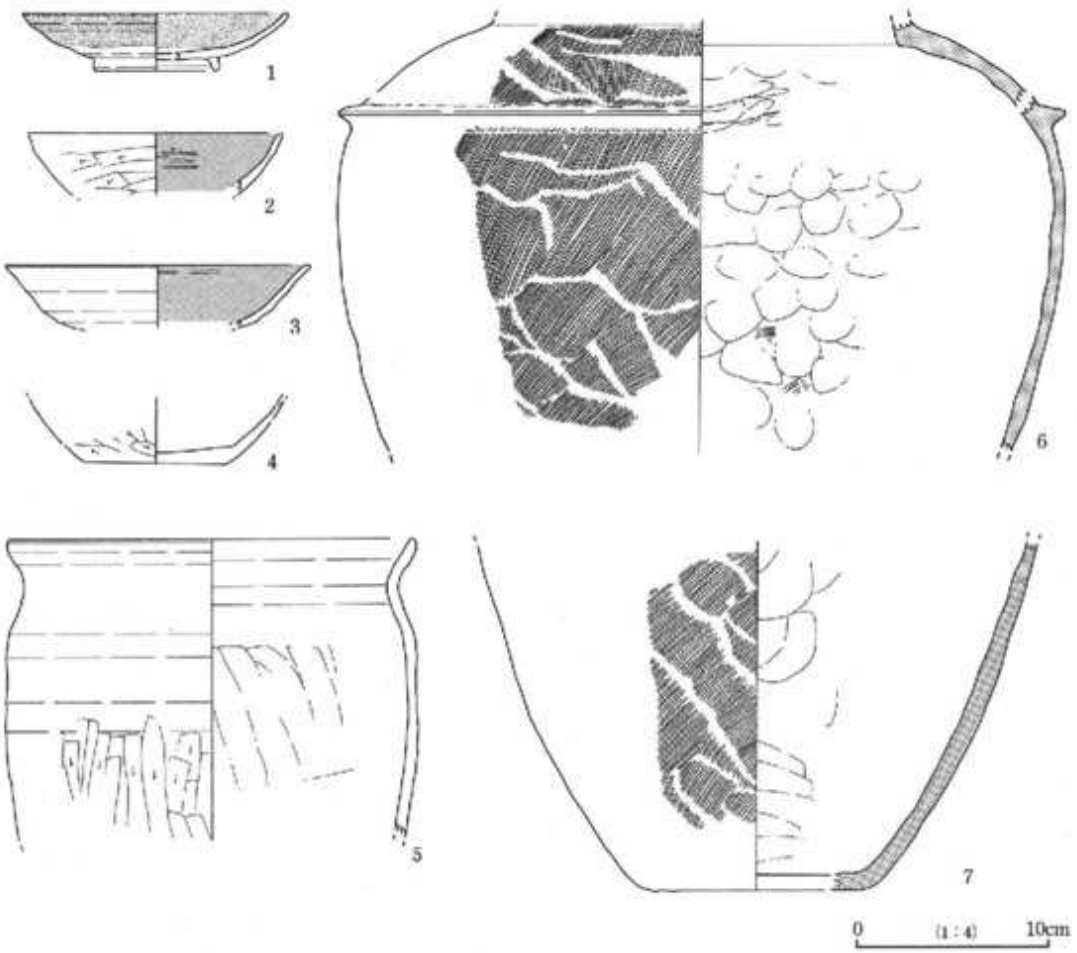
本住居址は、調査区東よりの台地の先端部であるG－ク－８Grに位置する。残存状態は北側が後世の畑地境溝によって1/3程が削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられ、東壁にカマドが造られている。規模は北壁0.7ｍ(残存)、推定では2.4ｍ・南壁2.05ｍ(検出部分)で、壁高さは北西コーナーよりで21㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はＮ－58°－Ｅを示す。住居址の床面積は検出部で5.1㎡を測る。覆土は２層に分かれる。床は住居址カマド周辺部にかけて硬質であり、貼り床は確認されず、地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。壁溝・柱穴は確認されなかった。

カマドは東壁やや南よりに検出された。主軸方位はＮ－72°－Ｅを測り、住居址主軸よりも南側にずれる。規模は煙道部から火床面までの長さ73㎝・幅40㎝で、右袖が長さ32㎝・幅19㎝、左袖



第２図　ＩH10号住居址実測図



第3図　1H10号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	灰釉皿	(13.6)	3.0	(6.4)	外面　ロクロ成形 回転糸きり後、高台貼付 施釉は漬け掛け 内面　ロクロ成形 内面よく磨かれている 輪花あり	7.5Y8/1　灰白 黒色粒子を微量含む
2	土師器坏	(13.0)	〈3.2〉	——	外面　口縁部ヨコナデ後、体部ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6　橙 径1～2㎜の砂粒多く含みざらついている
3	土師器坏	(15.6)	〈3.3〉	——	外面　ロクロ成形 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6　橙 径1㎜の赤色粒子を多く含み砂粒を含む
4	土師器甕	——	〈3.3〉	7.4	外面　ヘラケズリ・底部手持ちヘラケズリ 内面　ナデ	5YR5/4　にぶい赤褐 径1㎜程の赤色粒子を含み、砂粒を含む
5	土師器甕	(21.0)	〈15.4〉	——	外面　ロクロ成形後、胴下半ナデ or ケズリ 内面　ロクロ成形後、胴部ナデ	5YR7/8　橙 赤色粒子を微量含み、砂粒を含む
6	須恵器四耳壺	——	〈22.8〉	——	外面　タタキメ後、降帯貼付 内面　当て具痕残る　頸部ヨコナデ	N4/灰 黒色粒子を少量含む
7	須恵器甕	——	〈17.9〉	12.0	外面　タタキメ 内面　当て具痕残る　胴下半ナデ 6と同一個体の可能性	N4/灰 白色粒子を多く含む

第1表　1H10号住居址出土遺物観察表

が長さ30cm・幅19cmをそれぞれ測る。形態は煙道部が住居址壁ラインよりも外に飛び出す形で、煙道は緩やかに立ち上がる。袖は両袖ともに自然石を使用していた。火床面はよく焼けており、焼土は硬質化しており厚さ5cmの堆積が確認された。

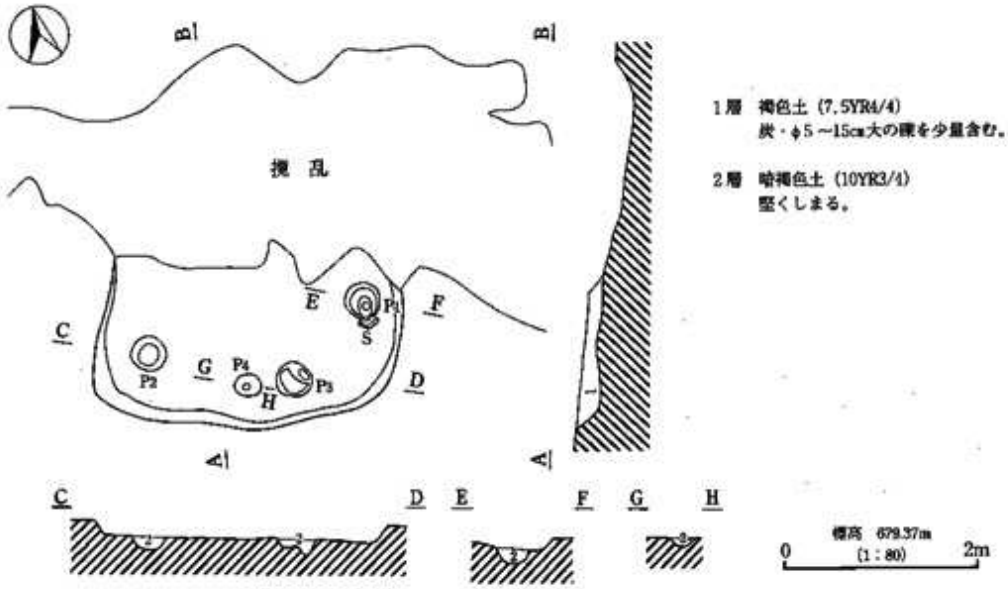
出土遺物は覆土中と床直のものがあるが、特に南東コーナー部分から集中して出土した。この南東コーナー部分にはカマドに使用されたような礫に混じって図示した須恵器四耳壺などが破砕した状態で検出された。図示した遺物の出土位置はそれぞれ3～6が南東コーナー部分、1が覆土中、2は北よりの床直、7がカマド火床面より出土した。よって本址は9世紀後半に位置づけられる。

(2) I H20号住居址（第4図、写真図版三①）

本住居址は、調査区西よりA－ツー6Grに位置する。残存状態は北側が撹乱を受けており、住居址の半分程が検出されたに止まった。

形態は、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は東壁1.18m（残存）・西壁1.4m（残存）・南壁2.94mで、壁高さは北壁中央で27cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。主軸方位N－13°－Eを示す。住居址の床面積は検出部で4.26㎡を測る。覆土は単層で、床は住居址中央部にかけて硬質であり、地山を敵いて踏み固めた様な状態であった。壁溝は確認されなかった。柱穴は4カ所確認され、規模はP1が径35cm・深さ28cm、P2が径36cm・深さ14cm、P3が径37cm・深さ18cm、P4が径29cm・深さ10cmをそれぞれ測る。カマドは北壁に付くのか確認されなかった。

出土遺物は覆土中よりいわゆる武蔵甕片が少量出土したのみであり、時期不明である。



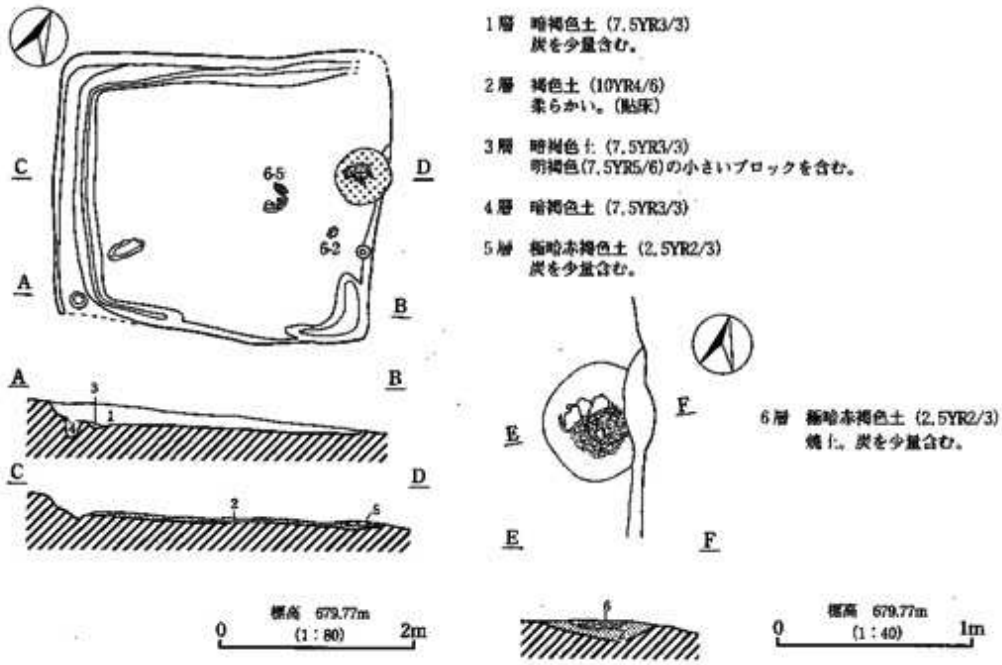
第4図　I H20号住居址実測図

(3) I H21号住居址（第５・６図、写真図版四）

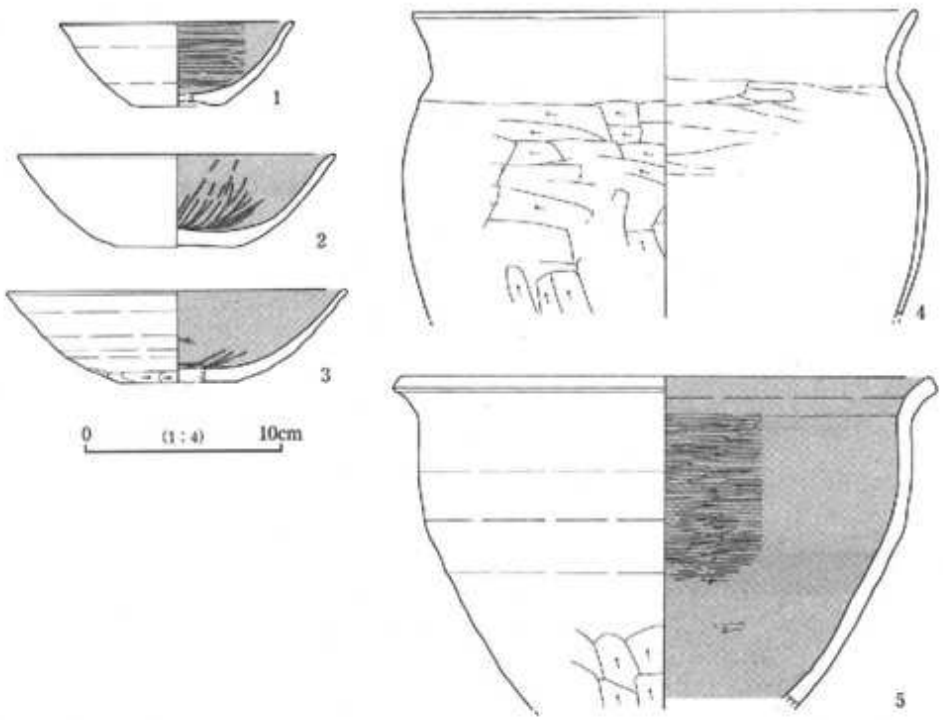
本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるF－ア－１・２.F－イ－１・２Grに位置する。残存状態は東側と南側が地形の傾斜のため壁が削平されている他は良好であった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁2.94ｍ(残存)、3.24ｍ(推定)・南壁1.94ｍ(残存)3.13ｍ(推定)・西壁2.6ｍ・東壁2.02ｍ(残存)2.87ｍ(推定)で、壁高さは北西コーナーよりで21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－24°－Wを示す。住居址の床面積は推定で6.8㎡を測る。覆土は３層に分かれる。床は住居址カマド周辺部のみ硬質であり、貼り床は全体に施されていたが軟弱であった。壁溝は北壁と西壁の全部と南壁の一部に検出された。断面形はＵ字形で、幅は12～30cm・深さ9.5cmを測る。ピットは２カ所確認され、規模はＰ１が径16cm・深さ20cm、Ｐ２が径15cm・深さ８cmを測る。これらピットは検出位置より壁柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

出土遺物は覆土中のものがほとんどで土師器甕・坏類であった。図示した遺物の出土位置は１が覆土、２と４がカマド火床面、３と５がカマド前床直である。１～３は土師器坏でいずれもロクロ成形で内面には黒色処理がされている。２のみ底部が回転糸切り離しの後無調整である。４は土師器甕で頸部の顕著な「コ」の字はすでに退化した形態のものである。５は土師器鉢で、口縁部を伏せた状態で出土した。調整は胴部がロクロ成形で、胴部下半分がヘラケズリが行われ、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。また外面には顕著なタール状の付着物が確認された。これら遺物より本址は９世紀後半に位置づけられる。



第５図　I H21号住居址実測図



第６図　ＩH21号住居址出土遺物実測図

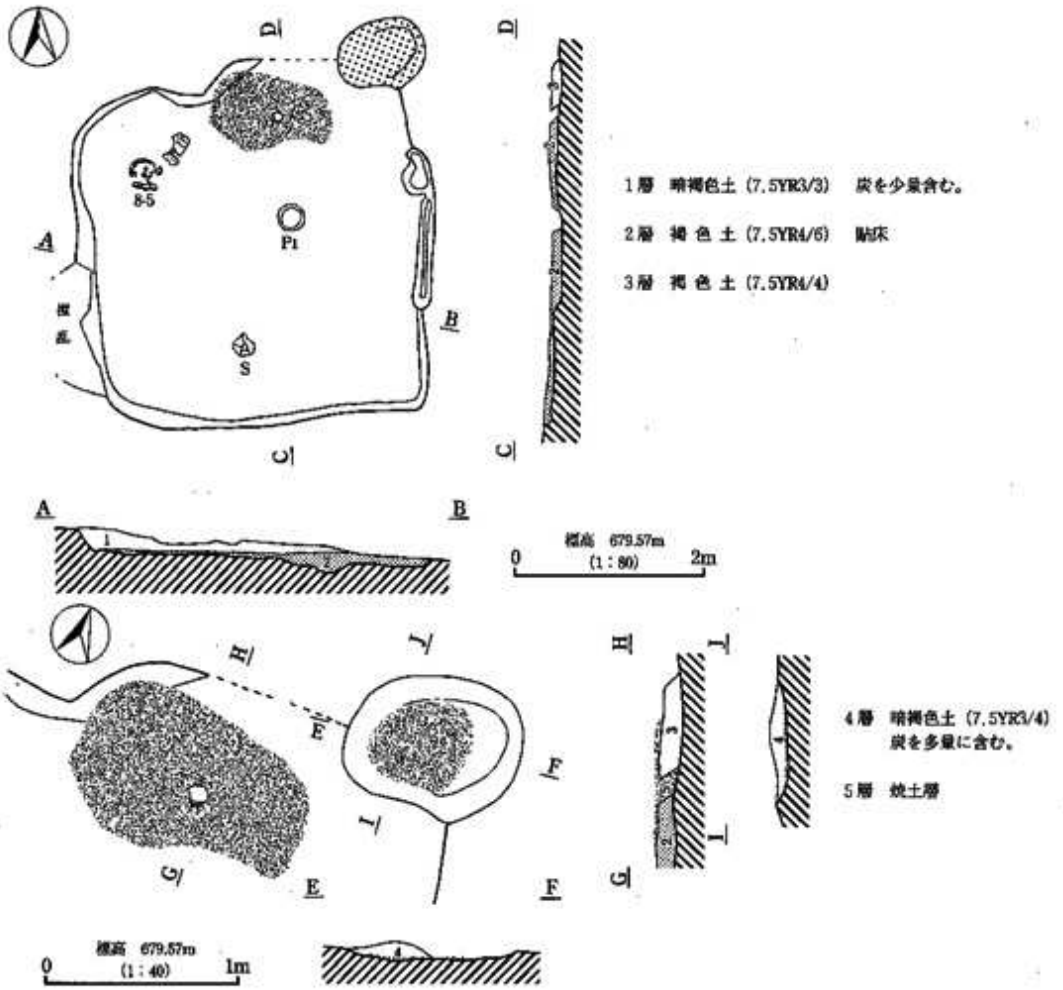
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器 坏	(12.0)	4.3	(4.8)	外面　ロクロ成形、底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面　ヘラミガキ・黒色処理　煤付着	7.5YR6/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
2	土師器 坏	(16.3)	4.8	6.0	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/4　にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
3	土師器 坏	(17.4)	4.7	(6.0)	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、底部および底部周縁手持ちヘラケズリ 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6　橙 径2～3㎜の赤色粒子多量と白色粒子含む
4	土師器 甕	(26.0)	(15.8)	――	外面　口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ後、胴部ナデ	7.5YR8/4　浅黄橙 径2～3㎜の赤色粒子を含み、砂粒を含む
5	土師器 鉢	(28.0)	(17.1)	――	外面　ロクロ成形　胴部下半ヘラケズリ ※タール付着 内面　ロクロ成形　胴部ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子と白色砂粒多量含む

第２表　ＩH21号住居址出土遺物観察表

(4) ＩH24号住居址（第７・８図、写真図版五）

本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるF－ア－２．３．F－イ－２．３Grに位置する。残存状態は西壁の一部が攪乱により削平されている他は良好であった。また、本址はH21号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁北東コーナーに造られている。規模は北壁1.76ｍ(残存)、3.25ｍ(推定)・南壁3.17ｍ・西壁3.1ｍ・東壁2.67ｍ(残存)3.56ｍ(推定)で、壁高さは西壁中央



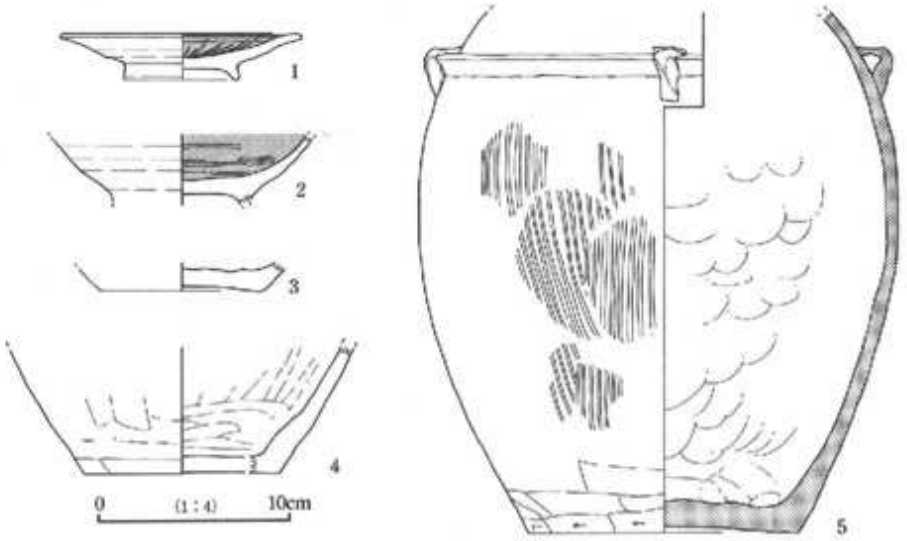
第7図　IH24号住居址実測図

で21cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－4°－Wを示す。住居址の床面積は11.0㎡を測る。覆土は1層のみである。貼り床は全体に施されていたが軟弱であった。壁溝は東壁に一部確認された。ピットは1カ所のみで、規模はP1が径27cm・深さ8cmを測る。

カマドは北東コーナーに検出されたがH21号住居址と同じく火床面のみ残存していた。焼土の厚さは1.5cmを測る。また、本址は北壁際中央部に床が焼けたような焼土が広がっている部分が確認された。

出土遺物は住居址覆土中の物が多かった。図示した遺物の出土位置は1と4が焼土内、2と3が覆土中、5が北西コーナー床直である。1、2は土師器坏で内面は黒色処理されている。5は須恵器四耳壺であり、まとまって出土したが口縁部から頸部までの破片は覆土内になかった。

本址はこれらの遺物より10世紀前半に位置づけられる。



第８図　ＩH24号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器 皿	(12.4)	2.4	5.9	外面　ロクロ成形　底部切り離し後、高台貼付 内面　暗文・黒色処理	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
2	土師器 椀	――	(3.6)	――	外面　ロクロ成形　底部切り離し後、高台貼付(切り離し方不明) 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/4　にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子多量、白色粒子少量含む
3	土師器 小形甕	――	(1.5)	(8.2)	外面　ロクロ成形　底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	5YR 6/4　にぶい橙(内面) 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
4	土師器 甕	――	(6.5)	(10.0)	外面　ハケ目の残るナデ　底部および外周手持ちヘラケズリ 内面　ナデ	5YR 6/6　橙(内面) 径2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
5	須恵器 四耳壺	――	(26.9)	10.8	外面　ナデ後タタキ　底部外周ヘラケズリ　隆帯貼付後、耳貼付 内面　当て具痕あり　ナデ(指頭痕残る)	7.5Y 6/2　灰オリーブ 径1㎜の黒色粒子微量、白色粒子多量含む

第３表　ＩH24号住居址出土遺物観察表

(5) ＩH25号住居址（第９・10図、写真図版六①）

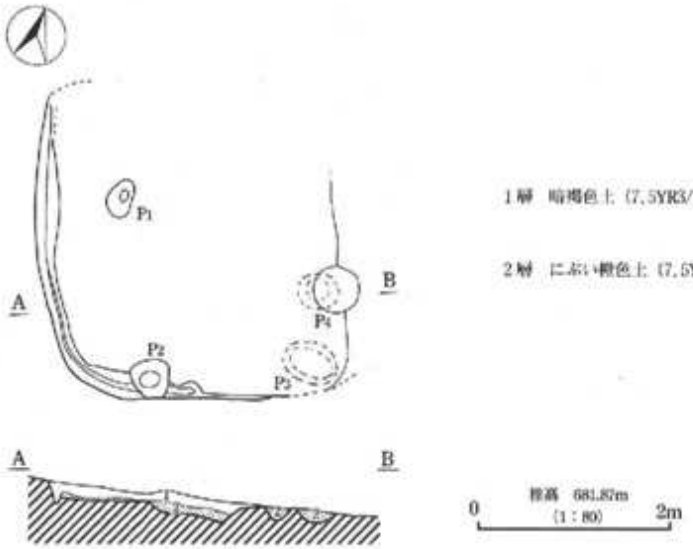
本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるＥ－ツ－５・６，Ｅ－テ－５・６Ｇｒに位置する。残存状態は北壁と東壁が地形の傾斜のため削平されていた。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明であるが東壁のほぼ中央にわずかに焼土部分が検出され、この焼土を火床面と考えると東カマドとなる。規模は南壁2.1ｍ(残存)2.85ｍ(推定)・西壁1.83ｍ(残存)2.92ｍ(推定)・東壁3.16ｍ(推定)で、壁高さは北西コーナーよりで21㎝を測る。

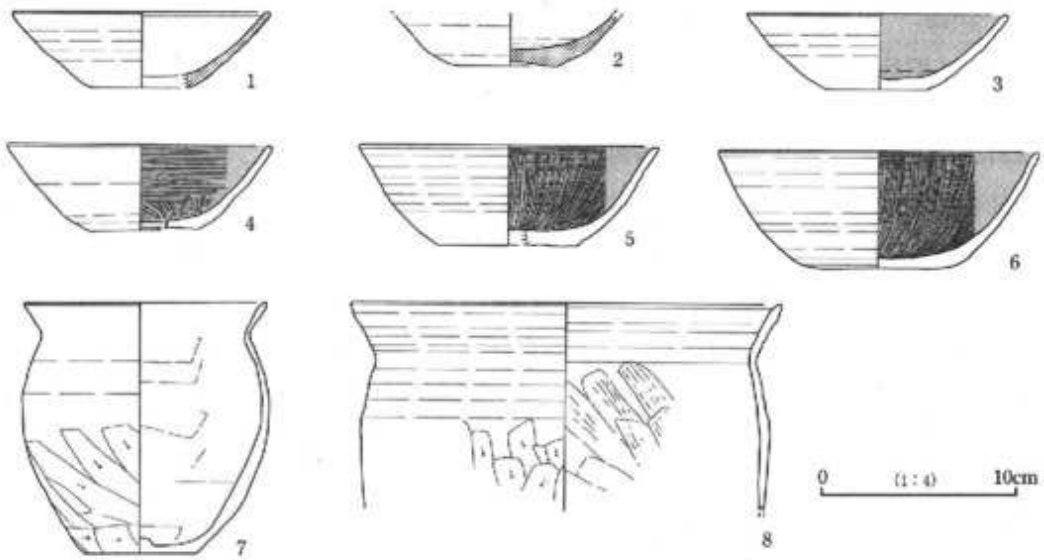
壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はＮ－18°－Ｗを示す。住居址の床面積は推定で9.1㎡を測る。覆土は１層で、床はやや硬質であり、貼り床は厚さ10㎝程で施されていた。壁溝は西壁と南壁の一部に検出された。断面形はＶ字形で、幅は12～27㎝・深さ4㎝を測る。ピットは床面精査時に２カ所、掘り方検出時に２カ所の計４カ所が確認された。規模はＰ１が径40㎝・深さ16㎝、

P2が径40cm・深さ16cm、P3が径56cm・深さ17.5cm、P4が径43cm・深さ15cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

出土遺物はほとんどが床下から出土した。図示した遺物の出土位置も2が覆土の他はいずれも床下からの出土である。1と2は須恵器坏で、3～6は土師器坏で内面は丁寧なミガキの後黒色処理がされている。7は土師器小型甕、8は土師器ロクロ甕で胴部から底部を欠損している。本址はこれら遺物より9世紀後半に位置づけられる。



第9図　I H25号住居址実測図



第10図　I H25号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(13.2)	3.9	(5.0)	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形 なま焼的	7.5Y6/1 灰 径1㎜の黒色粒子と砂粒を含む
2	須恵器坏	――	(2.7)	5.0	外面 ロクロ成形 底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5Y6/2 灰オリーブ 径1㎜の黒色粒子と白色粒子を多く含む
3	土師器坏	(13.4)	3.9	5.0	外面 ロクロ成形 底部回転糸切り 内面 黒色処理	7.5YR6/6 橙 径1㎜の赤色粒子、径2～3㎜の小石を多く含む
4	土師器坏	13.6	4.5	5.6	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/4 浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子と白色粒子を含む
5	土師器坏	15.4	5.1	(7.4)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1㎜の赤色粒子を多く含み、砂粒を含む
6	土師器坏	(16.6)	6.0	7.6	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、回転ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1㎜以下の赤色粒子少量と、白色粒子を多量に含む
7	土師器小形甕	(12.5)	12.9	5.7	外面 口縁部～胴部ロクロ成形 胴部下半～底部ヘラケズリ 内面 口縁部ロクロ成形 胴部～底部ヘラナデ	7.5YR6/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と、砂粒を多量含む
8	土師器甕	(22.2)	(10.6)	――	外面 ロクロ成形 胴下半ヘラケズリ 内面 ロクロ成形 胴部ナデ	5YR5/6 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子と、白色粒子を多く含む

第4表　ⅠH25号住居址出土遺物観察表

(6) ⅠH30号住居址（第11・12図、写真図版七）

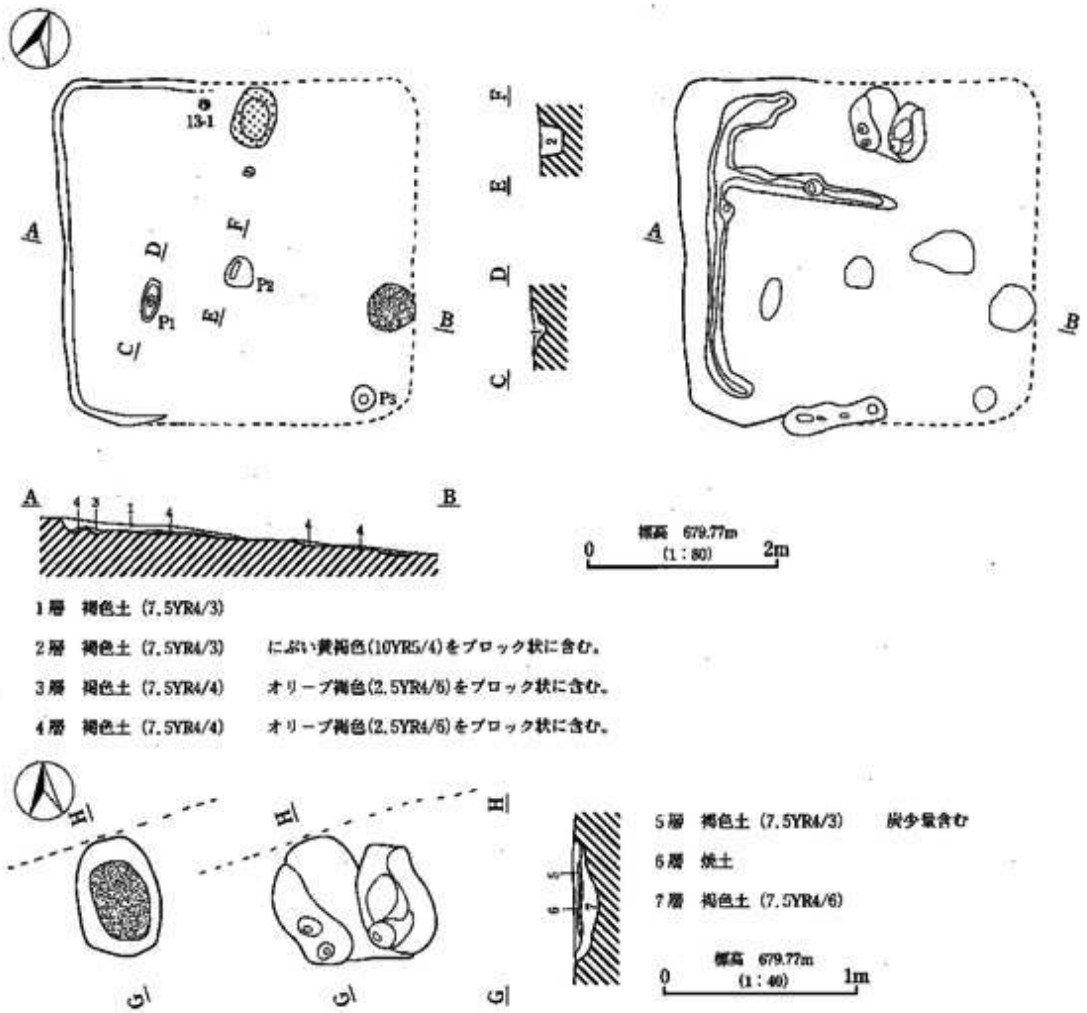
本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるF－ウ－4･5,F－エ－4･5Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁1.34m（残存）、3.5m（推定）･南壁0.93m（残存）3.34m（推定）･西壁3.3m･東壁3.3m（推定）で、壁高さは西壁中央で16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－21°－Wを示す。住居址の床面積は推定で12.1㎡を測る。覆土は4層に分かれる。床は地山を踏み固めたような土でやや軟質であった。壁溝は掘り方時に北壁側から間仕切り溝的に検出された。断面形はU字形で、幅は約20cm･深さ約4cmを測る。ピットは3カ所確認され、規模はP1が径44cm･深さ14.5cm、P2が径30cm･深さ25cm、P3が径27cm･深さ12cmを測る。

カマドは北壁中央にあったが、火床面のみしか残存していなかった。焼土の厚みは2cmで、掘り込み部の長さは長軸62cm･短軸45cmを測る。

出土遺物は覆土中のものがほとんどで土師器甕・坏類であった。図示した遺物の出土位置は1がカマド北側、2がカマド火床面である。以上の遺物などにより本址は9世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。

第11図　ⅠH30号住居址出土遺物実測図



第12図　ＩH30号住居址実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器 椀	――	〈2.4〉	7.1	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/4 にぶい赤褐 径1～2㎜の赤色、白色粒子を多く含む
2	須恵器 短頸壺	(16.4)	〈3.8〉	――	外面 ロクロ成形 表面赤化 内面 ロクロ成形	5YR3/1 黒褐 径1～2㎜の黒色粒子を含む

第５表　ＩH30号住居址出土遺物観察表

(7) ＩH31号住居址（第13・14図、写真図版八）

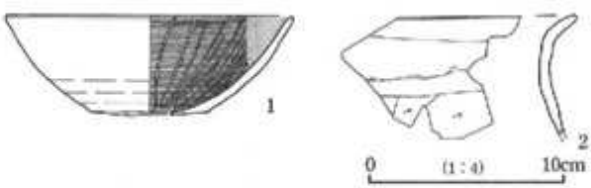
本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるB－ク－17･18Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。重複関係

はＩＦ４号掘立柱建物址と重複し本址の方が古い。

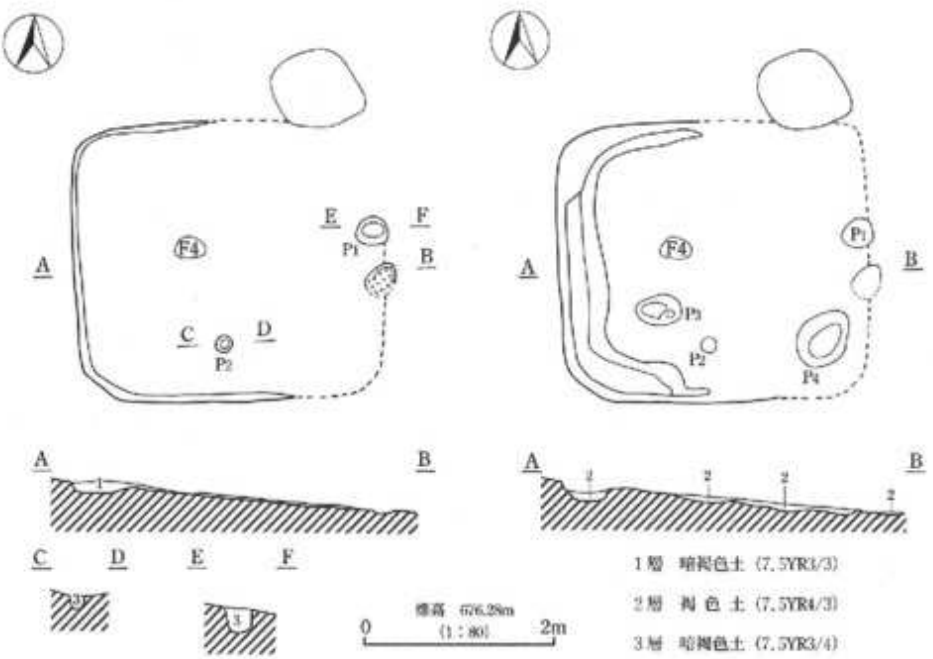
形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明であるが東壁のほぼ中央にわずかに焼土部分が検出され、この焼土を火床面と考えると東カマドとなる。規模は北壁1.35ｍ(残存)3.00ｍ(推定)・南壁2.1ｍ(残存)2.90ｍ(推定)・西壁2.46ｍ・東壁2.58ｍ(推定)で、壁高さは西壁中央で16cmを測る。

壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はＮ－１°－Ｗを示す。住居址の床面積は推定で8.4㎡(推定)を測る。覆土は１層で、床はやや硬質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは床面精査時に２カ所、掘り方検出時に２カ所の計４カ所が確認された。規模はＰ１が径32cm・深さ31.5cm、Ｐ２が径17cm・深さ21.5cm、Ｐ３が径47cm・深さ13.5cm、Ｐ４が径65cm・深さ10.5cmを測る。住居址の掘り方は西壁際のみ壁溝状に一段深く掘り窪められていた。

出土遺物のうちで図示した２点はいずれも覆土中の出土である。本址はこれら遺物より９世紀後半に位置づけられる。



第13図　ＩH31号住居址出土遺物実測図



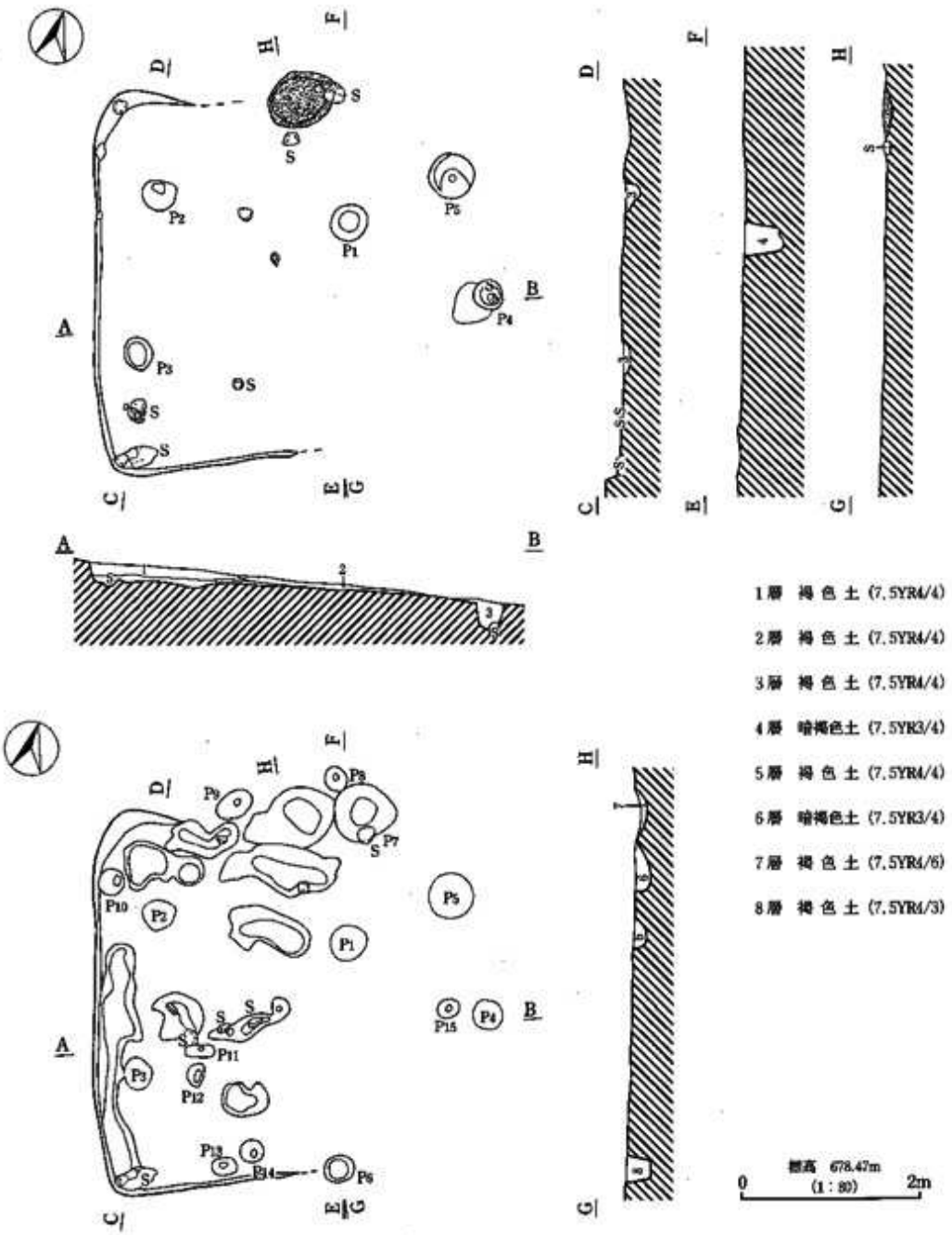
第14図　ＩH31号住居址実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(14.8)	5.1	(6.2)	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面　放射状のヘラミガキ・黒色処理	5YR6/4　にぶい橙 径1㎜の赤色粒子少量、黒色粒子微量含む
2	土師器甕	――	(6.0)	――	外面　胴部ヘラケズリの後、口縁部ヨコナデ 内面　胴部ナデの後、口縁部ヨコナデ	5YR6/6　橙 径1－2㎜の赤色粒子と砂粒を含む

第６表　ＩH31号住居址出土遺物観察表

(8) I H32号住居址（第15・16図、写真図版九）

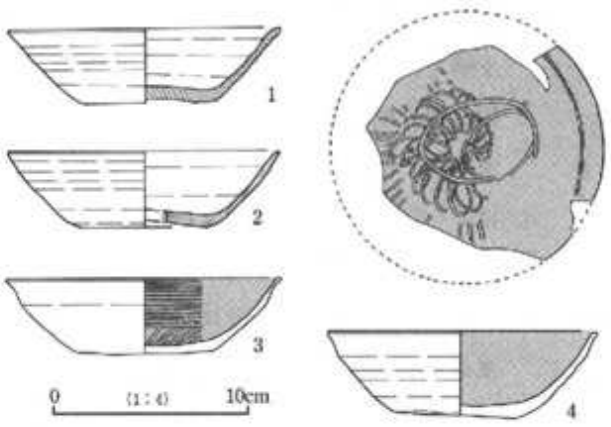
本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるB－ウ－20, B－エ－19・20, B－オ－20, F－エ－1 Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平され、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。



第15図　I H32号住居址実測図

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に検出された。規模は北壁0.94m(残存)4.10m(推定)・南壁2.02m(残存)4.00m(推定)・西壁4.10mで、壁高さは西壁で18.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN−18°−Wを示す。住居址の床面積は推定で17.8㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であった。壁溝は確認されていない。ピットは床面精査時に5カ所、掘り方検出時に10カ所の計15カ所が確認された。規模はP1が径40cm・深さ41cm、P2が径37cm・深さ18.5cm、P3が径37cm・深さ9cm、P4が径33cm・深さ32cm、P5が径50cm・深さ23cmを測る。P2～P5はその検出位置より主柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであったが、西壁と北壁の一部に間仕切り的な掘り込みが検出された。掘り方時に検出されたピットはP6～15まであり、規模は径22～32cm・深さ13～25cmを測る。壁際検出のピットは柱の補助穴とも考えられる。またP6に関しては検出場所より住居址の入り口施設に関連する穴と考えられる。

カマドは北壁中央部より検出されたが天井や袖部は既に削平され火床部のみ残存していた。焼土の厚さは6cmを測る。焼土は硬質化しており使用頻度の高さを感じさせた。



第16図　ⅠH32号住居址出土遺物実測図

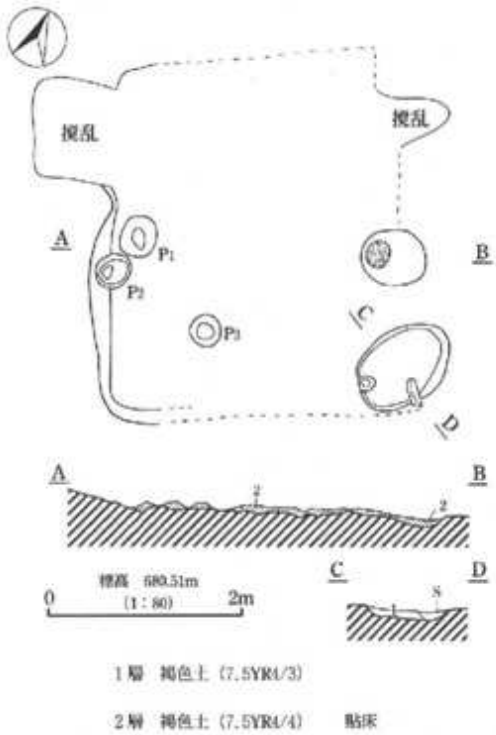
出土遺物はほとんどが西壁際から落ち込んだ様な状態で出土した。図示した遺物の出土位置は1が南東コーナー、2が覆土、4が西壁際中央、3が北東コーナー付近床直である。1，2は須恵器坏、3，4は土師器坏で、4は内面に暗文風のミガキが施されている。本址はこれら遺物より9世紀前半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	14.0	3.9	6.7	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り　火だすき痕あり 内面　ロクロ成形	2.5GY6/1　オリーブ灰 白色砂粒を非常に多く含む
2	須恵器坏	(14.0)	3.9	(6.4)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	2.5GY6/1　オリーブ灰 白色砂粒を多く含む
3	土師器坏	(14.2)	3.9	(6.8)	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/4　にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む
4	土師器坏	(16.9)	4.5	6.7	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面　螺旋状の暗文・黒色処理	5YR7/4　にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む

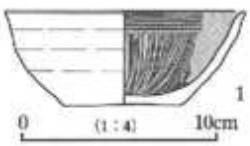
第7表　ⅠH32号住居址出土遺物観察表

(9) I H33号住居址（第17・18図、写真図版十）

本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるE－テ－3・4，E－ト－3Grに位置する。残存状態は北壁と東壁が地形の傾斜のため北側部分が攪乱によって、東側部分が地形によって削平されていたため、住居址の半分程しか検出できなかった。



第17図 I H33号住居址実測図



第18図 I H33号住居址出土遺物実測図

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明であるが東壁のほぼ中央にわずかに焼土部分が検出され、この焼土を火床面と考えると東カマドとなる。規模は北壁0.34m（残存）2.60m（推定）・南壁0.53m（残存）3.20m（推定）・西壁3.50mで、壁高さは南西コーナー付近で6cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。西壁を基にすると主軸方位はN－20°－Wを示す。住居址の床面積は推定で10.3㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であり、貼り床は厚さ10cm程で施されていた。壁溝は確認されなかった。ピットは3カ所が確認された。規模はP1が径43cm・深さ18cm、P2が径40cm・深さ25cm、P3が径33cm・深さ8.5cmを測る。

住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。また本址は南東コーナー脇に貯蔵穴的な土坑が確認された。形態は楕円形で規模は長軸1m・深さ13cmを測る。

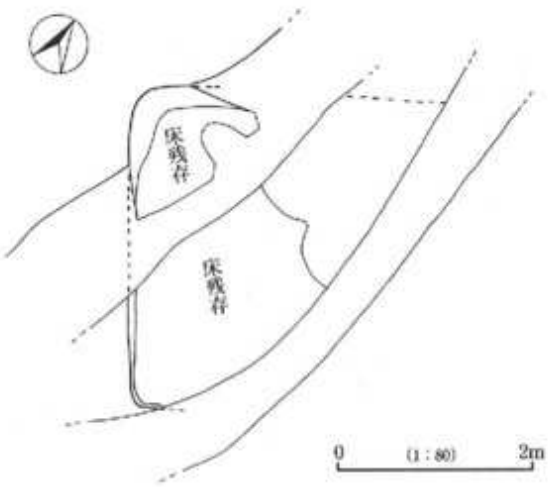
カマドは東壁の中央に一部火床面のみ残存していた。焼土の厚さは6cmを測り、火床面下部の地山までよく焼けていた。

出土遺物はほとんどなく、図示した遺物の他には土師器甕片が少量あるのみである。1の出土位置も覆土中である。本址はこれら遺物より9世紀後半に位置づけられる。

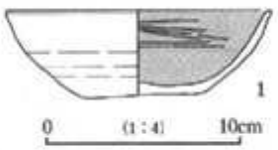
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器 坏	12.4	4.9	6.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	2.5YR5/6 明赤褐 径1－2mmの赤色粒子多量と砂粒を含む

第8表 I H33号住居址出土遺物観察表

⑽ＩH34号住居址（第19・20図、写真図版六②）



第19図　ＩH34号住居址実測図



第20図　ＩH34号住居址出土遺物実測図

本住居址は、調査区北側よりの台地の中央部であるF－ク－3Grに位置する。残存状態は北壁と東壁・西壁が地形の傾斜のため削平され、中央には溝状遺構が重複しており不良である。重複関係はＩM6号・M8号溝状遺構より本址のほうが古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁1.06m（残存）・南壁0.24m（残存）・西壁3.17m（推定）で、壁高さは北西コーナーで27cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－34°－Wを示す。住居址の床面積は推定で3.5㎡を測る。覆土は1層で、床はやや軟質で、壁溝・ピットは確認されなかった。

出土遺物はほとんどが覆土からで、図示した遺物も覆土中からである。本址はこれら遺物より9世紀後半に位置づけられると考える。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(13.7)	4.5	6.2	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面　ヘラケズリ後、黒色処理	2.5YR6/6　橙 径2－3㎜の赤色粒子を多く含む

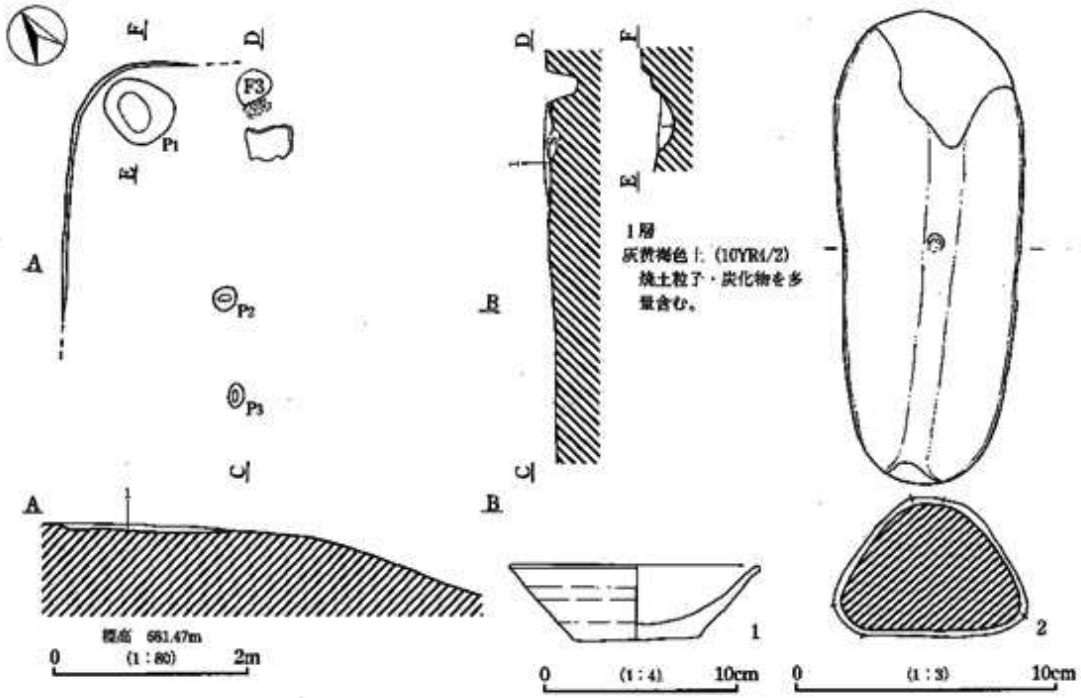
第9表　ＩH34号住居址出土遺物観察表

⑾ＩH36号住居址（第21図）

本住居址は、調査区南側の低地であるJ－サ－19.J－シ－19・20Grに位置する。残存状態は北西コーナー部が一部残存するのみで非常に不良である。

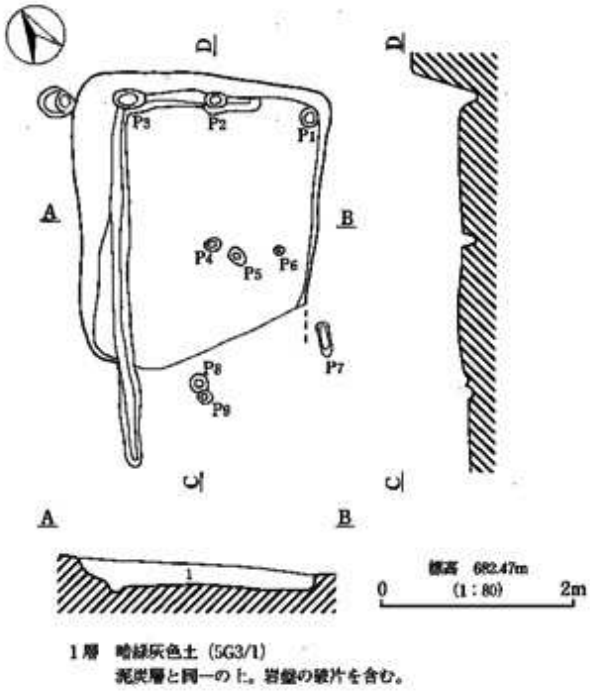
形態は不明である。規模は北壁1.14m（残存）・西壁2.25m（残存）で、壁高さは北西コーナーよりで9cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位・住居址の床面積は計測不能である。覆土は1層で、床はやや硬質である。壁溝は検出されていない。ピットは3カ所が確認された。規模はいずれも径24～72cm・深さ10～21cmを測る。

出土遺物はほとんどが覆土中からで、1の土師器坏と2のすり石を図示した。2は重量84gで花崗岩であった。本址はこれら遺物より不確実ではあるが10世紀以降と考えられる。



第21図　ＩH36号住居址及び出土遺物実測図

(12) ＩH37号住居址（第22図、写真図版十一①）



第22図　ＩH37号住居址実測図

本住居址は、調査区南側の低地内であるJ－サ－18Grに位置する。残存状態は東壁と西壁の一部と南壁全部を地形の傾斜のため削平されていた。

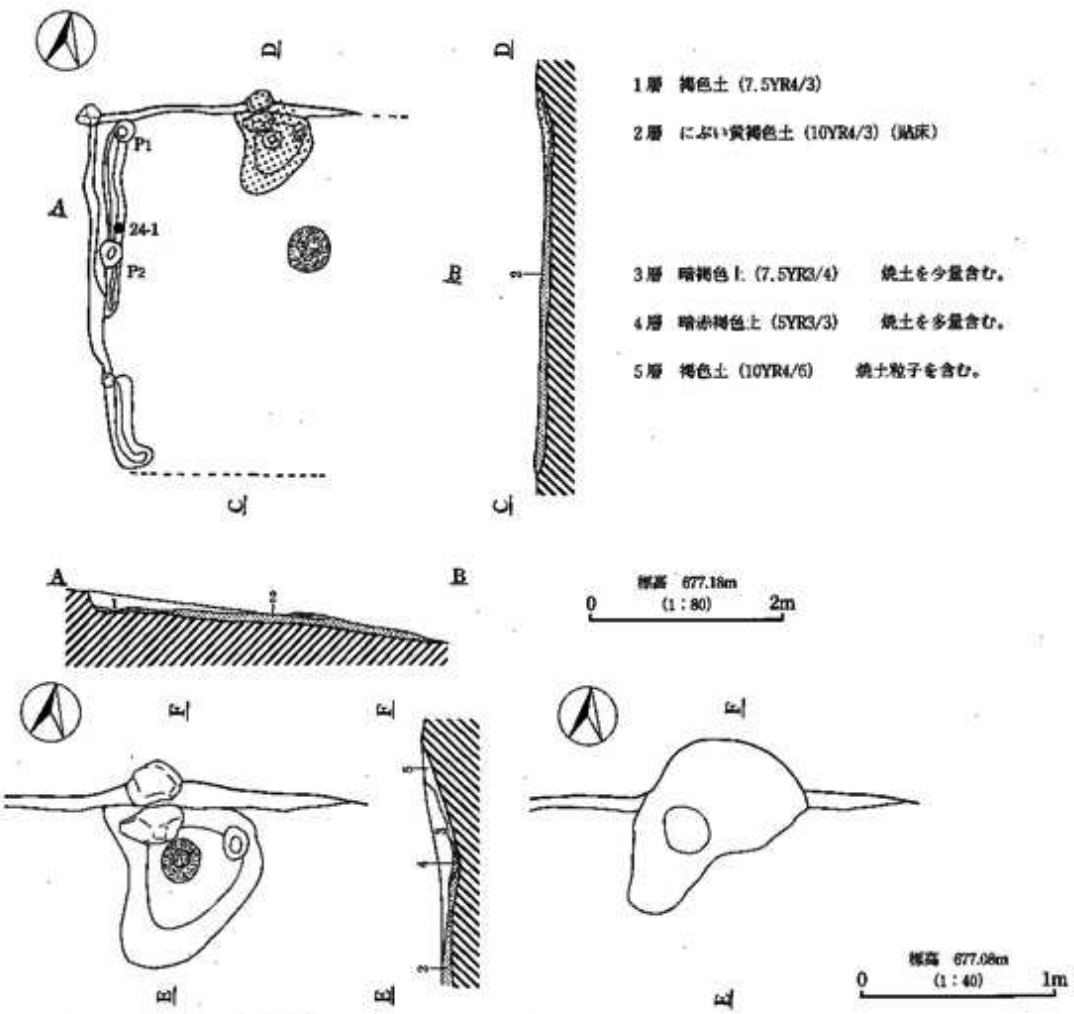
形態はほぼ長方形を呈する。規模は北壁2.50m・南壁0.3m（残存）2.2m（推定）・西壁2.78m（残存）・東壁2.2m（残存）2.7m（推定）で、壁高さは北壁で50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－30°－Eを示す。住居址の床面積は推定で4.58㎡を測る。覆土は1層で、床はやや硬質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は西壁と北壁の一部に検出された。断面形はU字形で、幅は15～54cm・深さ8cmを測る。ピットは9カ所が確認さ

れた。規模はP1が径20cm・深さ12cm、P2が径20cm・深さ13.5cm、P3が径33cm・深さ36cm、P4が径14cm・深さ14cm、P5が径18cm・深さ9cm、P6が径10cm・深さ21cm、P7が径36cm・深さ13cm、P8が径18cm・深さ9.5cm、P9が径14cm・深さ10cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。カマドは不明である。

出土遺物はほとんどが覆土から出土したが図示できる物はなかった。よって遺構の帰属時期は不明である。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(12.8)	3.9	6.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ナデ	5YR8/2 灰白 径1～2mmの赤色粒子微量と砂粒を含む

第10図 IH36号住居址出土遺物観察表



第23図 IH38号住居址実測図

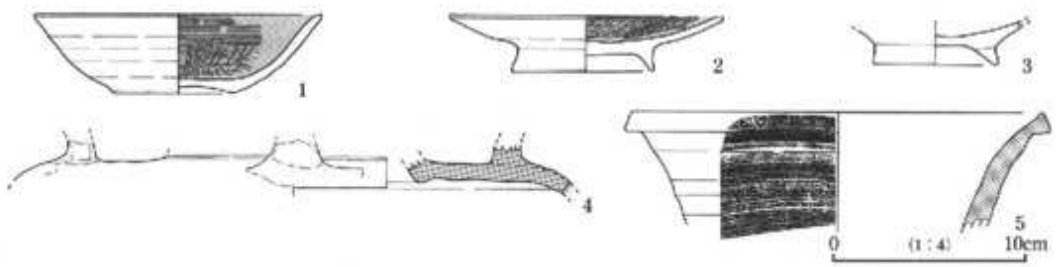
⑬ＩH38号住居址（第23・24図、写真図版十一②）

本住居址は、調査区北側よりの台地の先端部であるB－カ－19・20, B－キ－19・20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁2.8m（残存）、3.54m（推定）・南壁0.28m（残存）2.96m（推定）・西壁3.63m・東壁3.58m（推定）で、壁高さは北西コーナーで14cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－13°－Wを示す。住居址の床面積は推定で11．28㎡を測る。覆土は2層に分かれる。床は全体的に硬質で、貼床は全体に14cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁で部分的に検出された。断面形はU字形で、幅は約15～27cm・深さ15cmを測る。ピットは2カ所確認され、規模はP1が径22cm・深さ16.5cm、P2が径28cm・深さ11cmを測る。住居址掘り方は均一であった。

カマドは北壁中央にあったが、火床面のみしか残存していなかった。火床面の規模は長軸96cm・短軸70cmで焼土の厚みは3cmを測る。カマドの主軸方位はN－11°－Wを測る。

出土遺物は覆土中のものがほとんどであった。図示した遺物の出土位置は1と4がカマド内、3と5が覆土中、2がP2脇の床直からである。1は土師器坏で内面黒色処理が施されている。2は土師器皿で内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。4は須恵器の短頸壺と考えられ取っ手が貼付されている。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。



第24図　ＩH38号住居址出土遺物実測図

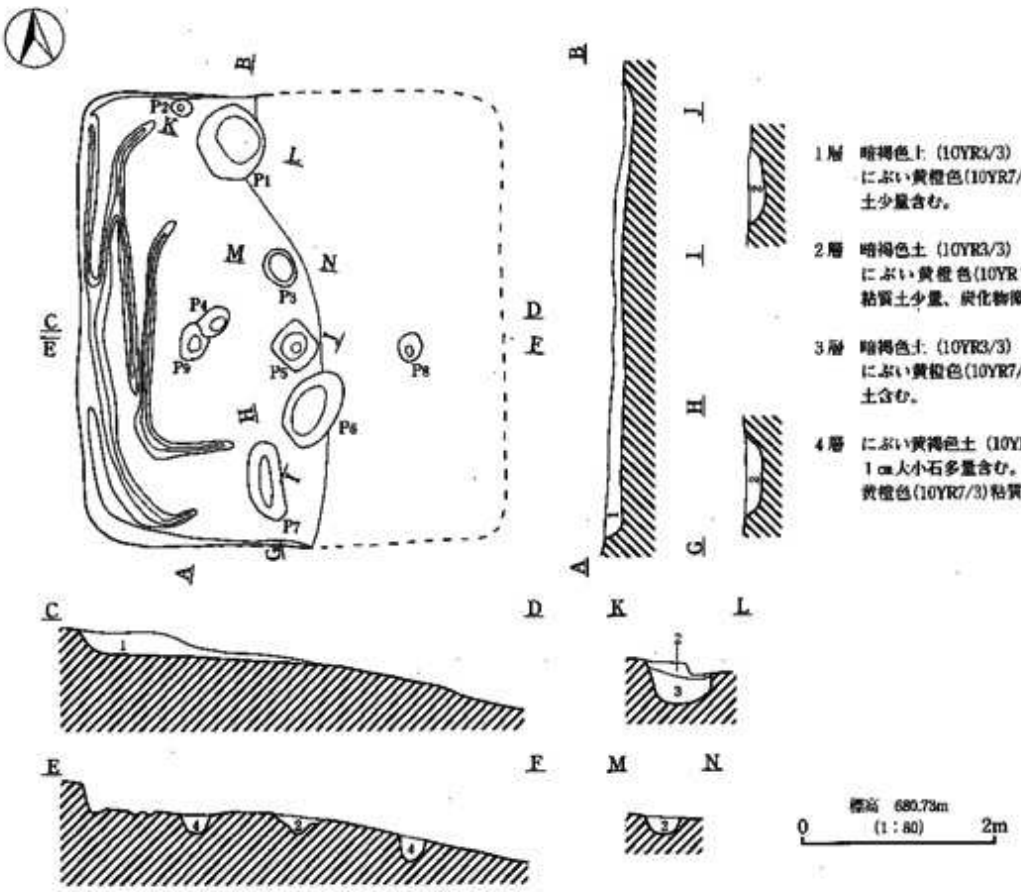
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(14.8)	4.1	6.0	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6　橙 径1－2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
2	土師器皿	(14.0)	2.9	7.3	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面　放射状のヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6　橙 径1－2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
3	土師器椀	－－	〈2.3〉	6.4	外面　ロクロ成形　底部回転糸切り後、高台貼付 内面　ロクロ成形	7.5YR8/3　浅黄橙 径1－2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
4	須恵器短頸壺	－－	〈2.7〉	－－	外面　ロクロ成形後、把手貼付　自然釉付着 内面　ロクロ成形	N6/　灰 黒色の噴出物が多い
5	須恵器甕	(21.1)	〈6.1〉	－－	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形　自然釉付着	N3/　暗灰 白色砂粒を含む

第11表　ＩH38号住居址出土遺物観察表

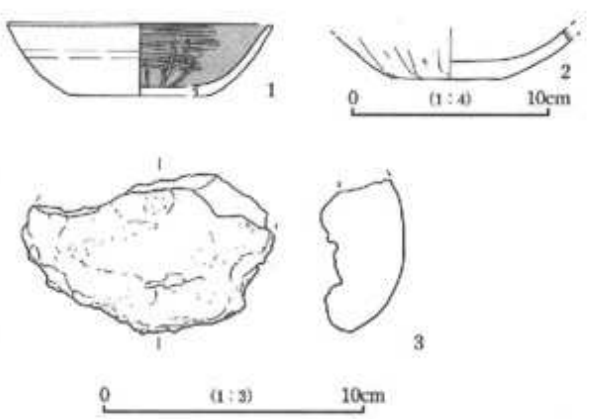
⑭ＩH40号住居址（第25・26図、写真図版十二①）

本住居址は、調査区東側の台地の先端部であるK－シ－3・4.K－ス－3・4 Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁1.9m（残存）4.12m（推定）・南壁2.22m（残存）4.12m（推定）・西壁4.40m・東壁4.36m（推定）で、壁高さは西壁中央で29cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－2°－Wを示す。住居址の床面積は残存で9.7㎡・推定で11．28㎡を測る。覆土は単層である。床は全体的に硬質であるが、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は西壁際に3本確認された。断面形はU字形で、幅は約8～26cm・深さ14cmを測る。壁溝としては特異な形態であるが、間仕切り的な使用は考えにくく、住居址拡張の結果の可能性が指摘できる。ピットは9カ所確認され、規模はP1が径76cm・深さ57cm、P2が径20cm・深さ14cm、P3が径40cm・深さ21cm、P4が径36cm・深さ29cm、P5が径44cm・深さ19cm、P6が径82cm・深さ22cm、P7が径83cm・深さ18cm、P8が径27cm・深さ28cm、P9が径37cm・深さ20cmを測る。住居址掘り方は均一であった。



第25図　ＩH40号住居址実測図



第26図　ⅠH40号住居址出土遺物実測図

出土遺物は覆土中のものがほとんどであった。図示した遺物の出土位置は1が覆土中、2がP1内より出土している。3は鉄滓である。これらの遺物より本址は9世紀後半以降に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(13.6)	3.7	(7.2)	外面　ロクロ成形・底部調整不明 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6　橙 径2～3㎜の赤色粒子を含む
2	土師器甕	――	(2.7)	5.7	外面　ヘラケズリ 内面　ナデ	7.5YR7/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む

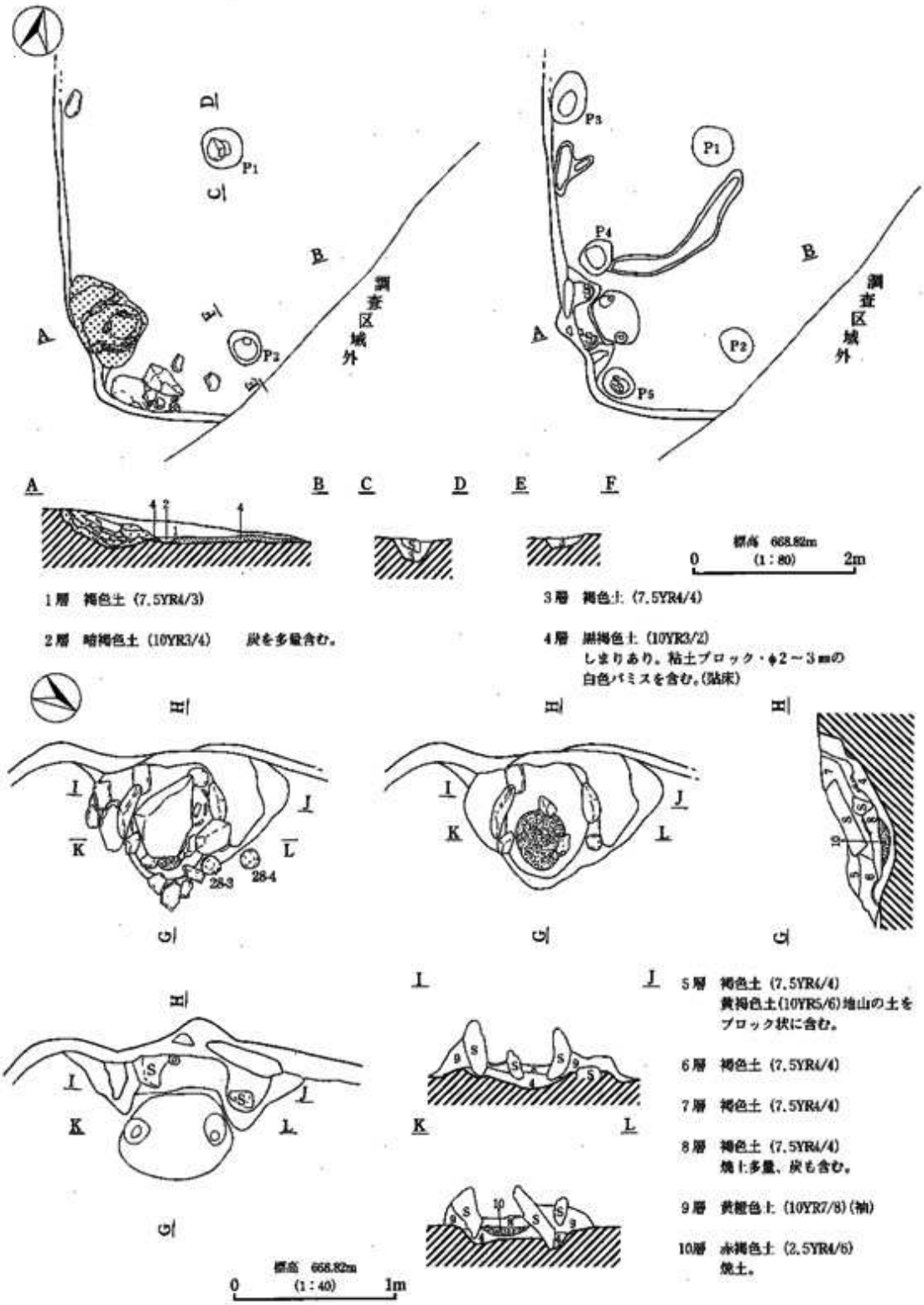
第12表　ⅠH40号住居址出土遺物観察表

(15) ⅠH41号住居址（第27～29図、写真図版十三．十四）

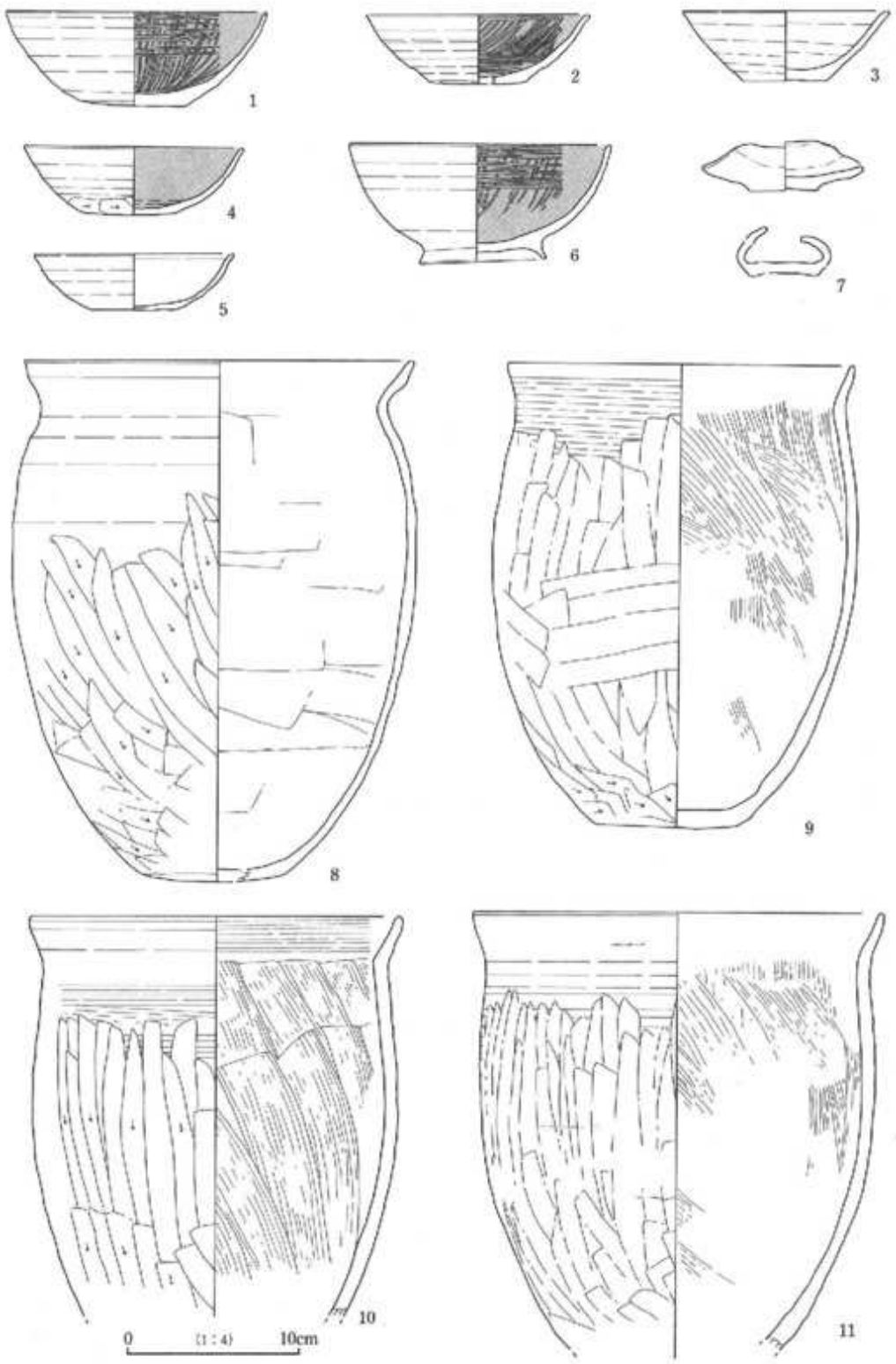
本住居址は、調査区北側の台地の先端部であるB－ツー4・5，B－テー4・5Grに位置する。本住居址が調査地域内では標高が最も低い場所からの検出である。残存状態は北側半分が地形により削平され、東側は調査区外となるため、住居址全体の1/3程の検出にとどまった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは南西コーナーより検出された。規模は南壁1.65m（残存）・西壁3.97m（残存）で、壁高さはカマドの北側で30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で12.9㎡を測る。覆土は2層に分かれる。床は全体的に硬質であり、貼床は6cm程の厚さで貼られていた。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で2カ所、掘り方時に3カ所の径5カ所が確認され、規模はP1が径48cm・深さ26cm、P2が径45cm・深さ14cm、P3が径64cm・深さ22cm、P4が径45cm・深さ20cm、P5が径40cm・深さ17cmを測る。検出位置よりP1とP2が主柱穴と考えられる。住居址掘り方は均一であったが、カマド前に間仕切り的な溝が検出された。

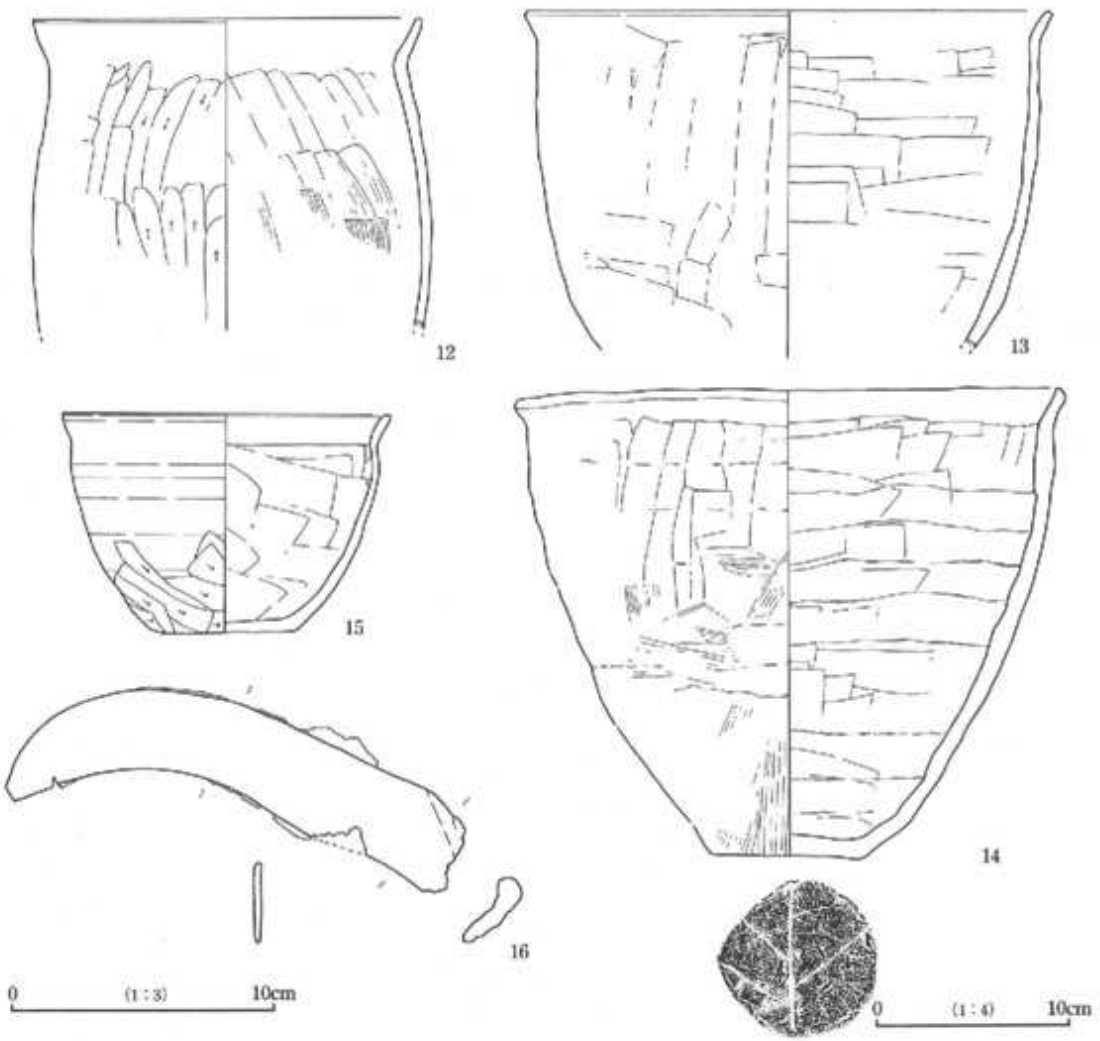
カマドは南西コーナーで検出された。形態は袖及び天井に扁平な自然石及び河原石を使用した物で、天井部には幅40cmほどの礫が崩れかかった状態で検出された。規模は煙道部長さが83cm・幅51cm、右袖長さ70cm・幅25cm、左袖長さ59cm・幅26cmである。火床面の焼土の厚さは6cmを測る。



第27図　ⅠH41号住居址実測図



第28図　ⅠH41号住居址出土遺物実測図①



第29図　ⅠH41号住居址出土遺物実測図②

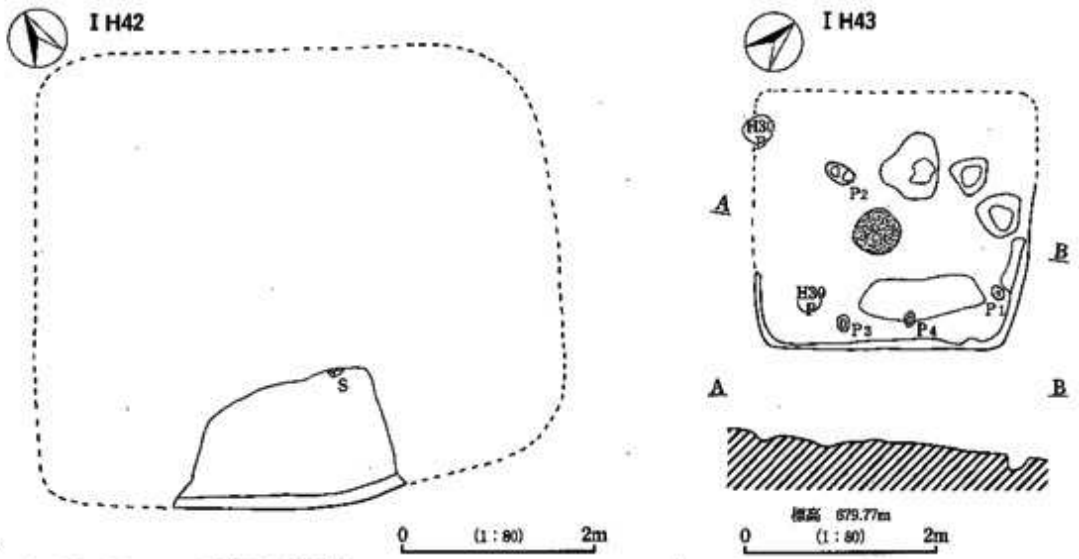
本址の出土遺物は非常に多く、特にカマド内とカマド周辺から出土している。図示した遺物の出土位置は1・5・15が覆土中、3と4がカマド右袖脇、その他の遺物はカマド内出土やカマド内から出土した破片と接合関係にある。1～5は土師器坏で、1と2は内面黒色処理されている。6は土師器椀で高台が貼付されている。内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。7は土師器耳皿で一部欠損しているがほぼ全容がつかめた。底部は回転糸切り離しである。8～12までは土師器甕である。12以外はいずれも胴部上半をロクロヨコナデが施されており、内面は9～11がハケ目の残るナデが、8はヘラナデが施されている。13～15までは土師器鉢であり、14は内面に顕著な輪積み痕が観察できる。また底部には木葉痕が残る。16は鉄製品の鎌で一部刃部が欠損しているがほぼ完形である。住居址の覆土中から出土した。形態は柄装着部がわずかに折り曲げられている。これら遺物より本址は10世紀前半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(15.2)	5.5	6.3	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を非常に多く含み、砂粒を含む
2	土師器坏	(13.0)	4.1	(5.8)	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 黒色化している 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/2 明褐灰 径1～2㎜の赤色粒子を含む
3	土師器坏	12.0	4.1	4.9	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を非常に多く含む 砂粒を含み、ざらざらしている
4	土師器坏	12.8	4.0	5.3	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、底部外周手持ちヘラケズリ 内面 調整不明・黒色処理	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子少量と砂粒多量含む
5	土師器坏	(11.6)	3.3	5.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ナデ	5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子と、砂粒を含む
6	土師器椀	(15.3)	7.1	7.4	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/4 浅黄橙 径2～3㎜の赤色粒子を非常に多く含み 黒色の砂粒を含む
7	土師器耳皿	9.3	2.9	4.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
8	土師器甕	22.8	30.5	(8.3)	外面 ロクロ成形 胴部・底部ヘラケズリ 内面 胴部から底部ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子を多く含む
9	土師器甕	20.2	27.2	(8.3)	外面 ロクロ成形 胴部ナデ 胴部下半～底部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 胴部～底部ハケメの残るナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
10	土師器甕	11.8	〈23.4〉	――	外面 ロクロ成形 胴部カキメ後、縦位ヘラケズリ 内面 口縁部ハケメの残るナデ 胴部ハケメ	7.5YR7/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子を非常に多く含む
11	土師器甕	(24.0)	〈25.6〉	――	外面 ロクロ成形 胴部ヨコナデ後、縦位のナデ 内面 ロクロ成形 胴部ハケメ	7.5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を多量に含む
12	土師器甕	21.0	〈16.1〉	――	外面 口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ後、胴部ナデ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含み、ざらざらしている
13	土師器鉢	(27.2)	〈17.4〉	――	外面 ロクロ成形 胴部ナデ 内面 ロクロ成形 胴部ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
14	土師器鉢	28.5	24.1	7.5	外面 口縁部ヨコナデ後、胴部ナデ 胴部下半ハケメ 煤付着 ※底部に木葉痕 ※胴部に輪積痕が顕著 内面 口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を少量含む
15	土師器小形鉢	16.9	11.4	7.2	外面 ロクロ成形 胴部下半～底部手持ちヘラケズリ 煤付着 内面 胴部～底部ヘラナデ 口縁部ヨコナデ後、黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む

第13図　ⅠH41号住居址出土遺物観察表

(16) ⅠH42号住居址（第30図）

本住居址は、調査区北側の低地であるF－サー9・10.F－シ－9・10Grに位置する。残存状態は南側の一部分しか残っておらず、住居址とするにも疑問が残るが、遺構底面に床的な部分が存在する事から住居址として報告する。形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁4.70m(推定)・南壁2.42m(残存)5.16m(推定)・西壁4.26m(推定)・東壁3.75m(推定)で、壁高さは7cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で2.17㎡、推定で23.56㎡を測る。床は全体的に硬質である。壁溝・ピットは確認されなかった。出土遺物は無く帰属時期は不明である。

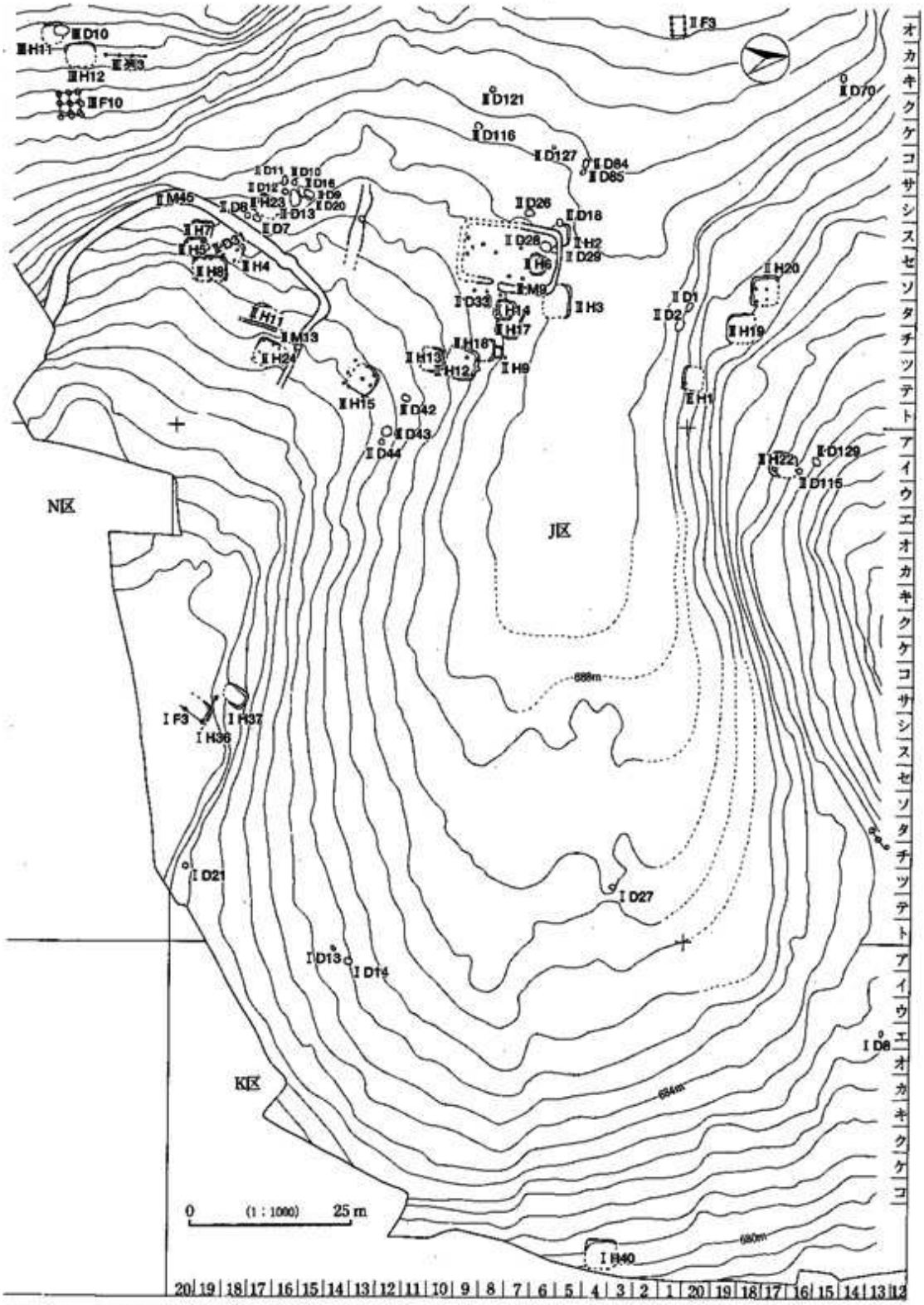


第30図　I H42・43号住居址実測図

(17) I H43号住居址（第30図、写真図版十二②）

本住居址は、調査区北側の台地中央であるF－ウ－5，F－エ－4・5Grに位置する。残存状態は東側半分が残るのみである。H30号住居址と重複関係にあり、本址のほうが古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁2.82m（推定）・南壁2.44m・西壁0.75m（残存）2.56m（推定）・東壁1.70m（残存）2.53m（推定）で、壁高さは南壁中央よりで10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－45°－Wである。住居址の床面積は7.12㎡を測る。床は全体的に硬質である。壁溝は確認されなかった。ピットは4カ所が確認され、規模はP1が径15cm・深さ6cm、P2が径30cm・深さ25cm、P3が径15cm・深さ13cm、P4が径14cm・深さ6.5cmを測る。本址は住居址中央部に焼土の広がりが確認された。焼土の厚さは2cmを測り、よく焼けていた。本址は出土遺物が無く帰属時期は不明である。

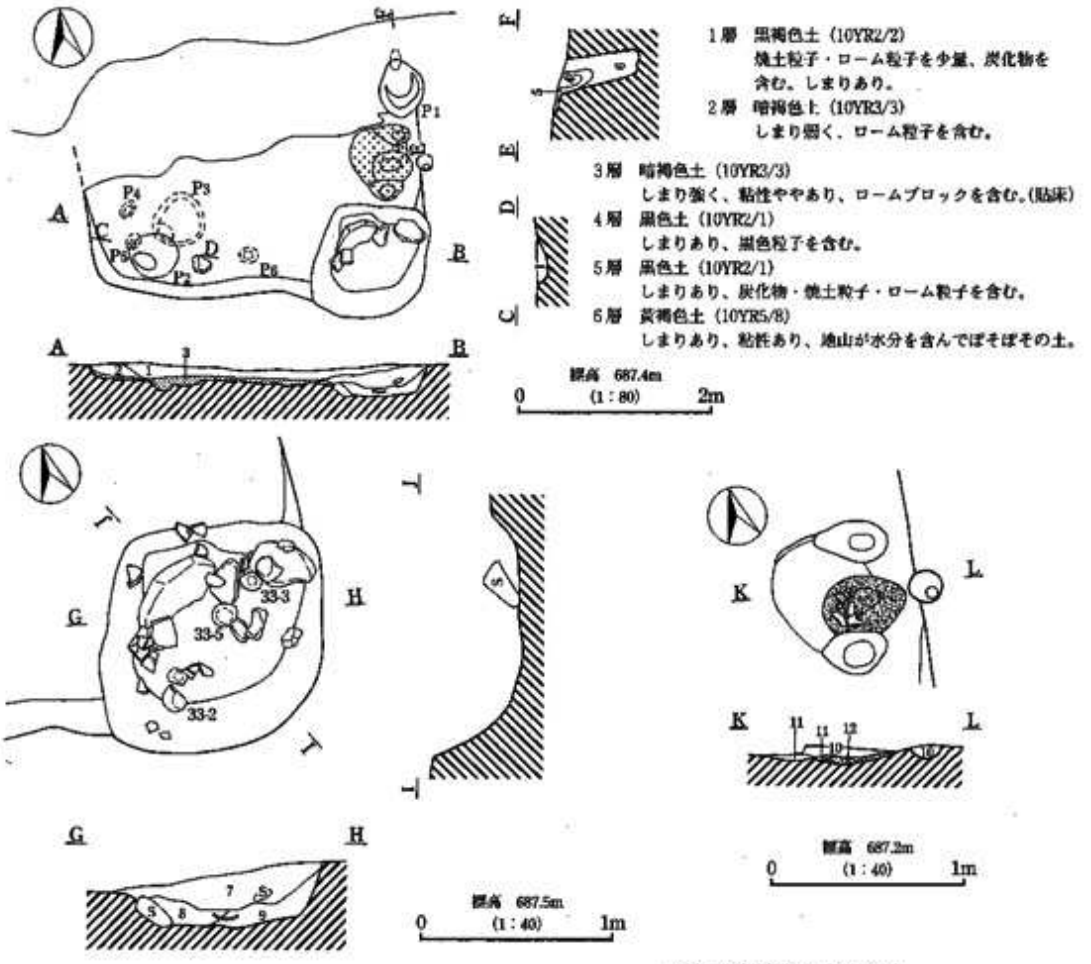


第31図　Ⅱ区奈良・平安時代遺構全体図

(18) IIH1号住居址（第32・33図、写真図版十五・十六）

本住居址は、調査中央台地の北斜面であるE－ツ－20.E－テ－20.I－ツ－1.I－テ－1Grに位置する。残存状態は北側が地形の傾斜によって1/2程が削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられ、東壁中央にカマドが造られている。規模は南壁3.16mで、西壁0.97m（残存）、東壁1.98m（残存）で、壁高さは南西コーナー部分で24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－90°－Eを示す。住居址の床面積は残存部で3.3㎡を測る。覆土は2層に分かれる。床は住居址カマド周辺部にかけて硬質であり、貼床は厚い部分で9cm程が確認さた。壁溝は確認されなかった。ピットは床面精査時に2カ所、掘り方検出時に3カ所の計5



1層　黒褐色土（10YR2/2）
焼土粒子・ローム粒子を少量、炭化物を含む。しまりあり。

2層　暗褐色土（10YR3/3）
しまり弱く、ローム粒子を含む。

3層　暗褐色土（10YR3/3）
しまり強く、粘性ややあり、ロームブロックを含む。（貼床）

4層　黒色土（10YR2/1）
しまりあり、黒色粒子を含む。

5層　黒色土（10YR2/1）
しまりあり、炭化物・焼土粒子・ローム粒子を含む。

6層　黄褐色土（10YR5/8）
しまりあり、粘性あり、地山が水分を含んでぼそぼその土。

7層　黒褐色土（10YR2/2）
炭化物・ロームブロックを含み、焼土粒子を微量含む。

8層　褐色土（10YR4/4）
炭化物・焼土粒子を多量含む。しまり弱い。

9層　褐色土（10YR4/4）
ロームブロックを含む。地山の掘り崩れたような土。

10層　極暗赤褐色土（5YR2/4）
炭化物・焼土粒子・焼土ブロックを多量含む。

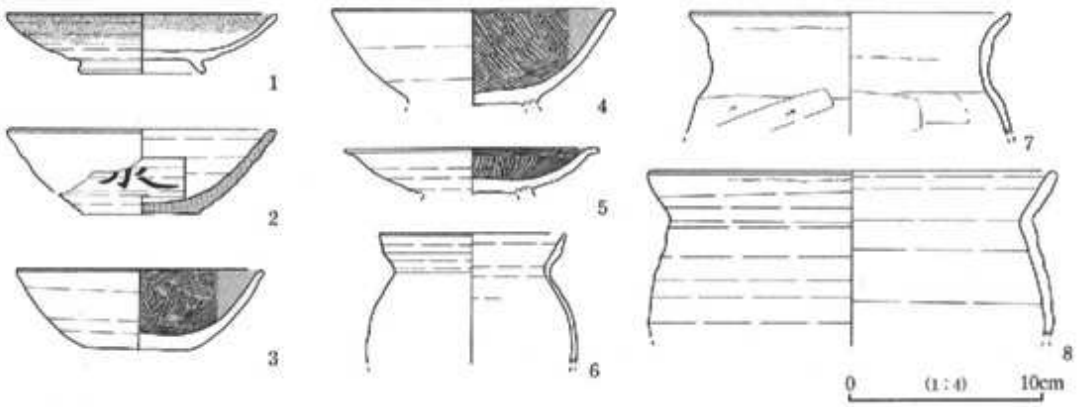
11層　黒褐色土（5YR2/2）
炭化粒子を多量、ロームブロックを少量含む。

12層　赤色土（10R4/6）
しまりややあり、炭化物を微量含む。ローム土がよく焼けている。

第32図　IIH1号住居址実測図

カ所が確認された。規模はP1が径60cm・深さ83cm、P2が径50cm・深さ16cm、P3が径54cm・深さ8cm、P4が径20cm・深さ7cm、P5が径16cm・深さ9.5cmを測る。また本址は南西コーナー部に貯蔵穴的土坑が検出された。規模は長軸1.44m・短軸1.22m・深さ49cmを測る。土坑内からは比熱面のある礫や土師器坏などが流れ込んだ様な状態で出土した。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。

カマドは東壁中央部に検出された。主軸方位はN−104°−Eを測り、住居址主軸よりも南側にずれる。残存状況は火床部しか残っておらず、両袖ともに芯材の設置穴と思われるピットが2カ所確認されたのみである。焼土の厚さは4cmを測り、非常に硬質化していた。



第33図　ⅡH1号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	灰釉皿	(12.8)	3.1	6.2	外面　ロクロ成形・下半は回転ヘラケズリ　底部は回転ヘラケズリの後、高台貼付 内面　ロクロ成形　内面磨かれている　釉は漬け掛け	7.5Y6/1　灰 黒色の粒子を少量含む
2	須恵器坏	13.5	4.9	6.0	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 体部に墨書「水」？ 内面　ロクロ成形	N7/灰 白色粒子を多く含み、脆い土
3	土師器坏	12.5	4.2	5.5	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/8　橙 径1−2㎜の赤色粒子を多く含み、白色・黒色粒子を含む
4	土師器椀	14.3	〈4.9〉	−−	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4　にぶい橙 径1−2㎜の赤色粒子を多く含み、白色・黒色粒子を含む
5	土師器高台皿	13.0	〈2.3〉	−−	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3　にぶい橙 径1−2㎜の赤色粒子少量含み、黒色粒子をやや多く含む
6	土師器小形甕	(9.4)	〈6.7〉	−−	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形	7.5YR6/2　灰褐 黒色粒子を多く含む
7	土師器甕	(16.4)	〈6.2〉	−−	外面　口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	7.5YR6/4　にぶい橙 径2〜3㎜の赤色・黒色粒子を多く含む
8	土師器甕	(10.5)	〈8.5〉	−−	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形	7.5YR6/4　にぶい橙 径1−2㎜の赤色粒子を多く含み、径1㎜以下の黒色粒子を多く含む

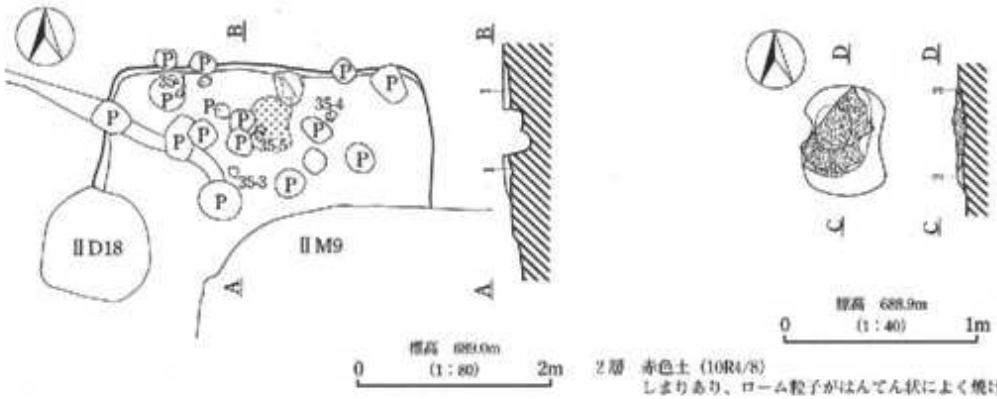
第14表　ⅡH1号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土中と床直のものがあるが、特に南東コーナー部分の貯蔵穴から集中して出土した。図示した出土遺物の内7の土師器甕以外はこの土坑よりの出土である。1は灰釉陶器皿で釉

は漬け掛けである。また内面の見込み部は非常によく磨かれており何らかの転用の結果とも考えられる。2は須恵器坏で、体部外面に「水」？の墨書が確認できる。よって本址は10世紀前半に位置付けられる。

⑲ⅡH2号住居址（第34・35図、写真図版十七①）

本住居址は、調査区中央部の台地西よりI－ス－5・6、I－セ－5Grに位置する。残存状態は南側をM9号溝によって削平されている。重複関係はM9号溝・D18号土坑・各ピットと重複するがいずれの遺構よりも本址の方が古い。

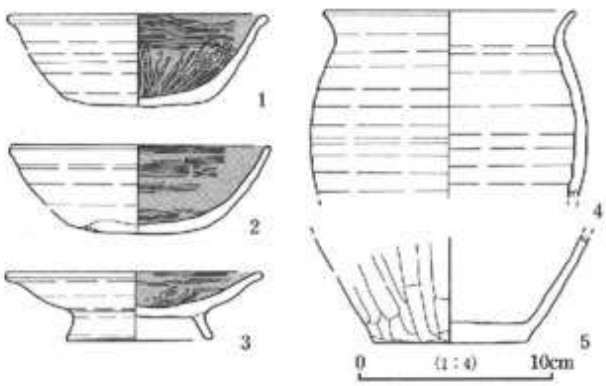


1層 暗褐色土（10YR3/3）
しまりあり、ローム粒子をやや多く含む。

2層 赤色土（10R4/8）
しまりあり、ローム粒子がはんてん状によく焼けている。

3層 赤黒色土（10R2/1）
しまりあり、粘性あり、ローム粒子を含み、焼土粒子を微量含む。

第34図 ⅡH2号住居址実測図



第35図 ⅡH2号住居址出土遺物実測図

形態は、ほぼ方形を呈すると考えられる。規模は北壁3.03m・西壁1.20m（残存）・東壁1.40m（残存）で、壁高さは北西コーナーで12cmを測る。壁はほぼ緩やかに立ち上がる。主軸方位Nを示す。住居址の床面積は検出部で3.8㎡を測る。覆土は1層で、床は住居址中央部にかけて硬質であり、地山を敲いて踏み固めた様な状態であった。壁溝・柱穴は確認されなかった。カマドは確認できなかったが、北壁中央部近くにカマド火床面と考えられる焼土の広がりを検出した。規模は長軸長さ56cm・幅37cmを測る。焼土の厚みは6cmを測る。

出土遺物は覆土中と焼土周辺部より多く出土した。図示した遺物の出土位置は2・3・5が焼土南側、1が北西コーナー脇、4がカマド東脇である。いずれもほぼ床直であった。1と2は土師

器坏で内面黒色処理、3は土師器皿で内面黒色処理がそれぞれ施されている。4と5は土師器甕である。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	13.4	4.7	6.1	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と長石を多く含む
2	土師器坏	(13.3)	4.5	7.0	外面 ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/3/にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と黒色粒子多く含む
3	土師器高台皿	13.2	3.5	7.5	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を非常に多く含み、黒色粒子を多く含む
4	土師器甕	7.0	〈9.6〉	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/2 明褐灰 径2～3㎜の赤色粒子を多く含み、黒色粒子を含む
5	土師器甕	——	〈5.5〉	8.0	外面 ハケメの残るようなナデ 焼けこげが付着 内面 ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径3－4㎜の赤色粒子を多く含む

第15表 ⅡH2号住居址出土遺物観察表

(20)ⅡH3号住居址（第36・37図、写真図版十七②）

本住居址は、調査区中央部の台地西よりであるIーソー5・6,Iーターー5・6Grに位置する。残存状態は南側が地形の傾斜のため削平されている。また重複関係ではⅡM7・8・9号溝と重複するがいずれの遺構より本址の方が古い。

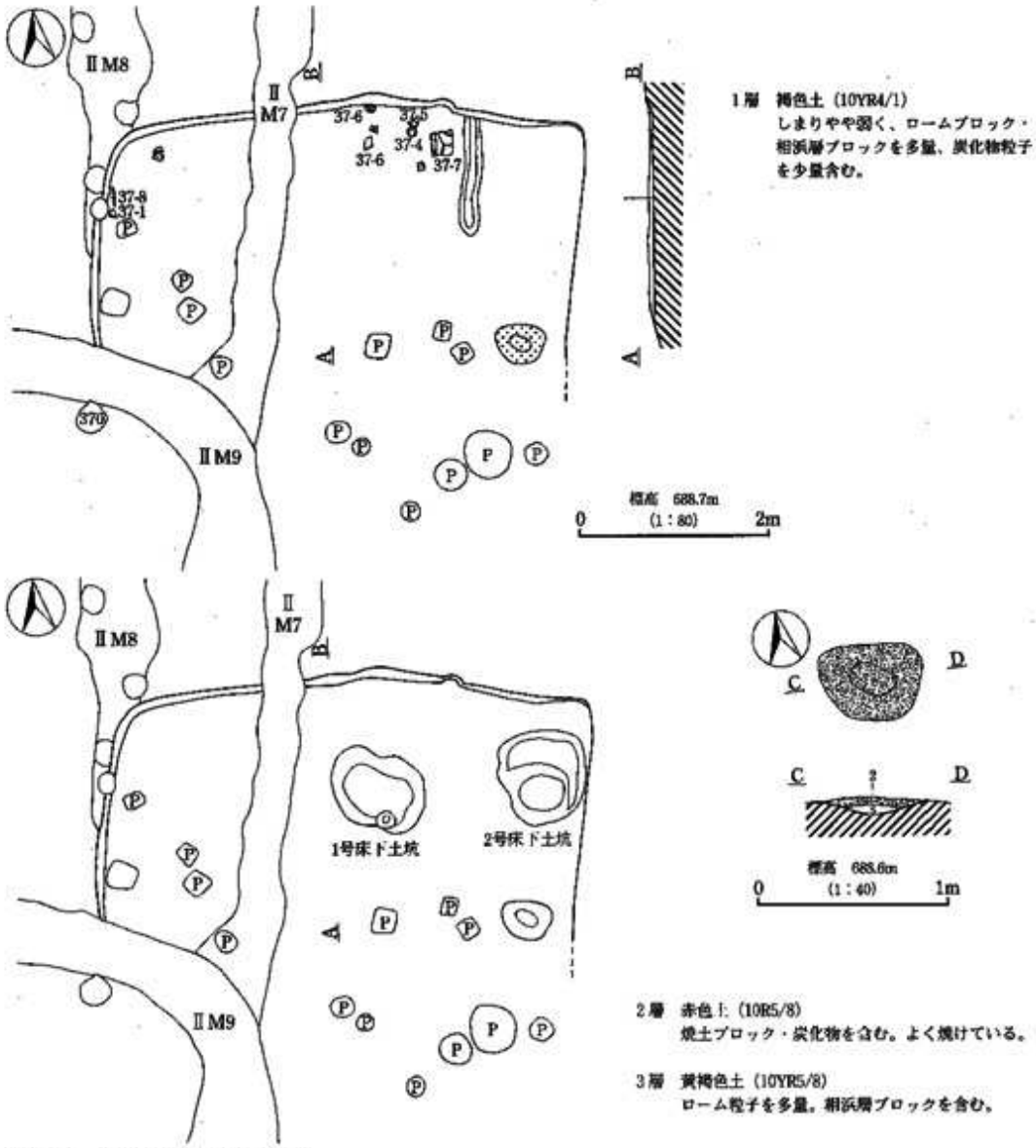
形態はほぼ方形を呈する。カマドは東壁のほぼ中央に造られていたと考えられる。規模は北壁4.85m・西壁2.20m(残存)・東壁2.54m(残存)で、壁高さは北東コーナーと北壁中央の間で12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－86°－Eを示す。住居址の床面積は残存部で1.8

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(11.6)	3.5	5.6	外面 ロクロヨコナデ・底部回転ヘラ切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含み、黒色粒子を含む
2	土師器坏	(11.8)	3.7	4.8	外面 ロクロヨコナデ・底部ヘラケズリ 内面 ナデ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と黒色粒子多く含む
3	土師器坏	(12.4)	〈3.3〉	——	外面 ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含み、長石を含む
4	土師器椀	——	〈1.7〉	7.6	外面 底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ナデ	7.5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
5	灰釉長頸瓶	——	〈17.0〉	——	外面 ロクロ成形・胴部に自然釉付着 内面 ロクロ成形	7.5Y8/1 灰白 黒色粒子を微量含む
6	灰釉長頸瓶	——	〈13.6〉	11.8	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形・底部に自然釉付着	7.5Y8/1 灰白 黒色粒子を微量含む
7	須恵器甕	——	〈24.0〉	——	外面 カキメの後、平行タタキ 内面 同心円状の当て具痕をスリ消している	7.5Y6/1 灰 黒色粒子を含む

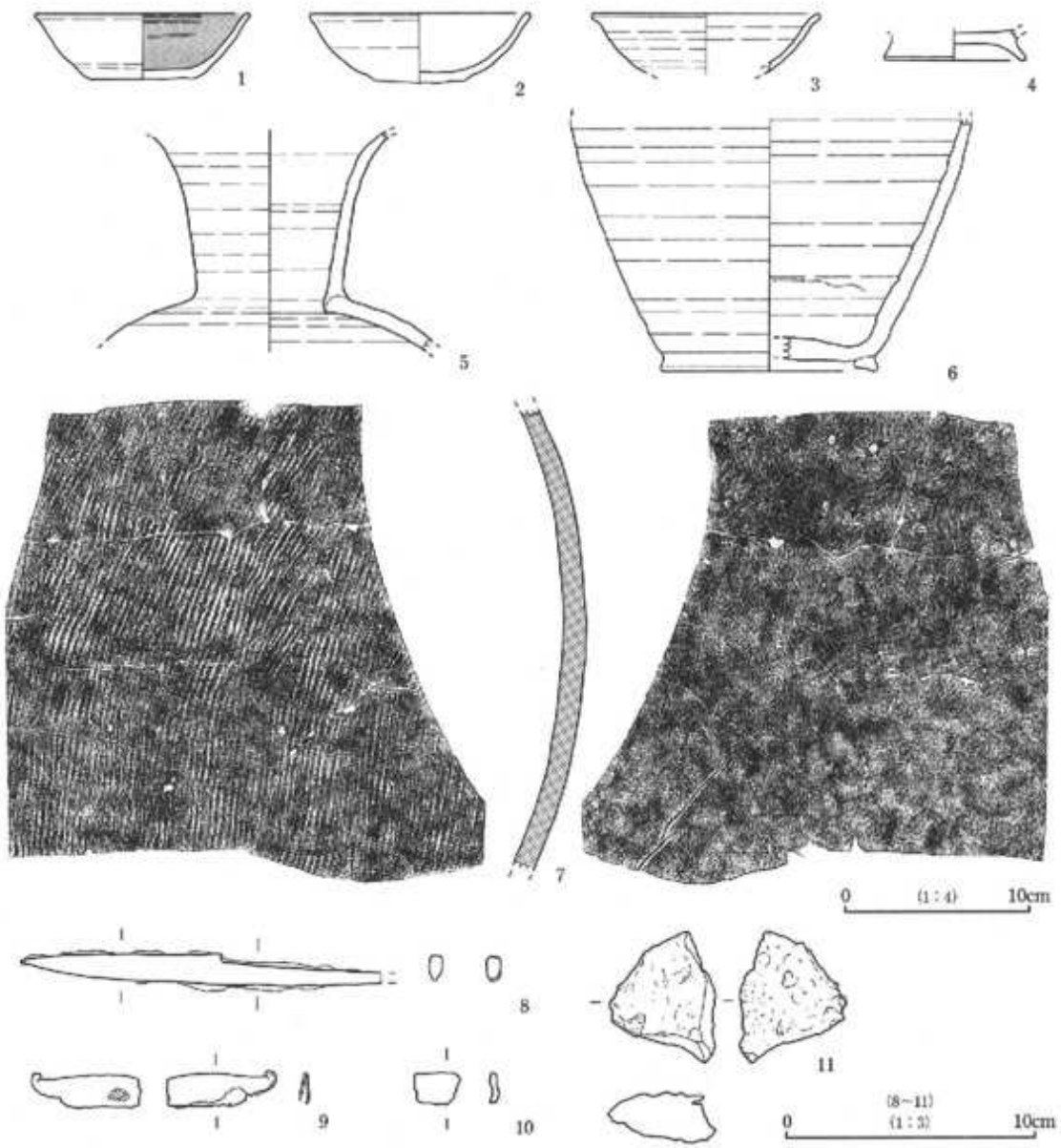
第16表 ⅡH3号住居址出土遺物観察表

㎡を測る。覆土は1層で、床は中央部分がやや硬質であった。壁溝・ピットは確認されなかった。掘り方検出時に住居址中央と北東コーナーに土坑が検出された。規模は1号土坑が長軸1.08m・短軸84cm・深さ10cm、2号土坑が長軸1m・短軸93cm・深さ18cmを測る。また、北東コーナーには間仕切り溝が長さ1.1mほど検出されている。カマドは東壁中央部に造られていたと考えられるが火床面のみしか残存していなかった。焼土の厚みは4.5cmを測る。袖部・天井部の形態は不明である。

出土遺物は北壁際に多く出土した。図示した遺物の内、3の土師器坏は覆土中よりの出土で、それ以外はいずれも北壁際よりの出土である。



第36図 ⅡH3号住居址実測図



第37図　ⅡH３号住居址出土遺物実測図

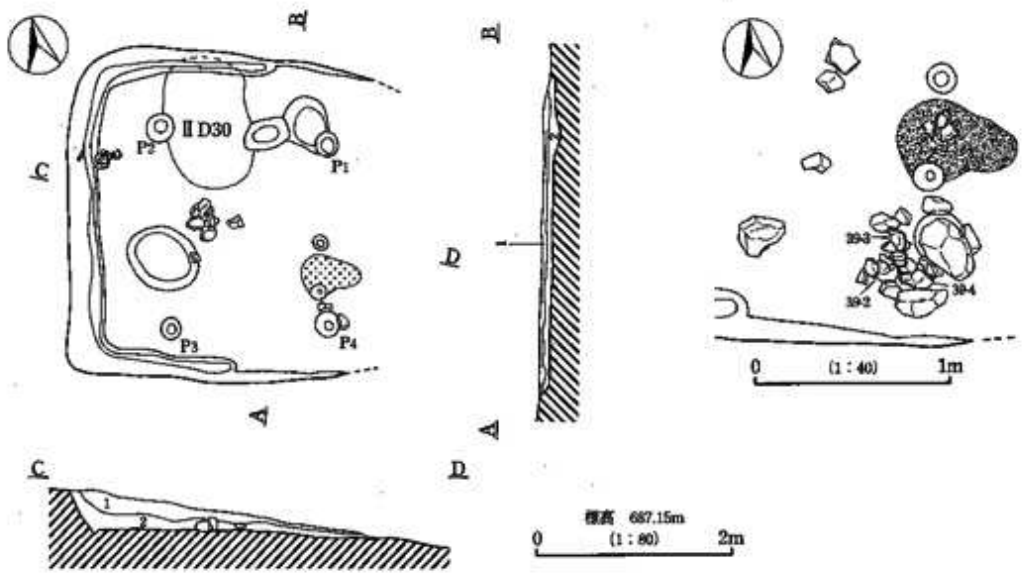
１～３は土師器坏であり、１のみ内面に黒色処理が施されている。４は土師器高台付き椀の高台部分である。５と６は灰釉陶器長頸瓶の口縁部から頸部の破片と胴部から底部の破片である。いずれも1/5程しか残存していない。これら２つの個体は同一個体と考えられるが接合点が見いだせなかった。また住居址内の出土遺物の中にもこれら灰釉の長頸瓶の破片は無かった。７は須恵器甕の胴部破片である。８～11は鉄製品で、８は刀子、11は鉄滓である。９と10は不明製品である。特に９については腐食面が青銅製とも考えられ、或いはキセルの一部で本址には伴わないかもしれない。よってこれら遺物より本址は９世紀後半に位置づけられる。

(21) ⅡH4号住居址（第38・39・40図、写真図版十九）

本住居址は、調査区中央部の台地付け根であるI－セ－18･19Grに位置する。残存状態は東壁が地形の傾斜のために削平されている他は良好であった。また、本址はD30号土坑と重複関係にあり本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは東壁のやや南よりに造られている。規模は北壁2.92m（残存）･南壁2.90m（残存）･西壁3.11mで、壁高さは南西コーナーで44cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－15°－Eを示す。住居址床面積は残存部で6.9㎡を測る。覆土は2層のみである。床は全体に軟質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁の全体と北壁と南壁の一部に確認された。規模は幅13～37cm･深さ8cmを測り、断面形はU字形である。ピットは6カ所検出され、規模はP1が径24cm･深さ32cm、P2が径30cm･深さ16cm、P3が径22cm･深さ15cm、P4が径26cm･深さ17cm、P5が径60cm･深さ22cm、P6が径47cm･深さ26cmを測る。検出位置よりP1～P4までが住居址の主柱穴と考えられる。また本址は南西コーナー近くに貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。

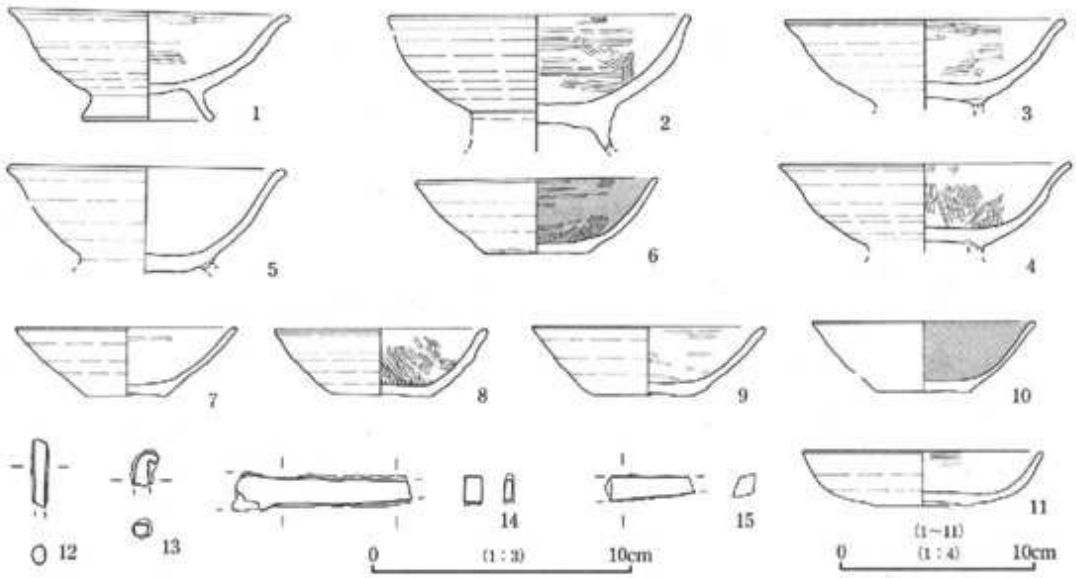
規模は長軸76cm･短軸62cmで、深さは17cmを測る。カマドは東壁やや南よりに検出された。地形による削平の為か火床部のみの残存となった。火床部の大きさは長さ63cm･幅42cmで、焼土の厚さは非常に薄かった。また袖構築材の掘り込みと思われるピットが火床面の両脇から検出された。



1層　黒褐色土（10YR2/3）　パミス・炭化物を少量含む。

2層　黒褐色土（10YR2/3）　パミスを多量・炭化物を少量含む。

第38図　ⅡH4号住居址実測図

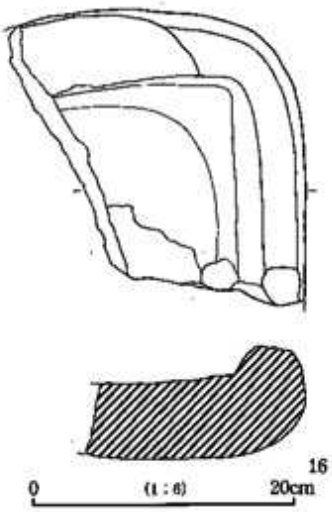


第39図　ⅡＨ４号住居址出土遺物実測図①

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器椀	14.4	5.8	6.8	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面　荒いヘラミガキ	7.5YR 7/4　にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子少量と砂粒多量含む
2	土師器椀	15.5	(6.8)	――	外面　ロクロ成形・底部回転ヘラケズリ後、高台貼付 内面　ヘラミガキ	7.5YR 7/4　にぶい橙 径3～4㎜の赤色粒子少量と黒色粒子多量含む
3	土師器椀	14.4	4.6	――	外面　ロクロ成形・底部回転ヘラケズリ後、高台貼付 内面　ヘラミガキ	5YR 7/6　橙 径2－3㎜の赤色粒子と黒色粒子多く含む
4	土師器椀	13.0	(4.6)	――	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　荒いヘラミガキ	5YR 5/4　にぶい赤褐 径3～4㎜の赤色粒子と黒色粒子少量含む
5	土師器椀	14.3	(5.3)	――	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面　ロクロ成形　※内外面　黒色処理？	7.5YR 2/1　黒 黒色粒子を多く含む
6	土師器坏	12.4	3.9	5.4	外面　ロクロ成形・底部回転ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1－2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
7	土師器坏	(11.4)	3.5	4.4	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　磨耗著しく調整不明	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
8	土師器坏	11.0	3.5	5.0	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　荒いヘラミガキ	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と黒色粒子多量含む
9	土師器坏	12.0	3.5	5.2	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
10	土師器坏	(11.4)	3.6	4.8	外面　磨耗著しく調整不明 内面　調整不明　黒色処理	7.5YR 6/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
11	土師器坏	(12.3)	2.8	4.8	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　磨耗著しく調整不明	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む

第17表　ⅡＨ４号住居址出土遺物観察表

出土遺物は住居址覆土中とカマド南脇が多かった。特に図示した遺物の出土位置は２が覆土中以外はすべてこのカマド南脇からの出土である。このカマド南脇には土器と共にカマドで使用さ



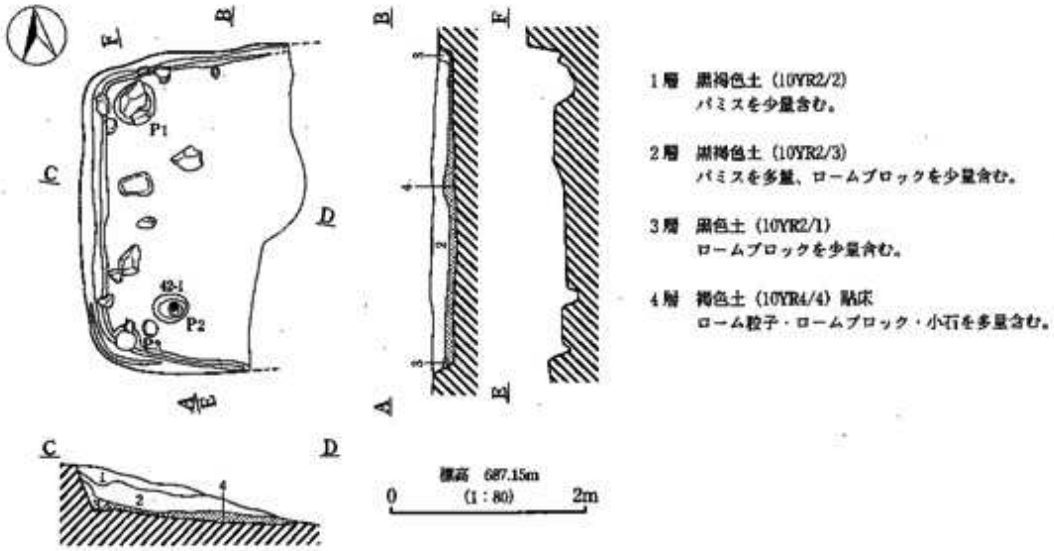
第40図　ⅡH4号住居址出土遺物実測図②

れたような礫が多く検出されている。1～5は高台付きの土師器椀である。6～11は土師器坏で6・10・11が内面黒色処理されている。ただ11はやや形態が異なる。12～15は鉄製品で、いずれも出土位置はカマド南脇の礫中より出土した。種別は12が釘か鉄鏃の茎部、13が釘？、14と15は刀子の柄と考えられる。16は石皿で住居址の北西コーナー付近より出土した(写真参照)。石材は砂岩質である。よって本址はこれらの遺物により10世紀前半に位置づけられる。

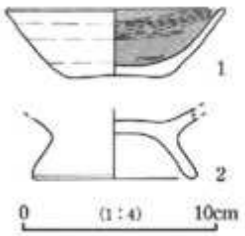
(22)ⅡH5号住居址（第41・42図、写真図版十八①）

本住居址は、調査区中央部の台地付け根であるI－ス－19・20.I－セ－19・20Grに位置する。残存状態は東壁が地形の傾斜のために削平されている他は良好であった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは不明である。規模は北壁2.03m(残存)・南壁1.50m(残存)・西壁2.86mで、壁高さは南西コーナーで37.5cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－4°－Eを示す。住居址床面積は残存部で5.2㎡を測る。覆土は2層のみである。床は全体に



第41図　ⅡH5号住居址実測図



第42図 ⅡH5号住居址出土遺物実測図

硬質で、貼床は10cmの厚さで貼られていた。壁溝は西壁の全体と北壁と南壁の一部に確認された。規模は幅10～30cm・深さ6cmを測り、断面形はU字形である。ピットは3カ所検出され、規模はP1が径45cm・深さ21cm、P2が径35cm・深さ16cm、P3が径30cm・深さ8cmを測る。

出土遺物は主に覆土中である。図示した遺物の出土位置は1がP2上、2が覆土中である。よって本址は10世紀前半以降に位置づけられる。

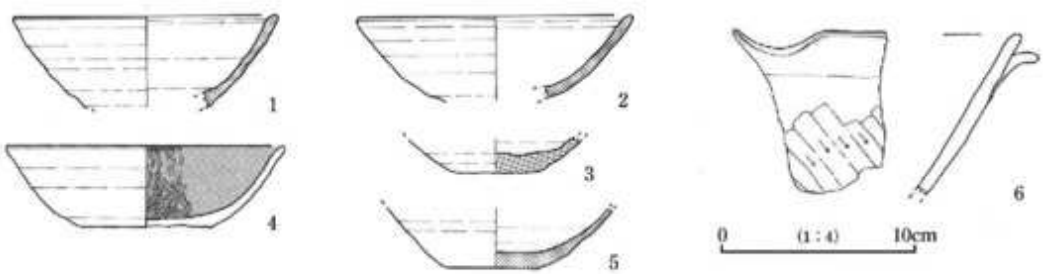
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	11.2	3.6	5.3	外面 ロクロ成形・底部調整不明 内面 ロクロ成形・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子多量と黒色粒子含む
2	土師器椀	――	(3.1)	8.5	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR6/3 にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を多く含む

第18表 ⅡH5号住居址出土遺物観察表

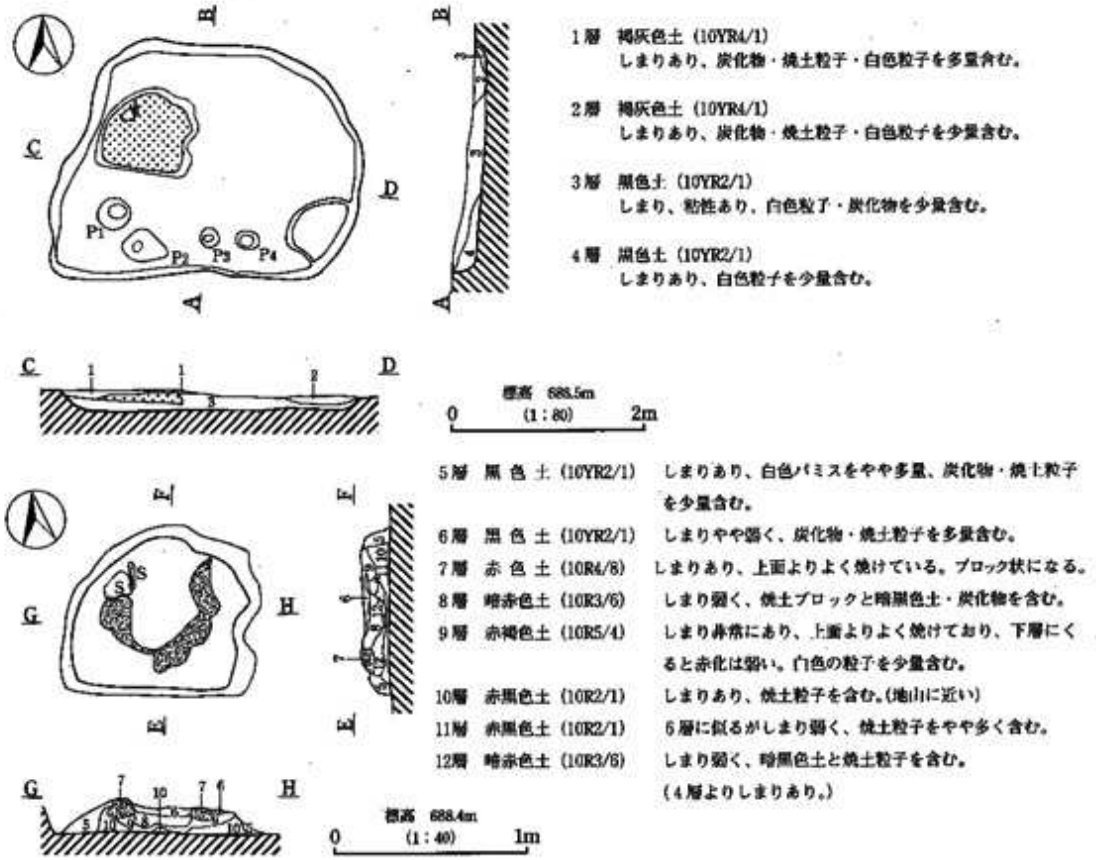
(23) ⅡH6号住居址（第43・44図、写真図版二十）

本住居址は、調査区中央の台地上であるI－セ－6・7、I－ソ－6・7Grに位置する。残存状態はほぼ良好であり、重複遺構はⅡM9号溝状遺構と直接の新旧関係はないが、ⅡM9号に囲まれた状態である。

形態は不整形を呈する。カマドは炉址的な部分が西壁よりに検出された。規模は北壁2.25m・南壁2.72m・西壁2.27m・東壁2.03mで、壁高さは北壁中央で28cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－6°－Eを示す。住居址の床面積は推定で5.8㎡を測る。覆土は4層で、床は軟質であった。壁溝は確認されなかった。ピットは4カ所検出され、規模はP1が径33cm・深さ19cm、P2が径46cm・深さ10.5cm、P3が径20cm・深さ12.5cm、P4が径23cm・深さ10cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。カマドは置き竈的な焼土範囲が検出された。この焼土範囲は床面よりも12cm程高い位置にあり、焼土を囲むように粘質土が取り巻いていた。規模は長軸2.02m・短軸1.82mで、焼土の厚みは9cmを測る。



第43図 ⅡH6号住居址出土遺物実測図



第44図　ⅡH6号住居址実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(13.6)	〈4.6〉	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	5Y5/1 灰 白色粒子を含む
2	須恵器坏	(14.2)	〈4.3〉	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5Y6/1 灰 白色粒子をやや多く含む
3	須恵器坏	——	〈1.7〉	4.8	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5Y6/1 灰 白色粒子を含む
4	須恵器?坏(軟質)	(14.3)	4.1	(6.8)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理?	7.5YR7/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子多量と黒色粒子含む
5	須恵器坏	——	〈3.1〉	5.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5YR7/3 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を含み、砂粒をやや多く含む
6	土師器片口鉢	——	〈8.4〉	——	外面 口縁部～胴部ヨコナデ後、胴部ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子微量と白色粒子少量含む

第19表　ⅡH6号住居址出土遺物観察表

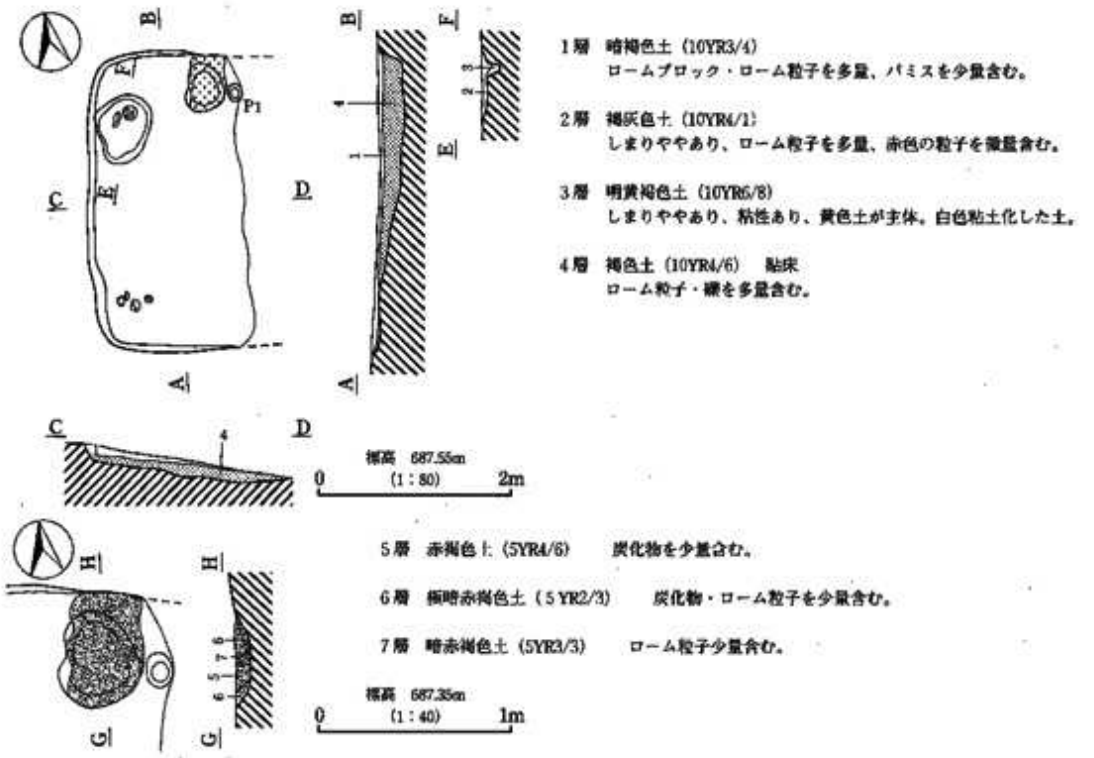
出土遺物は覆土中と焼土内から出土した。特に焼土南側には拳大の礫が多く検出された(写真参照)。図示した遺物の出土位置は1が焼土東側、2が覆土中、6が焼土内、その他は南東コー

ナー付近の床直からの出土である。1～5は須恵器坏である。特に4は一見すると非常に生焼け的な須恵器であるが、内面のミガキ技法を考えると土師器でありいわゆる須恵質系土師器の問題も含め位置づけに苦慮する。6は土師器の片口鉢で内面黒色処理されている。以上、ⅡH6号住居址について述べたが、本址は住居址とすべきかどうか疑問点も残るが、現報告段階では住居址的遺構として報告する。なお本址はこれら遺物より9世紀前半に位置づけられる。

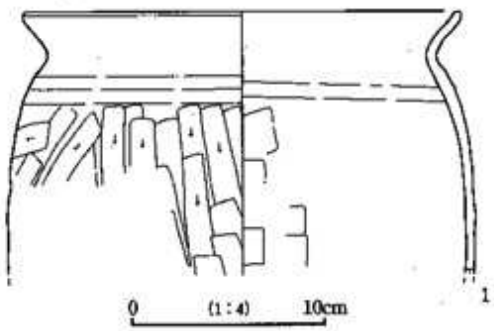
㉔ⅡH7号住居址（第45・46図、写真図版十八②）

本住居址は、調査区中央部の台地付け根であるI－ス－19·20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。重複はⅡH5号住居址としており本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁のほぼ中央に造られている。規模は北壁1.30m（残存）、·南壁1.36m（残存）·西壁2.85mで、壁高さは西壁中央で13cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－8°－Eを示す。住居址の床面積は残存で4.23㎡を測る。覆土は4層に分かれる。床は硬質であり、貼床は深いところで24cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは1カ所確認されただけで、規模はP1が径14cm·深さ20cmを測る。また本址は北西コーナーに貯蔵穴的な土坑



第45図 ⅡH7号住居址実測図



第46図　ⅡH７号住居址出土遺物実測図

が検出された。規模は長軸74cm・短軸58cm・深さは8.5cmを測る。カマドは北壁中央にあったが、火床面のみしか残存していなかった。焼土の厚みは８cmで、掘り込み部の長さは長軸59cm・短軸40cmを測る。出土遺物は覆土中のものがほとんどで、図示した土師器甕は住居址南西コーナー床直より出土している。

本址はこれらの遺物より９世紀後半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器甕	(22.6)	〈13.5〉	――	外面　口縁部～胴部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	7.5YR7/6　橙 径１～２mmの赤色火山灰粒子多量と白色粒子少量含む

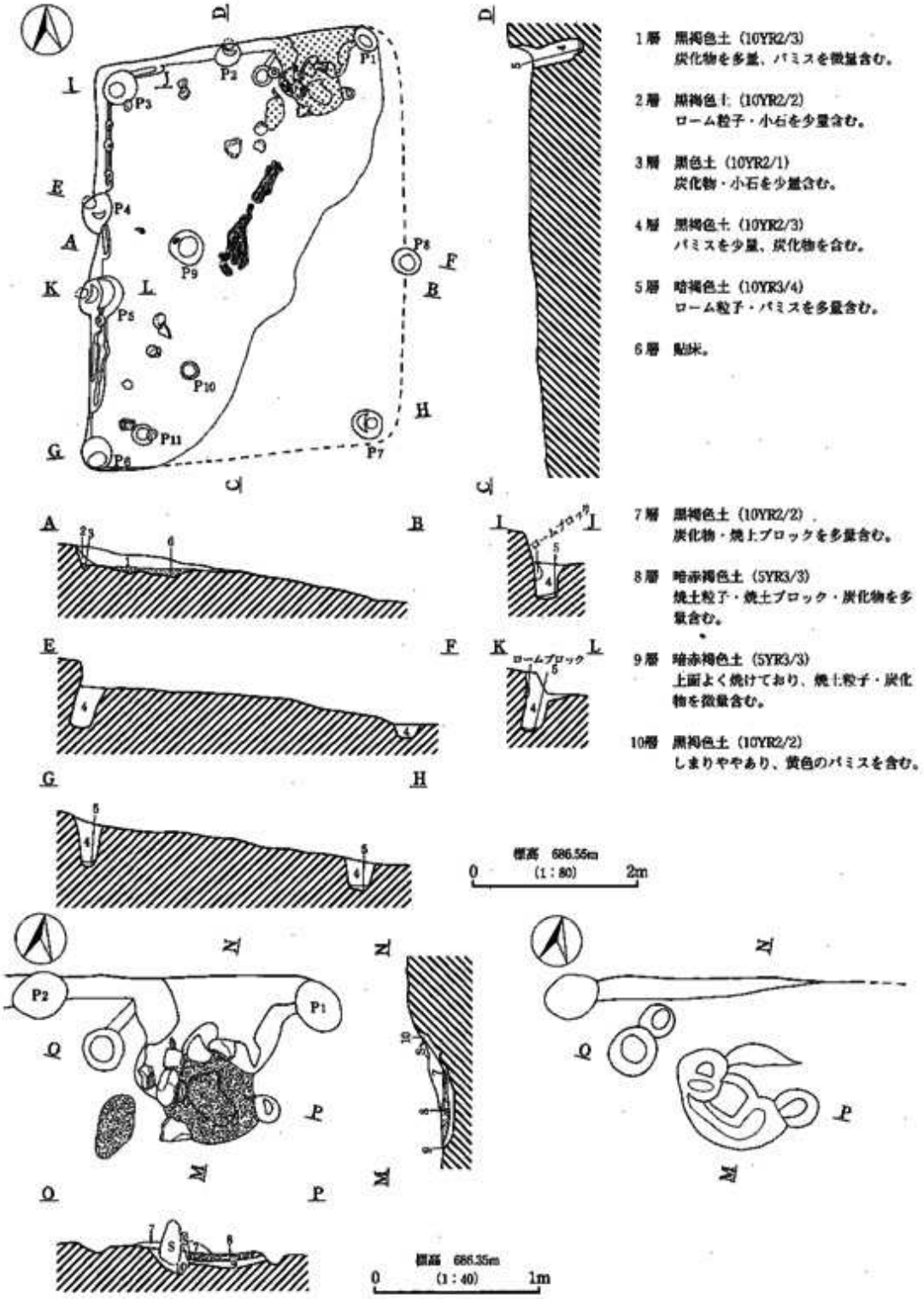
第20表　ⅡH７号住居址出土遺物観察表

(25)ⅡH８号住居址（第47・48図、写真図版二一）

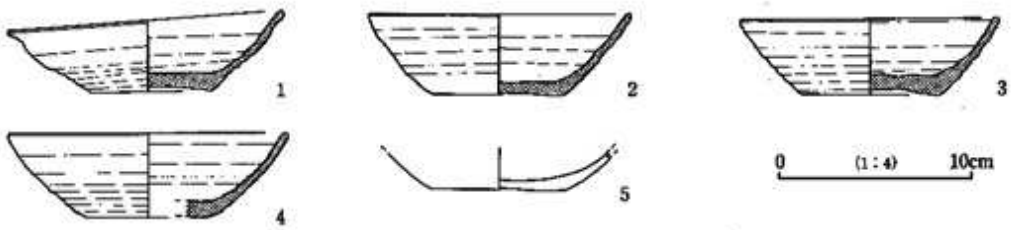
本住居址は、調査区中央部の台地であるI－セ－19・20.I－ソ－18・19・20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。重複関係はＩＦ４号掘立柱建物址と重複し本址の方が古い。

形態はほぼ長方形を呈する。カマドは北壁東よりに造られていた。規模は北壁3.20ｍ(残存)2.50ｍ(推定)・南壁0.76ｍ(残存)3.65ｍ(推定)・西壁4.76ｍ・東壁4.80ｍ(推定)で、壁高さは北東コーナーで32cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はＮ－２°－Ｗを示す。住居址の床面積は推定で16.3㎡(推定)・残存で10.7㎡を測る。覆土は６層に分れ、床は硬質で、貼床は８cmを測る。壁溝は西壁と北壁の一部に検出された。規模は幅８～20cm・深さ７cmで、断面形はＵ字形を呈する。また壁溝内には５個のピットが確認された。ピットは11カ所検出された。規模はＰ１が径32cm・深さ20cm、Ｐ２が径33cm・深さ61cm、Ｐ３が径40cm・深さ44cm、Ｐ４が径48cm・深さ78.5cm、Ｐ５が径50cm・深さ71cm、Ｐ６が径37cm・深さ66cm、Ｐ７が径35cm・深さ40cm、Ｐ８が径34cm・深さ18cm、Ｐ９が径40cm・深さ13cm、P10が径22cm・深さ28cm、P11が径25cm・深さ33.5cmを測る。これらピットは検出位置より住居址の側柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

カマドは北壁東よりで検出された。主軸方位はＮ－10°－Ｗを測る。袖の形態は芯材として縦長の礫を立てその周りを粘質土で覆うものであり左袖のみ確認できた。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは５cmを測る。煙道部の長さは1.01ｍ・幅44cmを測る。



第47図　ⅡH８号住居址実測図



第48図　ⅡＨ８号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	14.0	4.2	6.2	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形　重ね焼跡あり	7.5Y6/1　灰 白色・黒色粒子を多く含む
2	須恵器坏	13.5	4.2	6.7	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形　火だすき痕あり	7.5Y7/1　灰白 白色・黒色粒子を多く含む
3	須恵器坏	13.4	4.0	7.0	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	7.5Y6/1　灰 白色・黒色粒子を多く含む
4	須恵器坏(軟質)	(14.4)	4.3	(6.4)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	5Y7/2　灰白 径1～2㎜の赤色粒子と白色・黒色粒子を多く含む
5	土師器坏	――	〈2.1〉	6.8	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、ヘラケズリ 内面　ヘラミガキ？	7.5YR7/4　にぶい橙 赤色粒子を微量と砂粒をやや多く含む

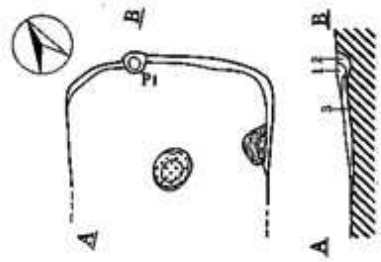
第21表　ⅡＨ８号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土中及びカマド周辺と住居址中央部で検出された炭化材の周辺より出土した。図示した遺物の出土位置は１と３が住居址中央、２と５がカマド左袖脇、４が覆土中である。１～４は須恵器坏であるが、４は生焼け的須恵器であった。これらの遺物より本址は９世紀前半に位置づけられる。

(26)ⅡＨ９号住居址（第49・50図）

本住居址は、調査区中央部の台地南斜面であるⅠ－チ－８,Ⅰ－ツ－８Grに位置する。残存状態は南側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。明瞭なカマドは不明であるが、東壁と住居址中央部に焼土広がりが検出された。規模は北壁2.06ｍ・西壁1.06ｍ・東壁1.32ｍ(残存)で、壁高さは北壁中央で10㎝を測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はＮ－29°－Ｅを示す。住居址の床面積は残存で2.7㎡を測る。覆土は１層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は確認されなかった。ピットは１カ所確認され、規模はＰ１が径26㎝・深さ11㎝を測る。住居址掘り方は均一であった。住居址中央部の焼土は炉址的な残存状況で、規模は長軸43㎝・短軸38㎝・深さ11.5㎝を測る。



1層　黒褐色土（10YR3/1）
しまりあり、粘性ややあり、φ3～4㎜の相浜層のブロックを含み、炭化粒子を少量含む。

2層　黒褐色土（10YR3/1）
しまりあり、粘性ややあり、φ1～2㎜の相浜層のブロックを多量含む。

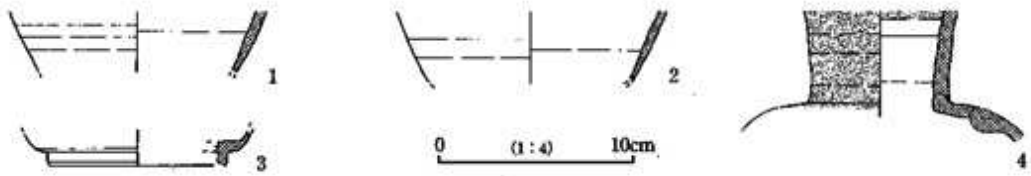
3層　褐色土（10YR4/4）
しまりあり、1㎝大の相浜層のブロックを含み、白色のパミスを少量含む。

標高　688.1m
0　(1:80)　2m

4層　明赤褐色土（2.5YR5/8）
しまりややあり、赤色（焼土ブロック）と褐色土ブロックを多量、炭化物を微量含む。

標高　687.9m
0　(1:40)　1m

第49図　ⅡH9号住居址実測図



第50図　ⅡH9号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(14.8)	〈5.8〉	——	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形	N6/灰(内面) 白色・黒色粒子を含む
2	須恵器坏	(15.0)	〈6.0〉	——	外面　ロクロ成形・自然釉付着 内面　ロクロ成形	N6/灰(内面) 黒色粒子を含む
3	須恵器高台坏	——	〈1.6〉	(9.0)	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形	7.5Y6/1　灰 白色粒子を含む
4	須恵器長頸瓶	(10.8)	〈7.5〉	——	外面　ロクロ成形・自然釉付着 内面　ロクロ成形・自然釉付着	5Y6/2　灰オリーブ 黒色粒子を多く含む

第22表　ⅡH9号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土中のものがほとんどで、図示した遺物の出土位置もすべて覆土中のものである。1と2は須恵器坏であり、3は須恵器高台坏の高台部である。4は須恵器長頸瓶の頸部から口縁部である。外面全体と内面の口縁部に釉が施されている。口頸部はいわゆる三段構成を呈する。

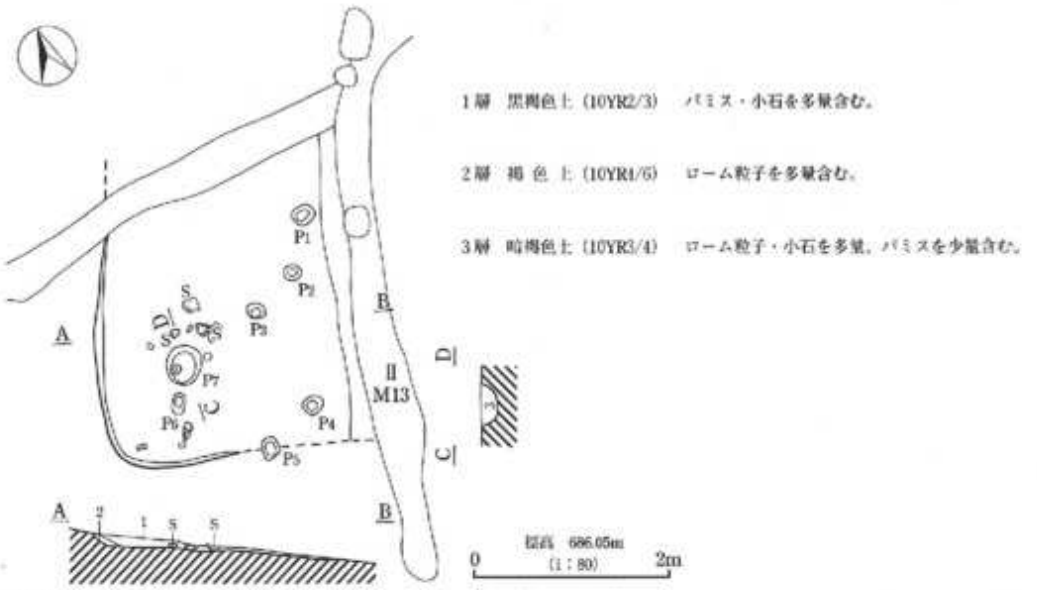
これらの遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

㉗ⅡH11号住居址（第51・52図、写真図版二十二①）

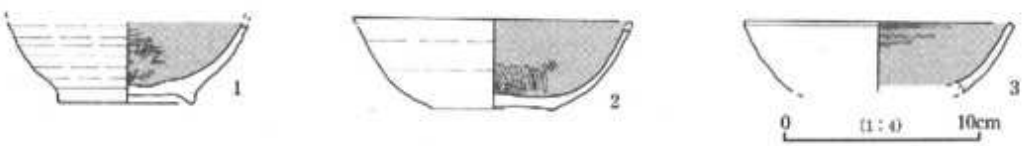
本住居址は、調査区中央部台地の付け根部であるI－ター17,I－チー17Grに位置する。残存状態は北側及び東側が暗渠排水とⅡM13号溝状遺構によって削平され、住居址の西壁と南西コーナー部分のみ検出された。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は南壁1.20ｍ(残存)・西壁2.90ｍ(残存)で、壁高さは南西コーナーで12㎝を測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で6.6㎡を測る。覆土は３層に分かれる。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で７カ所が確認され、規模はＰ１が径23㎝・深さ22㎝、Ｐ２が径19㎝・深さ11㎝、Ｐ３が径18㎝・深さ20㎝、Ｐ４が径22㎝・深さ23㎝、Ｐ５が径20㎝・深さ13㎝、Ｐ６が径22㎝・深さ14㎝、Ｐ７が径41㎝・深さ19㎝を測る。住居址掘り方は均一であった。

本址の出土遺物は覆土中からの出土が殆どで、図示した遺物の出土位置はいずれも住居址南西コーナーからである。１は土師器の高台付椀で、２と３は土師器坏である。いずれも内面黒色処理されている。１と２は重なるような状態で出土した。これら遺物より９世紀後半以降に位置づけられると考える。



第51図　ⅡH11号住居址実測図



第52図　ⅡH11号住居址出土遺物実測図

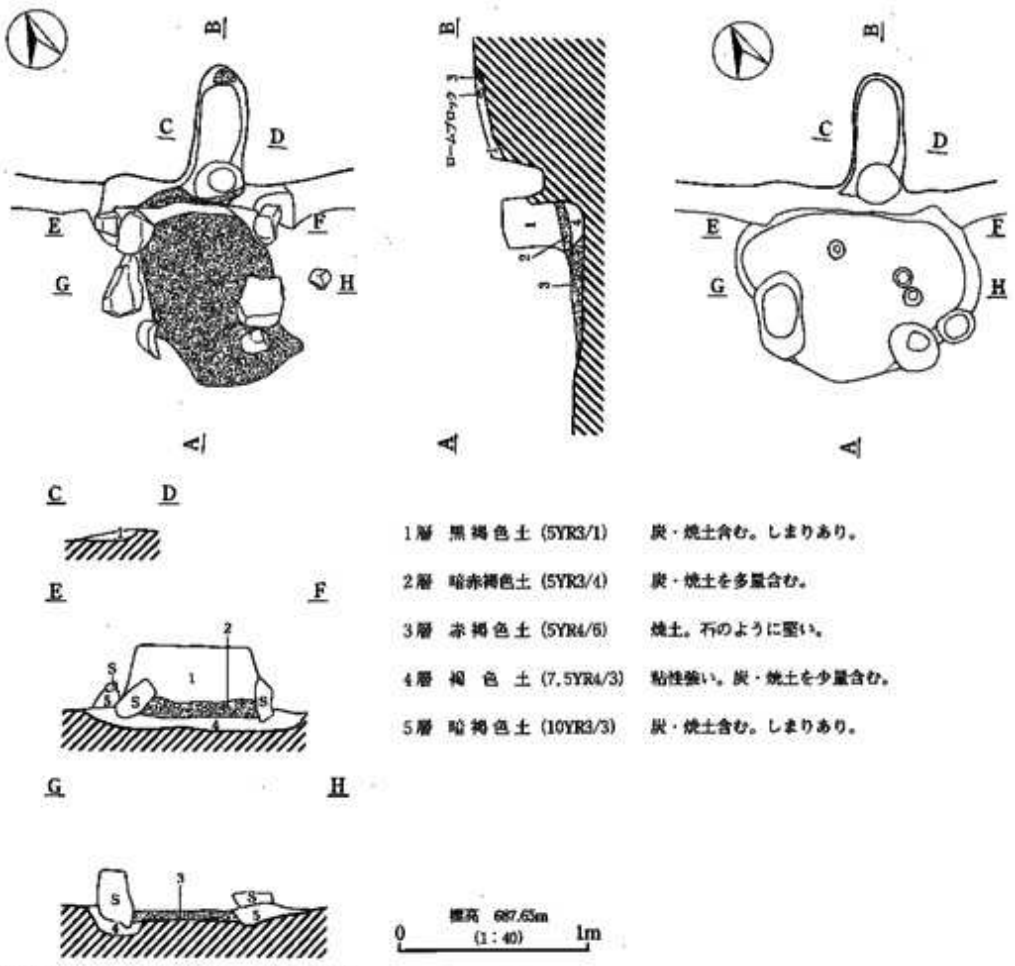
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器椀	――	〈4.2〉	6.9	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR5/6 明赤褐 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を含む
2	土師器坏	(14.4)	3.2	5.9	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/2 灰褐 径2～3㎜の赤色粒子を多く含む
3	土師器坏	13.8	〈3.7〉	――	外面 ロクロ成形 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR5/6 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子と黒色粒子多量含む

第23表 ⅡH11号住居址出土遺物観察表

(28) ⅡH12号住居址（第53～55図、写真図版二十三・二十四）

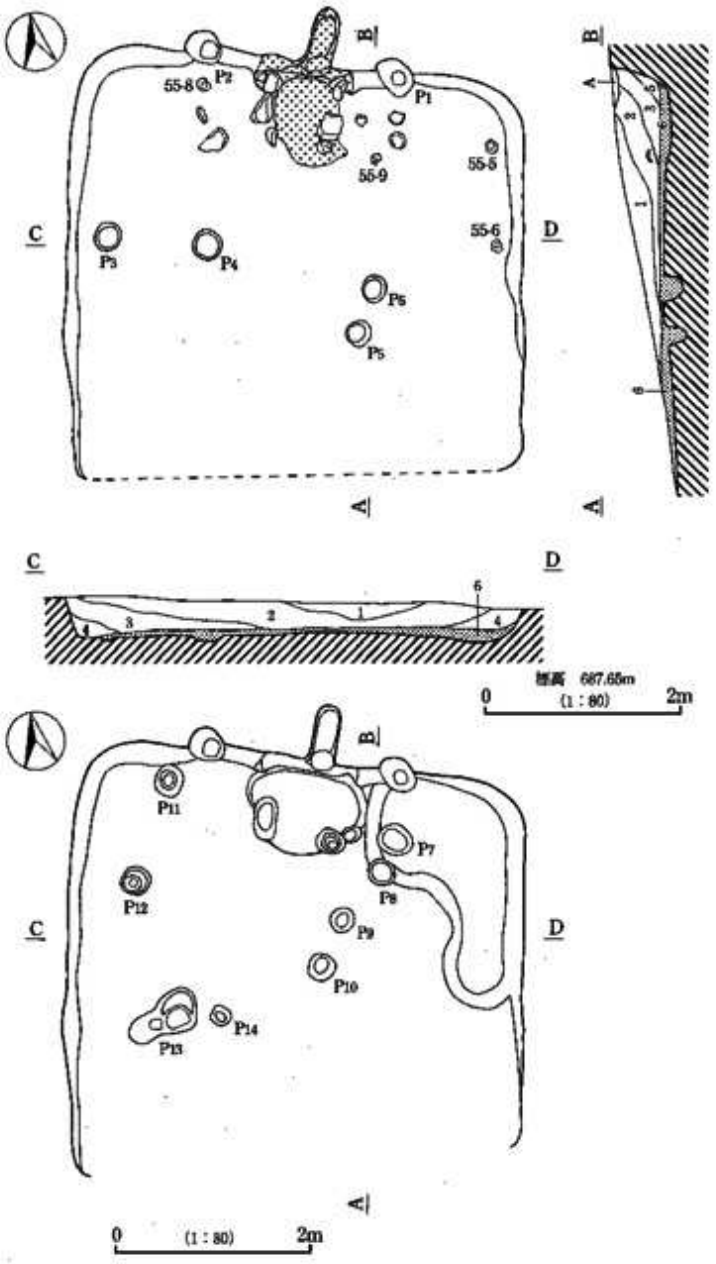
本住居址は、調査区中央部の台地東斜面であるI－ツ－9・10.I－テ－9・10Grに位置する。残存状態は南側が地形の傾斜によって削平されていた。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央にある。規模は北壁4.32m・南壁0.35



第53図 ⅡH12号住居址カマド実測図

m（残存）4.50m（推定）・西壁4.25m・東壁3.75mで、壁高さは北西コーナーで58cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－10°－Eを測る。住居址の床面積は推定で17.5㎡を測る。床は全体的に硬質であり、貼床の厚さは10cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは床面検出時に6カ所、掘り方検出時に8カ所の計14カ所が確認され、規模はP1が径40cm・深さ76cm、P2が径36cm・深さ75cm、P3が径27cm・深さ17cm、P4が径30cm・深さ10cm、P5が径25cm・深さ28cm、



A層　褐灰色土（10YR5/1）
しまり弱く、ぼそぼそしている。耕作土に近い。

1層　暗褐色土（10YR3/3）
しまりややあり、φ1－2㎜大の相浜層ブロックを少量含む。

2層　黒褐色土（10YR2/3）
しまりあり、φ1－3㎜大の相浜層のブロック・φ5㎜大の軽石を含む。炭化物を少量含む。

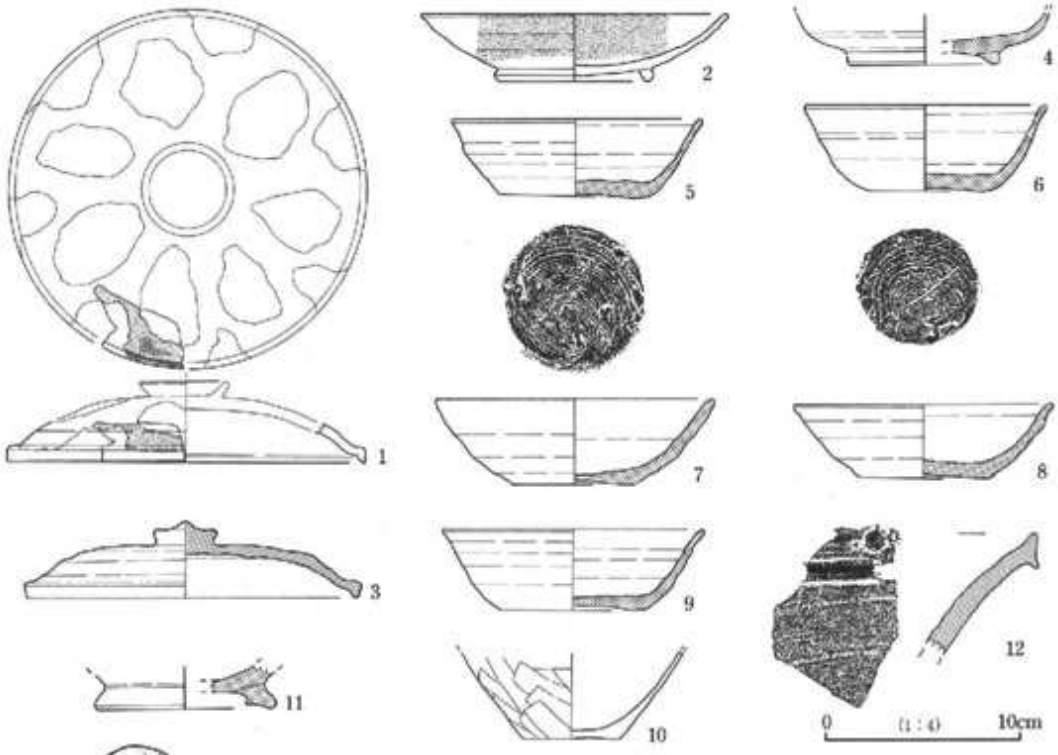
3層　黒褐色土（10YR3/2）
しまりややあり、φ1－2㎜大の相浜層ブロックを含み、白色の粒子を微量含む。

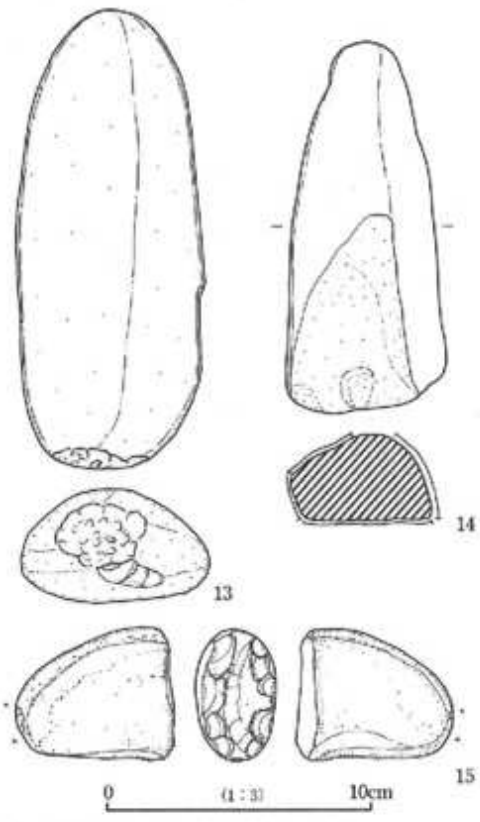
4層　黒褐色土（10YR3/2）
しまりややあり、炭化物・3－4㎜の相浜層のブロックを含む。下層粘質。

5層　褐色土（10YR4/4）
しまり、粘性あり、焼土粒子を少量含む。黒褐色土ブロックを含む。

6層　貼床

第54図　ⅡH12号住居址実測図





第55図　ⅡH12号住居址出土遺物実測図

P6が径28cm・深さ22cm、P7が径36cm・深さ17cm、P8が径28cm・深さ29cm、P9が径25cm・深さ19cm、P10が径26cm・深さ19cm、P11が径34cm・深さ24cm、P12が径30cm・深さ24cm、P13が径80cm・深さ35cm、P14が径20cm・深さ13cmを測る。ピットの検出位置よりP1とP2は主柱穴的な役割の壁柱穴と考えられる。住居址掘り方は北東コーナー部に「L」字形に一段深く掘り下げた部分が確認された。深さは掘り方面より3～4cmであった。

カマドは住居址北壁中央部に造られていた。形態は煙道部が細長く住居址壁よりも飛び出るタイプのもので、袖は自然礫を芯材とし粘土で覆ったものであった。カマド主軸方位はN－21°－Eを測り、住居址主軸よりも東にずれている。規模は煙道部長さが165cm・幅50cm、右袖長さ86cm・幅23cm、左袖長さ72cm・幅20cmである。火床

面焼土の厚みは5cmを測り、非常に硬質化しており使用頻度の高さを伺わせた。

本址の出土遺物は覆土中のものが多く、ついでカマド周辺の床直とカマド内のものがあった。1は奈良三彩の蓋であり、カマド左側の覆土中より出土した。また、ⅡH15号住居址出土の小片と接合関係にある。小片の為全容は不明であるが、新潟県和島村八幡林官衙遺跡出土の三彩蓋を参考として復元図化した。2は灰釉陶器皿で同じくカマド左側の覆土中より出土した。釉はハケ塗りである。3は須恵器蓋でカマド右袖脇の床直から出土した。4～9は須恵器坏で、出土位置は5は北東コーナー脇、6は東壁中央よりの床直、8がカマド左袖脇、9がカマド右袖前の床直で、それ以外は覆土中である。5と6はいずれも底部に焼成前のヘラ書きが施され、5が「十」、6が「十」である。11は須恵器長頸壺の底部と考えられる。12は須恵器甕の口縁部で、10は土師器甕の底部から胴部である。13～15は石製品で、13と15はいずれも先端部に敲き痕がある。14は全面研磨されている。石材は13が輝石安山岩、14が同じく輝石安山岩、15が角閃石安山岩である。

これらの出土遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

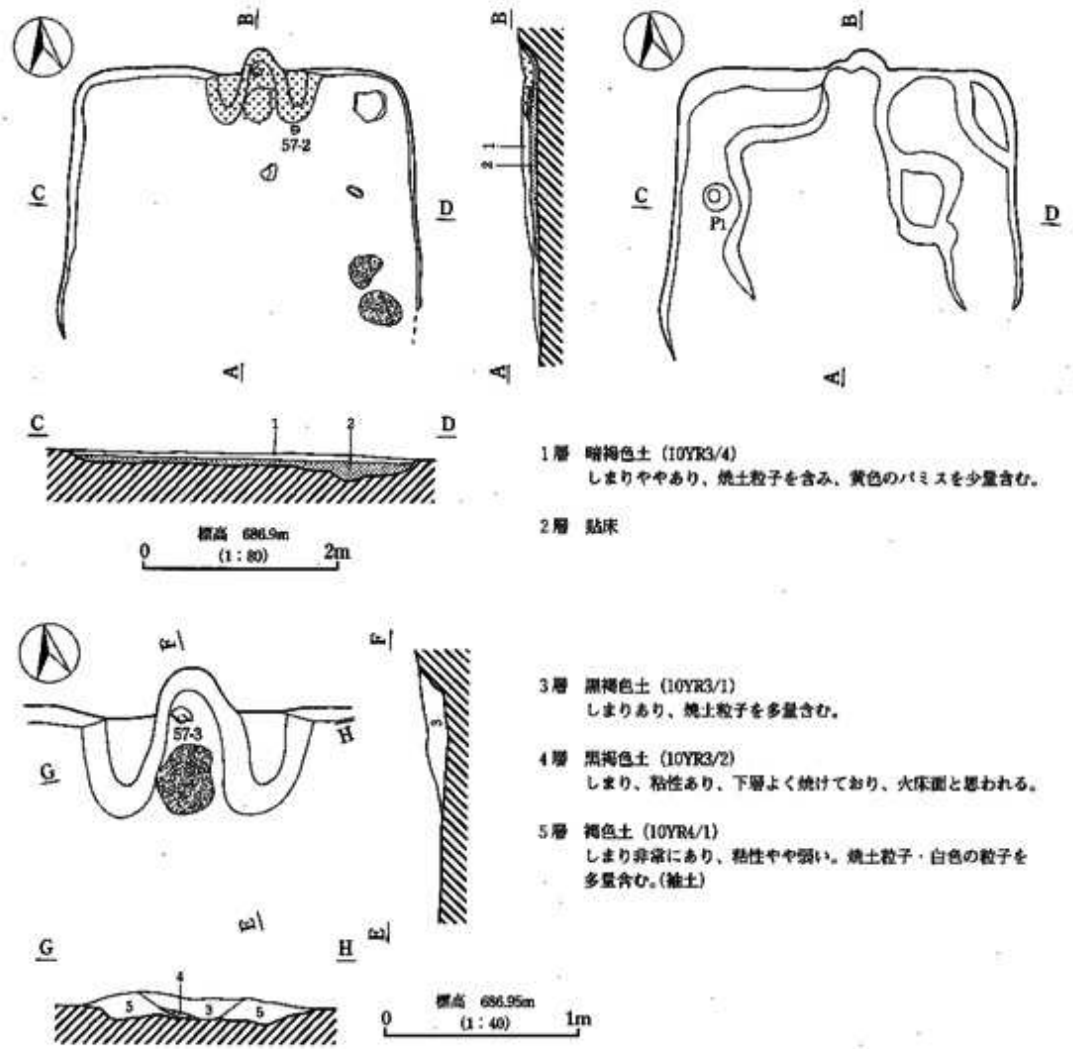
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	奈良三彩蓋	(18.4)	〈2.1〉	——	外面 ロクロ成形・施釉 内面 ロクロ成形・施釉	5Y8/3 淡黄 非常に良く精錬されている
2	灰釉皿	(15.8)	3.5	7.8	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後、高台貼付 施釉ハケぬり 内面 ロクロ成形・施釉・みこみ部拭ってある	2.5GY8/1 灰白 白色粒子を微量含む
3	須恵器蓋	17.2	3.9	つまみ部径3.2	外面 ロクロ成形・天井部回転ヘラケズリ後、つまみ部貼付 内面 ロクロ成形 火だすき痕あり	N6/灰 白色粒子と黒色の不純物を少量含む
4	須恵器高台坏	——	〈2.6〉	(7.8)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ロクロ成形	N5/灰 白色粒子を含む
5	須恵器坏	12.9	4.0	7.8	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラガキ「十」あり 内面 ロクロ成形 火だすき痕あり	7.5Y6/1 灰 白色粒子と黒色粒子を含む
6	須恵器坏	12.5	4.5	6.5	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り ヘラガキ「十」あり 内面 ロクロ成形 火だすき痕あり	7.5Y6/1 灰 白色粒子と黒色粒子を含む
7	須恵器坏	(14.4)	4.4	(6.5)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5Y7/1 灰白 砂粒を多く含み、ざらざらしている
8	須恵器坏	13.4	3.8	7.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形 火だすき痕あり	7.5Y6/1 灰 径2～3mmの黒色の不純物を多く含む
9	須恵器坏	(13.6)	4.1	7.4	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形 火だすき痕あり	N6/灰 黒色の噴出物が非常に多い
10	土師器甕	——	〈4.4〉	5.0	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	5YR5/6 明赤褐 径1mm以下の白色・黒色粒子を多量に含む
11	須恵器長頸壺	——	〈2.1〉	(9.4)	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後 自然釉付着 高台貼付 内面 ヨコナデ	7.5Y6/1 灰 白色粒子をやや多く含む
12	須恵器甕	——	〈6.0〉	——	外面 ヨコナデ 自然釉付着 内面 ヨコナデ 自然釉付着	N5/灰 白色粒子を少量含む

第24表 ⅡH12号住居址出土遺物観察表

(29) Ⅱ H13号住居址（第56・57図、写真図版二十五）

本住居址は、調査区中央部の台地南斜面であるⅠ－ツー10.11Grに位置する。残存状態は南側半分が地形の傾斜によって削平されている。

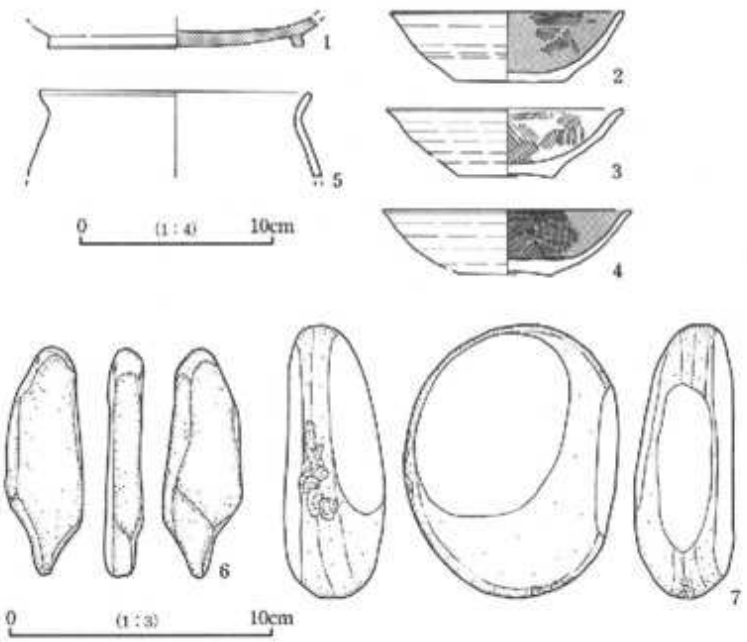
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.24m・西壁2.65m（残存）・東壁2.35m（残存）で、壁高さはカマド付近で9cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－8°－Eである。住居址の床面積は9.0㎡を測る。床は全体的に硬質であり、貼床は厚い箇所で18cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは掘り方時に1カ所が確認され、規模はP1が径27cm・深さ12.5cmを測る。住居址掘り方は東壁と西壁の両脇を一段深く掘り窪ます状態で、深さは東側が約7cm・西側が約2cmを測る。



第56図　Ⅱ H13号住居址実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器高台坏	――	〈1.2〉	13.2	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラ切り後、高台貼付 内面 ロクロ成形 良く磨かれている	5GY5/1 オリーブ灰 径1～2㎜の赤色粒子と白色粒子多量含む
2	土師器坏	16.1	3.7	5.1	外面 ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
3	土師器坏	(16.2)	3.5	5.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ	7.5YR8/4 浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子微量、砂粒少量含む
4	土師器坏	(12.8)	3.4	4.8	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/2 明褐灰 径1～2㎜の赤色粒子を含み、白色粒子を微量含む
5	土師器甕	(14.0)	〈4.4〉	――	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒をやや多く含む

第25表　ⅡH13号住居址出土遺物観察表



第57図　ⅡH13号住居址出土遺物実測図

カマドは北壁中央で検出された。主軸方位はN－9°－Eを測る。形態は煙道部が住居址壁よりも飛び出す形で、袖は芯材として粘質土で覆うものであり両袖が確認できた。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは3㎝を測る。煙道部の長さは76㎝・幅35㎝を測る。また本址は住居址南西コーナーに焼土の広がりが2カ所確認された。

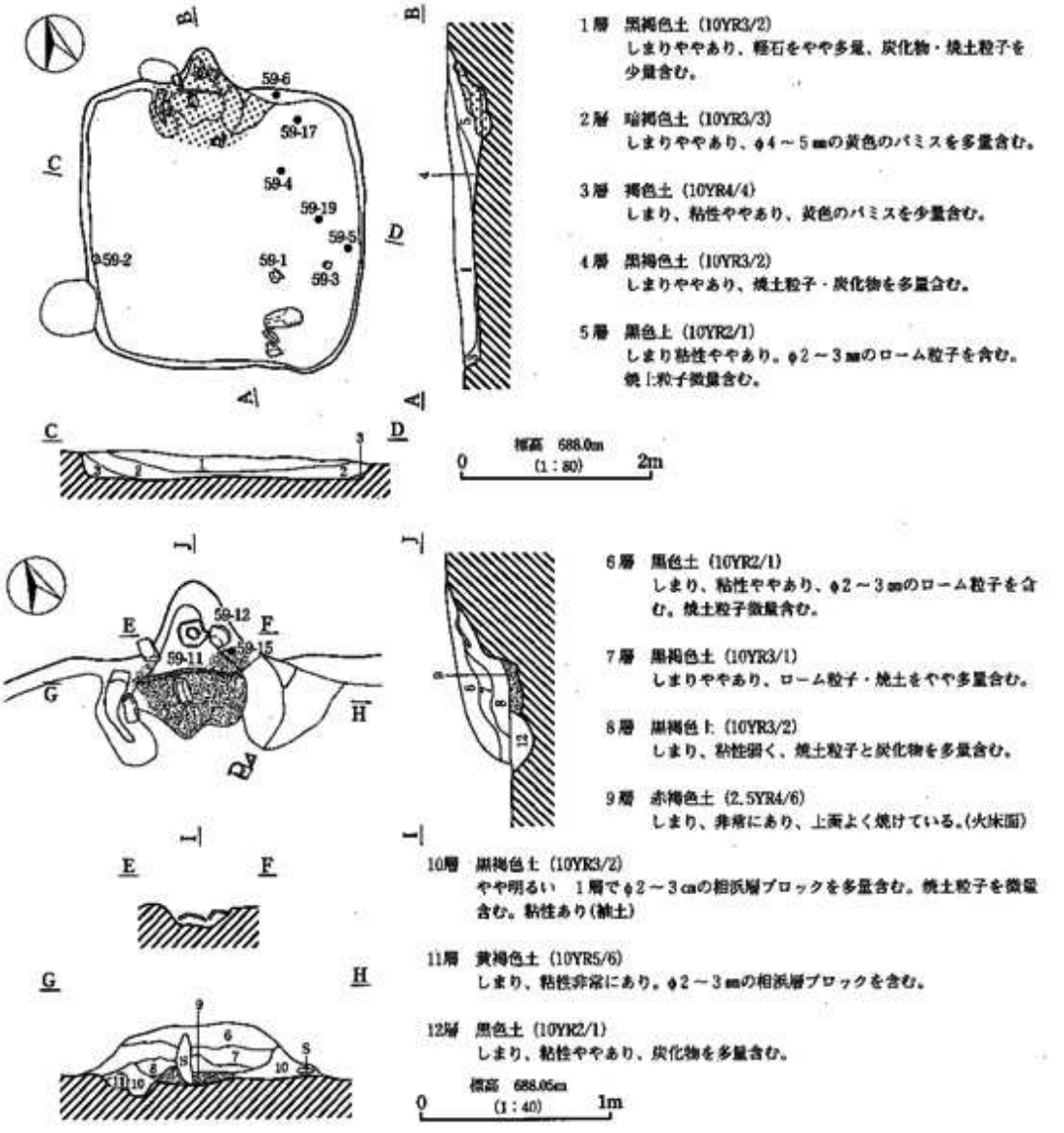
本址からの出土遺物はカマド周辺からのものが多かった。図示した遺物の出土位置は1と4が覆土中、2はカマド南側床直、3がカマド火床面内、5が床下からである。1は高台付きの須恵器坏で内面見込み部が非常によく磨かれている。2～4は土師器坏でいずれも内面黒色処理されている。5は土師器甕でいわゆるロクロ甕である。6と7は石製品であり、6は覆土中で7は床下より出土した。7は側面に擦り跡と敲き跡がある。石材は6と7ともに輝石安山岩である。

これら遺物より本址は9世紀後半以降に位置づけられる。なお1の須恵器高台杯はⅡH12号住居址からの混入品と考えられる。

㉚ⅡH14号住居址（第58～60図、写真図版二十六・二十七）

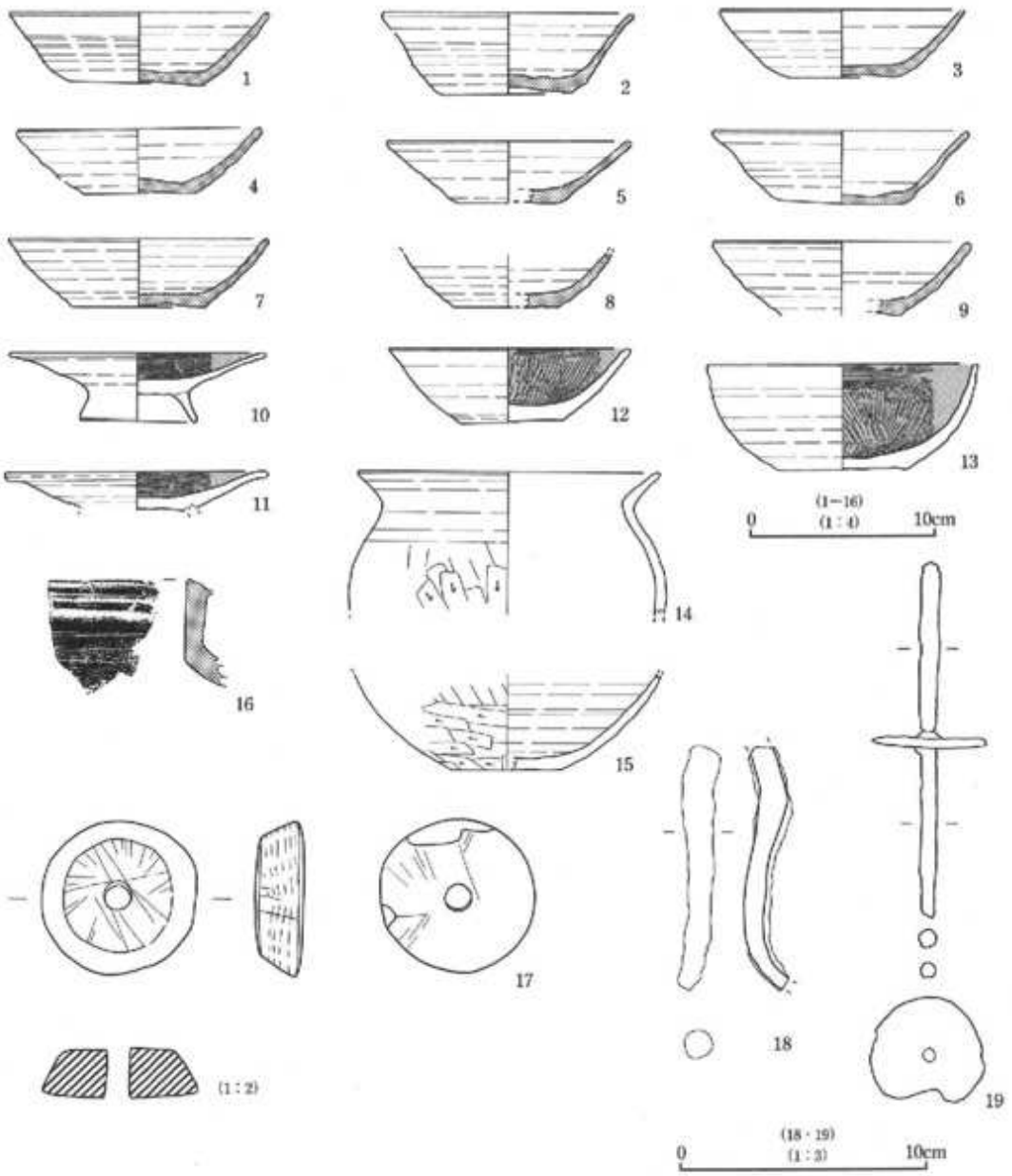
本住居址は、調査区中央部の台地南斜面であるI－ター7・8 Grに位置する。残存状態は良好であり、本遺跡には珍しく四方の壁が残存していた。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られていた。規模は北壁2.70m・南壁2.30m・西壁2.62m・東壁2.77mで、壁高さは西壁中央で25cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－13°－Eを示す。住居址の床面積は7.1㎡を測る。覆土は4層で、床は中央部分がやや硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝・ピットは確認されなかった。掘り方はほぼ均一であった。

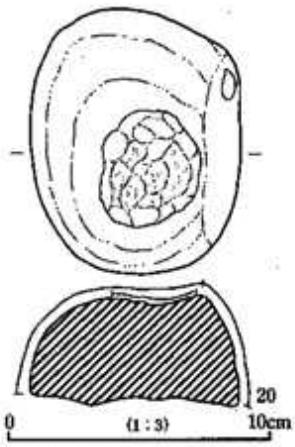


第58図　ⅡH14号住居址実測図

カマドは北壁中央部に造られていた。主軸方位はN－14°－Eを示す。形態は煙道部が壁よりも外に飛び出すタイプのもので、袖は粘質土によって構築されていた。規模は煙道部長さが96cm・幅60cm、右袖長さ58cm・幅20cm、左袖長さ48cm・幅44cmで、火床面の焼土の厚さは9cmを測る。火床面はよく焼けており使用頻度の高さを感じさせた。カマド内には火床部ほぼ中央に支脚石が立ったままで検出された。長さは27cm程の自然石であった。また、煙道部には土師器坏と皿が伏せた状態で出土した(写真参照)。しかし、土師器皿に関しては二次焼成を受けた痕跡があるもの



第59図　ⅡH14号住居址出土遺物実測図①



第60図 ⅡH14号住居址出土遺物実測図②

の、土師器坏は二次焼成を受けた顕著な痕跡は無く、カマド破棄後に置かれたものかもしれない。

出土遺物は東壁際に多く出土したが、いずれも床面からはやや浮いた状態で出土した。図示した遺物の出土位置は1～5が東壁際、6～9・13・14・16は覆土中、11・12はカマド煙道部、10・15はカマド内である。14と15は土師器甕で同一個体と考えられるが接合点がない。17は石製の紡錘車である。18と19は鉄製品で、18が釘、19が紡錘車と考えられる。20は凝灰岩の敲き台の石と考えられ、中央部に敲き痕がある。

これらの出土遺物より本址は9世紀前半に位置づけられる。

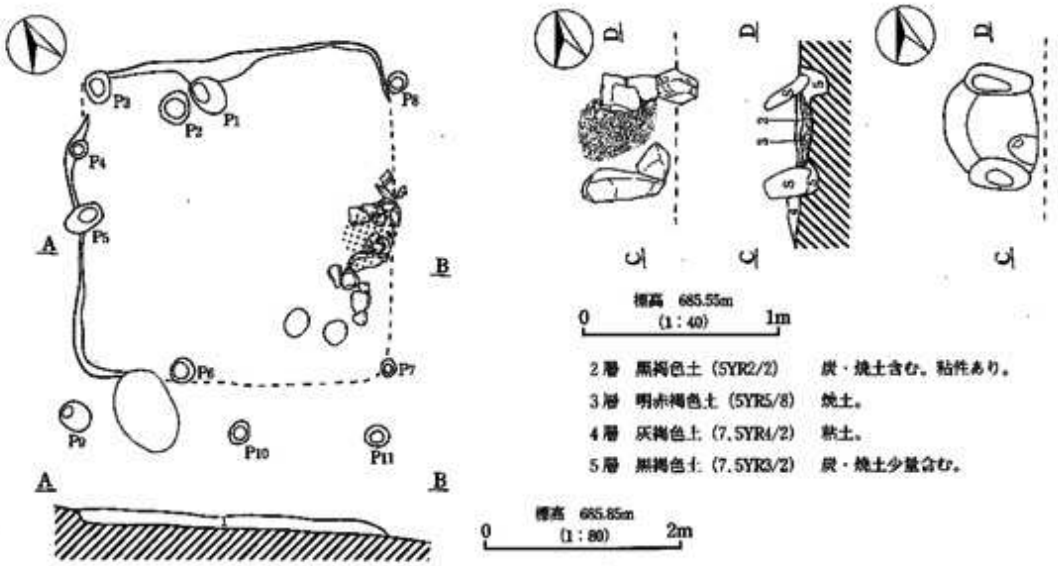
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	14.0	3.9	7.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	N6/灰 白色・黒色粒子を少量含む
2	須恵器坏	13.6	4.4	7.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形・歪みが激しい 火だすき痕あり	N6/灰 白色粒子を多く含む
3	須恵器坏	(13.2)	3.7	(6.2)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	N6/灰 径2～3㎜の砂粒少量と白色粒子を含む
4	須恵器坏	(13.2)	3.5	6.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	N7/灰白 白色・黒色粒子を少量含む
5	須恵器坏	(13.2)	3.4	(5.4)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形 磨かれている	N7/灰白 径2～3㎜の黒色粒子を含む
6	須恵器坏	14.0	4.0	7.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形 火だすき痕あり	N6/灰 白色・黒色粒子を少量含む
7	須恵器坏	(14.0)	3.7	(7.2)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	N6/灰 白色・黒色粒子を含む
8	須恵器坏	——	〈2.9〉	(5.6)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形 火だすき痕あり	N6/灰 白色・黒色粒子を含む
9	須恵器坏	(14.0)	4.0	(6.2)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	N6/灰 白色・黒色粒子を含む
10	土師器高台皿	13.8	4.8	6.3	外面 ロクロ成形・底部（調整不明）切り離し後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/4 浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子と白色粒子多く含む
11	土師器高台皿	(14.0)	〈2.1〉	(6.0)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形・黒色処理	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を少量含む
12	土師器坏	13.0	4.1	5.5	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形・黒色処理	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含み、白色・黒色粒子を含む
13	土師器坏	(14.8)	5.7	7.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
14	土師器甕	(16.4)	〈7.6〉	——	外面 口縁部～頸部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子多量と白色・黒色粒子を含む
15	土師器甕	——	〈5.2〉	6.0	外面 ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
16	須恵器甕	——	〈5.7〉	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	N6/灰 白色粒子と砂粒を多く含む

第26表 ⅡH14号住居址出土遺物観察表

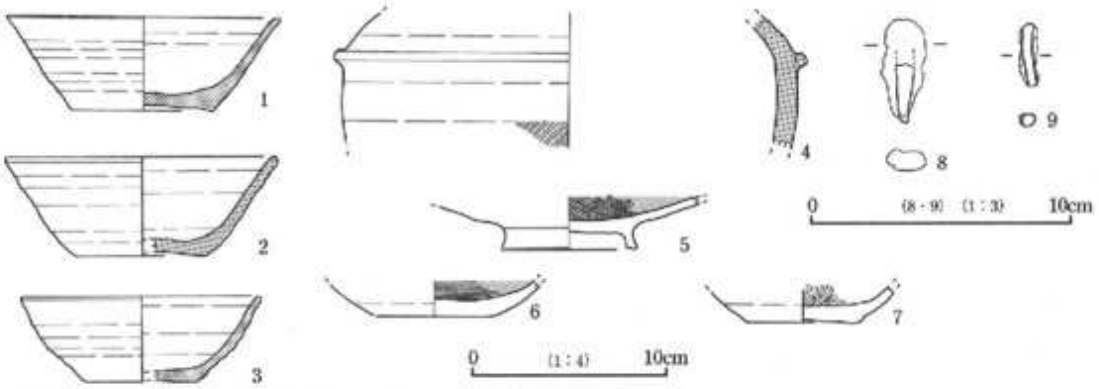
(31)ⅡH15号住居址（第61・62図、写真図版二十八）

本住居址は、調査区中央部の台地南斜面であるI－ツー13Grに位置する。残存状態は南東側半分が地形により削平されている。形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは東壁中央に造られている。規模は北壁3.04m・南壁0.4m（残存）3.00m（推定）・西壁2.65m（残存）3.00m（推定）・東壁0.54m（残存）3.34m（推定）で、壁高さは北壁中央で16.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－102°－Eを示す。住居址の床面積は推定で9.9㎡を測る。覆土は1層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は確認されなかった。ピットは11カ所確認され、規模はP1が径40cm・深さ17cm、P2が径32cm・深さ13.5cm、P3が径32cm・深さ23.5cm、P4が径18cm・深さ13cm、P5が径40cm・深さ30cm、P6が径14cm・深さ18.5cm、P7が径17cm・深さ16.5cm、P8が径20cm・深さ19cm、P9が径31cm・深さ15cm、P10が径22cm・深さ14cm、P11が径23cm・深さ23.5cmを測る。これらピットの内P9～P11は検出位置より壁外柱穴と考えられる。住居址掘り方はほぼ均一であった。カマドは東壁中央部に造られていた。残存状況は火床面と袖構築材である礫が崩れたような状態で検出された。火床面の焼土の厚さは6cmを測る。カマド掘り方は両袖部分の礫を埋め込んだピットと火床面下の掘り込みが検出できた。

出土遺物は覆土とカマド周辺より出土した。図示した遺物の出土位置は1～3と7はカマド周辺の床直、4～6は覆土中である。8と9は釘の一部分と考えられる。本址は出土遺物より9世紀前半に位置づけられる。



第61図　ⅡH15号住居址実測図



第62図　ⅡH15号住居址出土遺物実測図

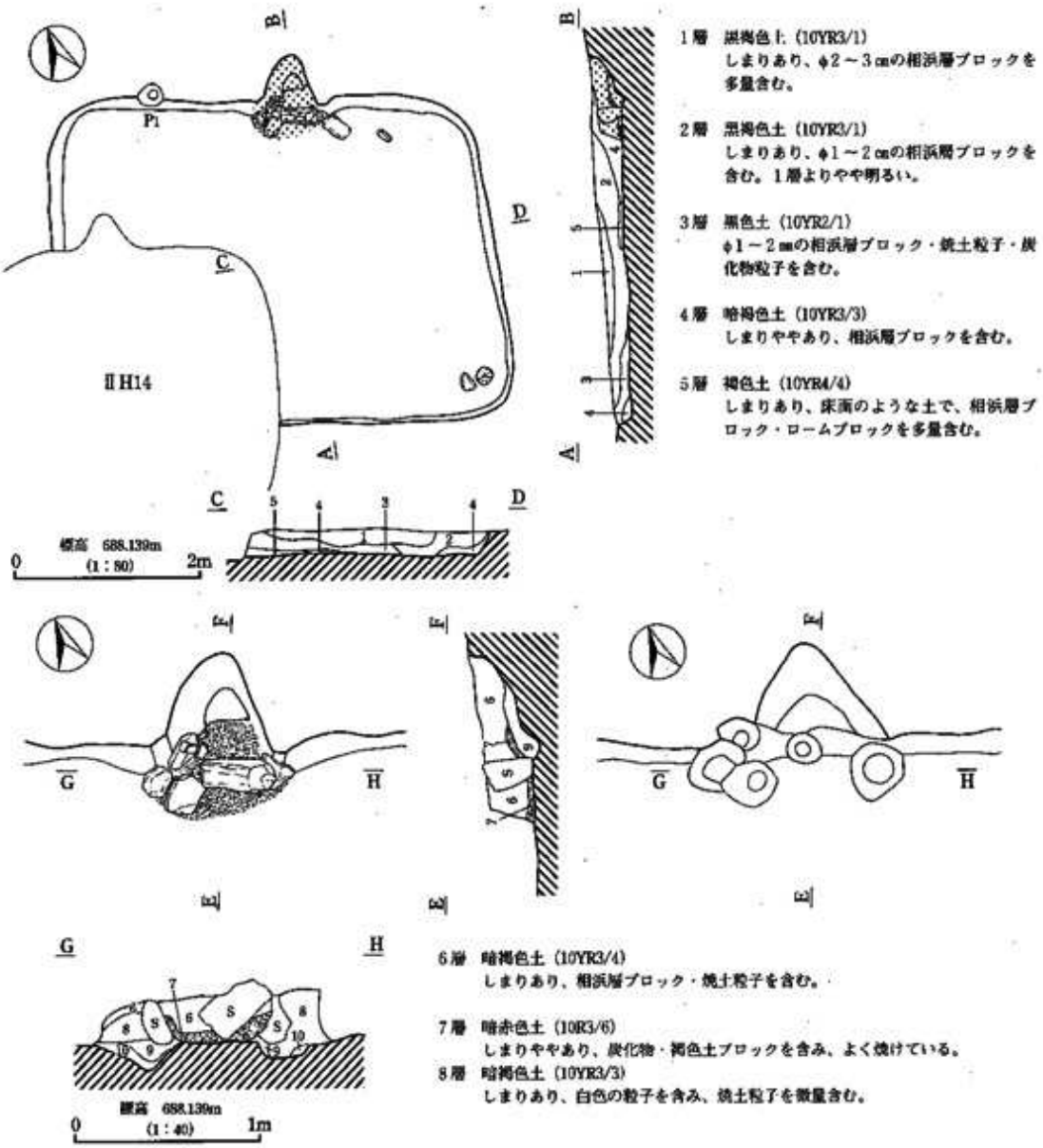
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(14.0)	5.1	(6.6)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	7.5Y7/1　灰白 径2～3㎜の噴出物を多量、白色粒子を微量含む
2	須恵器坏	(14.0)	4.8	7.2	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	N6/灰 白色粒子を多く含む
3	須恵器坏	(12.4)	4.4	(5.6)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	N6/灰 白色粒子を多く含む
4	須恵器四耳壺	――	〈6.9〉	――	外面　タタキ後、ヨコナデ・自然釉付着 内面　ナデ	N4/1　灰(内面) 黒色粒子を微量含む
5	土師器高台皿	――	〈2.7〉	7.0	外面　ロクロ成形・底部回転ヘラ切り？後、高台貼付 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子少量と砂粒多量含む
6	土師器坏	――	〈1.9〉	6.0	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形・黒色処理	7.5YR7/4　にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子を多く含む
7	土師器坏	――	〈2.0〉	6.0	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ	7.5YR8/3　浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と白色粒子多量含む

第27表　ⅡH15号住居址出土遺物観察表

(32) ⅡH17号住居址（第63・64図、写真図版二十九，三十）

本住居址は、調査区中央部台地の南斜面であるI－タ－7，I－チ－7・8Grに位置する。残存状態は南西コーナー部分がⅡH14号住居址によって削平されている他は良好である。重複遺構はⅡH14号住居址があり、新旧関係は本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央部に造られている。規模は北壁4.23m・南壁2.47m(残存)4.53m(推定)・西壁1.50m(残存)3.3m(推定)・東壁3.12mを測る。壁高さは北東コーナーで29cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－13°－Eを測る。住居址の床面積は残存で10.8㎡、推定で15.1㎡を測る。覆土は5層に分かれる。床は全体的に硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは床面で1カ所が確認され、規模はP1が径28cm・深さ32cmを測る。住居址掘り方はほぼ均一であった。



1層　黒褐色土（10YR3/1）
しまりあり、φ2～3㎝の相浜層ブロックを多量含む。

2層　黒褐色土（10YR3/1）
しまりあり、φ1～2㎝の相浜層ブロックを含む。1層よりやや明るい。

3層　黒色土（10YR2/1）
φ1～2㎜の相浜層ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む。

4層　暗褐色土（10YR3/3）
しまりややあり、相浜層ブロックを含む。

5層　褐色土（10YR4/4）
しまりあり、床面のような土で、相浜層ブロック・ロームブロックを多量含む。

6層　暗褐色土（10YR3/4）
しまりあり、相浜層ブロック・焼土粒子を含む。

7層　暗赤色土（10R3/6）
しまりややあり、炭化物・褐色土ブロックを含み、よく焼けている。

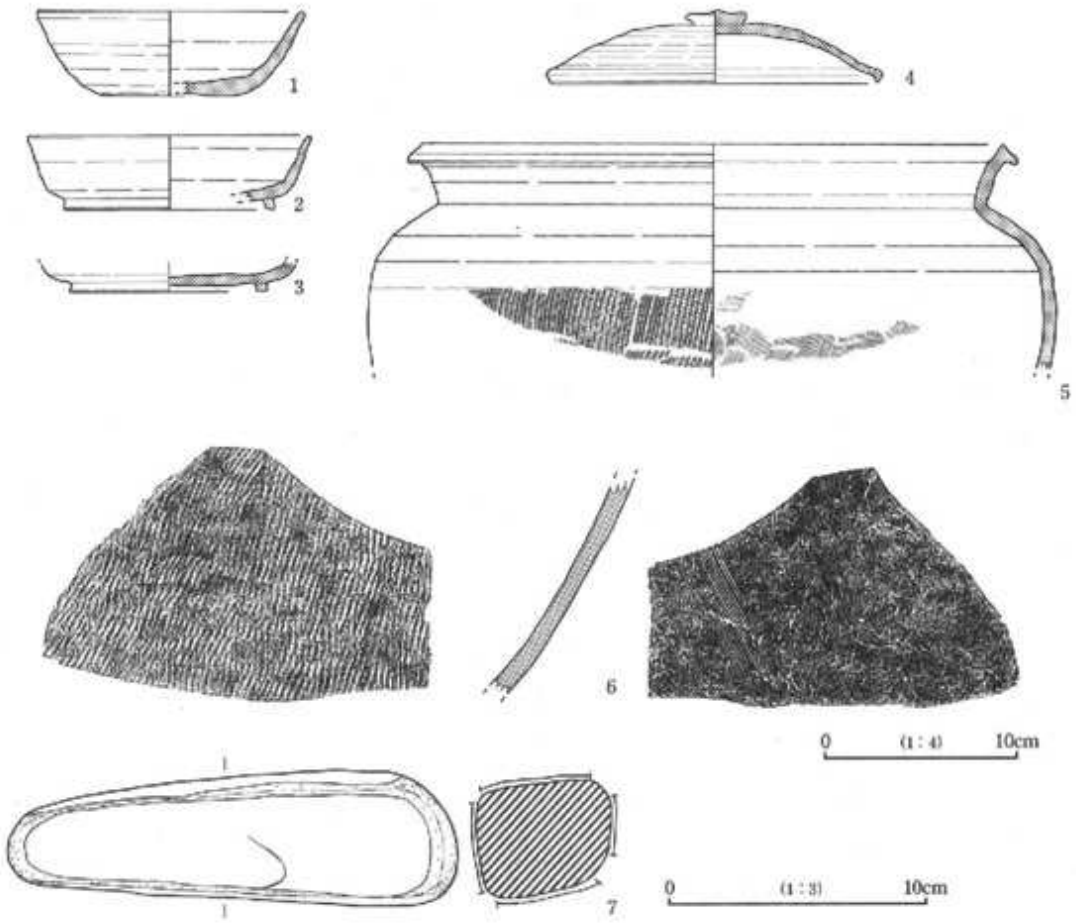
8層　暗褐色土（10YR3/3）
しまりあり、白色の粒子を含み、焼土粒子を微量含む。

9層　暗褐色土（10YR3/3）　しまりあり、大型の焼土ブロック・相浜層のブロックを含む。

10層　褐灰色土（10YR4/1）　しまりあり、相浜層ブロックを含む。

第63図　ⅡH17号住居址実測図

カマドは北壁中央部に造られている。煙道部が壁よりやや飛び出すタイプである。袖部は粘質土と礫により構築し、天井部は長さ80㎝の礫を高架状に掛けていたと考えられる。規模は煙道部が長さ87㎝・幅40㎝、右袖長さ20㎝・幅16㎝、左袖長さ43㎝・幅18㎝を測る。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは10㎝を測る。



第64図　ⅡH17号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(12.8)	4.4	(7.6)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、周辺部手持ちヘラケズリ 内面　ロクロ成形	N6/灰 径2～3mmの黒色・白色の噴出物と、白色粒子を多量含む
2	須恵器高台坏	(14.6)	4.8	(10.8)	外面　ロクロ成形・底部(調整不明)切り離し後、高台貼付 内面　ロクロ成形	2.5GY6/1　オリーブ灰 黒色の噴出物を微量と白色粒子を含む
3	須恵器坏	——	(1.5)	(10.2)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、ヘラケズリ　高台貼付 内面　ロクロ成形・磨かれている	2.5GY7/1　明オリーブ灰 白色・黒色粒子を多く含む
4	須恵器蓋	16.8	3.8	つまみ部径3.0	外面　ロクロ成形・天井部回転ヘラ切り後、つまみ部貼付 内面　ロクロ成形　火だすき痕あり	N5/灰 白色粒子を微量含む
5	須恵器甕	(30.0)	(11.5)	——	外面　口縁部ヨコナデ・胴部格子目のタタキ後、ヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ・胴部ハケメの残るナデの後、ヨコナデ	N3/暗灰(内面) 白色粒子を多く含む
6	須恵器甕	——	(16.0)	——	外面　平行タタキ目が残る 内面　ナデ後、工具使用(クシ?)	N7/灰白 白色粒子を多く含む

第28表　ⅡH17号住居址出土遺物観察表

本址の出土遺物は覆土中からと南東コーナー部分から出土した。図示した遺物の出土位置は1

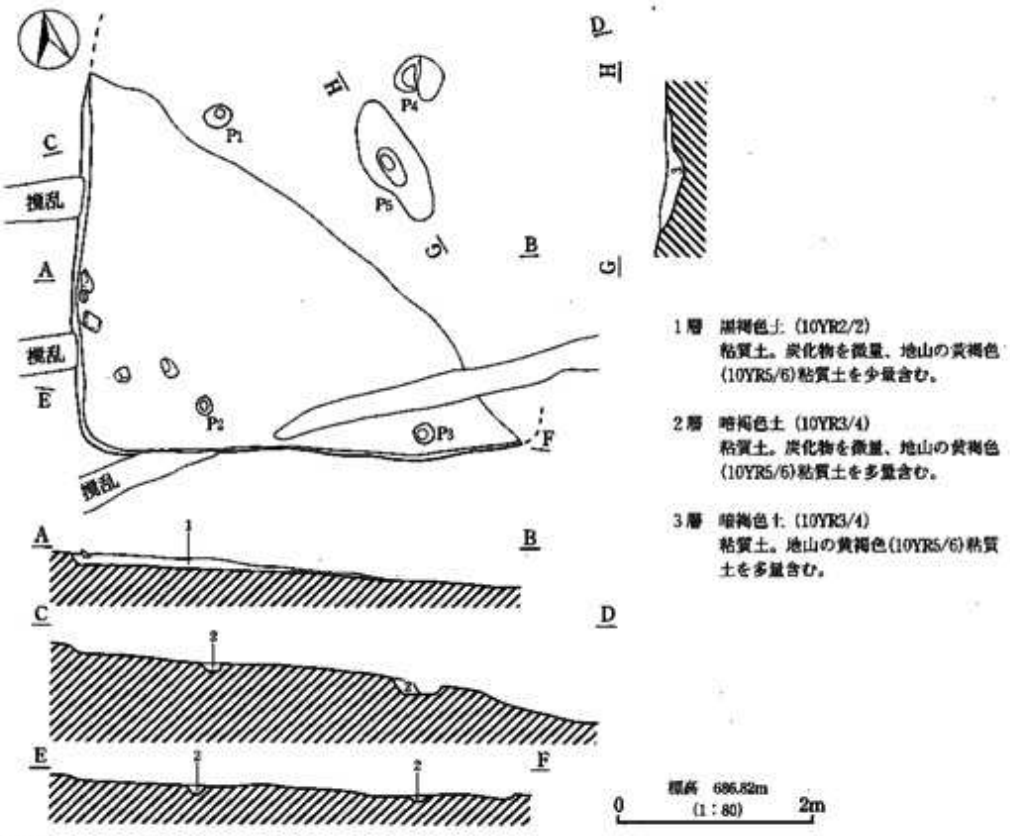
が南東コーナー、2と3がカマド左脇、5が北西コーナー、6が北東コーナー、7が覆土中である。7はすり石で、石材は輝石安山岩であった。

これらの出土遺物より本址は8世紀後半に位置づけられる。

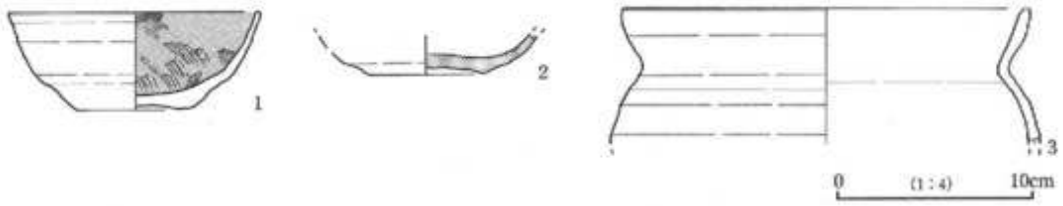
(33) ⅡH19号住居址（第65・66図、写真図版三十一①）

本住居址は、調査区中央部の台地北斜面であるE－タ－18･19、E－チ－18･19Grに位置する。残存状態は北東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は南壁4.43m（残存）･西壁3.82m（残存）で、壁高さは南壁中央で11.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－6°－Eを示す。住居址の床面積は残存で10.3㎡を測る。覆土は1層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は確認されなかった。ピットは5カ所確認され、規模はP1が径27cm･深さ23cm、P2が径18cm･深さ7cm、P3が径20cm･深さ6cm、P4が径34cm･深さ14cm、P5が径42cm･深さ20cmを測る。これらピットの内P1～P3･P5は検出位置より主柱穴と考えられる。住居址掘り方はほぼ均一であった。



第65図　ⅡH19号住居址実測図



第66図　ⅡH19号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器 坏	(13.0)	5.0	6.0	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3　にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を含み砂粒少量含む
2	須恵器(軟質) 坏	――	(2.0)	6.1	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	N3/暗灰 径1~2㎜の赤色粒子多量と白色・黒色粒子を含む
3	土師器 甕	21.0	(7.0)	――	外面　ロクロ成形 内面　口縁部ロクロ成形・胴部ナデ	7.5YR7/6　橙 径2～3㎜の赤色粒子多量と砂粒少量含む

第29表　ⅡH19号住居址出土遺物観察表

出土遺物は覆土と南西コーナー付近からまとまって出土した。図示した遺物の出土位置は1は南西コーナー、2と3はP5脇の床面から出土した。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

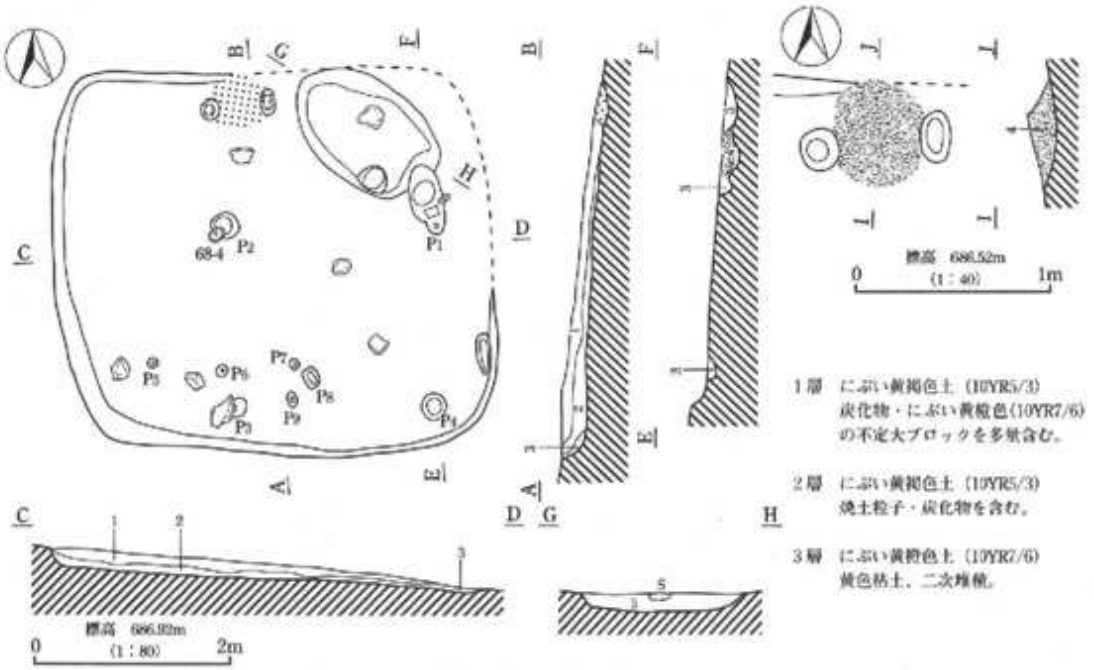
㉞ⅡH20号住居址（第67・68図、写真図版三十一②）

本住居址は、調査区中央部の台地北斜面であるE－ソー17・18、E－タ－17・18Grに位置する。残存状態は北東コーナー側が地形により削平されている。

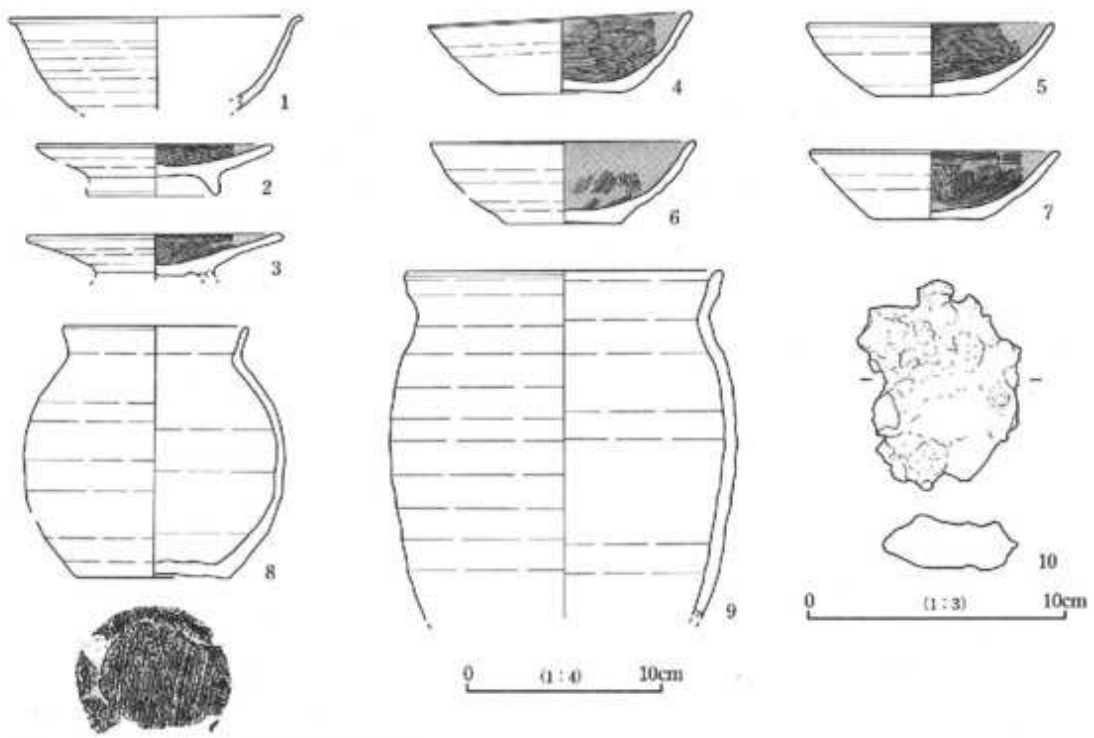
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁1.60m(残存)3.85m(推定)・南壁3.75m・西壁3.66m・東壁1.47m(残存)3.6m(推定)を測る。壁高さは南西コーナーで38cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－6°－Wを示す。住居址の床面積は推定で15.3㎡を測る。覆土は2層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は確認されなかった。ピットは9カ所確認され、規模はP1が径73cm・深さ22cm、P2が径27cm・深さ29cm、P3が径21cm・深さ42cm、P4が径26cm・深さ8cm、P5が径9cm・深さ4.5cm、P6が径13cm・深さ4.5cm、P7が径10cm・深さ10cm、P8が径22cm・深さ6.5cm、P9が径15cm・深さ6cmを測る。また、本址は北東コーナー部分に床下土坑が検出された。規模は長軸1.66m・短軸1.04mで深さ27cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

カマドは火床部と袖構築材の掘り込み跡と思われるピットのみ検出された。火床部の焼土の厚さは14cmでよく焼けており硬質化していた。

本址からの出土遺物は覆土および土坑内からおもに出土した。図示した遺物の出土位置は4がP2の脇の床面、5・7～9は土坑内、その他は覆土中の出土である。1は灰釉陶器椀である。



第67図　ⅡH20号住居址実測図



第68図　ⅡH20号住居址出土遺物実測図

2と3は土師器皿、4～7は土師器坏で内面黒色処理が施されている。8はロクロ成形の土師器小型甕で、底部は静止糸切り離しが行われている。9は土師器甕で、10は鉄滓と考えられる。

これらの出土遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

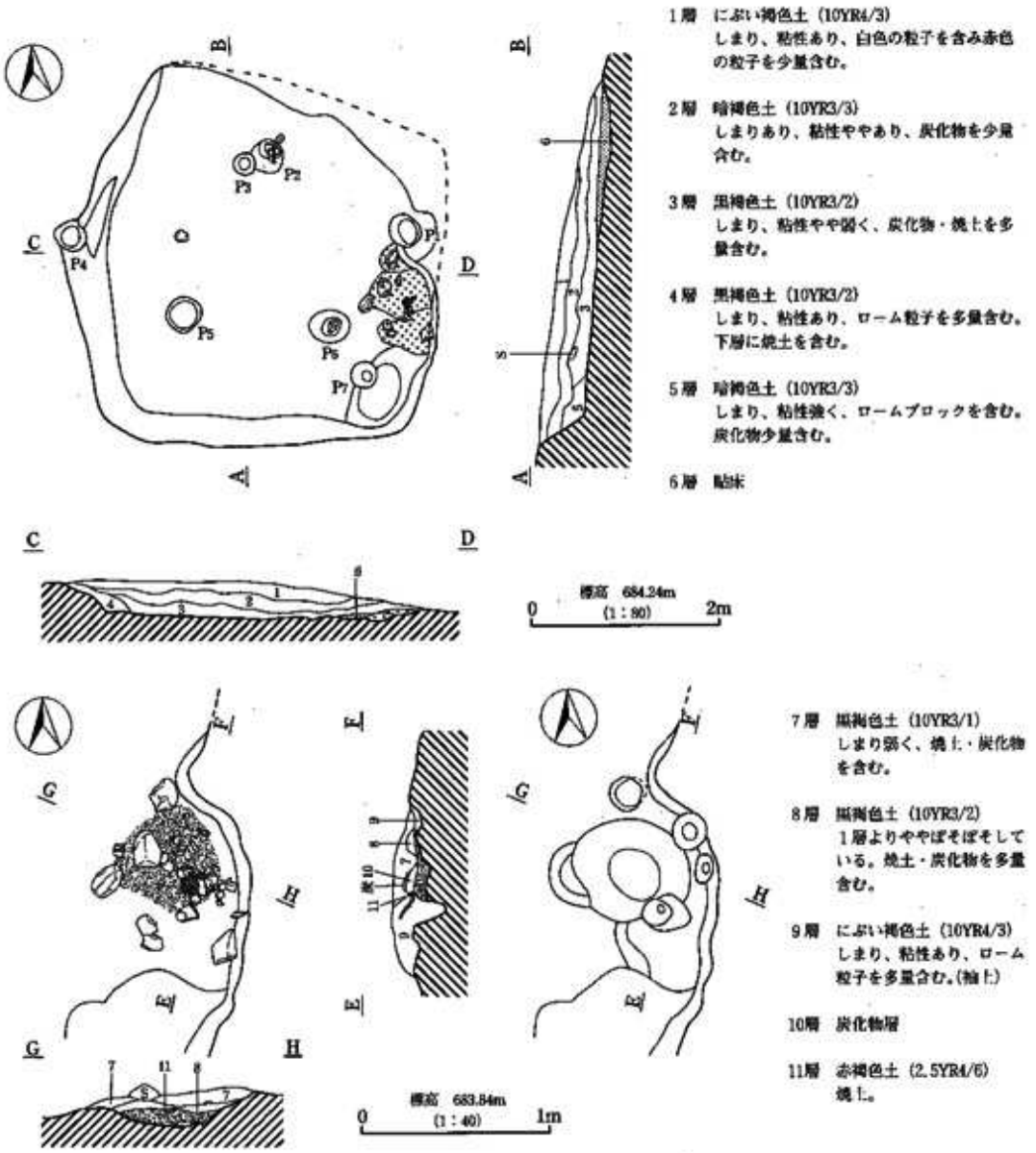
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	灰釉椀	(15.0)	〈4.8〉	——	外面 ロクロ成形・施釉 内面 ロクロ成形・施釉	2.5GY8/1 灰白 良く精練されている
2	土師器高台皿	12.1	2.7	6.6	外面 ロクロ成形・底部ナデ後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/2 明褐灰 径1～2㎜の赤色粒子微量と白色・黒色粒子を多量に含む
3	土師器高台皿	13.2	2.2	——	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラ切り？後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/2 明褐灰 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
4	土師器坏	13.5	4.1	6.6	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 煤付着 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多量に含む
5	土師器坏	12.7	3.8	3.5	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を多量に含む
6	土師器坏	(13.7)	4.2	6.0	外面 ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/4 浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子を微量に含む
7	土師器坏	(12.8)	4.5	5.5	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を多量に含む
8	土師器小形甕	(9.5)	12.9	8.0	外面 ロクロ成形・底部静止糸切り 内面 ロクロ成形	7.5YR7/3 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と微細な黒色粒子を多量に含む
9	土師器甕	(16.0)	〈17.9〉	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子を多量に含む

第30表　ⅡH20号住居址出土遺物観察表

(35)ⅡH22号住居址（第69・70図、写真図版三十二）

本住居址は、調査区中央部の台地北斜面であるF－ア－17、F－イ－16･17Grに位置する。残存状態は北東コーナー側が地形により削平されている。

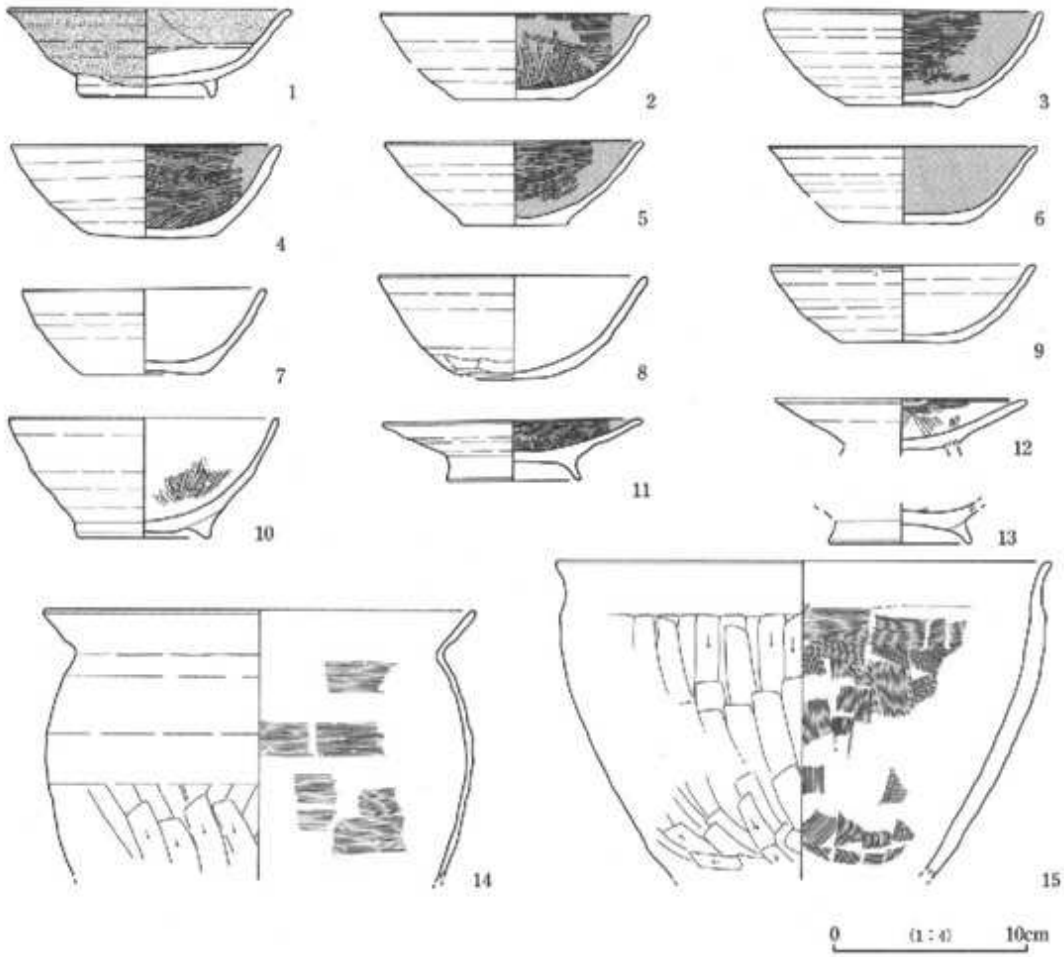
形態はほぼ方形を呈すると考えられるが、西壁中央部がやや外側に張り出し直線をなしていない。カマドは東壁南よりに造られている。規模は北壁3.12m（推定）･南壁3.18m･西壁3.85m･東壁1.73m（残存）3.06m（推定）を測る。壁高さは南西コーナーで53cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－87°－Eを示す。住居址の床面積は残存で10㎡、推定で11.1㎡を測る。覆土は5層に分れ、下層に炭化物・焼土を含む。床は全体的に軟質であり、一部に貼床が観察された。貼床は厚さ12cmを測る。壁溝は確認されなかった。ピットは7カ所確認され、規模はP1が径36cm･深さ11cm、P2が径35cm･深さ17cm、P3が径23cm･深さ10cm、P4が径35cm･深さ32cm、P5が径40cm･深さ10cm、P6が径43cm･深さ4.5cm、P7が径27cm･深さ17cmを測る。また、本址は南東コーナー部分に床下土坑が検出された。規模は長軸97cm･短軸53cmで深さ20cmを測る。住居址の掘り方は東側に凹凸がみられた。



第69図　ⅡH22号住居址実測図

カマドは東壁やや南よりに検出された。残存状態は不良で、火床部と袖構築材の掘り込み跡と思われるピットのみ検出された。火床部の焼土の厚さは10cmでよく焼けており硬質化していた。また、火床面には多くの遺物が散乱した状態で出土した。

本址からの出土遺物は覆土やカマド及び土坑内からおもに出土した。図示した遺物の出土位置は9がP2上、14･15が覆土中であり、それ以外のものはカマド及び土坑内から出土した。1は灰釉陶器椀である。内面みこみ部が非常によく磨かれている。2から9は土師器坏である。



第70図　ⅡH22号住居址出土遺物実測図

いずれもロクロ成形で、2から6は内面黒色処理が施されている。8は底部外面が手持ちヘラケズリが施されている。10は土師器椀で、11から13は土師器高台付皿である。いずれも内面が丁寧なヘラミガキが施されている。14は土師器甕であり、ロクロ成形の後胴部下半分はヘラケズリが施されている。15は土師器鉢であり底部を欠損する。外面はヘラケズリ、内面はハケ目の残るナデが施されている。

これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

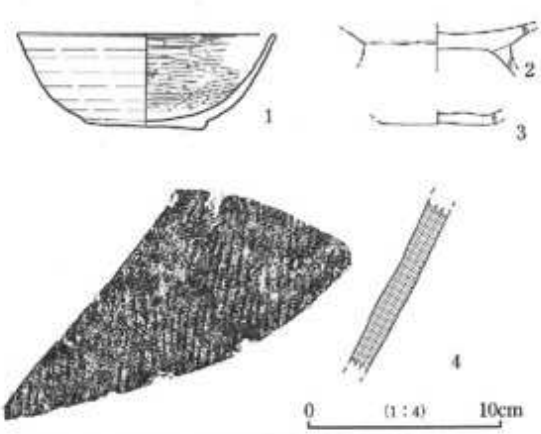
(36) Ⅱ H23号住居址（第71・72図、写真図版三十三）

本住居址は、調査区中央部の台地東斜面であるI－シー16·17Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁側に造られている。規模は北壁0.86m（残存）·南壁1.07m（残存）·西壁3.23mを測る。壁高さは南西コーナーで36cmを測る。壁は緩やかに立

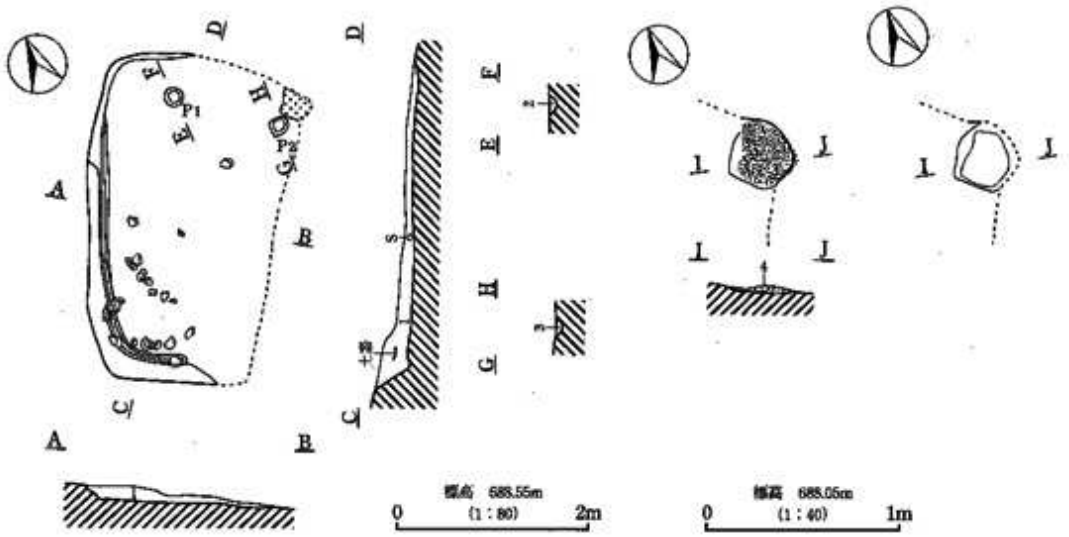
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	灰釉椀	(14.8)	4.6	(7.6)	外面 ロクロ成形・高台貼付後、ハケ塗りで施釉 内面 ロクロ成形 良く磨かれている	2.5GY8/1 灰白 径1～2㎜の黒色粒子を多く含む
2	土師器坏	(13.8)	4.4	6.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒微量含む
3	土師器坏	(14.2)	4.9	5.8	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
4	土師器坏	13.8	4.8	6.6	外面 ロクロ成形・底部ヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR5/2 灰褐 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
5	土師器坏	(13.4)	4.0	5.6	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む
6	土師器坏	(13.7)	4.0	6.0	外面 ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ 内面 ナデ 煤付着 黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒少量含む
7	土師器坏	(12.6)	4.4	6.2	外面 ロクロ成形・底部調整不明 内面 ナデ	5YR6/6 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
8	土師器坏	(13.8)	5.4	5.0	外面 ロクロ成形・底部手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多量に含む
9	土師器坏	(13.6)	4.0	(6.4)	外面 ロクロ成形・底部ヘラケズリ 内面 ロクロ成形	7.5YR6/1 褐灰 砂粒を多く含む
10	土師器椀	(13.8)	6.2	6.8	外面 ロクロ成形・底部回転手持ちヘラケズリ後、高台貼付 内面 ヘラミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒少量含む
11	土師器高台皿	13.4	3.2	7.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/3 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒少量含む
12	土師器高台皿	13.0	(2.7)	5.8 (体部分)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ	7.5YR7/3 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を少量含む
13	土師器坏	——	(2.1)	7.3	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を含み砂粒多量含む
14	土師器甕	(22.2)	(13.9)	——	外面 口縁部ヨコナデ・胴部ロクロ引きの後、ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ・胴部ハケメの残るナデ	7.5YR7/3 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子と砂粒を含む
15	土師器鉢	(25.6)	(16.3)	——	外面 口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ・胴部ハケメの残るナデ	5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多量に含む

第31表　ⅡH22号住居址出土遺物観察表



第71図　ⅡH23号住居址出土遺物実測図

ち上がる。主軸方位はN－24°－Eを示す。住居址の床面積は残存で5.3㎡を測る。覆土は1層で、下層に炭化物・焼土を含む。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と南壁の一部に確認された。断面形はU字形で、規模は幅6～10cm・深さ8㎝を測る。ピットは2カ所確認された。規模はP1が径20cm・深さ10cm、P2が径19cm・深さ10cmを測る。カマドは北壁際に検出されたが、大部分が削平されており袖等の形態は不明である。火床面は円形の掘り込みに焼土が薄く堆積していた。



1層 黒褐色土 (10YR2/3)
ローム ブロック・炭化物・焼土粒子を多量混入。

2層 黒褐色土 (10YR2/3)
焼土粒子が少量混入し、ローム粒子を多量含む。

3層 黒褐色土 (10YR2/2)
焼土ブロック・炭化物が少量混入。

4層 褐色土 (10YR4/4)
焼土。(炭化物が混入)

第72図 ⅡH23号住居址実測図

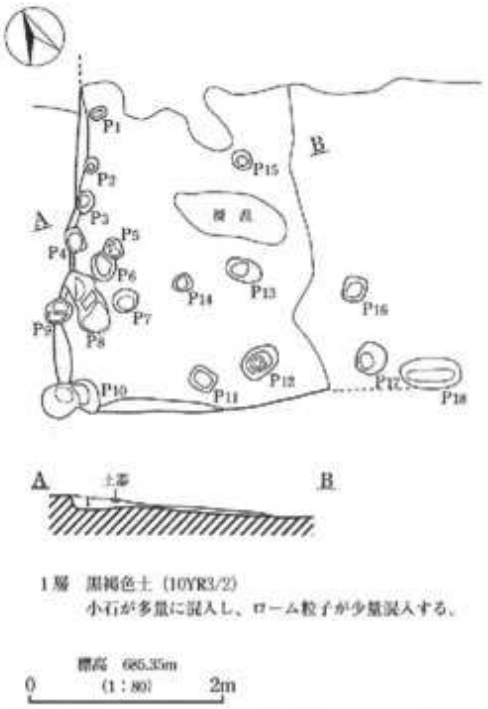
本址からの出土遺物は住居址南西コーナー脇から礫と共に多く出土した。図示した遺物の内1は南西コーナーよりの出土で、他のものは覆土中からの出土である。1と3は土師器坏、2は土師器椀、4は須恵器甕の胴部破片である。

これらの出土遺物より本址は9世紀後半以降に位置づけられると考える。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(13.2)	4.8	6.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ	5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
2	土師器椀	――	(2.4)	――	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ロクロ成形後、ナデ(接合痕あり)	5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
3	土師器坏	――	――	5.7	外面 底部回転糸切り 内面 ロクロ成形・黒色処理	2.5Y2/1 黒 径1～2㎜の赤色粒子を少量含む
4	須恵器甕	――	――	――	外面 平行タタキ 内面 ナデ	N6/灰 黒色・白色粒子を含む

第32表 ⅡH23号住居址出土遺物観察表

(37) Ⅱ H24号住居址（第73・74図、写真図版三十四①）



第73図 Ⅱ H24号住居址実測図

本住居址は、調査区中央部の東斜面であるI－チ－16･17、I－ツ－16･17Grに位置する。残存状態は住居址の南西コーナー部分しか残存していない。

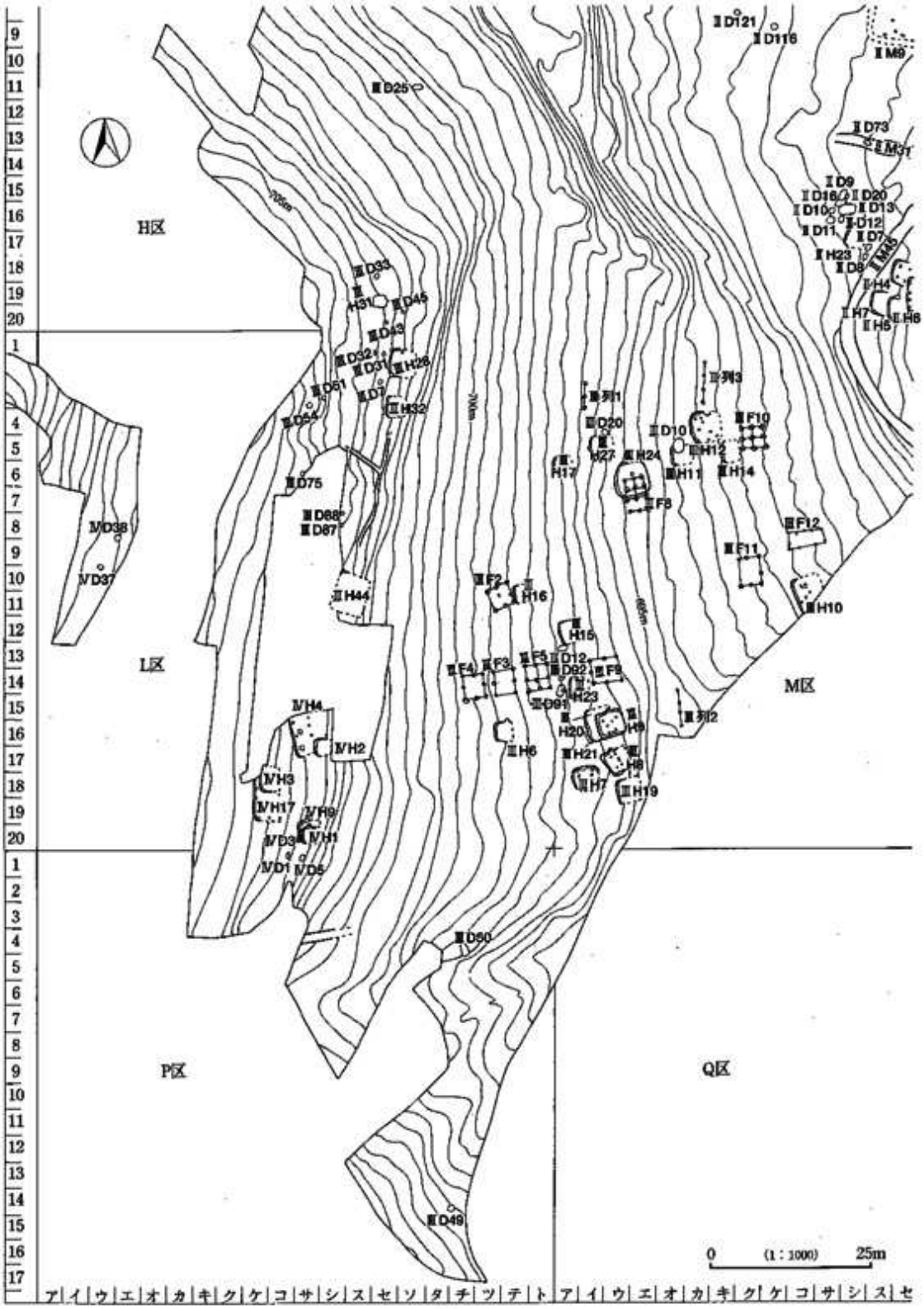
形態はほぼ方形を呈すると考えられるが、先にも述べたとおり残存部が少ない為詳細は不明である。カマドは不明である。規模は南壁2.80m(残存)・西壁3.35m(残存)を測る。壁高さはP8とP9の間で12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－21°－Eを示す。住居址の床面積は残存で6.9㎡を測る。覆土は1層であった。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは18カ所確認され、規模はP1が径18cm・深さ19cm、P2が径17cm・深さ17cm、P3が径23cm・深さ24cm、P4が径25cm・深さ25cm、P5が径20cm・深さ20cm、P6が径28cm・深さ28cm、P7が径24cm・深さ19cm、P8が径67cm・深さ29cm、P9が径27cm・深さ37cm、P10が径60cm・深さ61cm、P11が径26cm・深さ32cm、P12が径40cm・深さ40cm、P13が径36cm・深さ24cm、P14が径20cm・深さ18cm、P15が径22cm・深さ20cm、P16が径24cm・深さ16cm、P17が径32cm・深さ33cm、P18が径61cm・深さ26cmを測る。

本址からの出土遺物は覆土を中心に土師器坏片が数点出土した。図示した土師器坏は住居址中央の床直より出土した。

第74図Ⅱ H24号住居址出土遺物実測図

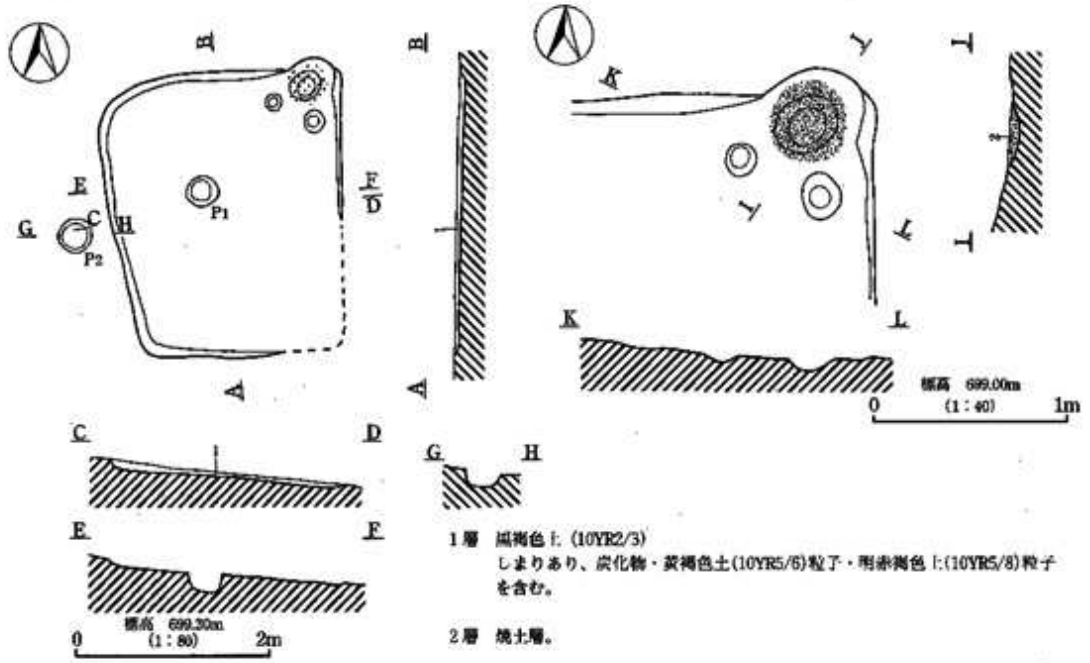
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(12.9)	3.8	6.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 調整不明・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1－2㎜の砂粒を多く含む

第33表 Ⅱ H24号住居址出土遺物観察表



第75図　Ⅲ区奈良・平安時代遺構全体図

㊳ⅢＨ６号住居址（第76・77図、写真図版三十四②）

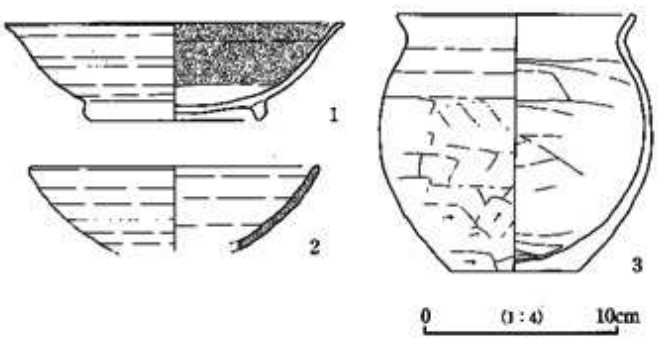


第76図　ⅢＨ６号住居址実測図

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるＬ－ツ－16.Ｌ－テ－16Grに位置する。残存状態は南東コーナーが地形の傾斜によって削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられ、カマドは住居址北東コーナーに造られている。規模は北壁2.32ｍ・南壁1.45ｍ(残存)2.03ｍ(推定)・西壁2.56ｍ(残存)・東壁1.64ｍ(残存)2.86ｍ(推定)で、壁高さは南西コーナー部分で15cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はＮ－３°－Ｗを示す。住居址の床面積は推定で6.0㎡を測る。覆土は１層で、床は住居址カマド周辺部にかけて硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは２カ所検出され、規模はＰ１が径34cm・深さ19cm、Ｐ２が径36cm・深さ19cmを測る。

カマドは住居址北東コーナーに造られていた。残存状態は不良で、袖構築材の掘り込みと考えられるピットが２カ所と火床面のみ確認できた。火床面の焼土の厚さは４cmを測り硬質化していた。



第77図　ⅢＨ６号住居址出土遺物実測図

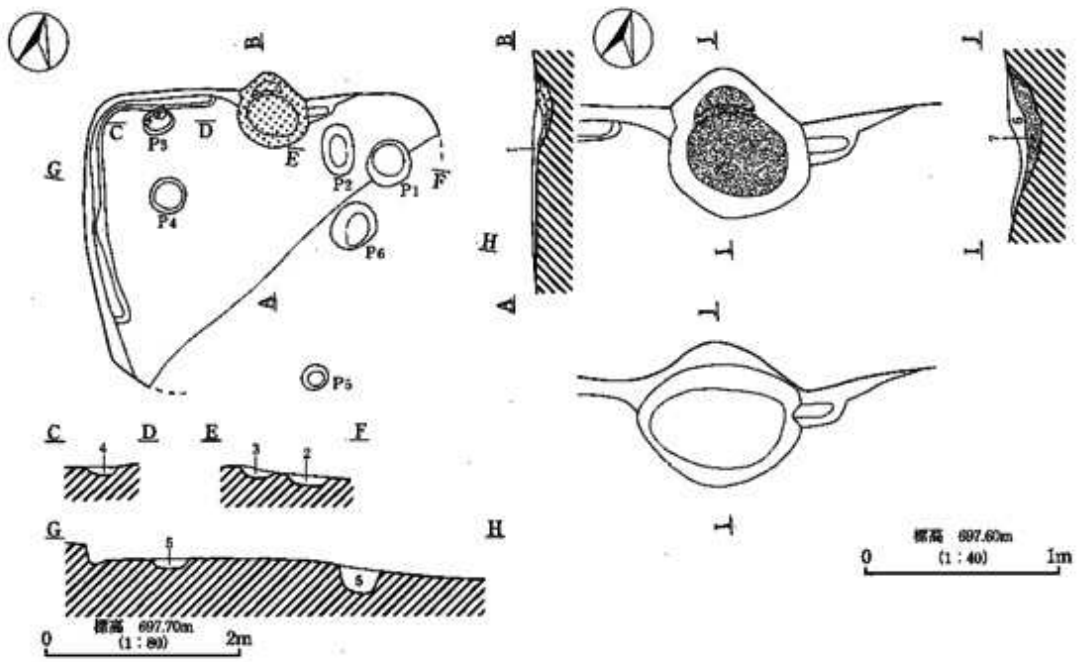
出土遺物は覆土中からのものが殆どで、図示した遺物の出土位置もすべて覆土中である。１は灰釉陶器椀である。内面がよく磨かれ何らかの転用の結果とも考えられる。２は須

恵器坏で、3は土師器小型甕である。よってこれらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	灰釉椀	(17.4)	5.0	(9.4)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付・施釉 内面 ロクロ成形 良く磨かれている	7.5Y8/2 灰白 良く精錬されている
2	土師器坏	(15.0)	〈4.3〉	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR5/1 褐灰 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
3	土師器小型甕	(12.2)	13.3	(6.4)	外面 ロクロ成形・胴部中央ヘラナデ後、胴部下半～底部ヘラケズリ 内面 ロクロ成形・胴部～底部ヘラナデ	7.5YR5/2 灰褐 径2～3㎜の赤色粒子を多く含む

第34表 ⅢH6号住居址出土遺物観察表

(39)ⅢH7号住居址（第78・79図、写真図版三十五）



1層 黒褐色土 (10YR3/2) しまりあり、炭化物片・赤褐色土粒子・黄褐色土粒子を含む。
2層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物片・黄褐色土粒子を含む。
3層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物片・黄褐色土粒子・焼土を含む。
4層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物片・焼土を多量に含む。
5層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物片・黄褐色土粒子を含む。
6層 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘質土。炭化物片・焼土粒子を多量に含む。
7層 赤褐色土 (2.5YR4/6) 火床面。

第78図 ⅢH7号住居址実測図

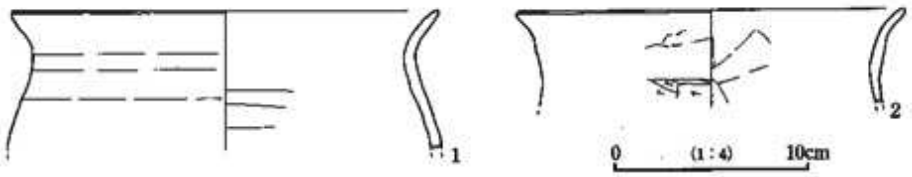
本住居址は、調査区上部台地の南よりであるM－ア－17･18、M－イ－17･18Grに位置する。残存状態は南東側半分を地形によって削平されており、住居址全体の1/2ほどの検出に止まった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.23ｍ・南壁0.32ｍ（残存）

2.9m(推定)・西壁2.8m・東壁0.36m(残存)2.74m(推定)で、壁高さは北西コーナー付近で19cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－14°－Wを示す。住居址の床面積は残存部で1.3㎡・推定で9.4㎡を測る。覆土は1層であった。床はカマド周辺が硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と北壁西側で確認された。規模は幅12～30cm・深さ6.5cmで、断面形はU字形であった。ピットは6カ所確認された。規模はP1が径47cm・深さ11cm、P2が径53cm・深さ12cm、P3が径32cm・深さ9cm、P4が径37cm・深さ7cm、P5が径25cm・深さ6cm、P6が径50cm・深さ28cmを測る。

カマドは北壁中央部に造られていたが、火床面のみしか残存していなかった。火床部はよく焼けており焼土が硬質化していた。焼土の厚みは9cmを測る。袖部・天井部の形態は不明である。

出土遺物は覆土中からのものが殆どで、図示した遺物の出土位置もいずれも覆土である。よって本址の所産時期は不確実であるが9世紀後半以降と考えられる。



第79図　ⅢH7号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器甕	(22.0)	〈7.2〉	――	外面　ロクロ成形・頸部にカキメ 内面　ロクロ成形・胴部ナデ	7.5YR7/4　にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子と砂粒を含む
2	土師器甕	(20.0)	〈5.0〉	――	外面　口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	2.5YR6/8　橙 黒色の砂粒を含む

第35表　ⅢH7号住居址出土遺物観察表

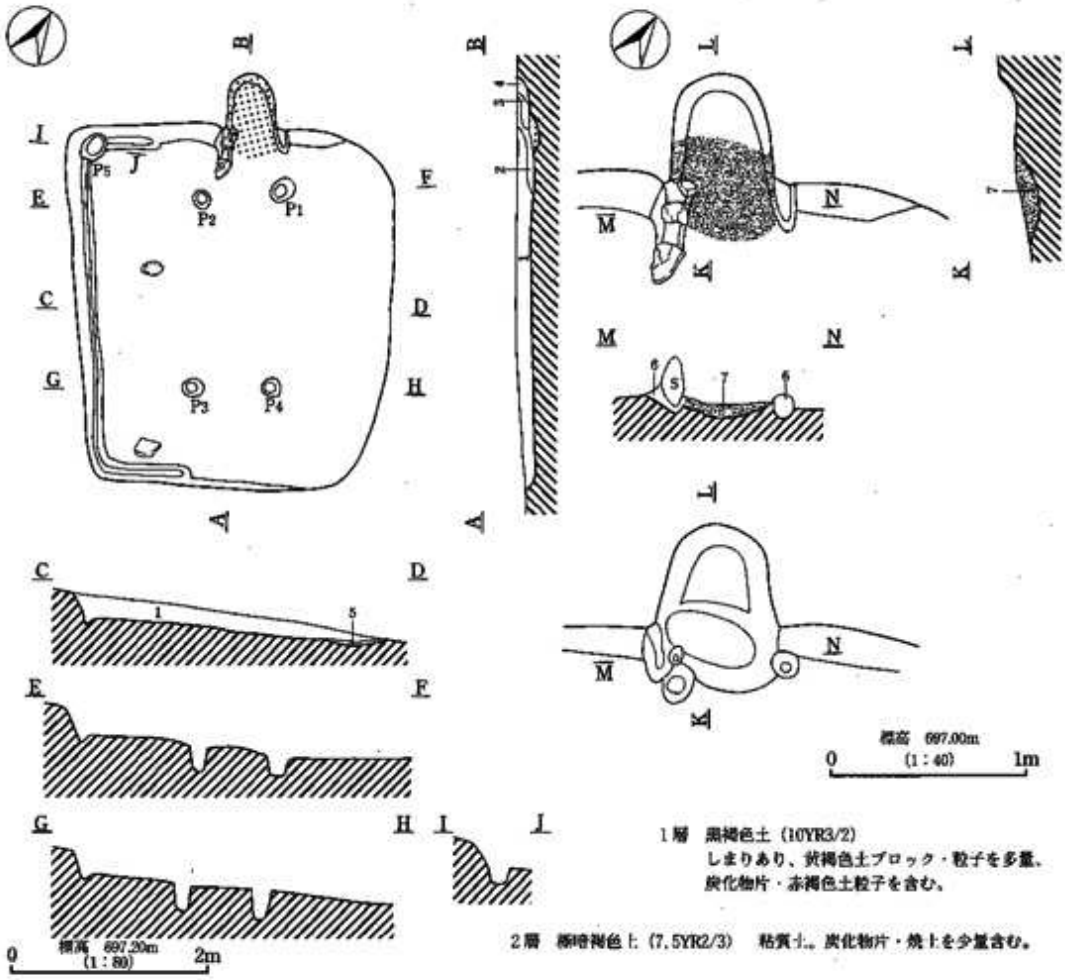
(40)ⅢH8号住居址（第80図、写真図版三十六）

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM－イ－17・M－ウ－17・18Grに位置する。残存状態は東壁が地形の傾斜のために削平されている他は良好であった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.17m・南壁2.5m・西壁3.56m・東壁3.25m(推定)で、壁高さは北西コーナー付近で28cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－32°－Wを示す。住居址床面積は残存部で10.0㎡を測る。覆土は1層のみである。床は全体に軟質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁の全体と北壁と南壁の一部に確認された。規模は幅16～25cm・深さ8cmを測り、断面形はU字形である。ピットは5カ所検出され、規模はP1が径26cm・深さ23cm、P2が径20cm・深さ26cm、P3が径20

cm・深さ26cm、P4が径20cm・深さ36cm、P5が径28cm・深さ18cmを測る。検出位置よりP1～P4までが住居址の主柱穴と考えられる。カマドは北壁中央に検出された。形態は煙道部が住居址壁よりも大きく飛び出すタイプのものである。袖は粘質土と礫によって造られていた。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは9cmを測る。また、掘り方時に袖部において構築礫等を設置したと考えられるピットが検出された。

本址からの出土遺物は土師器坏(内面黒色処理)・甕等の破片が出土したが図示可能なものはなく、時期も不明である。



1層 黒褐色土 (10YR3/2)
しまりあり、黄褐色土ブロック・粒子を多量、炭化物片・赤褐色土粒子を含む。

2層 暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘質土。炭化物片・焼土を少量含む。

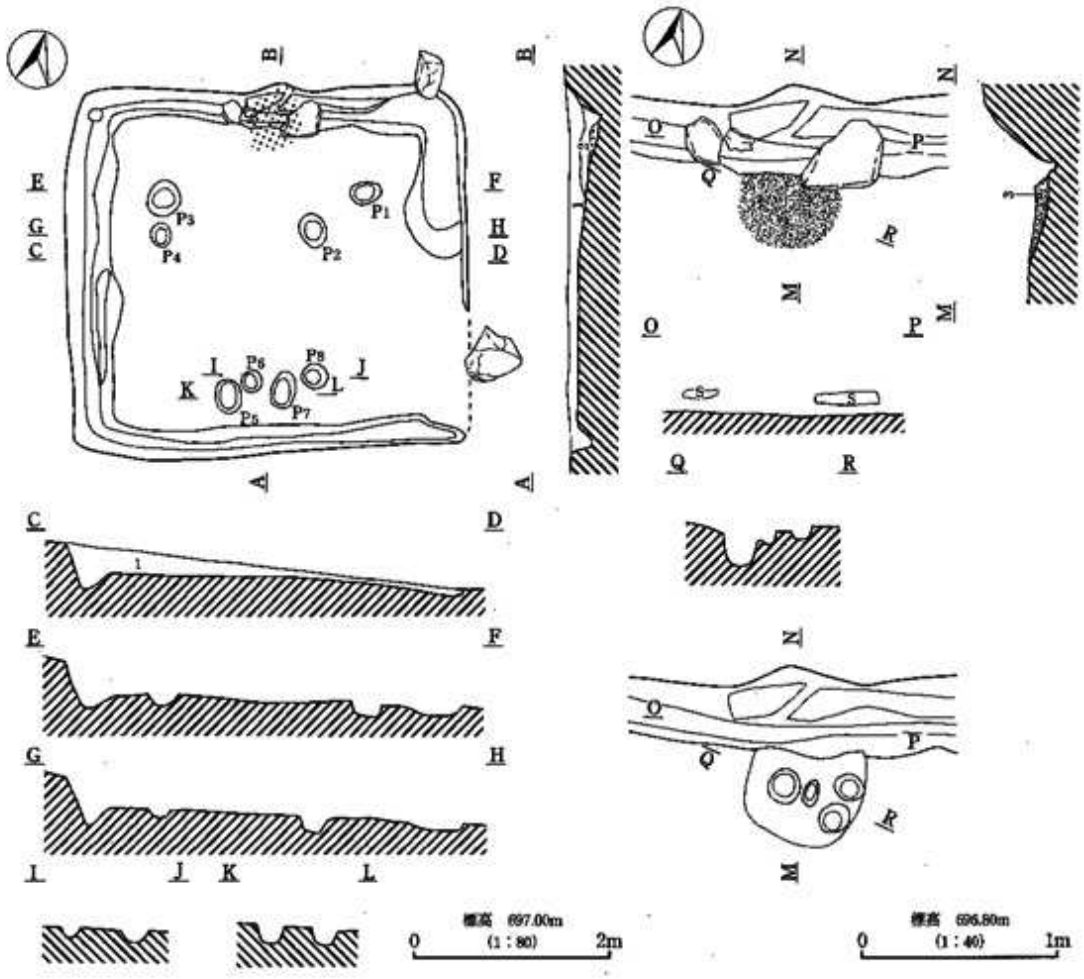
3層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土ブロック層。
4層 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物片・焼土粒子を含む。
5層 黒褐色土 (10YR3/2) 黄褐色土ブロック・粒子を極めて多量に含む。
6層 灰褐色土 (7.5YR4/2) 砂を含む。
7層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土層

第80図 ⅢH8号住居址実測図

(41)ⅢＨ９号住居址（第81・82図、写真図版三十七）

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるＭ－イ－15･16･Ｍ－ウ－15･16Grに位置する。残存状態は東壁の一部が地形の傾斜のために削平されている他は良好であった。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁3.75ｍ･南壁4.02ｍ･西壁3.55ｍ･東壁2.24ｍ(残存)3.48ｍ(推定)で、壁高さは北西コーナー付近で45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はＮ－16°－Ｗを示す。住居址床面積は10.3㎡を測る。覆土は１層のみである。床は全体に軟質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は住居址全体に巡っていたと考えられる。特に東壁側の溝幅は非常に広い。壁溝規模は幅16～50cm･深さ20cmで、断面形はＵ字形を示す。ピットは８カ所検出された。規模はＰ１が径32cm･深さ16cm、Ｐ２

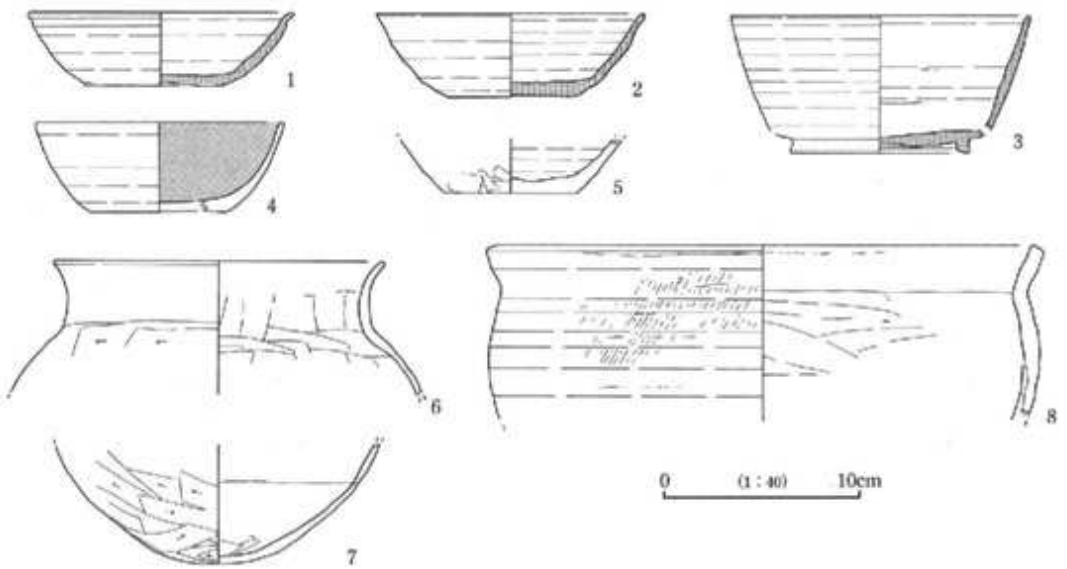


1層　黒褐色土（10YR3/2）　黄褐色土ブロック・粒子を多量、炭化物片・赤褐色土粒子を含む。
2層　極暗褐色土（7.5YR2/3）　粘質土。炭化物片・焼土を多量に含む。
3層　焼土層

第81図　ⅢＨ９号住居址実測図

が径34cm・深さ19cm、P3が径38cm・深さ11cm、P4が径25cm・深さ8cm、P5が径34cm・深さ20cm、P6が径20cm・深さ12cm、P7が径36cm・深さ19cm、P8が径26cm・深さ14cmを測る。

カマドは北壁中央に検出された。形態は煙道部が住居址壁よりもあまり飛び出さないタイプのものである。袖は粘質土と礫によって造られていたと考えられるが、扁平な礫のみ袖部で検出された。火床面はよく焼けており、焼土の厚みは7cmを測る。また、掘り方時に火床面下において4カ所のピットが検出された。



第82図　ⅢH9号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	13.7	3.8	7.1	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形　※火だすき痕あり	5Y6/1　灰 径2～3mmの黒色粒子微量と白色粒子多量含む
2	須恵器坏	(13.8)	4.3	6.6	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形　※内外面火だすき痕あり	7.5Y5/1　灰 径2～3mmの黒色粒子多量と砂粒微量含む
3	須恵器高台坏	(15.4)	〈7.1〉	9.2	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、回転ヘラケズリ・高台貼付 内面　ロクロ成形	7.5Y6/1　灰 径1～2mmの黒色粒子と砂粒を少量含む
4	土師器坏	(12.8)	4.6	(7.0)	外面　ロクロ成形・底部調整不明 内面　調整不明・黒色処理	5YR7/4　にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子を少量含む
5	土師器小型壺	――	〈2.8〉	(6.6)	外面　底部および底部周縁手持ちヘラケズリ 内面　ロクロ成形	7.5YR7/4　にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
6	土師器甕	(17.1)	〈6.9〉	――	外面　口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ後、胴部ヘラナデ ※7と同一個体の可能性	5YR7/6　橙 径1～2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
7	土師器甕	――	6.2	――	外面　ヘラケズリ 内面　ヘラナデ ※6と同一個体の可能性	5YR7/6　橙 径1～2mmの赤色粒子微量と砂粒多量含む
8	土師器鉢	(28.8)	〈8.9〉	――	外面　ハケメ調整後、ヨコナデ（ロクロ使用） 内面　口縁部ヨコナデ（ロクロ使用）後、胴部ナデ	7.5YR7/4　にぶい橙 径1～2mmの赤色粒子を微量含む

第36表　ⅢH9号住居址出土遺物観察表

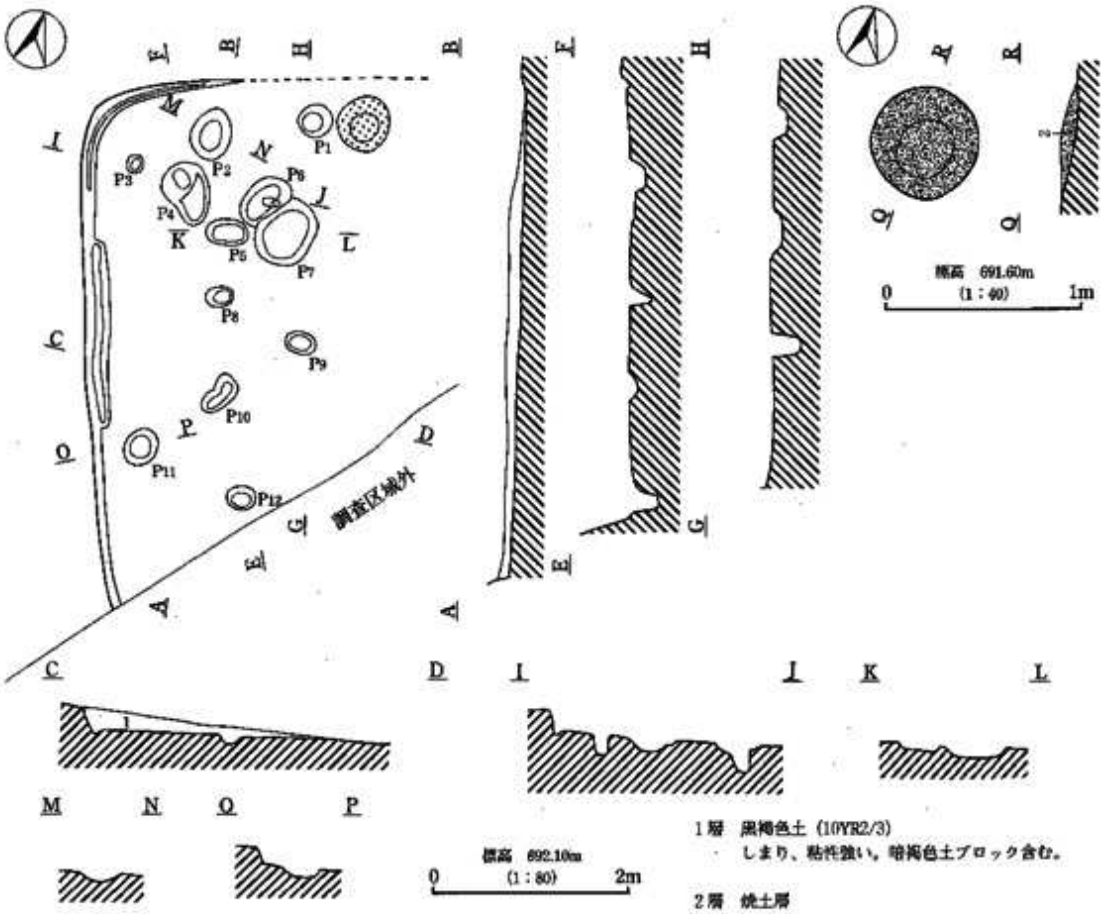
本址からの出土遺物は覆土を中心にカマド・壁溝内から出土した。図示した遺物の出土位置は1が南西コーナー部、3・6・7がカマド内、その他のものは覆土及び壁溝内よりである。1と2は須恵器坏、3は須恵器高台付坏、4は土師器坏、5～7は土師器甕で、6と7は同一個体の可能性がある。8は土師器鉢である。

これらの遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

(42)ⅢH10号住居址（第83・84図、写真図版三十八①）

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM－コ－10·11Grに位置する。残存状態は東側が自然の地形により削平され、南側は調査区域外であった。

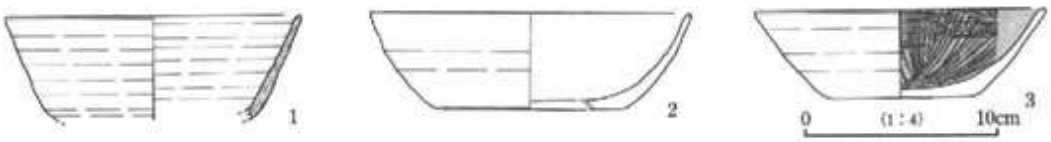
形態は方形を呈すると考えられる。カマドは火床面的な部分が北壁側より検出された。規模は北壁1.52m(残存)·西壁5.17m(残存)で、壁高さは西壁中央部で24cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－18°－Wを示す。住居址の床面積は残存で11.8㎡を測る。覆土は1層の



第83図　ⅢH10号住居址実測図

みで、床は軟質であった。壁溝は北西コーナー部分と西壁中央部に確認された。規模は幅8～25cm・深さ5cmを測る。ピットは12カ所検出され、規模はP1が径34cm・深さ13.5cm、P2が径55cm・深さ9cm、P3が径20cm・深さ21cm、P4が径66cm・深さ17cm、P5が径42cm・深さ6cm、P6が径60cm・深さ29cm、P7が径71cm・深さ12.5cm、P8が径28cm・深さ21cm、P9が径31cm・深さ30cm、P10が径45cm・深さ11cm、P11が径37cm・深さ6cm、P12が径30cm・深さ26cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一な深さであった。カマドは北壁よりに火床面的な焼土が確認された。焼土は硬質化しており、厚さは7cmを測る。

出土遺物は覆土中からの出土がほとんどであり、図示した遺物も覆土中からの出土である。1は須恵器坏、2と3は土師器坏で、3は内面黒色処理されている。よって本址はこれらの遺物より不確実ではあるがおおよそ9世紀前半に位置づけられる。



第84図　ⅢH10号住居址出土遺物実測図

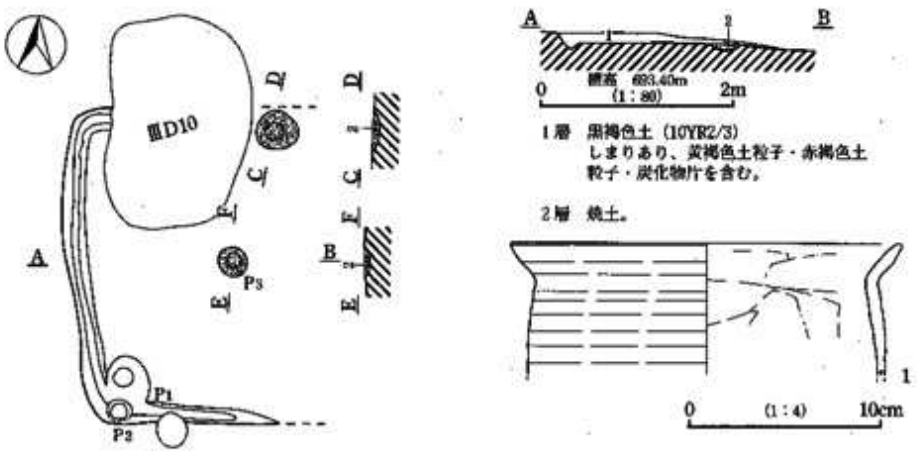
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(15.2)	(5.4)	――	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、高台貼付 ※自然釉付着 内面　ロクロ成形	N6/灰 黒色粒子を微量含む
2	土師器坏	(16.6)	5.0	(9.8)	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、手持ヘラケズリ 内面　ナデ後、黒色処理	2.5YR6/8　橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
3	土師器坏	(15.0)	4.5	(7.8)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り？ 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR8/4　浅黄橙 径2～3㎜の赤色粒子微量と砂粒を含む

第37表　ⅢH10号住居址出土遺物観察表

(43)ⅢH11号住居址（第85図、写真図版三十八②）

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM－オ－5・6・M－カ－5・6Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平されており、また重複するⅢD10号土坑によって北壁が壊されている。重複遺構はⅢD10号土坑で本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁側と住居址中央部に火床部的な焼土が確認されている。規模は北壁0.38m（残存）・南壁1.96m（残存）・西壁3.05mで、壁高さは南西コーナーで14cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－9°－Wを示す。住居址の床面積は残存で4.6㎡を測る。覆土は1層のみであった。床は硬質であり、地山を踏み固めた様な状態であった。壁溝は北壁と西壁・南壁で確認された。規模は幅14～24cm・深さ5cmで、断面の形態はU字形である。ピットは3カ所確認され、規模はP1が径43cm・深さ14cm、P2が径26cm・深さ



第85図　ⅢH11号住居址実測図

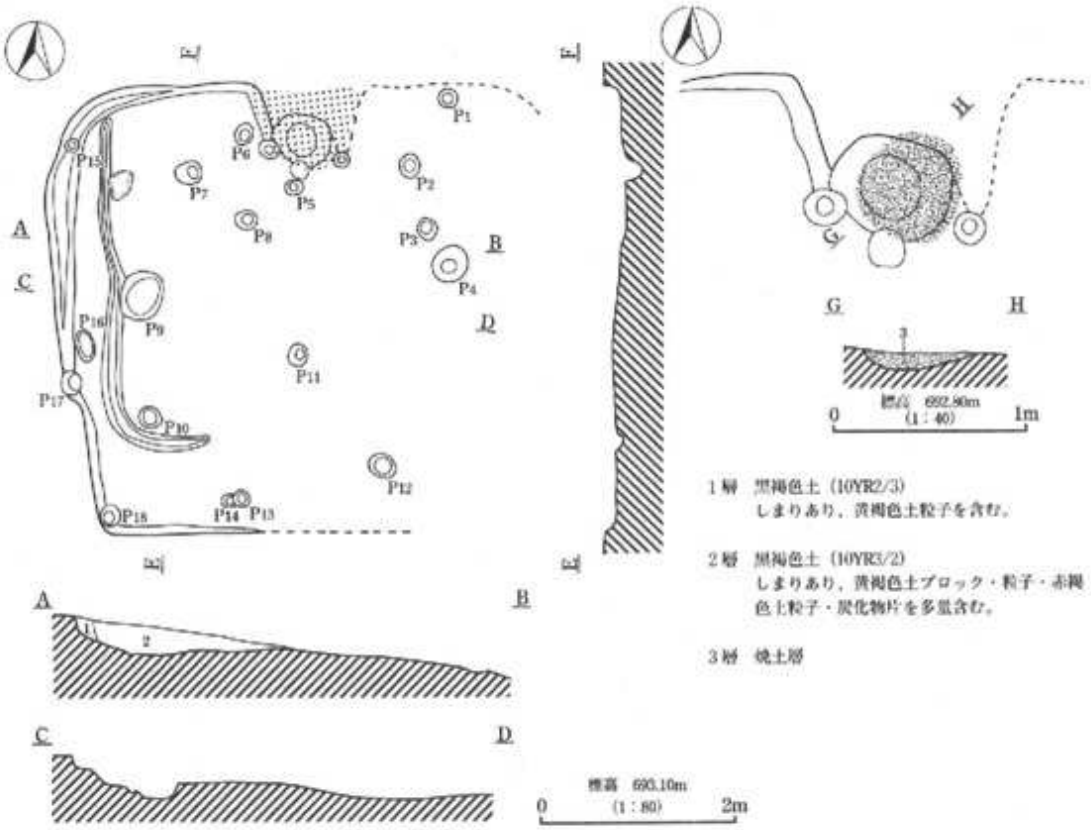
13cm、P3が径30cm・深さ3cmを測る。カマドは北壁際に火床部らしき焼土範囲を確認した。掘り込み規模は径44cm・深さ16cmで、焼土の厚みは6cm程で硬質化していた。

出土遺物は覆土中からであり極少量であった。図示した土師器甕も覆土中からの出土である。1は土師器甕で口径推定20.2cmであり、成形は内外面ロクロ成形である。色調は7.5YR7/4にぶい橙で、胎土は径1～2mmの赤色粒子を含む。本址の所産時期は不明である。

(44)ⅢH12号住居址（第86・87図、写真図版三十九①）

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM－カー4・5Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、西側半分が「コ」の字状に残るのみであった。

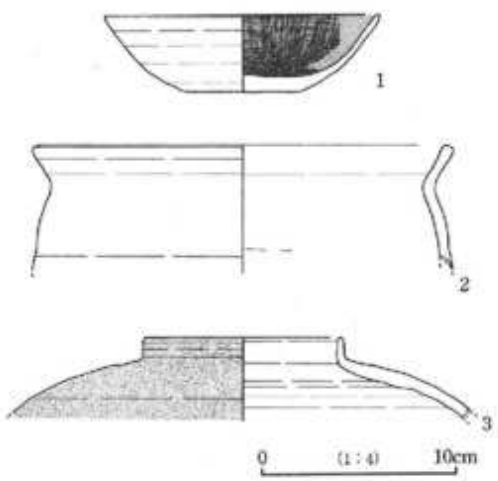
形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られていた。規模は北壁1.80m（残存）・南壁1.66m（残存）・西壁4.42mで、壁高さは北東コーナー付近で30cmを測る。壁はなだらかに立ち上がる。主軸方位はN－3°－Wを示す。住居址の床面積は推定で20.6㎡・残存で8.4㎡を測る。覆土は2層で、床は硬質であるが地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と南西コーナーに検出された。規模は幅8～20cm・深さ8cmで、断面形はU字形を呈する。なお本址の壁溝は南西コーナー部分が壁に沿わず、住居址の内側を巡り間仕切り溝的な様相を示す。このことは或いは本址の拡張による結果とも考えられる。ピットは18カ所検出された。規模はP1が径20cm・深さ13cm、P2が径24cm・深さ11cm、P3が径23cm・深さ8cm、P4が径40cm・深さ16cm、P5が径19cm・深さ13cm、P6が径22cm・深さ11cm、P7が径26cm・深さ18cm、P8が径24cm・深さ13cm、P9が径52cm・深さ14cm、P10が径22cm・深さ18cm、P11が径23cm・深さ10cm、P12が径27cm・深さ16cm、P13が径17cm・深さ8cm、P14が径14cm・深さ7cm、P15が径12cm・深さ15cm、P16が径33cm・深さ31cm、P17が径24cm・深さ16cm、P18が径20cm・深さ19cmを測る。これらピットの内P2・7・10・12が



第86図　ⅢH12号住居址実測図

主柱穴と考えられる。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

カマドは北壁中央部で検出された。主軸方位はN－5°－Wを測る。残存状態は左袖の一部と火床面のみ確認できた。袖の形態は粘質土によるもので、火床面はよく焼けており、焼土の厚みは8cmを測る。また、カマド掘り方時に火床面の両脇より袖構築材を立てたと思われるピットが2カ所検出された。



第87図　ⅢH12号住居址出土遺物実測図

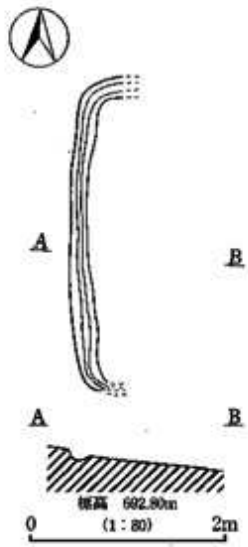
出土遺物は覆土を中心に出土し、図示した遺物もすべて覆土中からの出土である。1は土師器坏で内面黒色処理が施されている。2は土師器甕であり、3は灰釉陶器短頸壺である。

これらの出土遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(14.2)	4.0	(6.2)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
2	土師器甕	(21.6)	〈6.5〉	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
3	灰釉短頸壺	(10.4)	〈4.3〉	——	外面 ロクロ成形 ※胴部に施釉 内面 ロクロ成形	7.5Y7/1 灰白 良く精錬されているが部分的に小石含む

第38表　ⅢH12号住居址出土遺物観察表

(45)ⅢH14号住居址（第88図、写真図版三十九②）



第88図　ⅢH14号住居址実測図

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM－キ－5．6Grに位置する。残存状態は東側の殆どが地形により削平されおり、残存部は西壁のみであった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁0.42m（残存）・南壁0.20m（残存）・西壁2.98mで、壁高さは南西コーナーより少し北で10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－6°－Eを示す。住居址の床面積は計測不能である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は西壁に確認され、規模は10～26cm・深さ6cmを測る。出土遺物は全くなく、本址の帰属時期も不明である。

(46)ⅢH15号住居址（第89・90図、写真図版四十①）

本住居址は、調査区上部台地の中央部であるM－ア－12・13Grに位置する。残存状態は東側が地形の傾斜により削平されている。重複遺構はⅢD12号土坑であり新旧関係は本址の方が古い。

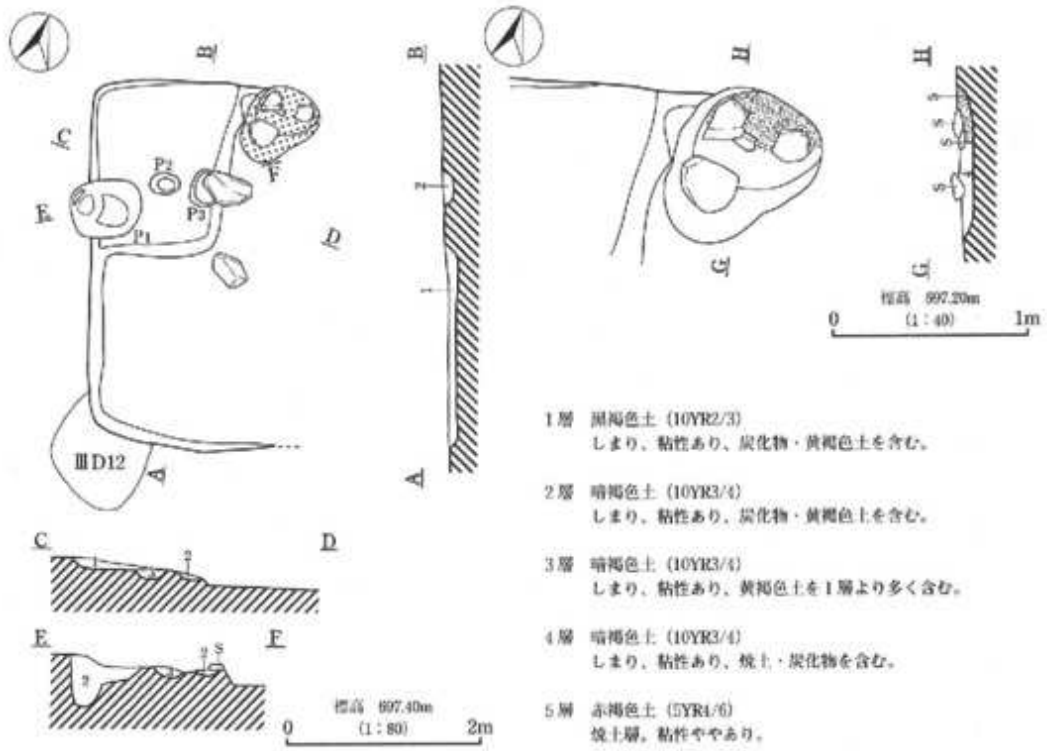
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北壁に造られている。規模は北壁1.75m（残存）・南壁1.88m（残存）・西壁3.42mで、壁高さは西壁中央で24.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－19°－Wを示す。住居址の床面積は残存で6.2㎡を測る。覆土は3層に分かれる。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。

ピットは床面で3カ所が確認された。規模はP1が径72cm・深さ57cm、P2が径30cm・深さ10cm、P3が径40cm・深さ6cmを測る。また本址は北西コーナーに一段高くなったテラス状の施設が確認された。床面との比高差は13cmを測る。住居址の掘り方は均一であった。

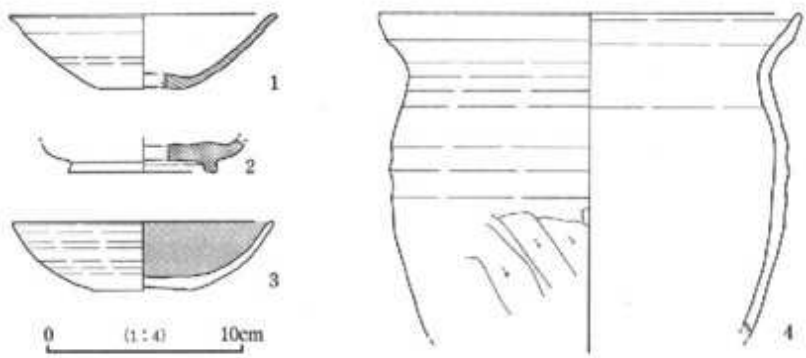
カマドは北壁際に造られている。残存状態は火床部のみで、カマド周辺には人頭大の礫が散乱していた。焼土はよく焼けており厚み7㎝を測る。

本址の出土遺物は覆土中からの出土が殆どで、図示した遺物の出土位置は1と3がカマド内でそのほかは覆土中である。1は須恵器坏、2は須恵器高台坏であるが口縁部から体部を欠損する。3は土師器坏でロクロ成形で内面は黒色処理が施されている。4は土師器甕でいわゆるロクロ甕の範疇に含まれる。口縁部から胴部はロクロ成形、胴部下半はヘラケズリを施す。

これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。



第89図　ⅢH15号住居址実測図

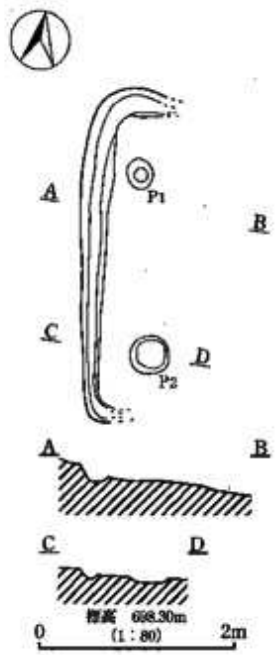


第90図　ⅢH15号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(13.8)	3.8	(4.4)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5Y6/1 灰 径1～2㎜の黒色粒子と砂粒を含む
2	須恵器高台坏	――	〈1.8〉	(4.6)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ロクロ成形	7.5Y5/1 灰 径1～2㎜の黒色粒子を多く含む
3	土師器坏	(13.4)	3.5	(5.0)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形・黒色処理	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
4	土師器甕	(21.8)	〈16.7〉	――	外面 ロクロ成形・胴部下半ヘラケズリ 内面 ロクロ成形・胴部ナデ	5YR7/4 にぶい橙 径2～3㎜の赤色粒子を非常に多く含む

第39表　ⅢH15号住居址出土遺物観察表

(47)ⅢH16号住居址（第91図、写真図版四十②）



第91図　ⅢH16号住居址実測図

本住居址は、調査区上部台地の中央部斜面であるL－テー10・11Grに位置する。残存状態は東側の殆どが地形の傾斜によって削平されていた。また重複遺構はⅢH26号住居址とⅢF2号掘立柱建物址があるが、いずれも覆土の切り合い等が確認できず新旧関係は不明である。

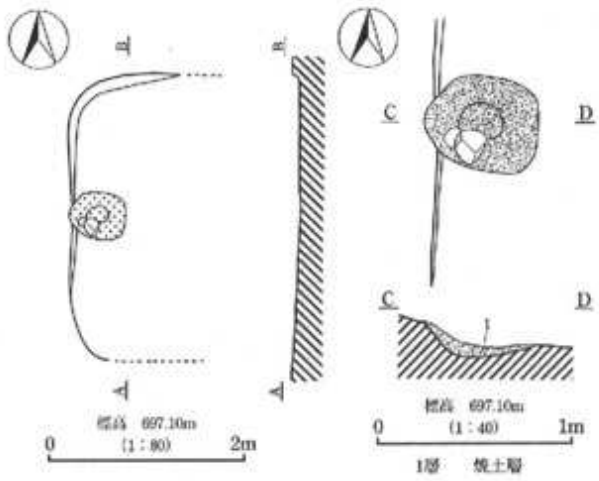
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁0.63m（残存）・南壁0.18m（残存）・西壁3.30mで、壁高さは西壁中央で15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－9°－Wを測る。住居址の床面積は推定で1.9㎡を測る。床は全体的に硬質であった。壁溝は西壁に確認された。規模は14～30cm・深さ5cmであり、溝断面形はU字形を呈する。ピットは床面検出時に2カ所確認され、規模はP1が径32cm・深さ3.5cm、P2が径40cm・深さ3.0cmを測る。

出土遺物は覆土中や壁溝内より土師器坏（内面黒色処理）や土師器ロクロ甕が出土しているがいずれも小片で図示可能なものは無かった。よって本址の帰属時期も不明である。

(48)ⅢH17号住居址（第92・93図、写真図版四十一①）

本住居址は、調査区上部台地のほぼ中央部であるM－ア－5．6Grに位置する。残存状態は東側半分が地形の傾斜によって削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは西壁中央に造られている。規模は北壁0.94m（残存）・南壁0.22m（残存）・西壁3.72m（残存）で、壁高さは北西コーナー付近で12cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－87°－Wを示す。住居址の床面積は1.8㎡を測る。床は全



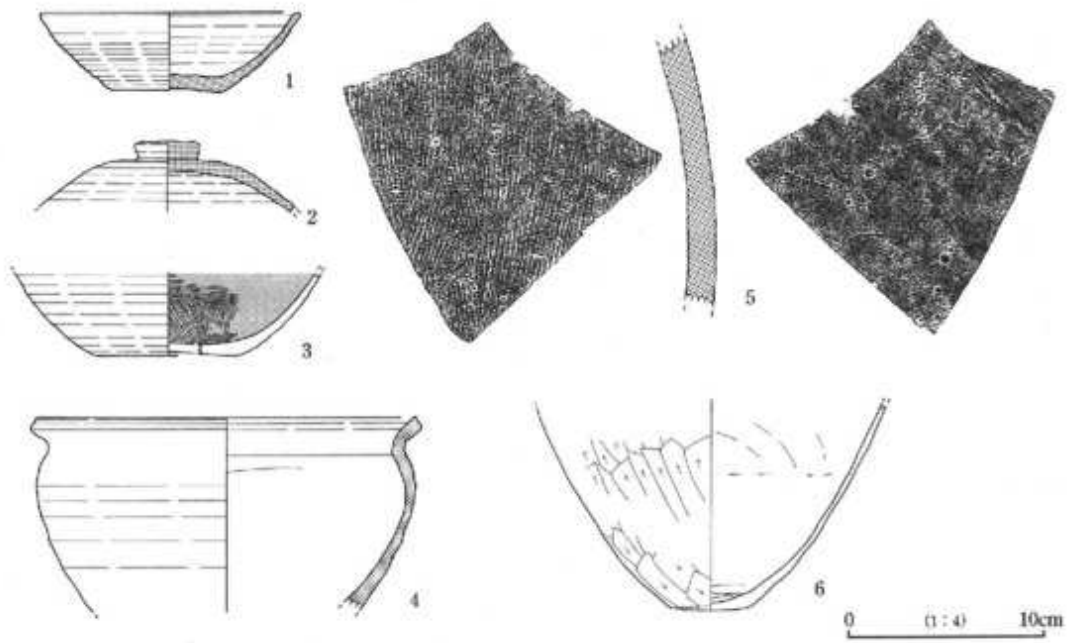
第92図　ⅢH17号住居址実測図

体的に軟質であった。壁溝・ピットは確認されなかった。

カマドは西壁中央に造られていた。残存状態は火床面しか残っていなかったが、焼土は硬質化していた。焼土の厚みは8cmを測る。

本址からの出土遺物は殆どが覆土中からのもので、図示した遺物もすべて覆土中からの出土である。1は須恵器坏である。底部は回転糸切り離しである。2は須恵器蓋で返りの部分を欠損する。3は土師器坏であり口縁部を欠損する。内面は丁寧なミガキと黒色処理が施されている。4は須恵器の鉢であり、非常に軟質の焼きで須恵器の範疇として捉えるには疑問が残る品である。5は須恵器甕の胴部破片である。6は土師器甕の胴部下半である。

これら遺物より本址は8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

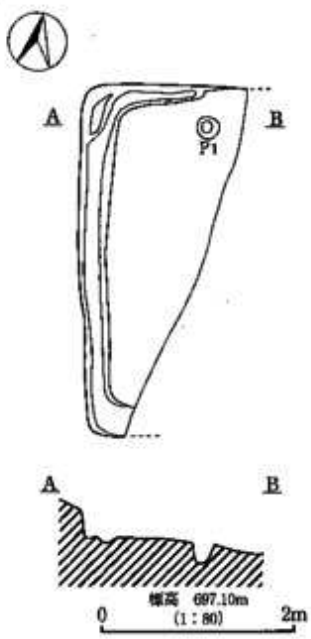


第93図　ⅢH17号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(13.4)	4.1	5.9	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	2.5GY7/1 オリーブ灰 径1～2㎜の白色粒子と砂粒を含む
2	須恵器蓋	——	〈3.7〉	3.3	外面 ロクロ成形・天井部回転ヘラケズリ後、つまみ部貼付 内面 ロクロ成形	2.5GY6/1 オリーブ灰 径1～2㎜の黒色粒子を多く含む
3	土師器坏	——	〈4.3〉	(7.2)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、ナデ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
4	須恵器(軟質)鉢	(20.2)	〈10.0〉	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形・胴部ナデ	7.5YR5/1 褐灰 径1～2㎜の黒色粒子を含む
5	須恵器甕	——	〈14.0〉	——	外面 平行タタキメ 内面 ナデ	7.5Y6/1 灰 黒色の噴出物を多く含む
6	土師器甕	——	〈9.8〉	(4.0)	外面 ヘラケズリ 内面 ナデ	7.5YR4/3 褐 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む

第40表　ⅢH17号住居址出土遺物観察表

(49)ⅢH19号住居址（第94図、写真図版四十一②）



第94図　ⅢH19号住居址実測図

本住居址は、調査区上部台地の南よりであるM－ウ－18･19Grに位置する。残存状態は東側の殆どが地形により削平されていた。

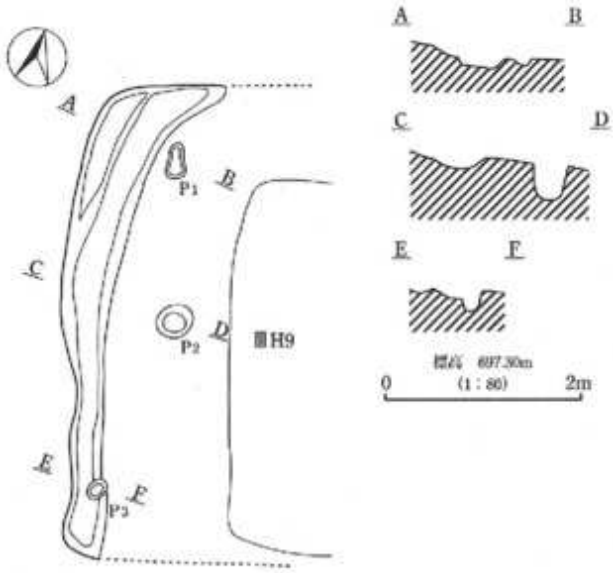
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁1.62m（残存）･南壁0.35m（残存）･西壁3.50m（残存）で、壁高さは北西コーナーで31㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－9°－Wを示す。住居址の床面積は残存部で3.8㎡を測る。床はやや硬質で、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁と北壁･南壁の一部に確認された。規模は幅14～32㎝･深さ8㎝で、断面形はU字形を呈する。ピットは1カ所確認され、規模はP1が径22㎝･深さ21㎝を測る。

本址からの出土遺物は覆土中より土師器坏（内面黒色処理）や土師器甕が小片で出土しているが、図示できるものはなかった。よって本址の帰属時期も不明である。

(50)ⅢH20号住居址（第95・96図、写真図版四十二①）

本住居址は、調査区上部台地の中央部であるM－イ－15･16Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。また、東側にはⅢH9号住居址が重複するが本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁1.2m（残存）･南壁0.42

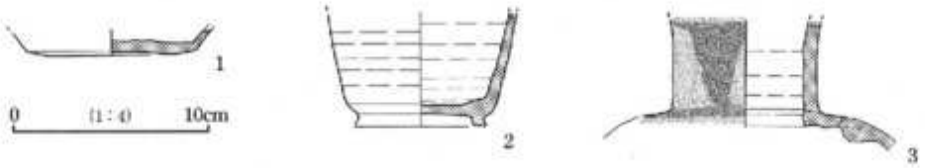


第95図　ⅢH20号住居址実測図

m(残存)・西壁4.60mで、壁高さは西壁中央より少し北で15cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN−14°−Wを示す。住居址の床面積は計測が不能である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝は西壁に確認された。規模は幅30〜56cm・深さ9cmであり、断面形は浅いレンズ状に窪んでいる。ピットは3カ所が確認され、規模はP1が径36cm・深さ6cm、P2が径36cm・深さ37cm、P3が径22cm・深さ10cmを測る。また本址は住居址北西コーナーにテラス的な部分が確認された。住居址掘り方はほぼ均一であった。

遺物は覆土からの出土が殆どであった。図示した遺物の内1と3は覆土内より出土した。なお3の須恵器長頸瓶はⅡH9号住居址出土の須恵器長頸瓶と接合関係にある。

これらの遺物より本址は8世紀末〜9世紀初頭に位置づけられる。



第96図　ⅢH20号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	−−	〈1.4〉	(8.8)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形　※内外面に火だすき痕あり	2.5GY6/1　オリーブ灰 白色の砂粒を多く含む
2	須恵器壺	−−	〈5.8〉	6.7	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面　ロクロ成形	5Y7/2　灰白 砂粒を多く含む
3	須恵器長頸瓶	−−	〈5.4〉	−−	外面　ロクロ成形後、施釉 内面　ロクロ成形	7.5Y7/1　灰白 黒色粒子を微量含む

第41表　ⅢH20号住居址出土遺物観察表

(51)ⅢH21号住居址（第97図）

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM－イ－16Grに位置する。残存状態はⅢH20号住居址に削平されている。重複遺構はⅢH20号住居址があり、新旧関係は本址の方が古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられるが、西壁のみの残存のため不明。規模は北壁0.2m（残存）・南壁0.3m（残存）・西壁3.5mを測る。壁高さは西壁中央で13cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－17°－Wを測る。

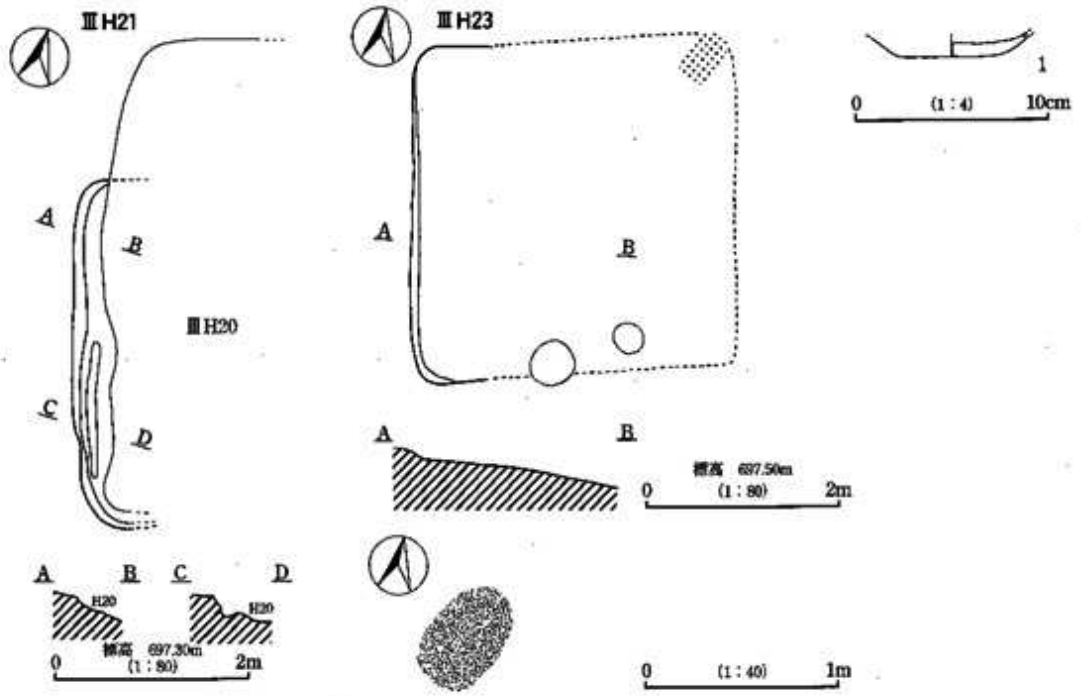
本址の出土遺物は覆土中から土師器片が少量出土したが図示できる物はなかった。よって本址の帰属時期は不明である。

(52)ⅢH23号住居址（第97図、写真図版四十二③）

本住居址は、調査区上部台地の東斜面であるM－ア－14・15Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北東コーナーに焼土範囲が確認された。住居址規模は北壁0.72m（残存）・南壁0.7m（残存）・西壁3.35mで、壁高さは西壁中央で8.5cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－9°－Wを示す。住居址の床面積は残存で10.8㎡を測る。

床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような床であった。壁溝・ピットは確認されなかった。



第97図　ⅢH21・23号住居址実測図

カマドは長軸57cm・幅37cmの火床面のみ残存していた。焼土は硬質化していた。

出土遺物は土師器坏・甕片が少量出土した。図示した1は土師器坏で覆土中からの出土である。底径5.2cmで、色調は7.5YR7/4にぶい橙である。胎土は径1～2㎜の赤色粒子を多量に含む。成形はロクロ成形で、底部は回転糸切り離しである。本址の帰属時期は遺物量が少ないため不確実であるがおおよそ9世紀前半に位置づけられる。

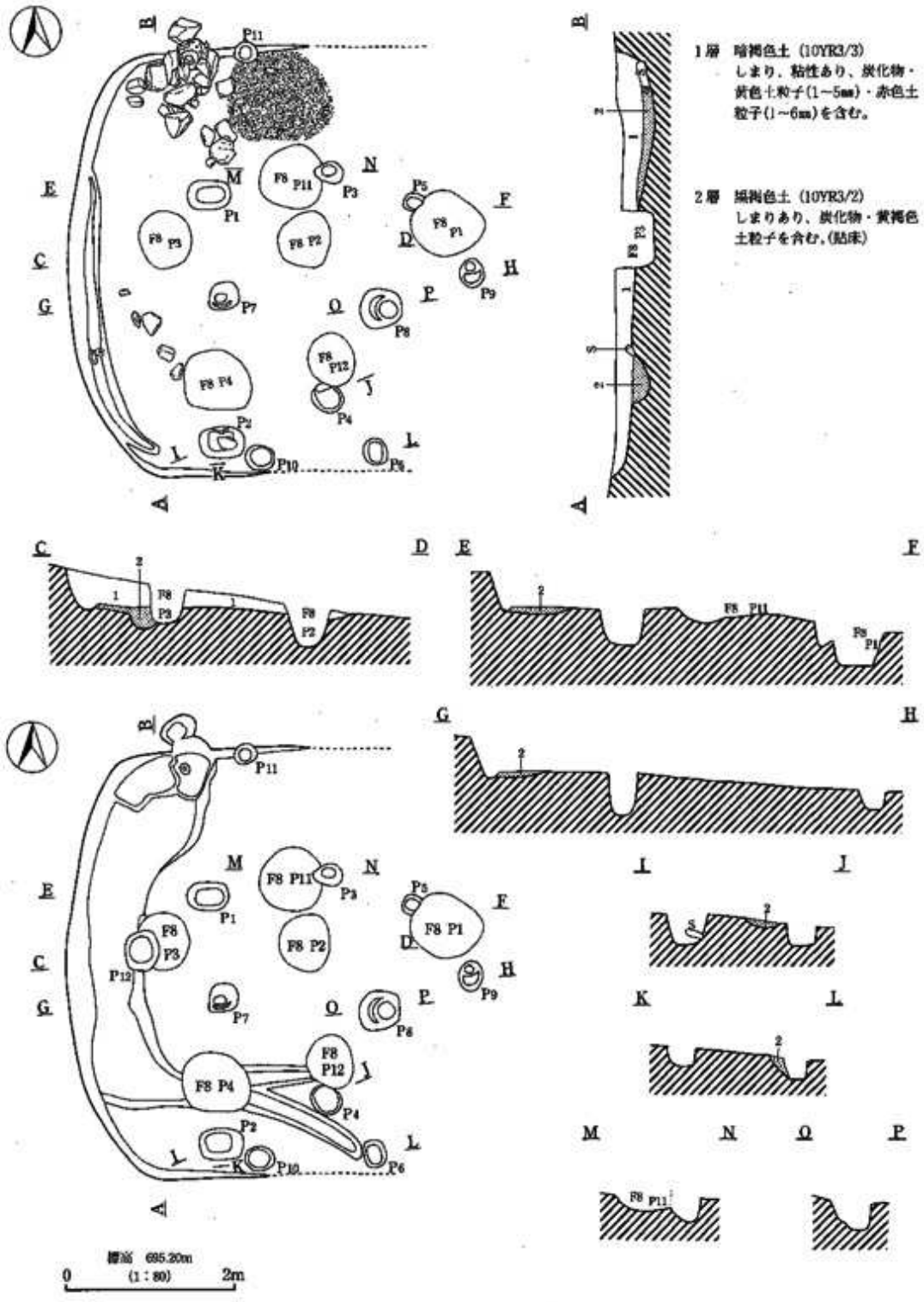
(53)ⅢH24号住居址（第98～101図、写真図版四十三）

本住居址は、調査区上部台地の中央部であるM－ウ－6・7、M－エ－6・7Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平されており、住居址の半分ほどが残存していた。重複遺構はⅢF8号掘立柱建物址で新旧関係は本址の方が古い。

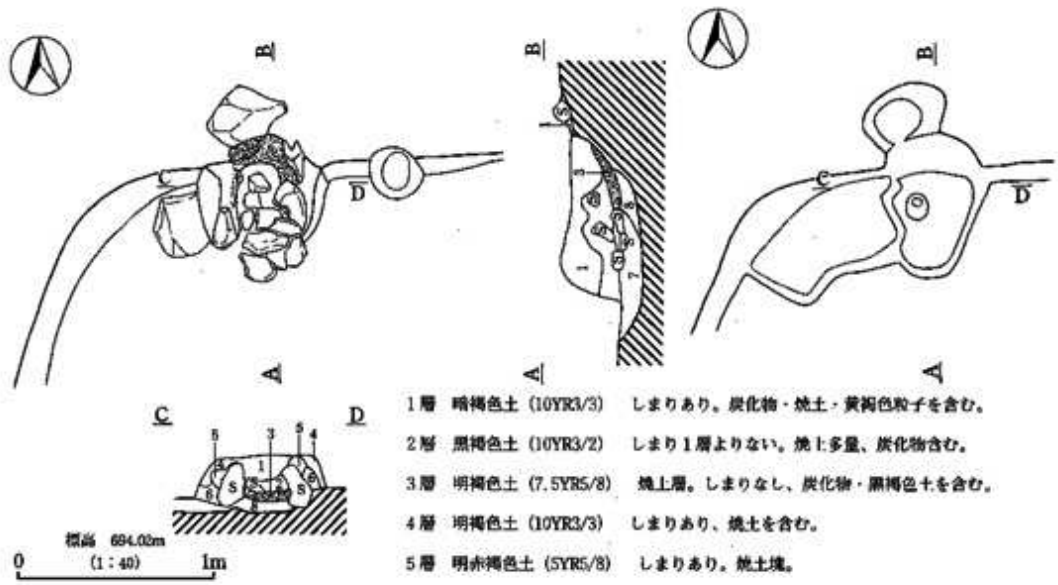
形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは北西コーナーに造られている。規模は北壁2.30m（残存）・南壁1.37m・西壁4.93mを測る。壁高さは西壁中央より少し北よりで45cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はNを示す。住居址の床面積は推定で26.7㎡、残存で12.1㎡を測る。覆土は1層であり、炭化物を含む。床は全体的に硬質であり、貼床は厚さ12cmを測る。壁溝は西壁中央から南にかけて確認された。規模は幅17～38cm・深さ6.5cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは12カ所確認され、規模はP1が径51cm・深さ43cm、P2が径54cm・深さ37cm、P3が径35cm・深さ30cm、P4が径39cm・深さ28cm、P5が径22cm・深さ30cm、P6が径31cm・深さ27cm、P7が径34cm・深さ49cm、P8が径50cm・深さ35cm、P9が径34cm・深さ28cm、P10が径34cm・深さ22cm、P11が径25cm・深さ33cm、P12は掘り方時の検出で、規模が径48cm・深さ30cmを測る。また、本址の掘り方は北西コーナーから北壁際にかけて一段深く掘り窪められており、南壁際は壁溝のような状態を呈する。

カマドは北西コーナー近くに造られている。天井部は既になかったが、その他の部分は非常に残りの良い状態を示しており、火床部上には礫が崩落したような状態であった。形態は煙道部があまり壁より出ないタイプで、袖は礫と粘質土によって構築されており、両袖ともに礫が立った状態で検出された。規模は煙道部長さが1.03m・幅65cmで、袖幅は両方ともに20～28cmを測る。火床部はよく焼けており、焼土の厚さは5cmを測る。カマド掘り方は火床部が楕円形であり、中央部に支脚石を立てていたと思われる小ピットが検出された。また、本址はカマド東脇に焼土と炭化物の広がった範囲が確認された。

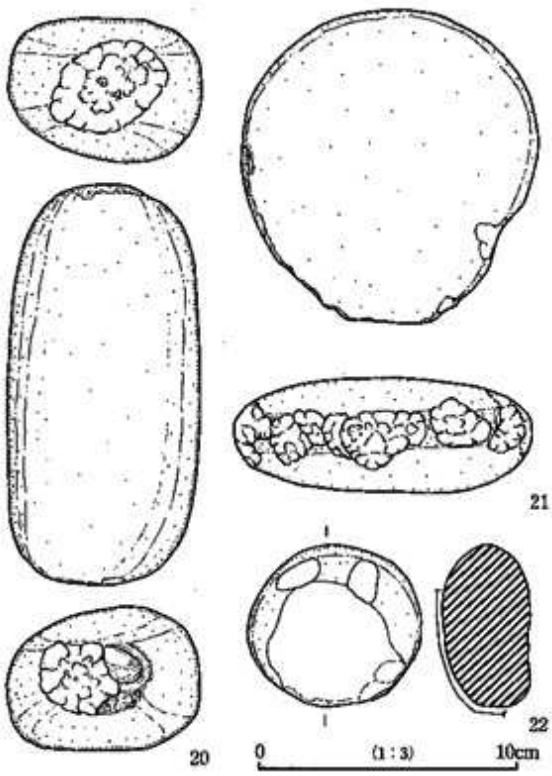
本址からの出土遺物は覆土および壁溝とカマド内からおもに出土した。図示した遺物の出土位置はカマドから出土の遺物が1・2・6・9・10であり、北西コーナーより出土が5、20が西壁壁溝内で、その他の遺物はすべて覆土中である。1～6は土師器坏であり、いずれもロクロ成形で5と6は内面に放射状のミガキと黒色処理が施されている。7～11は土師器椀で7～9と11は内面



第98図　ⅢH24号住居址実測図



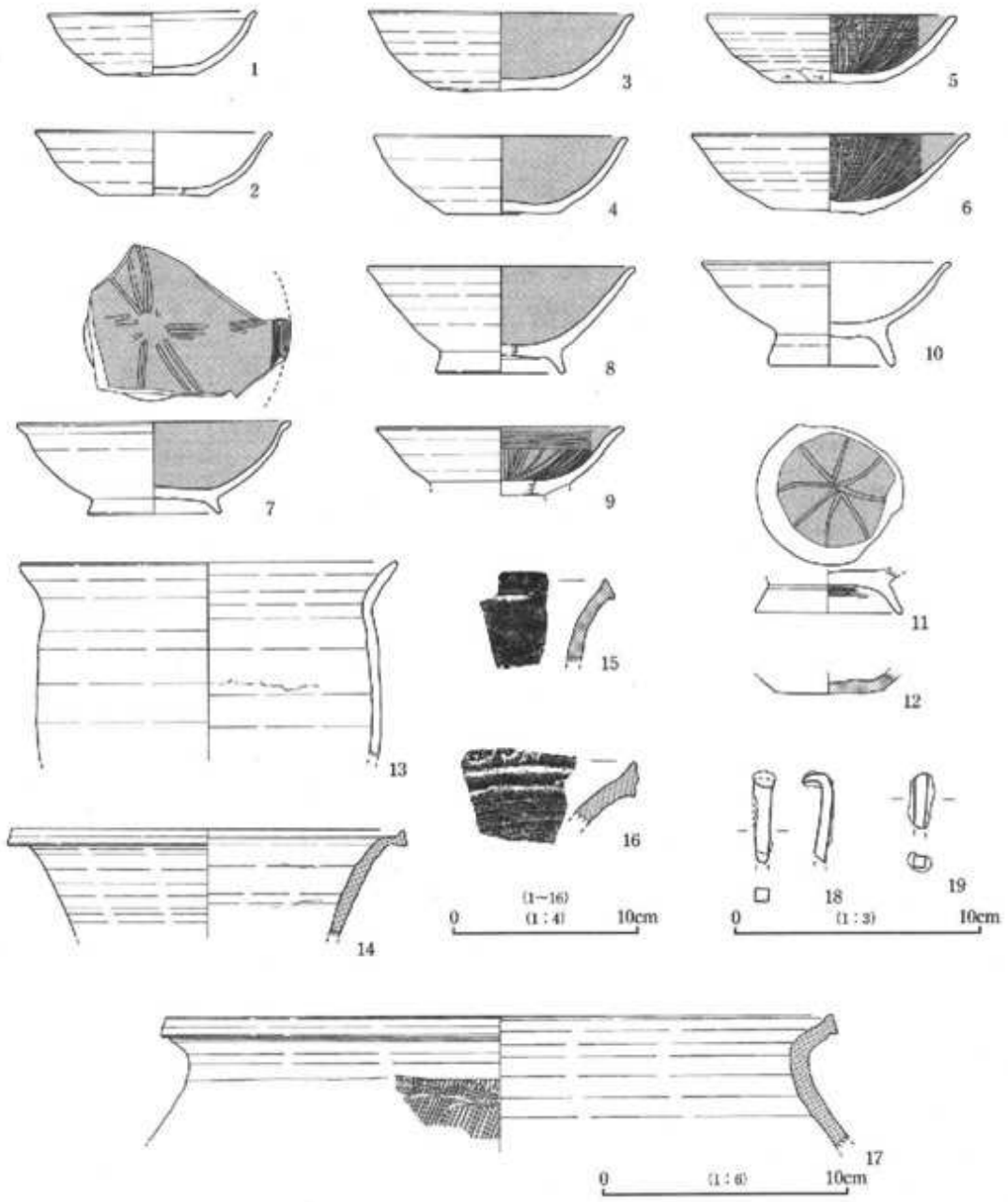
第99図　ⅢH24号住居址カマド実測図



第100図　ⅢH24号住居址出土遺物実測図①

黒色処理が施され、7・9・11は内面に丁寧なミガキによる放射状の暗文がある。13は土師器甕でいわゆるロクロ甕である。胴部下半を欠損する。14～17は須恵器甕である。17は非常に大型品であり、また焼成は生焼け的な赤褐色を呈する。18と19は鉄製品でありいずれも欠損しているが釘と考えられる。20～22は石製品で、20と21は敲き石、22はすり石と考えられる。20は上下両方向に敲き跡が付いている。21は側面半分に敲き跡がある。23は敲き後擦っている。石材は全て輝石安山岩である。

これらの遺物より本址は10世紀前半に位置づけられる。



第101図　Ⅲ H24号住居址出土遺物実測図②

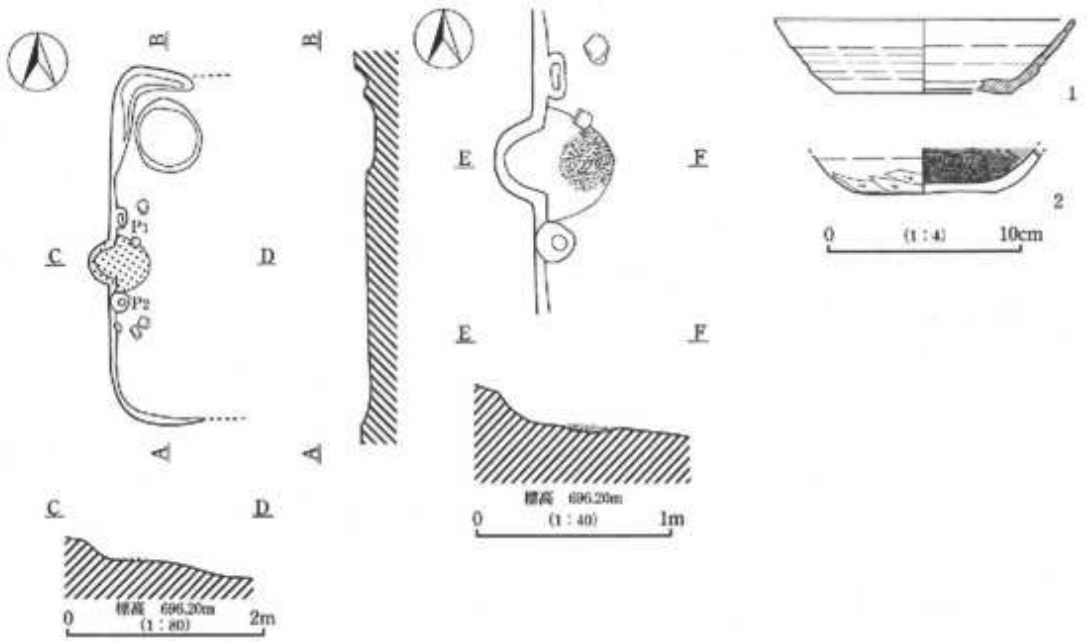
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(11.4)	3.4	4.9	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面 ナデ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
2	土師器坏	(13.0)	3.5	(6.0)	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面 みこみ部ナデ	7.5YR5/4 にぶい橙 砂粒を含み、ざらざらしている
3	土師器坏	14.5	4.3	7.0	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面 ナデ後、黒色処理	7.5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子を多く含む
4	土師器坏	13.9	4.3	6.4	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ナデ後、黒色処理	7.5YR5/4 にぶい褐 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含み、ざらざらしている
5	土師器坏	(13.6)	3.7	5.9	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、底部および外周手持ちヘラケズリ 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を少量含む
6	土師器椀	15.2	(4.6)	——	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付(高台欠損) 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を少量含む
7	土師器椀	(15.0)	5.1	7.3	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 暗文風ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
8	土師器椀	(14.7)	5.9	(7.0)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ナデ後、黒色処理	7.5YR5/4 にぶい橙 径2～3㎜の黒色粒子を含む
9	土師器椀	(13.6)	(3.8)	——	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付(高台欠損) 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6 橙 砂粒多量と径1～2㎜の赤色粒子を含む
10	土師器椀	13.6	5.7	7.0	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を多量に含む
11	土師器椀	——	(2.4)	8.1	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、高台貼付その後ヘラミガキ 内面 坏部(放射状)暗文状ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
12	須恵器坏	——	(1.2)	(6.0)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5Y7/1 灰白 径1～2㎜の黒色粒子を含む
13	土師器甕	(20.6)	(10.8)	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を多量に含む
14	須恵器甕	(21.9)	(5.9)	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	N6/灰 径1～2㎜の白色の砂粒を含む
15	須恵器甕	——	(4.5)	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	N6/灰(内面) 径1～2㎜の赤色粒子を含む
16	須恵器甕	——	(4.4)	——	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形 自然釉付着	N6/灰 白色の砂粒を多く含む
17	須恵器甕	(52.8)	(11.0)	——	外面 口縁部ロクロ成形 胴部平行タタキメ文※口管部に自然釉付着 内面 ロクロ成形	10R3/3 暗赤褐 径2～3㎜の小石と砂粒を含む

第42表　ⅢH24号住居址出土遺物観察表

(54)ⅢH27号住居址（第102図、写真図版四十四）

本住居址は、調査区上部台地の中央部であるM－イ－5Grに位置する。残存状態は東側が地形によって削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは西壁中央に造られている。規模は北壁0.7m(残存)・南壁0.78m(残存)・西壁3.53mを測る。壁高さは西壁中央で16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はN－86°－Wを示す。住居址の床面積は残存で2.7㎡を測る。覆土は単層であった。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は北西コーナー



第102図　ⅢH27号住居址及び出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(15.5)	3.8	(9.0)	外面　ロクロ成形・底部切り離し後、手持ちヘラケズリ 内面　ロクロ成形	2.5GY 7/1　明オリーブ灰 砂粒を含み、ざらざらしている
2	土師器坏	――	(2.4)	7.4	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、手持ちヘラケズリ 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 7/4　にぶい橙 径1－2㎜の赤色粒子と砂粒を含む

第43表　ⅢH27号住居址出土遺物観察表

部のみ検出された。規模は幅18～22cm・深さ7cmで、形態は断面U字形を呈する。ピットは2カ所確認され、規模はP1が径25cm・深さ5cm・P2が径20cm・深さ5cmを測る。ただこのピットはカマド両袖部分より検出されているため、或いはカマド袖構築材のための掘り方とも考えられる。また、本址は北西コーナー部分に円形の土坑が検出された。規模は長軸77cmで深さ10cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一であった。

カマドは火床部のみ検出された。形態は煙道部が壁よりも張り出すタイプのものである。火床部の焼土の厚さは3cmを測る。

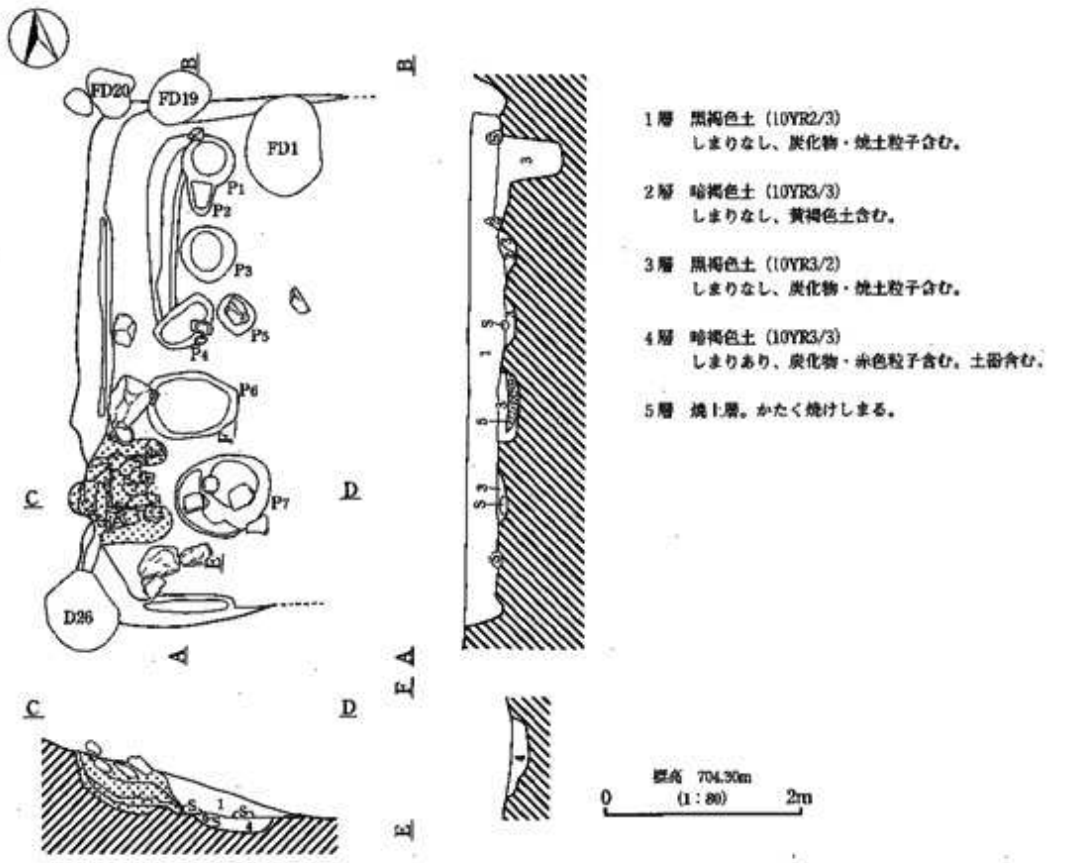
本址からの出土遺物は覆土を中心に出土した。図示した遺物の出土位置は1がカマド右袖脇で2が覆土中である。1は須恵器坏でロクロ成形であり、底部は切り離し後手持ちヘラケズリを施している。2は土師器坏でロクロ成形であり、底部は回転糸切り離し後手持ちヘラケズリを施す。

これらの遺物により本址は9世紀前半に位置づけられると考える。

(55)ⅢH28号住居址（第103～106図、写真図版四十五．四十六）

本住居址は、調査区最上部の台地であるL－セー1・2・3、L－ソー1・2・3Grに位置する。残存状態は東側半分が地形と畑地により削平されている。重複遺構は中世墳墓のFD1・19・20とⅢD26号土坑と重複関係にありいずれも本址のほうが古い。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは西壁南よりに造られている。規模は北壁2.46m（残存）・南壁1.86m（残存）・西壁5.14mを測る。壁高さは西壁中央よりのカマド付近で49cmを測る。壁はほぼ垂直に立ちあがる。主軸方位はN－89°－Eを示す。住居址の床面積は残存で9.8㎡、を測る。覆土はほぼ単層であり、炭化物・焼土を含む。床は全体的に硬質であった。壁溝は西壁中央と南壁の一部で確認された。規模は幅25～38cm・深さ5cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは7カ所確認され、規模はP1が径52cm・深さ67cm、P2が径33cm・深さ8cm、P3が径56cm・深さ14cm、P4が径64cm・深さ19cm、P5が径41cm・深さ10cm、P6が径96cm・深さ27cm、P7が径103cm・深さ23cmを測る。これらピットは柱穴にしては規模が大きく、また覆土中に焼土や炭化物を含むことから、土坑的な性格の遺構とも考えられる。また、本址には西壁北よりから間仕切

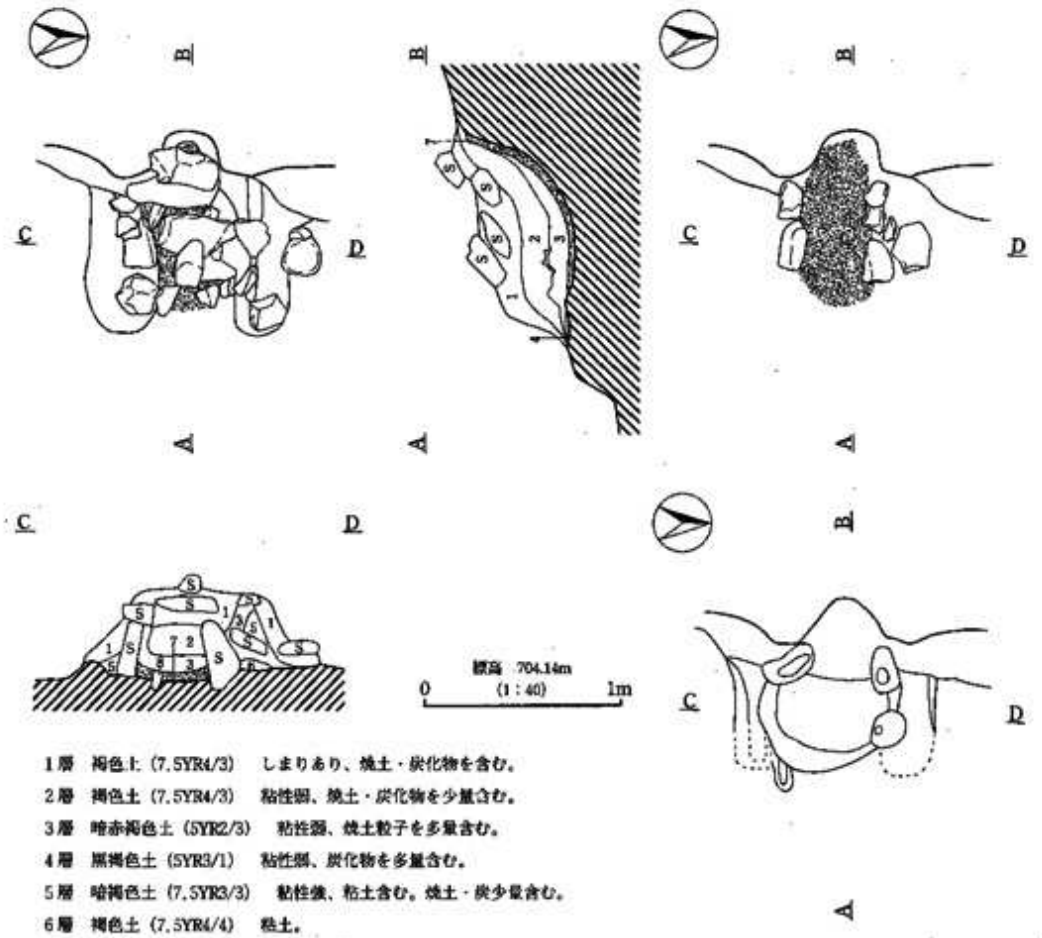


第103図　ⅢH28号住居址実測図

り的溝が検出されている。

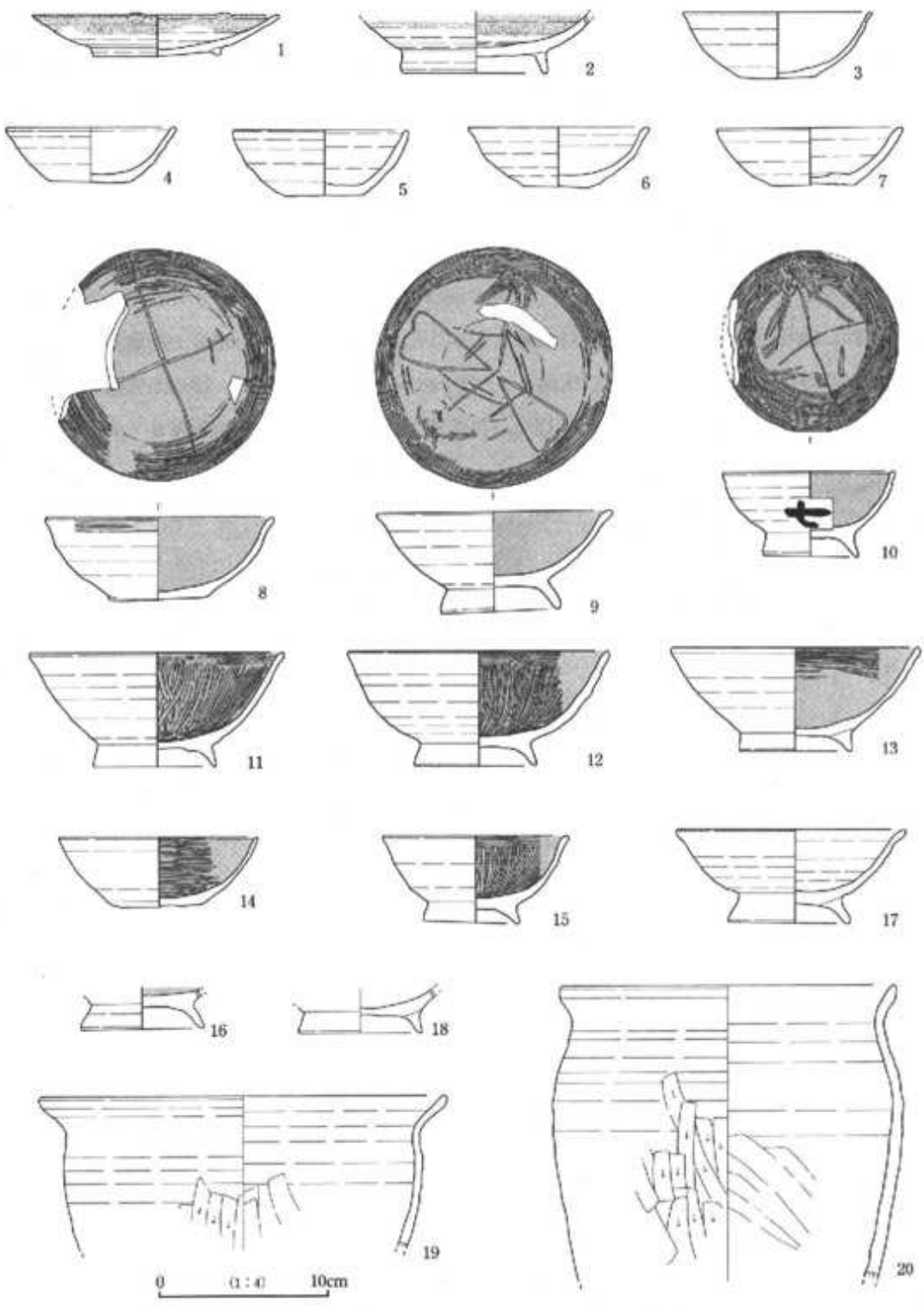
カマドは西壁南よりに造られている。本遺跡のなかでは非常に残存状態の良好なカマドであった。両袖及び天井部の構造が明瞭に観察できた。カマドの形態は煙道部が住居址壁よりもあまり飛び出さないタイプのもので、構築方法は天井部が扁平な石を4枚袖上に高架させている。袖部は両側2本ずつの礫を立て、その石を粘質土によって覆っていた。火床部はよく焼けており焼土の厚みは7㎝を測る。また火床部より図示した11の土師器椀が伏せた状態で出土している。この土師器椀はほぼ完形であるが、二次焼成を受けておらず、カマドの使用中止後火床部にいれられたものと考えられる。袖の規模はそれぞれ長さ80cm・幅7～11㎝を測る。カマド掘り方は火床部を楕円形に掘り込み、袖部には構築材の礫を立てたと考えられるピットが3カ所確認された。

本址からの出土遺物は覆土および床面とカマド内から多量に出土した。図示した遺物の出土位置は1・2・9・13・21が西壁際、3・7・12・23・24が覆土中、4・10・15・17が南西コーナー、5がカ

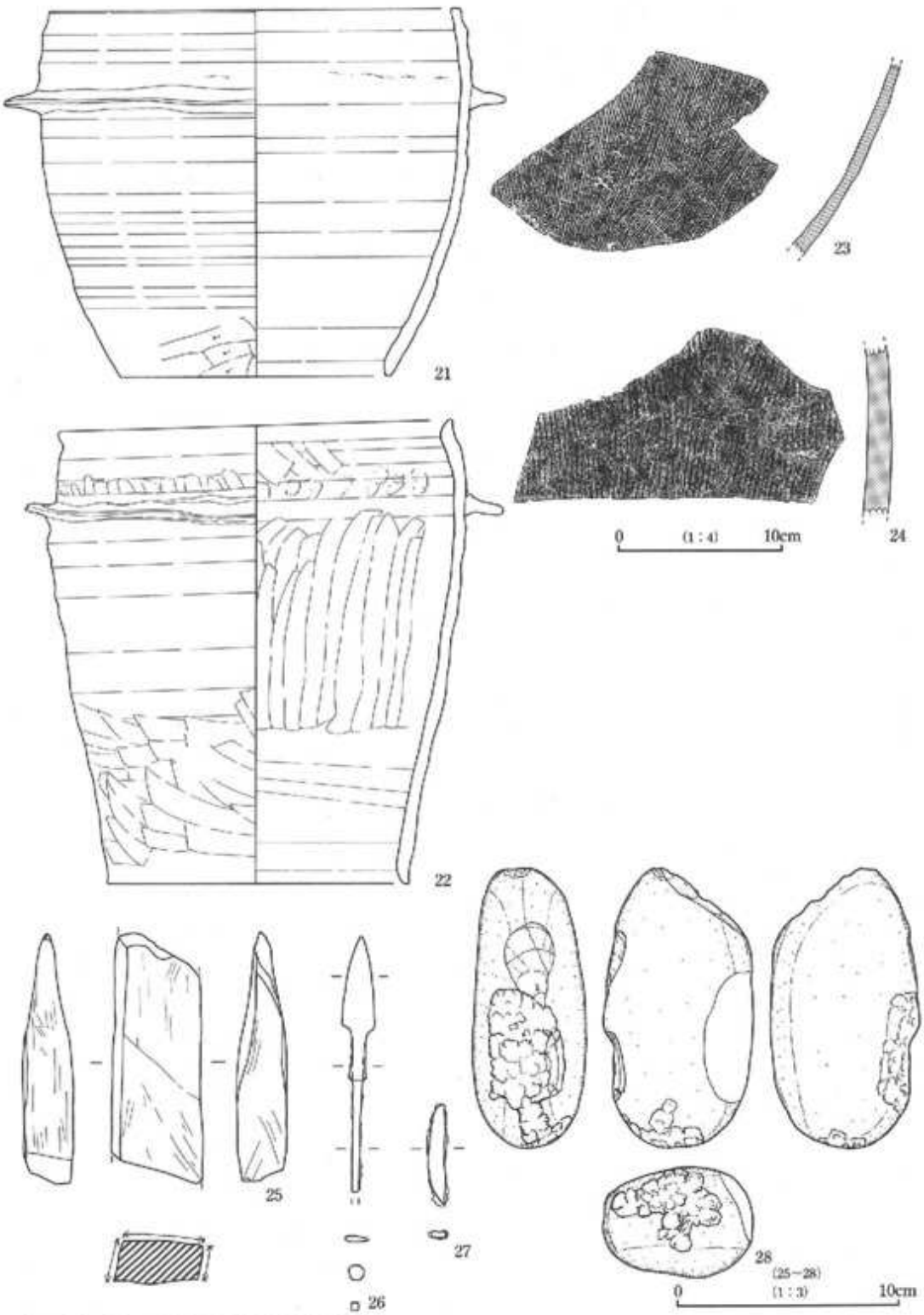


1層 褐色土 (7.5YR4/3) しまりあり、焼土・炭化物を含む。
2層 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性弱、焼土・炭化物を少量含む。
3層 暗赤褐色土 (5YR2/3) 粘性弱、焼土粒子を多量含む。
4層 黒褐色土 (5YR3/1) 粘性弱、炭化物を多量含む。
5層 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性強、粘土含む。焼土・炭少量含む。
6層 褐色土 (7.5YR4/4) 粘土。
7層 赤褐色土 (2.5YR4/6) 焼土。
8層 灰褐色土 (7.5YR4/2) 焼土ブロック状に混入。

第104図 ⅢH28号住居址カマド実測図



第105図　ⅢH28号住居址出土遺物実測図①



第106図　ⅢH28号住居址出土遺物実測図②

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	灰釉輪花皿	14.8	2.5	7.7	外面 ロクロ成形・底部回転ヘラケズリ後、高台貼付 内面 ロクロ成形 ※施釉は漬け掛け	2.5Y8/1 灰白 良く精練されている。径2㎜の長石含む
2	灰釉椀	――	3.8	8.8	外面 ロクロ成形・底部切り離し後、高台貼付 内面 ロクロ成形 重ね焼き痕あり ※施釉は漬け掛け？	2.5Y8/1 灰白 良く精練されている
3	土師器坏	(11.2)	3.9	(4.4)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、手持ちヘラケズリ 内面 ロクロ成形	5YR6/6 橙 砂粒を含む
4	土師器坏	(10.1)	3.3	5.1	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 みこみ部・体部ナデ ※みこみ部に回転糸切りらしきものが観察される 底部柱状作りか？	5YR7/8 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
5	土師器坏	(10.5)	4.0	4.7	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形 ※「底部柱状作り」の可能性あり 二次焼成を受けている可能性あり	2.5YR5/8 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
6	土師器坏	10.8	3.6	4.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形・みこみ部ナデ ※「底部柱状作り」の可能性あり	7.5YR8/6 浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
7	土師器坏	(11.0)	3.4	5.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形・みこみ部ナデ ※「底部柱状作り」の痕跡あり	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子を含む
8	土師器坏	13.7	5.1	5.9	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 暗文風ヘラミガキ・黒色処理（みこみ部ナデ後、暗文風ヘラミガキ）	7.5YR8/6 浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子を多量に含む
9	土師器坏	14.2	6.1	7.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 みこみ部ナデ後、暗文風ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を含む
10	土師器椀	10.3	5.2	5.7	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 ※墨書あり「七」 内面 暗文風ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR5/4 にぶい褐 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
11	土師器椀	15.2	6.8	7.3	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
12	土師器椀	15.7	6.9	(7.4)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
13	土師器椀	(14.8)	6.2	6.7	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/1 褐灰 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
14	土師器椀	(12.4)	4.2	5.7	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付（高台欠損） 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/8 黄橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多量に含む
15	土師器椀	(11.2)	5.3	5.7	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
16	土師器椀	――	〈2.3〉	7.4	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 調整不明・黒色処理	5YR7/8 橙 径1～2㎜の赤色粒子多量と砂粒を含む
17	土師器椀	13.7	5.6	7.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ロクロ成形	7.5YR8/4 浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子を含み、繊維跡あり
18	土師器椀	――	〈2.7〉	7.4	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ナデ	5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
19	土師器甕or鉢	(24.6)	〈9.2〉	――	外面 ロクロ成形・胴部に横位のヘラケズリ 内面 ロクロ成形・胴部に横位のナデ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
20	土師器甕	(20.2)	〈17.7〉	――	外面 ロクロ成形・胴部下半縦位のヘラケズリ 内面 ロクロ成形・胴部下半斜位のヘラナデ	7.5YR7/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
21	土師器甑	(25.0)	22.1	(16.4)	外面 ロクロ成形・外面下位に手持ちヘラケズリ・鍔貼付 内面 ロクロ成形	2.5YR5/6 明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒を含み、ざらざらしている
22	土師器甑	23.8	28.1	18.3	外面 ロクロ成形・胴部下半に横位のヘラケズリ・鍔貼付 内面 ロクロ成形・胴部上半に縦位のナデ 胴部下半は横位のナデ	7.5YR8/3 浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子を微量に含む
23	須恵器甕	――	〈12.8〉	――	外面 平行タタキメ 内面 ナデ 底部付近に自然釉付着	7.5Y5/1 灰 砂粒を微量含む
24	須恵器甕	――	〈10.2〉	――	外面 平行タタキメ 内面 ナデ	N5/灰 白色粒子を含む

第44表　ⅢH28号住居址出土遺物観察表

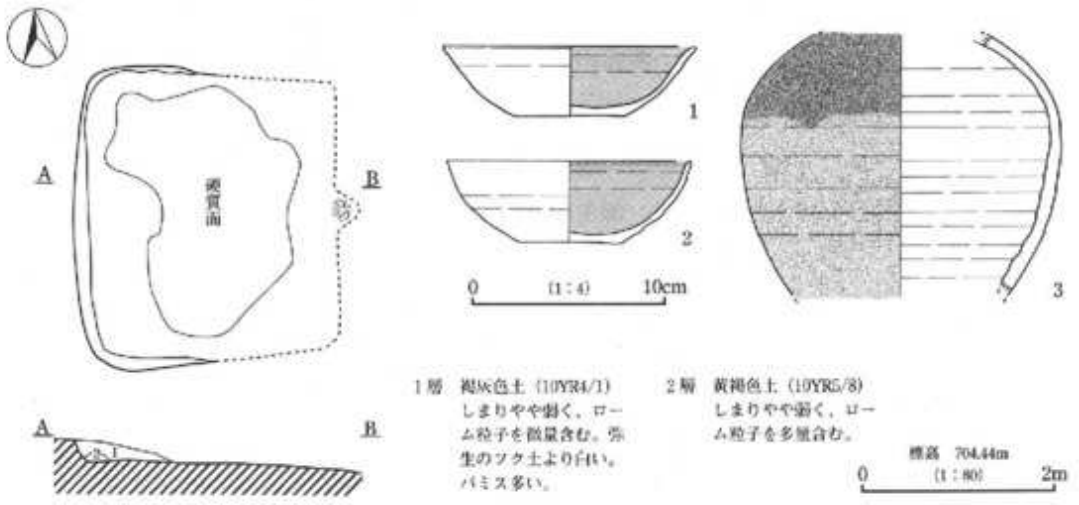
マド前、6がP1上、8·14·16·22がP7上、11がカマド内、18·19·20がP6上である。1と2は灰釉陶器皿と椀である。1はほぼ完形に近い。また1は口唇部四方向に輪花状の窪みを観察できる。釉はいずれも漬け掛けと考えられる。3~7は土師器坏である。いずれも小型のロクロ成形の坏であり、底部には柱状の粘土から切り離したと考えられる粘土痕が観察できるものがあった。8は土師器坏で内面黒色処理されている。また内面みこみ部には「十」の字のミガキによる暗文風の文様がある。9~18は土師器椀であり、17·18以外は内面黒色処理を施す。また9はみこみ部に花弁を象ったようなミガキによる暗文風の模様がある。10は8と同じくみこみ部に「十」の字のミガキによる暗文風の模様と体部外面には正位で「七」と読める墨書がある。19は土師器鉢か甕であり、20は土師器甕である。21と22は土師器甑である。いずれもほぼ完形である。22は外部に黒斑的な部分が見られる。23と24は須恵器甕の胴部破片である。25は砥石であり、よく使い減りが観察できた。26と27は鉄製品で、26は鉄鏃、27は不明品である。28は敲き石でP4脇より出土した。側面と先端に敲き痕が顕著に残っている。石材は輝石安山岩である。

これら遺物より本址は10世紀後半に位置づけられる。

(56)ⅢH31号住居址（第107図、写真図版四十七①）

本住居址は、調査区最上部の台地であるH-セ-19·20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは東壁中央よりに造られている。規模は北壁1.32m(残存)2.5m(推定)·南壁1.23m(残存)2.44m(推定)·西壁2.94m·東壁2.63m(推定)を測る。壁高さは西壁中央で20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ちあがる。主軸方位はEを示す。住居址の床面積は推定で7.3㎡を測る。覆土はほぼ単層である。床は中央部が硬質であった。壁溝·ピットは



第107図　ⅢH31号住居址及び出土遺物実測図

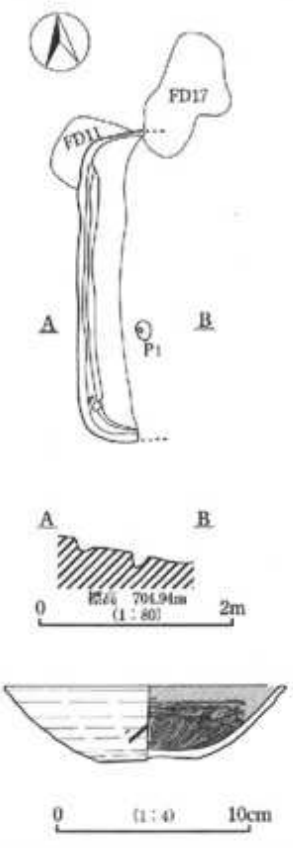
検出されなかった。カマドは東壁中央部に造られていたと考えられるが、火床部しか残存していなかった。また、本址の火床部は焼土が硬質化していなかった。

出土遺物は主に覆土中より出土した。図示した遺物はいずれも住居址中央の床面上より破砕した状態で出土した。1と2は土師器坏でいずれも内面黒処理されている。3は灰釉陶器長頸瓶の頸部破片と考えられる。これらの遺物より本址は9世紀前半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(13.1)	3.6	5.6	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、ヘラケズリ 内面 調整不明・黒色処理	7.5YR7/4 にぶい橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
2	土師器坏	12.6	4.2	5.2	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形・黒色処理	7.5YR7/1 明褐灰 白色の砂粒を多く含む
3	灰釉長頸瓶	――	(13.4)	――	外面 ロクロ成形後、施釉 内面 ロクロ成形	7.5Y8/2 灰白 良く精錬されている

第45表 ⅢH31号住居址出土遺物観察表

(57)ⅢH32号住居址（第108図、写真図版四十七②）

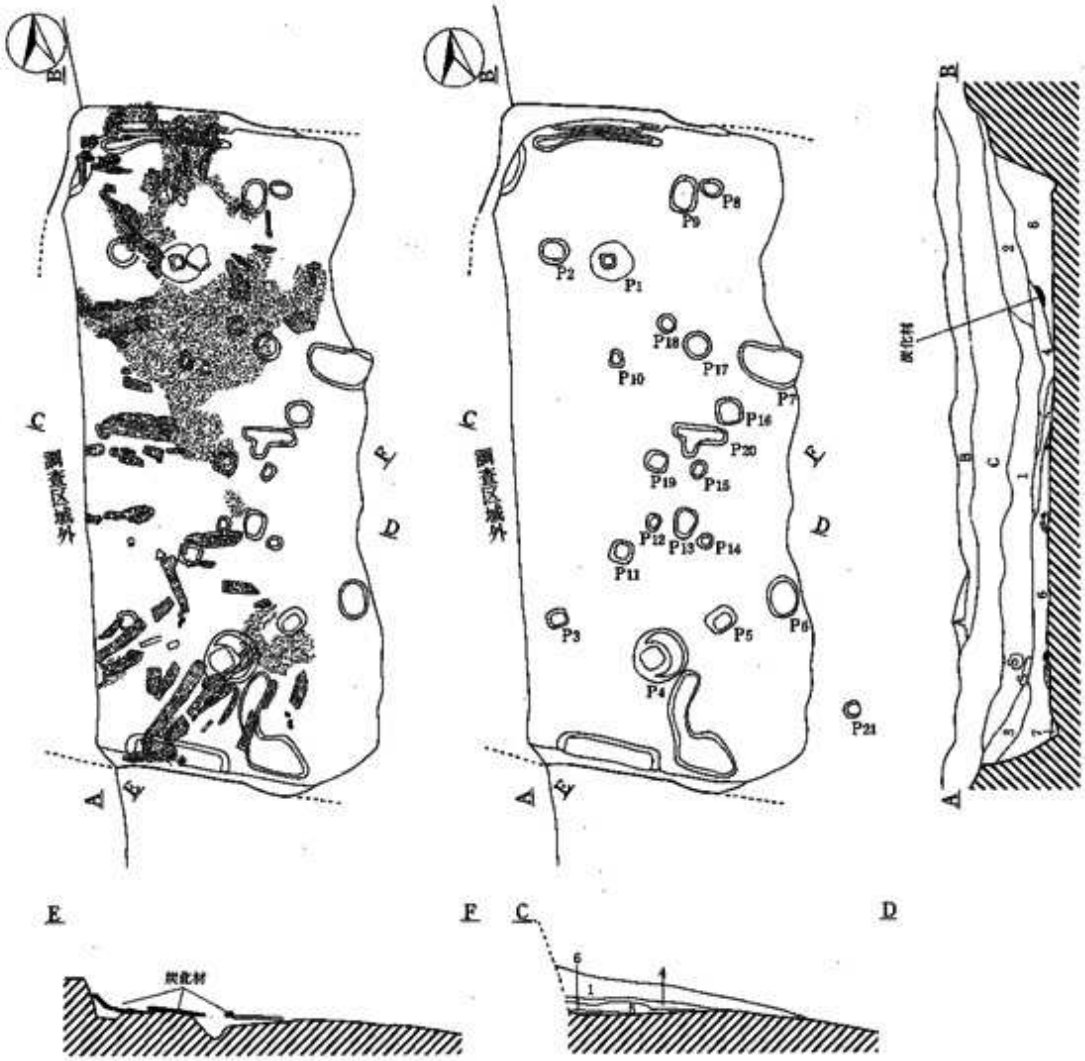


第108図 ⅢH32号住居址及び出土遺物実測図

本住居址は、調査区最上部の台地であるL－セー3Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁0.53m（残存）・南壁0.52m（残存）・西壁2.96mを測る。壁高さは北西コーナーで18cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は不明である。住居址の床面積は残存で0.86㎡を測る。覆土はほぼ単層である。床はやや軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁全体に確認され、規模は幅14～24cm・深さ3cmで、断面の形状はU字形を呈する。ピットは1カ所のみ検出された。規模はP1が径21cm・深さ14cmを測る。

出土遺物は図示した土師器坏のみで南西コーナーから出土した。口縁部を一部欠損するがほぼ完形である。口径14.4cm・器高4.1cm・底径5.2cmを測る。胎土は径1～2㎜の赤色粒子を多く含み、色調は7.5YR7/4にぶい橙である。調整は底部回転糸切り離しで内面は黒色処理されている。また、体部外面に墨痕があるが判読不明である。本址は出土遺物がこの遺物のみなので帰属時期の判断は難しいが、おおよそ9世紀後半と考えられる。



A層　褐灰色土（10YR6/1）　耕作土。しまりあり、ローム・粘土ブロックを含む。

B層　黒褐色土（10YR3/1）　しまり、粘性あり、砂層。

C層　黒褐色土（10YR3/2）　しまりあり、褐色土ブロックを含む。1層よりやわらかい。

1層　黒褐色土（10YR3/1）　しまり、粘性あり。黄色粒子・赤色粒子をやや多く含む。

2層　褐色土（10YR4/4）　しまりあり、粘性あり。

3層　暗褐色土（10YR3/3）　しまり、粘性あり。褐色土ブロックを多量含む。

4層　暗褐色土（10YR3/3）　3層に似るが、焼土・炭化物をやや多く含む。

5層　黒褐色土（10YR2/2）　1層よりやや明るく、炭化物を含む。焼土粒子を微量含む。

6層　黒褐色土（10YR2/3）　しまりややあり、炭化物・焼土を多量含む。

7層　褐色土（10YR4/4）　しまりややあり、粘性あり、小石を含む。地山に近い。

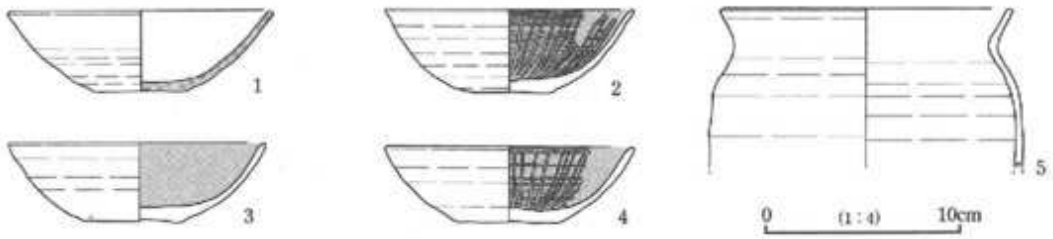
標高　704.90m
0　(1：80)　2m

第109図　ⅢH44号住居址実測図

(58) ⅢH44号住居址（第109・110図、写真図版四十八）

本住居址は、調査区最上部の台地であるL－シ－10・11、L－ス－10・11Grに位置する。残存状態は東側半分が地形により削平されており、また西側は調査区外となる。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は北壁2.32m（残存）・南壁2.30m（残存）・西壁6.60m（推定）を測る。壁高さは北西コーナーで81cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－10°－Wを示す。住居址の床面積は検出部で18.6㎡を測る。覆土は7層に分かれ、下層では焼土と炭化物が顕著に含まれていた。床は全体的に硬質であったが、貼り床は施されていなかった。壁溝は北壁と南壁の一部に確認された。規模は幅20～24cm・深さ3cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは21カ所確認され、規模はP1が径43cm・深さ69cm、P2が径30cm・深さ5cm、P3が径20cm・深さ31cm、P4が径55cm・深さ22cm、P5が径29cm・深さ13cm、P6が径50cm・深さ6.5cm、P7が径65cm・深さ7cm、P8が径23cm・深さ4cm、P9が径36cm・深さ3cm、P10が径19cm・深さ11cm、P11が径22cm・深さ9cm、P12が径17cm・深さ9cm、P13が径32cm・深さ6cm、P14が径14cm・深さ4cm、P15が径19cm・深さ5cm、P16が径18cm・深さ8cm、P17が径28cm・深さ12cm、P18が径19cm・深さ5cm、P19が径22cm・深さ7cm、P20が径54cm・深さ6.5cm、P21が径16cm・深さ7.5cmを測る。住居址の掘り方はほぼ均一であった。また、本址は屋根材が焼失し崩落したような状態で出土した。これら炭化材は床面に張り付いた状態で検出されているため、



第110図　ⅢH44号住居址出土遺物実測図

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	(13.6)	4.2	(4.8)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ナデ	7.5Y6/1　灰 径1～2㎜の黒色粒子と砂粒を含む
2	土師器坏	12.8	4.3	4.9	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/3　にぶい褐 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
3	土師器坏	13.3	4.1	5.2	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ？・黒色処理	7.5YR8/3　浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含み、ざらざらしている
4	土師器坏	12.8	3.9	5.2	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り　タール状の物付着 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/8　橙 径1～2㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
5	土師器小型甕	(15.2)	(8.2)	――	外面　ロクロ成形 内面　ロクロ成形	7.5YR8/4　浅黄橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を微量含む

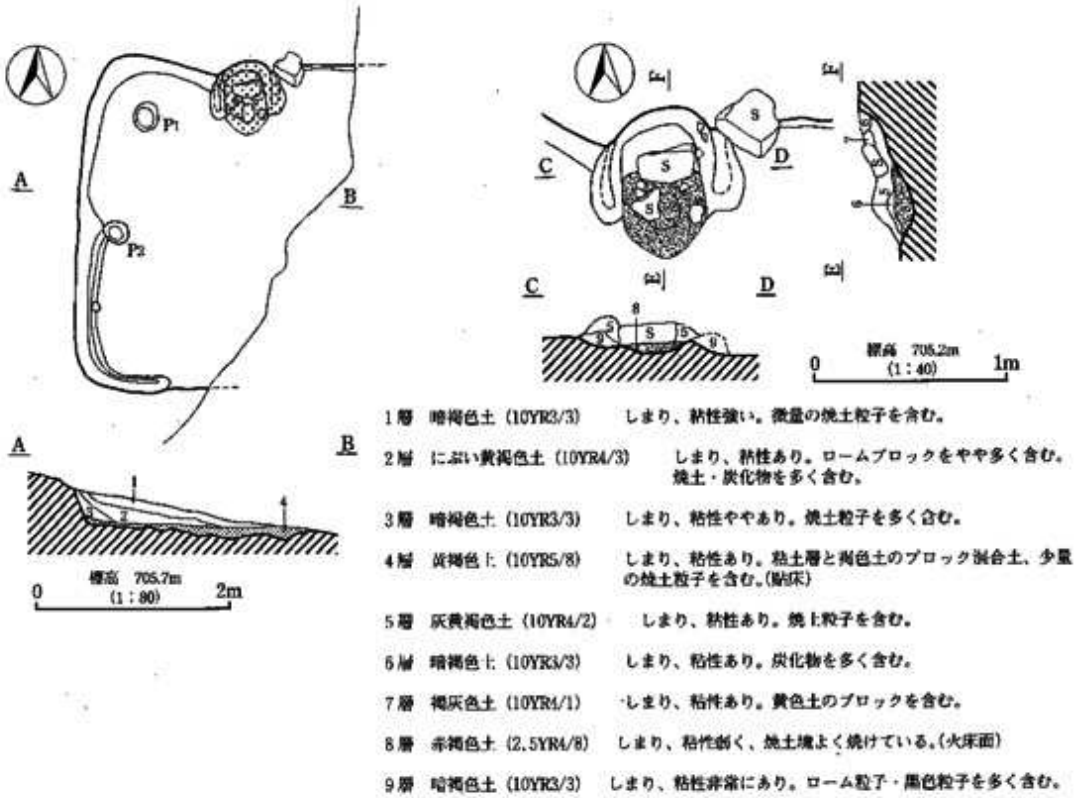
第46表　ⅢH44号住居址出土遺物観察表

本址の使用期間中か廃絶直後に焼失したと考えられる。本址からの出土遺物は覆土を中心にP10近辺から集中的に出土した。図示した出土遺物の内1と3は覆土中でその他に関してはこのP10付近より出土した。1は須恵器坏で、2～4は土師器坏で内面黒色処理を施している。5は土師器甕で成形はロクロ成形である。これらの遺物から本址は9世紀後半に位置づけられる。

(59)ⅣH1号住居址（第111・112図、写真図版四十九）

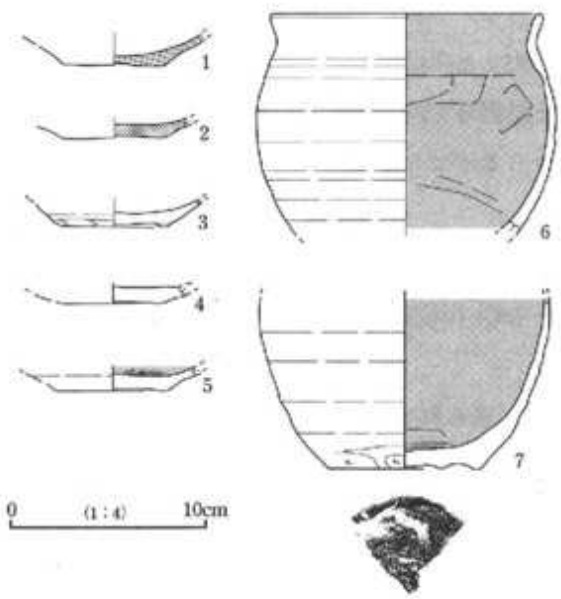
本住居址は、調査区上部の台地であるL－サー20Grに位置する。残存状態は東側半分が地形と畑地により削平されている。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央部に造られている。規模は北壁2.42m（残存）・南壁1.24m（残存）・西壁3.33mを測る。壁高さは北西コーナーで35cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－3°－Eを示す。住居址の床面積は残存で6.1㎡を測る。覆土は3層に分かれ、焼土炭化物を多く含む。床は全体的に硬質であり、貼床は10cmの厚さで貼られていた。壁溝は南西コーナーの一部で確認された。規模は幅16～28cm・深さ4cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは2カ所確認され、規模はP1が径30cm・深さ11cm、P2が径26cm・深さ27cmを測る。これらピットは検出位置から壁柱穴と考えられる。



1層 暗褐色土（10YR3/3） しまり、粘性強い。微量の焼土粒子を含む。
2層 にぶい黄褐色土（10YR4/3） しまり、粘性あり。ロームブロックをやや多く含む。焼土・炭化物を多く含む。
3層 暗褐色土（10YR3/3） しまり、粘性ややあり。焼土粒子を多く含む。
4層 黄褐色土（10YR5/8） しまり、粘性あり。粘土層と褐色土のブロック混合土、少量の焼土粒子を含む。（貼床）
5層 灰黄褐色土（10YR4/2） しまり、粘性あり。焼土粒子を含む。
6層 暗褐色土（10YR3/3） しまり、粘性あり。炭化物を多く含む。
7層 褐灰色土（10YR4/1） しまり、粘性あり。黄色土のブロックを含む。
8層 赤褐色土（2.5YR4/8） しまり、粘性弱く、焼土塊よく焼けている。（火床面）
9層 暗褐色土（10YR3/3） しまり、粘性非常にあり。ローム粒子・黒色粒子を多く含む。

第111図 ⅣH1号住居址実測図



第112図　ⅣH１号住居址出土遺物実測図

カマドは北壁中央部で確認された。形態は煙道部が壁より僅かに飛び出すタイプである。残存状況は両袖と火床部が検出できた。袖は粘質土で構築されていた。袖の規模は長さがいずれも31～33cm・幅は5～8cmを測る。火床部焼土の厚みは９cmを測る。

出土遺物は覆土とカマド内より出土した。図示した遺物の出土位置は３と６がカマドからでその他は覆土中からの出土である。また、図示しなかったが西壁際より小刀子の柄と思われる鉄製品が１点出土している。

これらの遺物より本址は９世紀後半に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏	――	〈1.7〉	(5.8)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	7.5Y 4/1　灰 径１～２㎜の黒色粒子多量と砂粒を含む
2	須恵器坏	――	〈1.0〉	5.6	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ロクロ成形	7.5YR 7/1　明褐灰 径１～２㎜の黒色粒子を多く含む
3	土師器坏	――	〈1.5〉	5.5	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り後、外周「底部柱状作り」の可能性あり 内面　ロクロ成形	7.5YR 8/4　浅黄橙 径１～２㎜の赤色粒子と砂粒を多く含み、ざらざらしている
4	土師器坏	――	0.9	5.5	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ	2.5YR 5/6　明赤褐 径１～２㎜の赤色粒子微量と砂粒多量含む
5	土師器坏	――	〈1.2〉	5.8	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR 8/4　浅黄橙 径１～２㎜の赤色粒子と砂粒を少量含む
6	土師器小型甕	(14.0)	〈11.4〉	――	外面　ロクロ成形後、口縁部ヨコナデ 内面　口縁部～胴部ヨコナデ・胴部ナデ黒色処理　※７と同一個体の可能性	7.5YR 6/6　橙 径１～２㎜の赤色粒子と砂粒を少量含む
7	土師器小型甕	――	〈9.8〉	(7.8)	外面　ロクロ成形・底部外周手持ちヘラケズリ上げ底ぎみに成形 内面　ナデ・黒色処理	7.5YR 6/6　にぶい橙 径１～２㎜の赤色粒子と砂粒を少量含む

第47表　ⅣH１号住居址出土遺物観察表

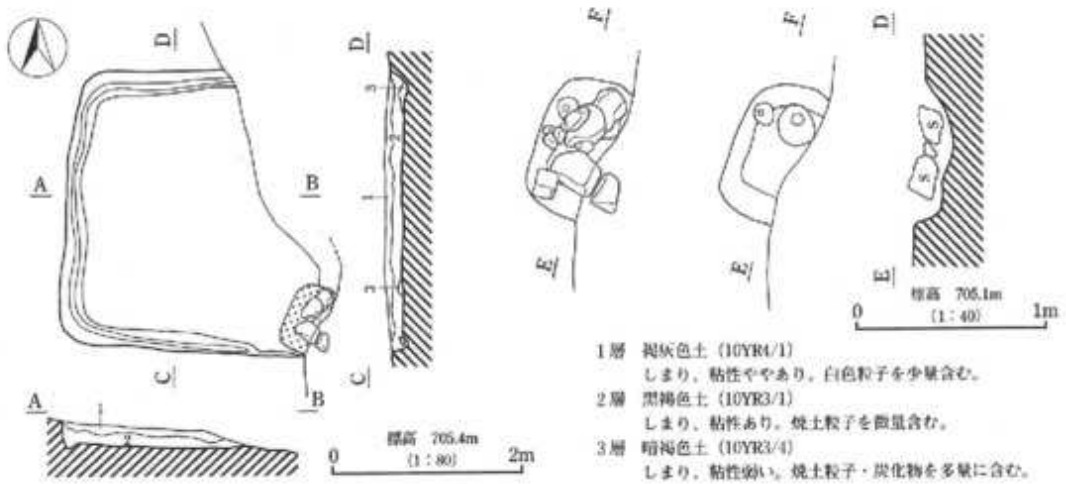
(60)ⅣH２号住居址（第113・114図、写真図版五十）

本住居址は、調査区上部の台地であるL－サ－16･17Grに位置する。残存状態は東側の一部が地形により削平されている。

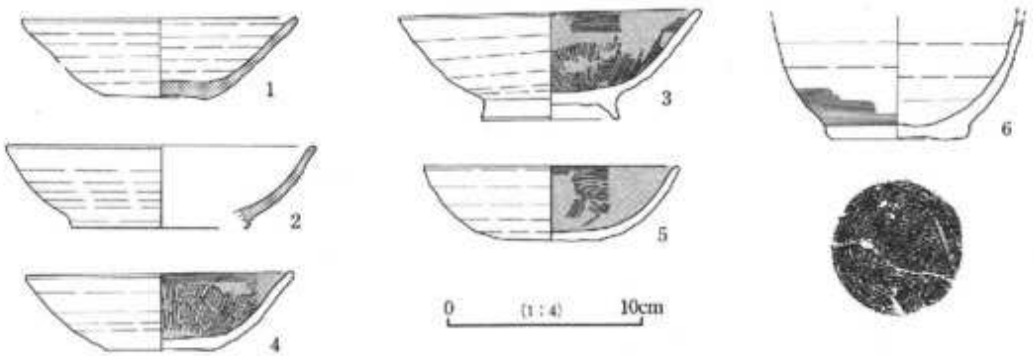
形態はほぼ方形を呈する。カマドは南東コーナーに造られている。規模は北壁1.36ｍ(残存)・南壁3.42ｍ(残存)・西壁2.7ｍを測る。壁高さは西壁中央で26cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上が

る。主軸方位はN－3°－Eを示す。住居址の床面積は残存で4.8㎡を測る。覆土は3層に分かれ、焼土を少量含む。床は全体的に硬質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は南東コーナー付近で一部とぎれる他は全周していた。規模は幅12～25cm・深さ7cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは検出されなかった。カマドは南東コーナーに造られていた。カマド使用と考えられる礫がまとまって検出され、礫下に僅かに焼土が検出された。カマド掘り方の規模は長軸73cm・深さ18cmを測る。また、底面よりピット2カ所が確認された。

本址よりの出土遺物は覆土中とカマド内よりおもに出土した。図示した遺物の出土位置は1・23が覆土中、4がカマド左脇、5が北壁際、6がカマド内である。1と2は須恵器坏、3は土師器椀で内面黒色処理が施されている。4と5は土師器坏で内面黒色処理が施されている。6は土師器の小型甕であり、成形はロクロ成形である。底部は回転糸切り離しである。これらの遺物より本址は9世紀後半に位置づけられる。



第113図　NH2号住居址実測図

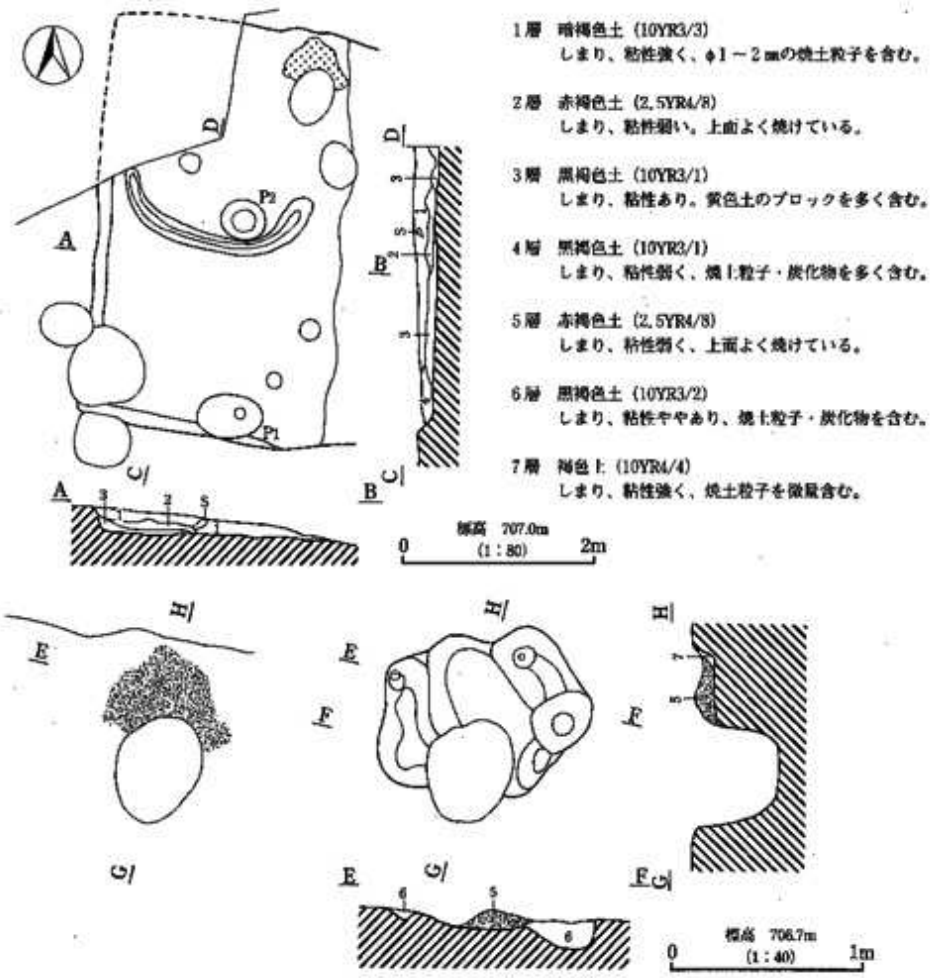


第114図　NH2号住居址出土遺物実測図

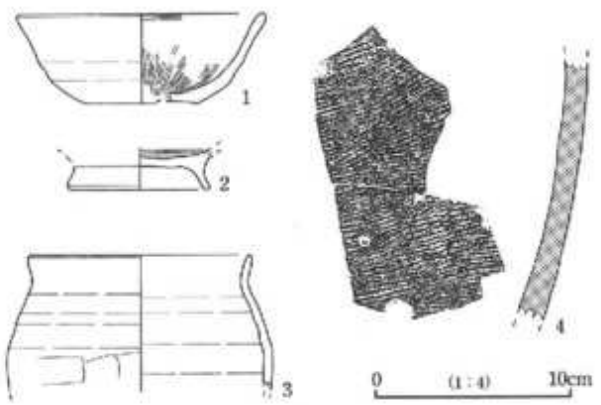
挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	須恵器坏(転質)	(14.2)	4.1	5.3	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ロクロ成形	7.5YR6/1 褐灰 径1～2㎜の黒色粒子を含む
2	須恵器高台坏	(15.9)	4.2	(9.1)	外面 ロクロ成形 内面 ロクロ成形	2.5GY7/1 明オリーブ灰 砂粒を多く含む
3	土師器椀	15.6	5.6	7.0	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り後、高台貼付 内面 ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6 橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
4	土師器坏	13.8	4.0	5.5	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR7/8 黄橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を多く含む
5	土師器坏	(13.2)	3.8	5.4	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り 内面 ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/8 橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
6	土師器小型壺	――	〈6.3〉	(6.9)	外面 ロクロ成形・底部回転糸切り・胴部下位カキメのようなナデ 内面 ロクロ成形	7.5YR7/6 橙 径2～3㎜の赤色粒子を含む

第48表　ⅣH2号住居址出土遺物観察表

(61)ⅣH3号住居址（第115・116図、写真図版五十一）



第115図　ⅣH3号住居址実測図



第116図　ⅣH３号住居址出土遺物実測図

本住居址は、調査区上部の台地であるL－ケ－17･18、L－コ－17･18Grに位置する。残存状態は東側の一部が地形により削平されている。

形態はほぼ方形を呈する。カマドは北壁中央に造られている。規模は北壁1.13ｍ(残存)･南壁2.54ｍ(残存)･西壁4.06ｍを測る。壁高さは南西コーナーより少し北で23cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－3°－Eを示す。住居址の床面積は残存で7.9㎡を測る。覆土は基本的に４層に分かれ、２層にはよく焼けている面があった。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかったが、住居址の中央部に「コ」の字状の間仕切り的な溝が検出された。規模は幅20cm･深さ４cmを測る。断面形はＵ字形を呈する。ピットは２カ所検出された。規模はＰ１が径66cm･深さ33cm、Ｐ２が径44cm･深さ９cmを測る。

カマドは北壁中央よりに火床部的な焼土が確認された。袖部や煙道部は既に削平されていた為形態は不明である。火床部はよく焼けており、焼土の厚みは９cmを測る。カマド掘り方は火床部と袖部が掘り窪められており、袖部には構築材を立てたと考えられるピットが確認された。

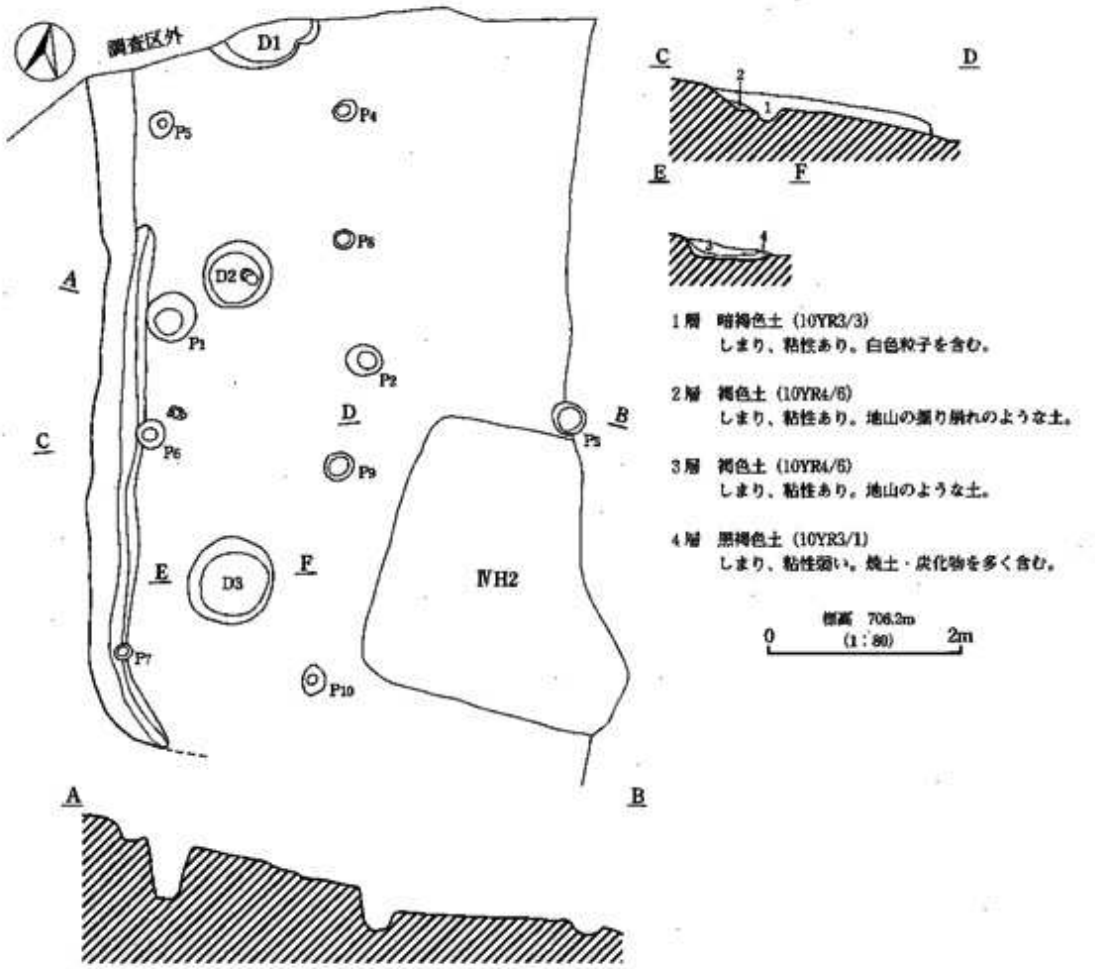
本址よりの出土遺物は覆土中とカマド内よりおもに出土した。図示した遺物の出土位置は１がカマド内、２と４は覆土中、３は南壁際である。１は土師器坏である。底部回転糸切り離しで、柱状作りの可能性がある。２は土師器椀で内面黒色処理を施す。３は土師器甕でありロクロ成形である。４は須恵器甕で表面に黒色の噴出物が多い。

これらの遺物より本址は９世紀後半以降に位置づけられる。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	(12.8)	4.6	(5.8)	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り「底部柱状作り」の可能性あり 内面　ヘラミガキ	2.5YR5/6　明赤褐 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
2	土師器椀	――	(2.1)	7.3	外面　ロクロ成形･底部回転糸切り後、高台貼付 内面　ヘラミガキ・黒色処理	5YR6/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子と砂粒を含む
3	土師器小型甕	11.5	(7.0)	――	外面　ロクロヨコナデ 内面　ロクロ成形	5YR6/6　橙 径1～2㎜の赤色粒子を多く含む
4	須恵器甕	――	(13.1)	――	外面　平行タタキ後、ナデ 内面　ヘラナデ	N3/暗灰 黒色の噴出物が多い

第49表　ⅣH３号住居址出土遺物観察表

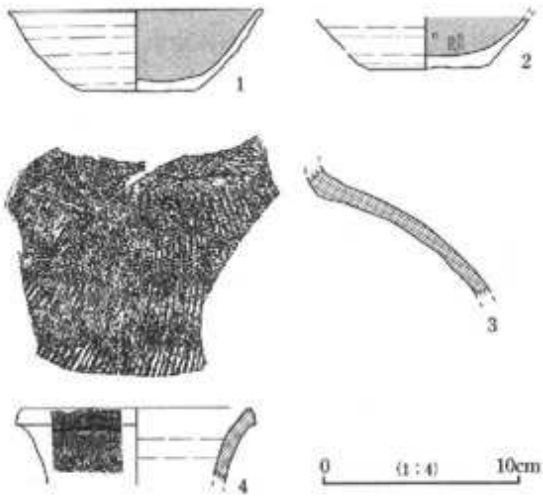
(62)ⅣH4号住居址（第117・118図、写真図版五十二）



第117図　ⅣH4号住居址実測図

本住居址は、調査区上部の台地であるL－コ－15・16・17、L－サ－15・16・17Grに位置する。残存状態は東側の大部分が地形により削平され、また北側は調査区外となる。

形態は全容の把握が難しいがほぼ長方形を呈する。カマドは不明である。規模は南壁0.57m（残存）・西壁6.65m（残存）を測る。壁高さは西壁北よりで26cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はN－12°－Wを示す。住居址の床面積は残存で28.7㎡を測る。覆土は単層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁南よりで確認された。規模は幅12～54cm・深さ5.5cmを測る。断面形はU字形を呈する。ピットは10カ所検出された。規模はP1が径50cm・深さ67cm、P2が径38cm・深さ48cm、P3が径34cm・深さ16cm、P4が径24cm・深さ10cm、P5が径28cm・深さ14cm、P6が径30cm・深さ15cm、P7が径15cm・深さ19cm、P8が径18cm・深さ13cm、P9が径30cm・深さ14cm、P10が径31cm・深さ25cmを測る。また本址は西壁側に3カ所の土



第118図　ⅣH４号住居址出土遺物実測図

坑が検出された。規模はＤ１が長軸115cm・短軸46cm・深さ22cm、Ｄ２が長軸72cm・短軸64cm・深さ25cm、Ｄ３が長軸89cm・短軸85cm・深さ22cmである。これら土坑の内Ｄ２からは完形の土師器坏が石を入れ込んだ状態で出土し、Ｄ３からは焼土塊が検出された。以上、本址の概略を述べたが、本址はピットの形状や壁規模の形態より竪穴住居址の範疇としてではなく、大型建物址的な遺構とも考えられる。

本址よりの出土遺物は覆土中と土坑内よりおもに出土した。図示した遺物の出土位置は１がＤ２からでその他の物は覆土中である。１と２は土師器坏、３は須恵器甕、４は須恵器長頸壺の破片と考えられる。これらの遺物より本址は９世紀後半に位置づけられると考える。

挿図番号	器種	法量(cm)			成形・調整	色調
		口径	器高	底径	外面・内面	胎土
1	土師器坏	13.2	4.2	5.8	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　調整不明・黒色処理	7.5YR7/6　橙 径1－2㎜の赤色粒子を非常に多く含む
2	土師器坏	――	〈2.6〉	6.2	外面　ロクロ成形・底部回転糸切り 内面　ヘラミガキ・黒色処理 「底部柱状作り」の可能性あり	7.5YR7/6　橙 径1－2㎜の赤色粒子を非常に多く含む
3	須恵器甕	――	〈6.6〉	――	外面　平行タタキ後、ナデ　自然釉付着 内面　ナデ	2.5GY5/1　オリーブ灰 径2－3㎜の黒色の噴出物あり
4	須恵器長頸壺？	(12.3)	〈4.0〉	――	外面　ロクロ成形　自然釉付着 内面　ロクロ成形	N2/黒(内面) 砂粒を含む

第50表　ⅣH４号住居址出土遺物観察表

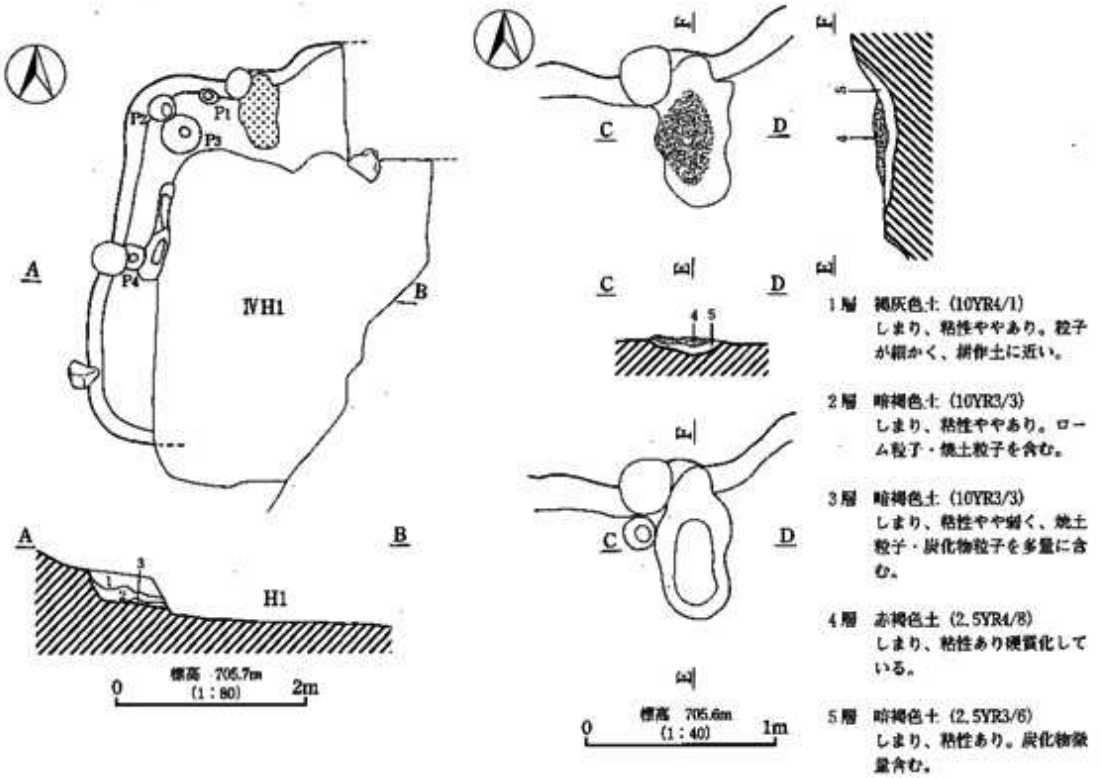
(63)ⅣH９号住居址（第119図、写真図版五十三①）

本住居址は、調査区上部の台地であるＬ－コ－19・20、Ｌ－サ－19・20Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平され、また南東コーナーはⅣH１号住居址により切られている。

形態は方形を呈する。カマドは北壁中央部に造られている。規模は北壁2.08ｍ(残存)・南壁0.47ｍ(残存)・西壁3.56ｍを測る。壁高さは西壁中央で19cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はＮを示す。住居址の床面積は残存で2.6㎡を測る。覆土は３層に分かれる。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は確認されなかった。ピットは４カ所検出された。規模はP1が径18cm・深さ24cm、P２が径25cm・深さ14cm、P3が径40cm・深さ10cm、P4が径25cm・深さ14cmを測る。カマドは北壁中央に造られており、火床面のみ残存していた。火床部の焼

土はよく焼けており焼土の厚みは7㎝を測る。火床部掘り方の規模は長さ78㎝・幅38㎝を測る。

本址からの出土遺物は土師器坏・甕片が小量と図示した砥石があったのみである。砥石は砂岩で2.8kgあった。これらの事から本址の帰属時期は不明である。

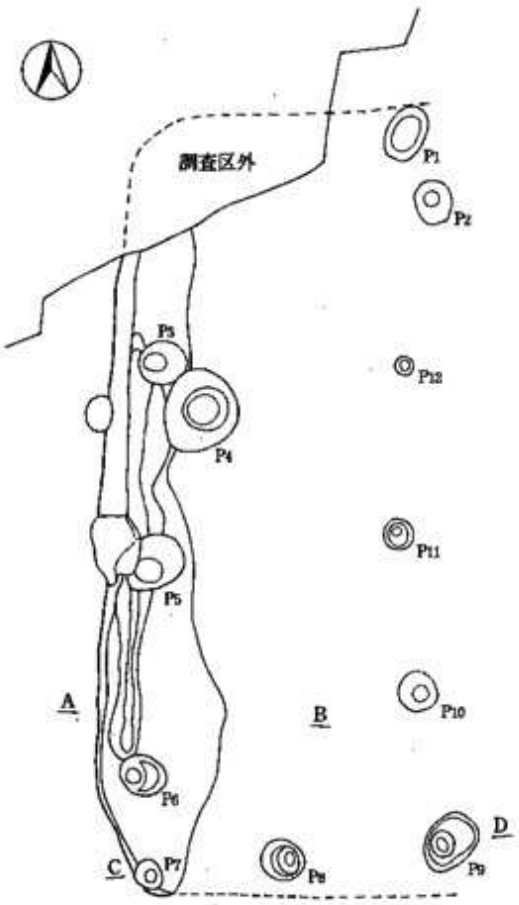


第119図　ⅣH９号住居址実測図

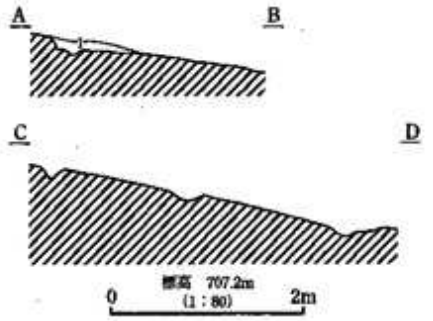
(64)ⅣH17号住居址（第120・121図、写真図版五十三②）

本住居址は、調査区上部の台地であるL－ケ－17･18･19、L－コ－19Grに位置する。残存状態は東側が地形により削平されている。また、本址はⅣH３号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が新しい。

形態は長方形を呈すると考えられる。カマドは不明である。規模は西壁6.60ｍ(残存)7.77ｍ(推定)を測る。壁高さは西壁中央で20㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位はＮを示す。住居址の床面積は残存で4.32㎡を測る。覆土は単層である。床は全体的に軟質であり、地山を踏み固めたような状態であった。壁溝は西壁の一部に確認された。規模は幅24～70㎝・深さ８㎝を測り、断面形はＵ字形を呈する。ピットは12カ所検出された。規模はＰ１が径57㎝・深さ43㎝、Ｐ２が径44㎝・深さ20㎝、Ｐ３が径50㎝・深さ62㎝、Ｐ４が径85㎝・深さ25㎝、Ｐ５が径66㎝・深さ60



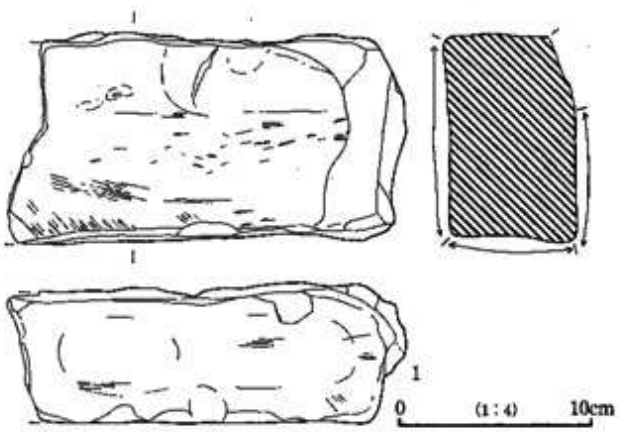
第120図　ⅣH17号住居址実測図



cm、P6が径50cm・深さ61cm、P7が径30cm・深さ16cm、P8が径46cm・深さ58cm、P9が径66cm・深さ19cm、P10が径42cm・深さ35cm、P11が径11cm・深さ56cm、P12が径18cm・深さ20cmを測る。これらピットは壁際に沿うように並んでおり壁柱穴の様相を示す。

本址の形態は先に述べたⅣH４号住居址とよく似る。この形態から考えると本址も竪穴住居址の範疇というよりは、掘立柱を構造の基本とする大型建物址的な遺構と考えられる。

本址からの出土遺物は土師器坏・甕片が小量あったのみである。よって本址の帰属時期は不明である。



第121図　ⅣH９号住居址出土遺物実測図

第２節　掘立柱建物址と柵列

(1) ＩＦ４号掘立柱建物址（第122図）

本址は、調査区北よりの低地部分であるＢ－キ－17、Ｂ－ク－17･18、Ｂ－ケ－17Grに位置する。残存状態はほぼ良好で、ＩＨ31号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は東西方向に長い１間×１間の側柱式建物址である。長軸方位はＮ－61°－Ｅを示す。規模は桁行4.03ｍ(Ｐ１～Ｐ２)･梁間3.00ｍ(Ｐ１～Ｐ４)で、桁行柱間は3.35～4.03ｍ･梁間柱間は2.95～3.00ｍを測る。ピット間に囲まれた面積は10.8㎡を測る。柱穴の形態はほぼいずれも円形である。ピットの規模はＰ１が径31cm･深さ24cm、Ｐ２が径33cm･深さ24cm、Ｐ３が径32cm･深さ21cm、Ｐ４が径32cm･深さ33cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址よりの出土遺物はなかった。

(2) ＩＦ６号掘立柱建物址（第122図、写真図版五十四①）

本址は、調査区最北端の北斜面であるＺ－ウ－15、Ｚ－エ－15･16Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。

形態は南北方向に長い２間×１間の側柱式建物址である。長軸方位はＮ－34°－Ｗを示す。規模は桁行3.03ｍ(Ｐ２～Ｐ４)･梁間2.20ｍ(Ｐ１～Ｐ２)で、桁行柱間は1.41～1.61ｍ･梁間柱間は2.18～2.20ｍを測る。ピット間に囲まれた面積は6.6㎡を測る。柱穴の形態はいずれも円形であり、中段にテラスを持つピットもある。ピットの規模はＰ１が径33cm･深さ22cm、Ｐ２が径42cm･深さ27cm、Ｐ３が径36cm･深さ23.5cm、Ｐ４が径31cm・深さ24cm、Ｐ５が径36cm･深さ23cm、Ｐ６が径42cm･深さ23cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

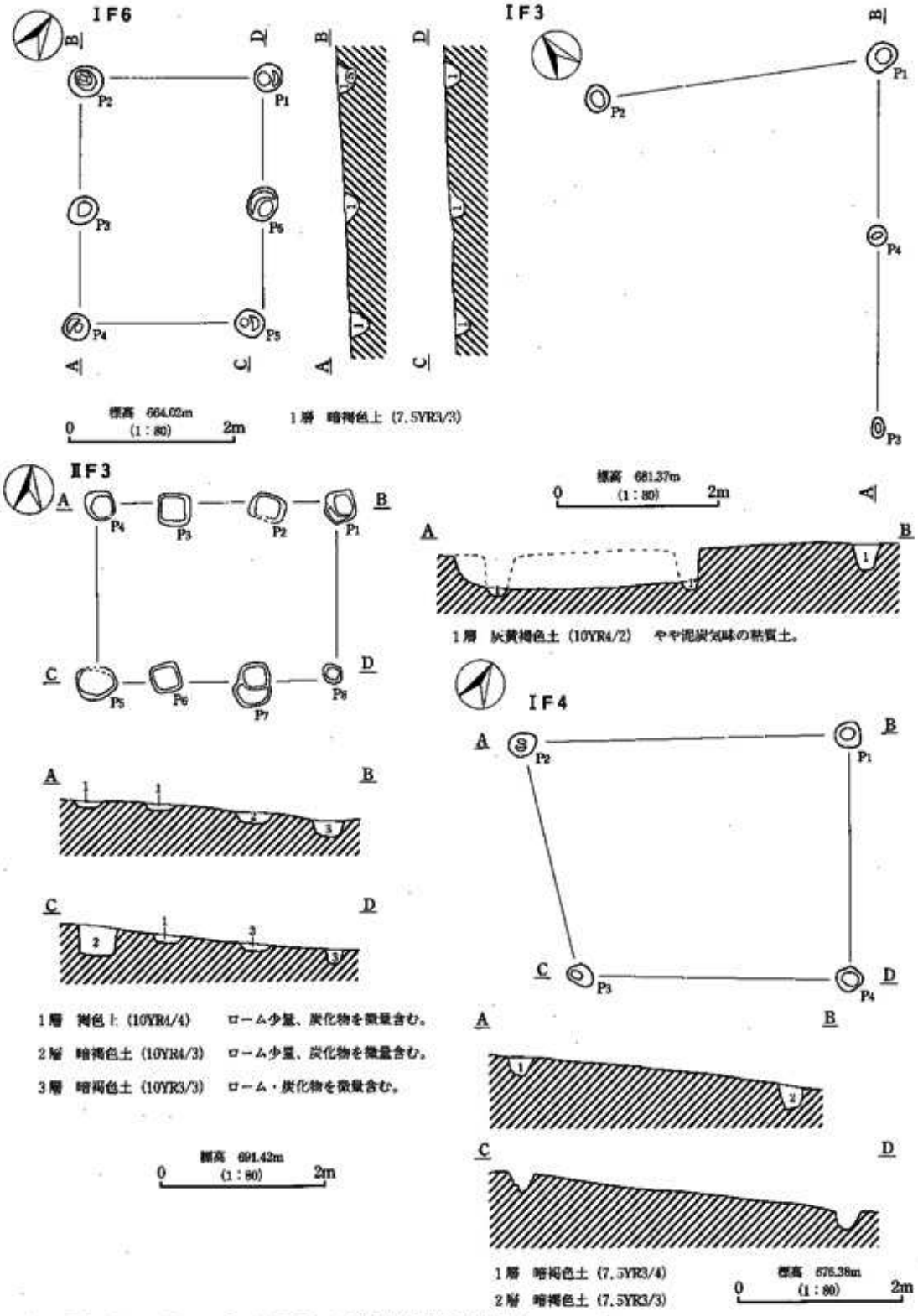
本址よりの出土遺物はＰ４より土師器坏(黒色処理)片が出土しているのみである。

(3) ⅡＦ３号掘立柱建物址（第122図、写真図版五十四②）

本址は、調査区中央台地のほぼ真ん中であるＩ－オ－1Grに位置する。残存状態はほぼ良好であるが、周辺部は中世のピットが密集しており、調査時に覆土より古代の掘立柱建物址と判断された。

形態は東西方向に長い３間×１間の側柱式建物址である。長軸方位はＮ－85°－Ｅを示す。規模は桁行2.94ｍ(Ｐ１～Ｐ４)･梁間2.16ｍ(Ｐ４～Ｐ５)で、桁行柱間は0.83～1.17ｍ･梁間柱間は2.14～2.16ｍを測る。ピット間に囲まれた面積は6.3㎡を測る。柱穴の形態は方形を基調としている。ピットの規模はＰ１が径37cm･深さ22cm、Ｐ２が径42cm･深さ14cm、Ｐ３が径40cm･深さ７cm、Ｐ４が径49cm･深さ９cmをＰ５が径50cm･深さ36cm、Ｐ６が径35cm･深さ12cm、Ｐ７が径52cm･深さ８cm、Ｐ８が径22cm･深さ16cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址よりの出土遺物はなかった。



第122図　IF3・IF4・IF6号・IIF3号掘立柱建物址実測図

(4)ⅢF2号掘立柱建物址（第123図、写真図版五十五①）

本址は、調査区上部台地の中央部であるL－ツ－10･11、L－テ－10･11Grに位置する。残存状態はほぼ良好で、ⅢH26号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は東西方向に長い2間×2間の総柱式建物址と考えられるが、P3とP4間にはピットが検出できなかった。長軸方位はN－67°－Eを示す。規模は桁行3.50m（P1～P6）･梁間3.36m（P1～P3）で、桁行柱間は1.20～3.26m･梁間柱間は1.45～1.90mを測る。ピット間に囲まれた面積は11.3㎡を測る。柱穴の形態はいずれも円形であり、二段掘りのピットもある。ピットの規模はP1が径58cm･深さ30cm、P2が径54cm･深さ40cm、P3が径60cm･深さ35cm、P4が径63cm･深さ16cm、P5が径53cm･深さ32cm、P6が径65cm･深さ18cm、P7が径45cm･深さ12cm、P8が径24cm･深さ9cmをそれぞれ測る。ピット内で柱痕を確認できたものはなかった。

本址よりの出土遺物はP1より土師器甕片が1点、P6より須恵器坏片1点がそれぞれ出土したのみであった。

(5)ⅢF3号掘立柱建物址（第123図、写真図版五十五②）

本址は、調査区上部台地の南よりであるL－ツ－14･15、L－テ－14･15Grに位置する。残存状態は良好である。ⅢH16号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は南北方向に長い2間×1間の側柱式建物址である。長軸方位はN－9°－Wを示す。規模は桁行3.76m（P1～P5）･梁間3.10m（P4～P5）で、桁行柱間は1.82～1.94m･梁間柱間は3.08～3.10mを測る。ピット間に囲まれた面積は11.6㎡を測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径49cm･深さ45cm、P2が径47cm･深さ31cm、P3が径60cm･深さ37cm、P4が径47cm･深さ48cm、P5が径45cm･深さ36cm、P6が径38cm･深さ27cmをそれぞれ測る。ピット内でP3～P5は顕著な柱痕を確認できた。

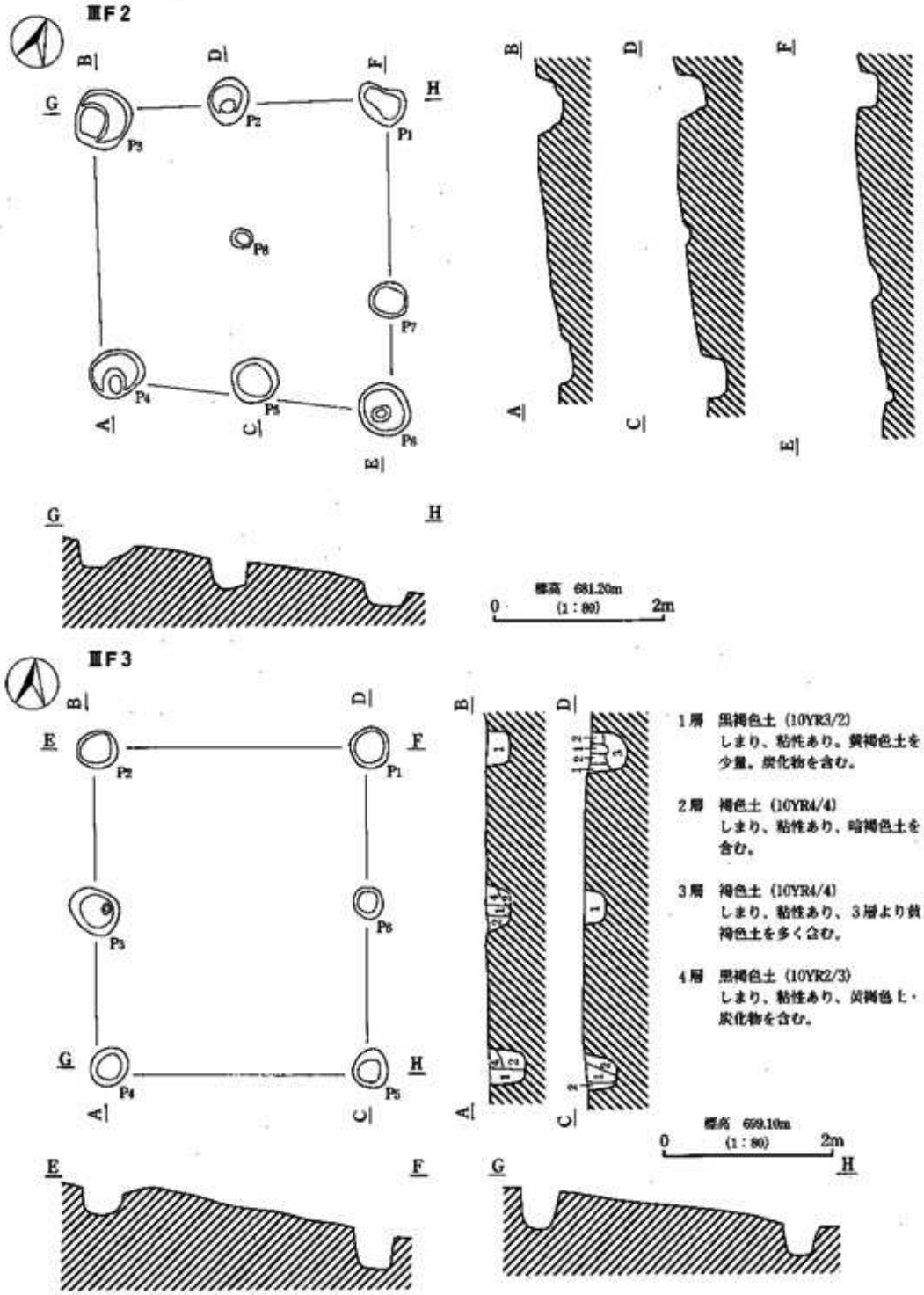
本址よりの出土遺物はなかった。

(6)IF3号掘立柱建物址（第122図）

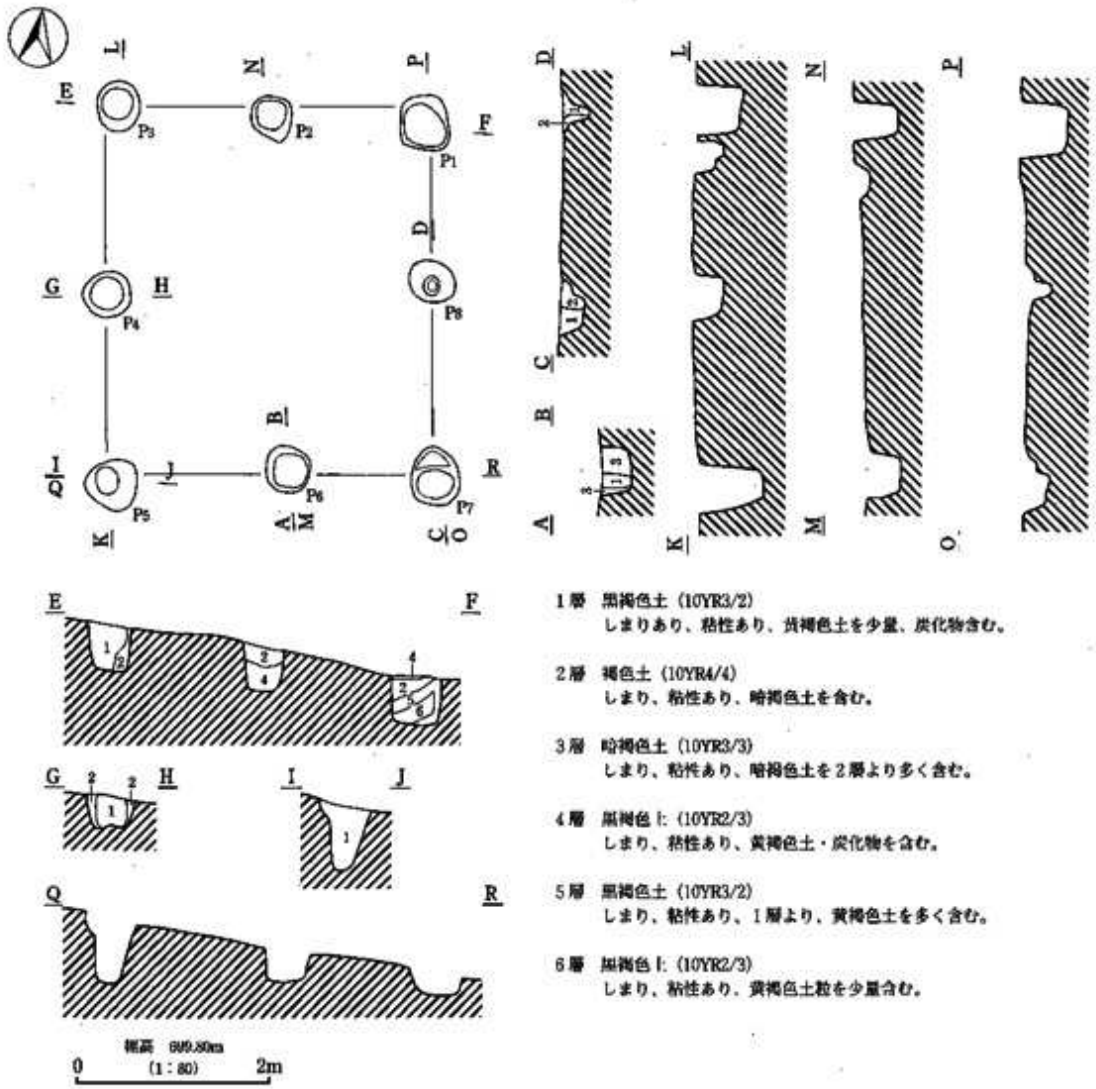
本址は、調査区東端のJ区埋没谷であるJ－サ－19･20、J－シ－19･20Grに位置する。残存状態は不良で西と南辺は確認できなかった。IH36号住居址と重複関係にあり本址の方が新しい。

形態は南北方向に長い2間×1間の側柱式建物址と考えられる。規模は桁行4.55m（P1～P3）･梁間3.54m（P1～P2）で、桁行柱間は2.20～2.35m･梁間柱間は3.54mを測る。柱穴の形態はいずれも円形である。ピットの規模はP1が径38cm･深さ33cm、P2が径32cm･深さ42cm、P3が径25cm･深さ10cm、P4が径24cm･深さ12cmをそれぞれ測る。

本址よりの出土遺物はなかった。



第123図　ⅢF2・ⅢF3号掘立柱建物址実測図

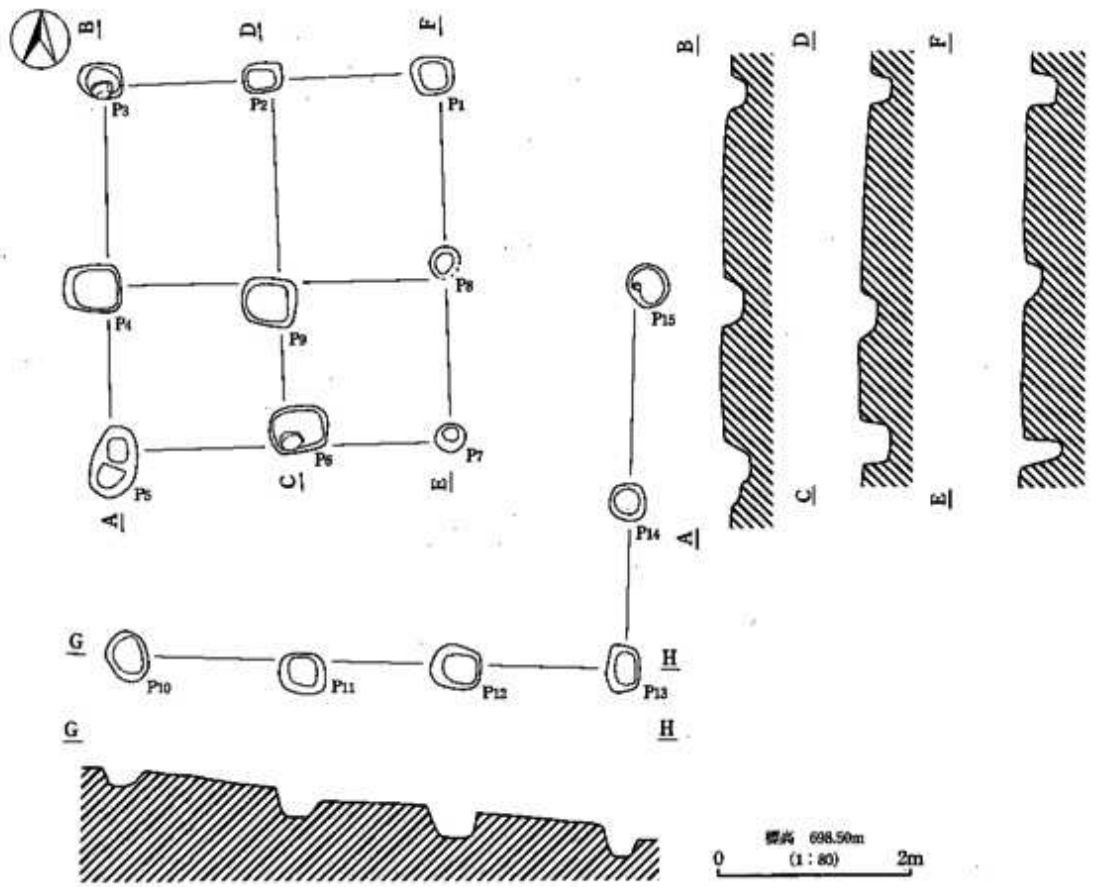


第124図　ⅢＦ４号掘立柱建物址実測図

(7)ⅢＦ４号掘立柱建物址（第124図、写真図版五十六①）

本址は、調査区上部台地の南よりであるＬ－チ－14･15、Ｌ－ツ－14･15Grに位置する。残存状態はほぼ良好である。形態は南北方向に長い２間×２間の側柱式建物址である。長軸方位はＮ－12°－Ｅを示す。規模は桁行3.80ｍ(Ｐ１～Ｐ７)･梁間3.33ｍ(Ｐ１～Ｐ３)で、桁行柱間は1.75～2.03ｍ･梁間柱間は1.64～1.70ｍを測る。ピット間に囲まれた面積は12.6㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径56cm･深さ50cm、P2が径48cm･深さ48cm、P3が径53cm･深さ52cm、P4が径50cm･深さ32cm、P5が径53cm･深さ71cm、P6が径47cm･深さ36cm、P7が径55cm･深さ28cm、P8が径49cm･深さ28cmをそれぞれ測る。ピット内でP4とP6に柱痕を確認できた。

本址よりの出土遺物はピット内より土師器坏片５点があったのみである。

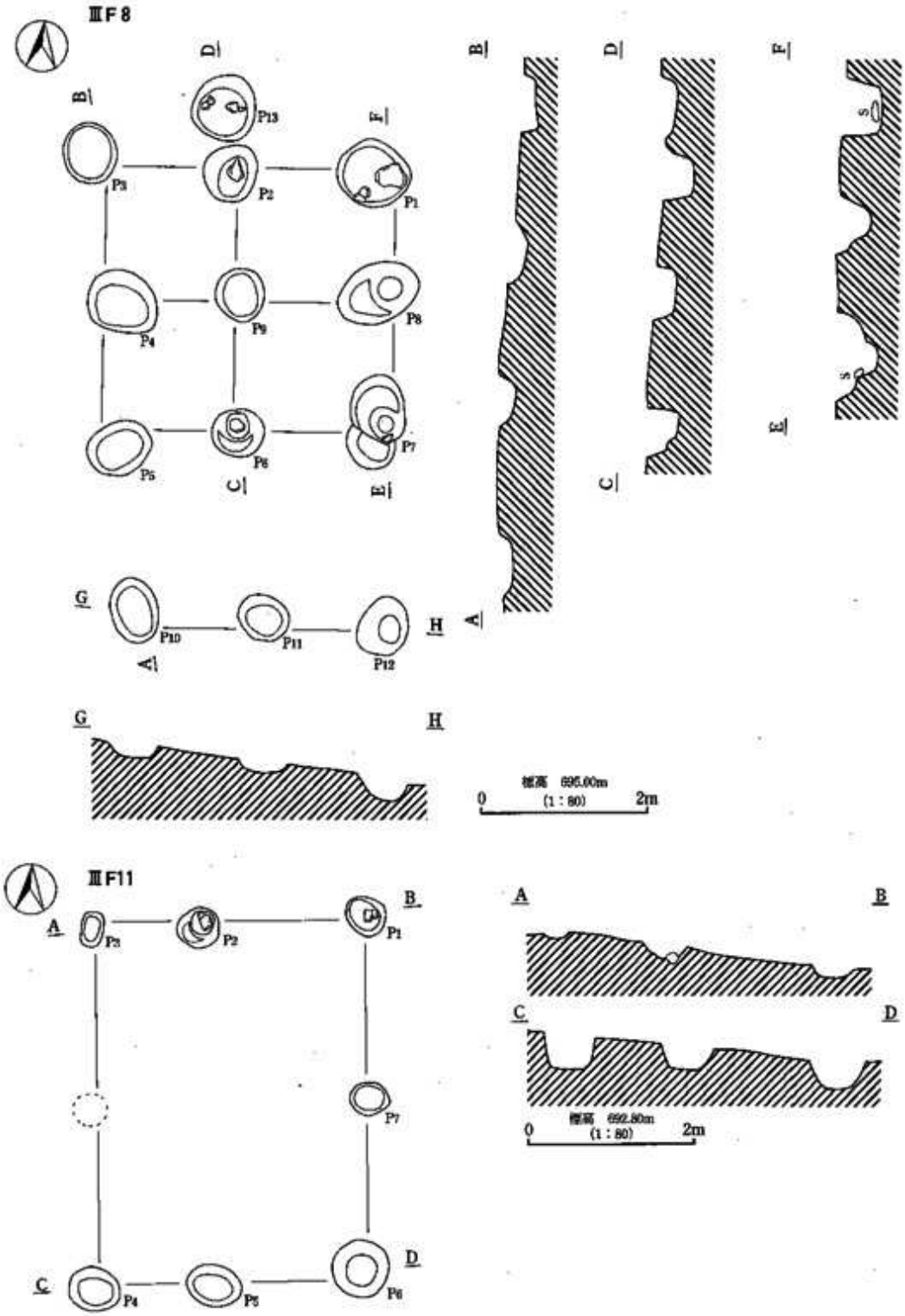


第125図　ⅢＦ５号掘立柱建物址実測図

(8)ⅢＦ５号掘立柱建物址（第125図、写真図版五十六②）

本址は、調査区上部台地の南よりであるＬ－テ－13･14、Ｌ－ト－13･14･15、Ｍ－ア－14･15Grに位置する。残存状態は良好である。形態は南北方向に長い2間×2間の総柱式建物址であり、南と西にそれぞれ庇が付けられている。長軸方位はＮ－9°－Ｗを示す。規模は桁行3.80ｍ(P3～P5)・梁間3.47ｍ(P5～P7)で、桁行柱間は1.60～2.20ｍ・梁間柱間は1.63～1.84ｍを測る。庇間は5.16ｍ(P10～P13)と3.96ｍ(P13～P15)を測る。ピット間に囲まれた面積は13.0㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径43cm・深さ30cm、P2が径40cm・深さ26cm、P3が径43cm・深さ22cm、P4が径60cm・深さ24cm、P5が径73cm・深さ42cm、P6が径60cm・深さ34cm、P7が径32cm・深さ49cm、P8が径34cm・深さ18cm、P9が径56cm・深さ25cm、P10が径50cm・深さ19cm、P11が径47cm・深さ29cm、P12が径50cm・深さ34cm、P13が径46cm・深さ25cm、P14が径38cm・深さ13cm、P15が径45cm・深さ41cmを測る。また、P3とP6にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。

本址よりの出土遺物はなかった。



第126図　ⅢF8・ⅢF11号掘立柱建物址実測図

(9)ⅢF8号掘立柱建物址（第126図、写真図版五十七①）

本址は、調査区上部台地のほぼ中央部であるM－ウ－6・7・8、M－エ－6・7・8Grに位置する。残存状態は良好である。ⅢH24号住居址と重複関係にあるが本址の方が新しい。

形態は南北方向にやや長い2間×2間の総柱式建物址であり南に庇が付けられている。また、北側に入り口施設と考えられるようなピットが検出されている。長軸方位はN－7°－Wを示す。規模は桁行3.40m(P1～P3)・梁間3.34m(P1～P7)で、桁行柱間は1.63～1.77m・梁間柱間は1.52～1.82mを測る。庇間は3.02m(P10～P12)を測る。ピット間に囲まれた面積は10.7㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径81cm・深さ53cm、P2が径70cm・深さ42cm、P3が径71cm・深さ19cm、P4が径83cm・深さ26cm、P5が径76cm・深さ26cm、P6が径60cm・深さ44cm、P7が径80cm・深さ58cm、P8が径100cm・深さ43cm、P9が径64cm・深さ27cm、P10が径78cm・深さ18cm、P11が径62cm・深さ17cm、P12が径70cm・深さ31cm、P13が径80cm・深さ17cmを測る。また、P1・P2・P6・P7にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。

本址よりの出土遺物はP1から土師器小型ロクロ甕片1・土師器坏片1、P3より内面黒色処理された土師器坏片6、P11より土師器甕片2・土師器坏片1(内面黒色処理)、P12より土師器甕片2などが出土しているが図示できるものはなかった。

(10)ⅢF11号掘立柱建物址（第126図）

本址は、調査区上部台地の東よりであるM－ク－9・10、M－ケ－10Grに位置する。残存状態は西側中央のピットが検出できなかった他は良好である。

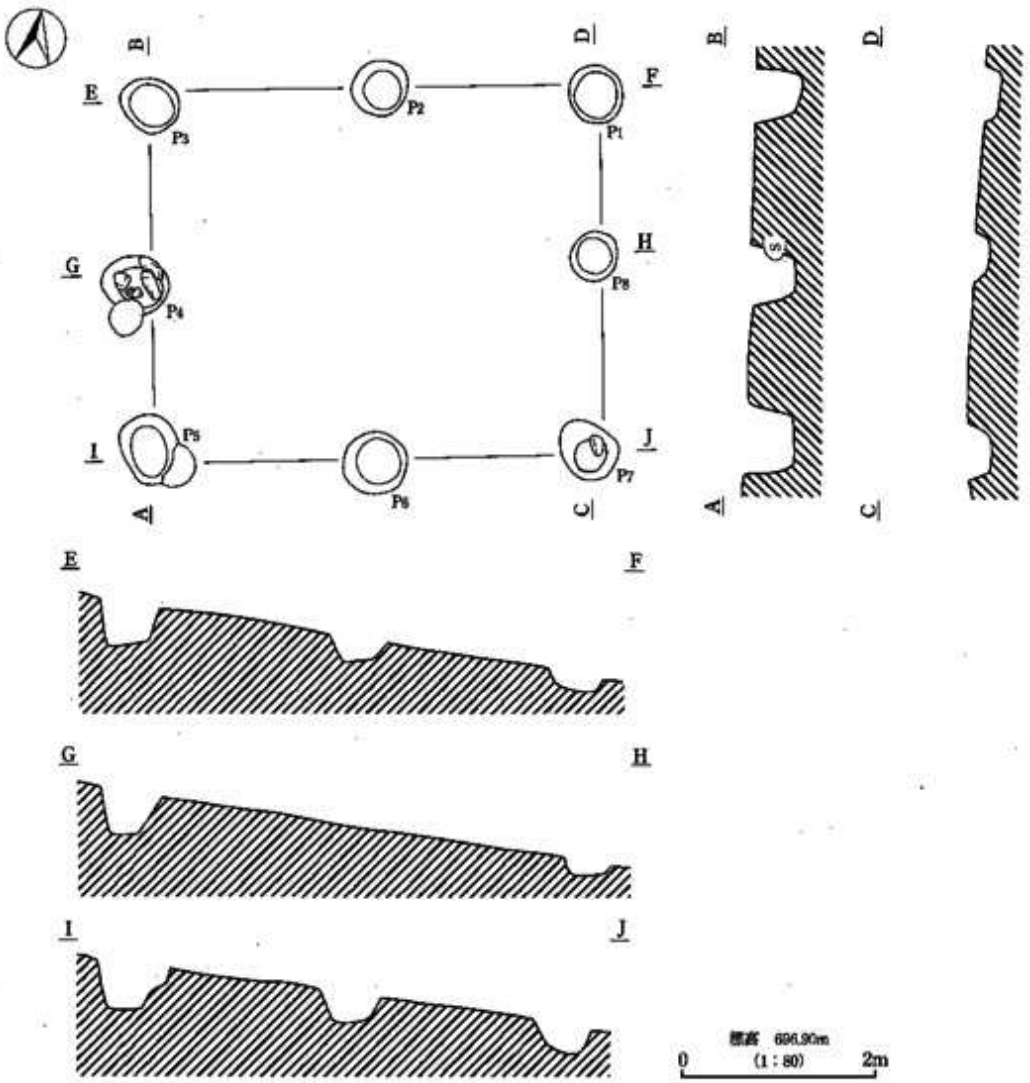
形態は南北方向に長い2間×2間の側柱式建物址であり、長軸方位はN－8°－Wを示す。規模は桁行4.33m(P3～P4)・梁間3.22m(P1～P3)で、桁行柱間は2.15～4.33m・梁間柱間は1.30～1.92mを測る。ピット間に囲まれた面積は13.9㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径50cm・深さ13cm、P2が径51cm・深さ20cm、P3が径41cm・深さ10cm、P4が径60cm・深さ45cm、P5が径63cm・深さ30cm、P6が径70cm・深さ33cm、P7が径43cm・深さ10cmを測る。また、P1とP2にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。

本址よりの出土遺物はP4とP5からそれぞれ土師器甕が1点ずつ出土しているのみであり図示できる物はなかった。

(11)ⅢF9号掘立柱建物址（第127図、写真図版五十七②）

本址は、調査区上部台地の南よりであるM－イ－13・14、M－ウ－13・14Grに位置する。残存状態は良好である。

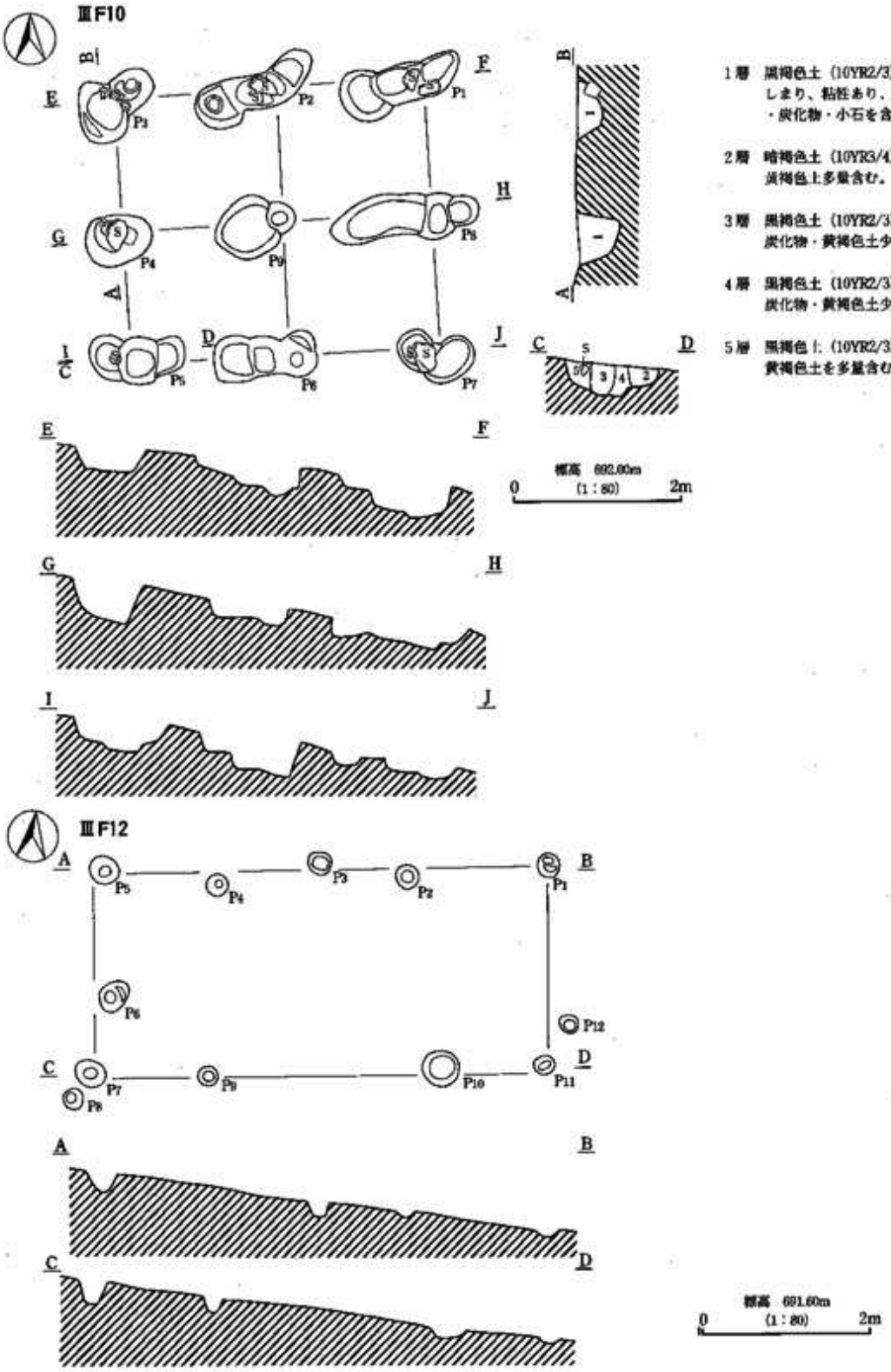
形態は東西方向に長い2間×2間の側柱式建物址であり、長軸方位はN－80°－Eを示す。規



第127図　ⅢF９号掘立柱建物址実測図

模は桁行4.60ｍ(P1～P3)・梁間3.74ｍ(P1～P7)で、桁行柱間は2.19～2.42ｍ・梁間柱間は1.68～2.06ｍを測る。ピット間に囲まれた面積は17.1㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径60cm・深さ19cm、P2が径48cm・深さ27cm、P3が径63cm・深さ48cm、P4が径68cm・深さ49cm、P5が径72cm・深さ48cm、P6が径65cm・深さ33cm、P7が径63cm・深さ33cm、P8が径50cm・深さ17cmを測る。また、P4にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。

本址よりの出土遺物はＰ２より器種不明の土師器が２点出土しているのみであり図示できる物はなかった。



第128図　ⅢF10・ⅢF12号掘立柱建物址実測図

⑿ⅢF10号掘立柱建物址（第128図、写真図版五十八①）

本址は、調査区上部台地の南東よりであるM－ク－4･5、M－チ－4･5Grに位置する。残存状態は比較的良好であった。

形態は東西方向にやや長い2間×2間の総柱式建物址である。長軸方位はN－88°－Eを示す。規模は桁行3.54m（P1～P3）･梁間3.30m（P3～P5）で、桁行柱間は1.58～1.96m･梁間柱間は1.53～1.77mを測る。ピット間に囲まれた面積は11.6㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径145cm･深さ44cm、P2が径151cm･深さ40cm、P3が径103cm･深さ30cm、P4が径78cm･深さ45cm、P5が径111cm･深さ37cm、P6が径123cm･深さ37cm、P7が径80cm･深さ17cm、P8が径175cm･深さ28cm、P9が径96cm･深さ26cmを測る。また、P1･P3･P7にはピット内に柱を支える根石と思われる礫が検出された。また、本址は北側の柱列と南側の柱列がそれぞれ3個を基準とする柱穴となる形態であった。これらは掘立柱建物址の立て替えを示すのか、或いは柱穴を支えるための補助ピットであるのか調査段階では不明であった。

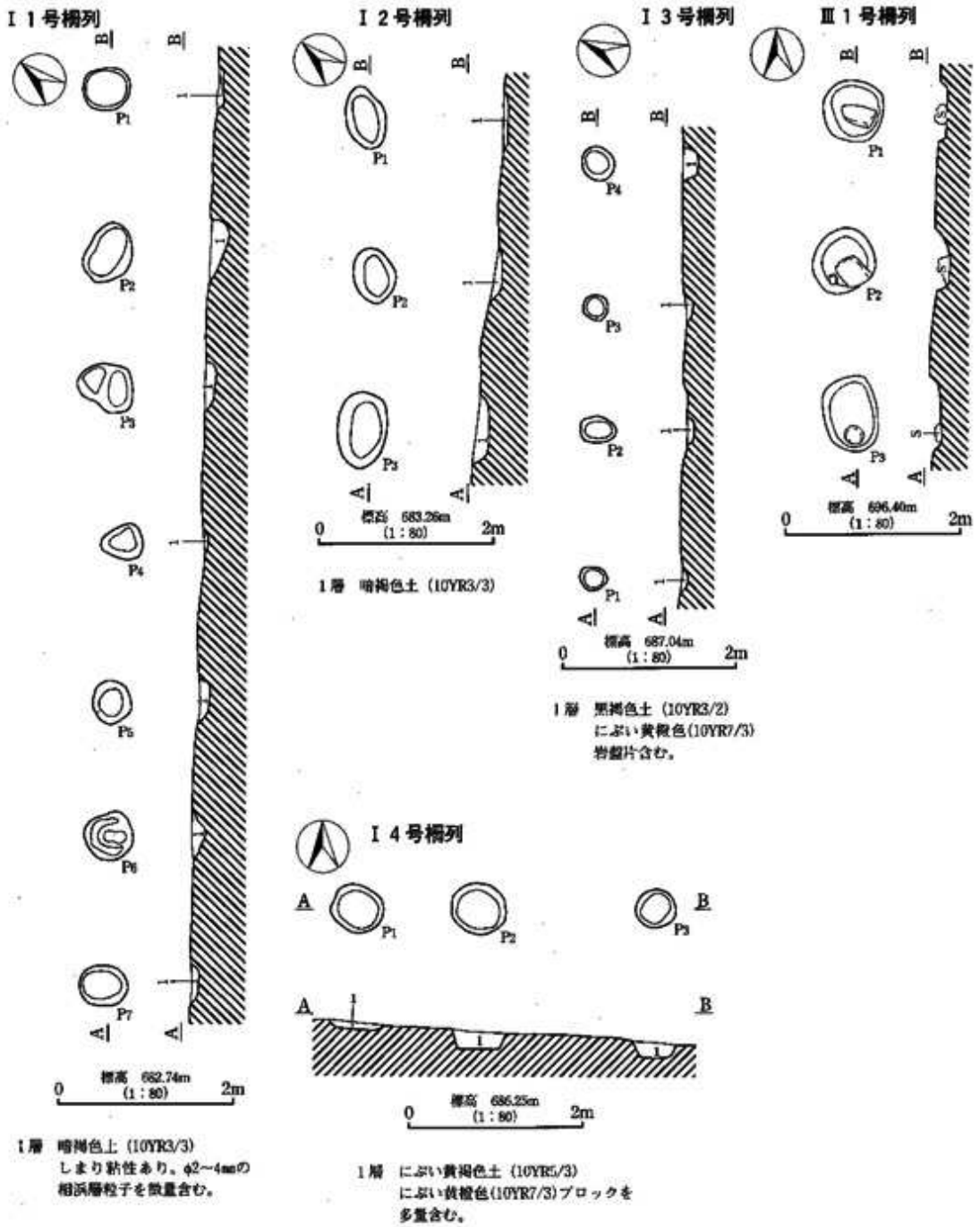
本址よりの出土遺物はP1から内面黒色処理された土師器坏片2、P4より須恵器甕片1、P6より土師器甕片4・土師器椀片1などが出土しているが図示できるものはなかった。

⒀ⅢF12号掘立柱建物址（第128図、写真図版五十八②）

本址は、調査区上部台地の東よりであるM－コ－8･9、M－サ－8･9Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は東西方向に長い2間×4間の側柱式建物址と考えられるが、南側柱列と東側柱列に不規則な柱列の並びがある。長軸方位はN－81°－Eを示す。規模は桁行5.37m（P7～P11）･梁間2.37m（P5～P7）で、桁行柱間は1.04～2.80m･梁間柱間は0.92～2.36mを測る。ピット間に囲まれた面積は12.8㎡を測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径29cm･深さ10cm、P2が径26cm･深さ16cm、P3が径28cm･深さ18cm、P4が径26cm･深さ17cm、P5が径36cm･深さ26cm、P6が径40cm･深さ26cm、P7が径37cm･深さ30cm、P8が径23cm･深さ8cm、P9が径23cm･深さ18cm、P10が径52cm･深さ12cmを測る。本址よりの出土遺物はなかった。

⒁Ⅰ1号柵列（第129図、写真図版五十九①）

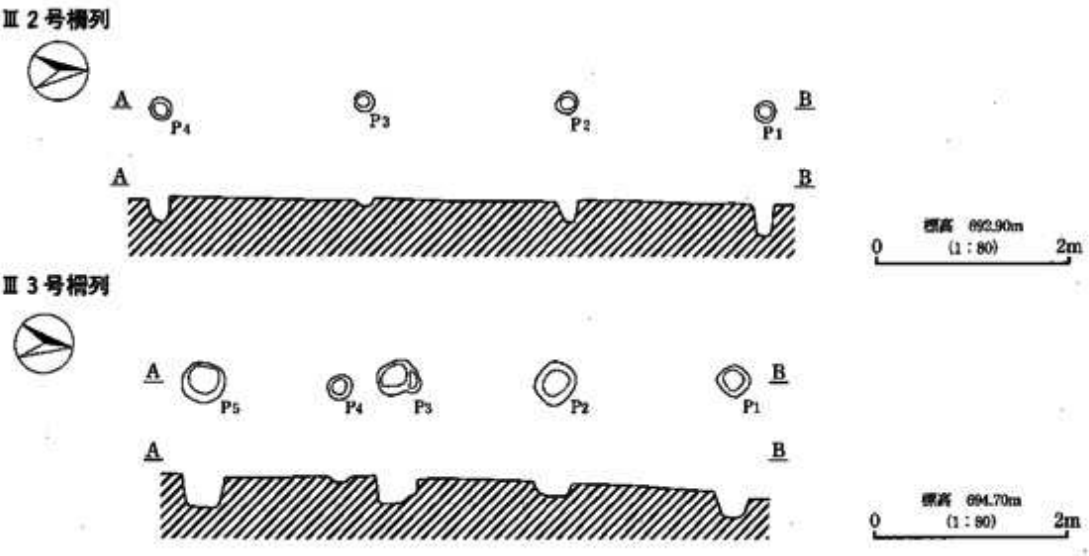
本址は、調査区中央台地の先端部であるF－ツ－12、F－テ－11、F－ト－10Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い6間の柵列であり、長軸方位はN－49°－Eを示す。規模はP1～P7が10.30mで、柱間は1.54～1.88mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径52cm･深さ8cm、P2が径70cm･深さ12cm、P3が径64cm･深さ14cm、P4が径49cm･深さ8cm、P5が径47cm･深さ10cm、P6が径56cm･深さ15cm、P7が径53cm･深さ10cmを測る。本址よりの出土遺物は無かった。



第129図　Ⅰ1・Ⅰ2・Ⅰ3・Ⅰ4号・Ⅲ1号棚列実測図

⑮Ⅰ2号構列（第129図）

本址は、調査区中央台地の先端部であるF－タ－13、F－チ－13Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い2間の柵列であり、長軸方位はN－47°－Eを示す。規模は



第130図　Ⅲ2・Ⅲ3号柵列実測図

P1～P3が3.62mで、柱間は1.80～1.82mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径75cm・深さ8cm、P2が径64cm・深さ18cm、P3が径86cm・深さ20cmを測る。本址よりの出土遺物はP2から土師器甕片4点が出土している。また本址は検出位置よりⅠ1号柵列と同列の柵と考えられる。

(16) Ⅰ3号柵列（第129図）

本址は、調査区中央台地上であるJ－ソ－10、J－タ－10Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は東西方向に長い3間の柵列であり、長軸方位はN－56°－Eを示す。規模はP1～P4が4.80mで、柱間は1.42～1.72mを測る。ピットの規模はP1が径31cm・深さ8.5cm、P2が径41cm・深さ9cm、P3が径27cm・深さ12cm、P4が径39cm・深さ15cmを測る。本址よりの出土遺物は土師器甕片2点がピット内より出土している。

(17) Ⅰ4号柵列（第129図）

本址は、調査区中央台地の先端部であるK－ア－3、K－イ－3Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は東西方向に長い2間の柵列であり、長軸方位はN－87°－Wを示す。ピットの形態は円形を基調としている。規模はP1～P3が3.44mで、柱間は1.40～2.04mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径58cm・深さ9cm、P2が径65cm・深さ23cm、P3が径47cm・深さ18cmを測る。柱痕等は観察できなかった。本址よりの出土遺物は無かった。

⑱Ⅲ1号柵列（第129図、写真図版五十九②）

本址は、調査区上部台地のほぼ真ん中であるM－イ－3Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い2間の柵列であり、長軸方位はN－2°－Eを示す。規模はP1～P3が3.5mで、柱間は1.72～1.78mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径70cm・深さ16cm、P2が径73cm・深さ15cm、P3が径87cm・深さ12cmを測る。また本址はそれぞれのピット底面に扁平な川原石が1点ずつ検出された。これら礫は柱受けの根石と考えられ、とすると本址は掘立柱建物址の一部が残存した結果とも考えられる。本址よりの出土遺物は無かった。

⑲Ⅲ2号柵列（第130図、写真図版六十①）

本址は、調査区上部台地の東斜面であるM－カ－2·3Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い3間の柵列であり、長軸方位はN－3°－Eを示す。規模はP1～P4が6.23mで、柱間は2.04～2.10mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径21cm・深さ36cm、P2が径23cm・深さ22cm、P3が径21cm・深さ11cm、P4が径22cm・深さ22cmを測る。本址よりの出土遺物は無かった。

⑳Ⅲ3号柵列（第130図）

本址は、調査区上部台地の南よりであるM－オ－14·15·16Grに位置する。残存状態は良好であった。形態は南北方向に長い4間の柵列であり、長軸方位はN－10°－Wを示す。規模はP1～P5が5.48mで、柱間は0.54～1.84mを測る。柱穴の形態は円形を基調としている。ピットの規模はP1が径30cm・深さ28cm、P2が径43cm・深さ22cm、P3が径42cm・深さ29cm、P4が径26cm・深さ5cm、P5が径42cm・深さ35cmを測る。本址よりの出土遺物は無かった。